熊本県文化財調査報告　第13集

沈目

——熊本県下益城郡城南町沈目遺跡の調査——

1974

熊本県教育委員会

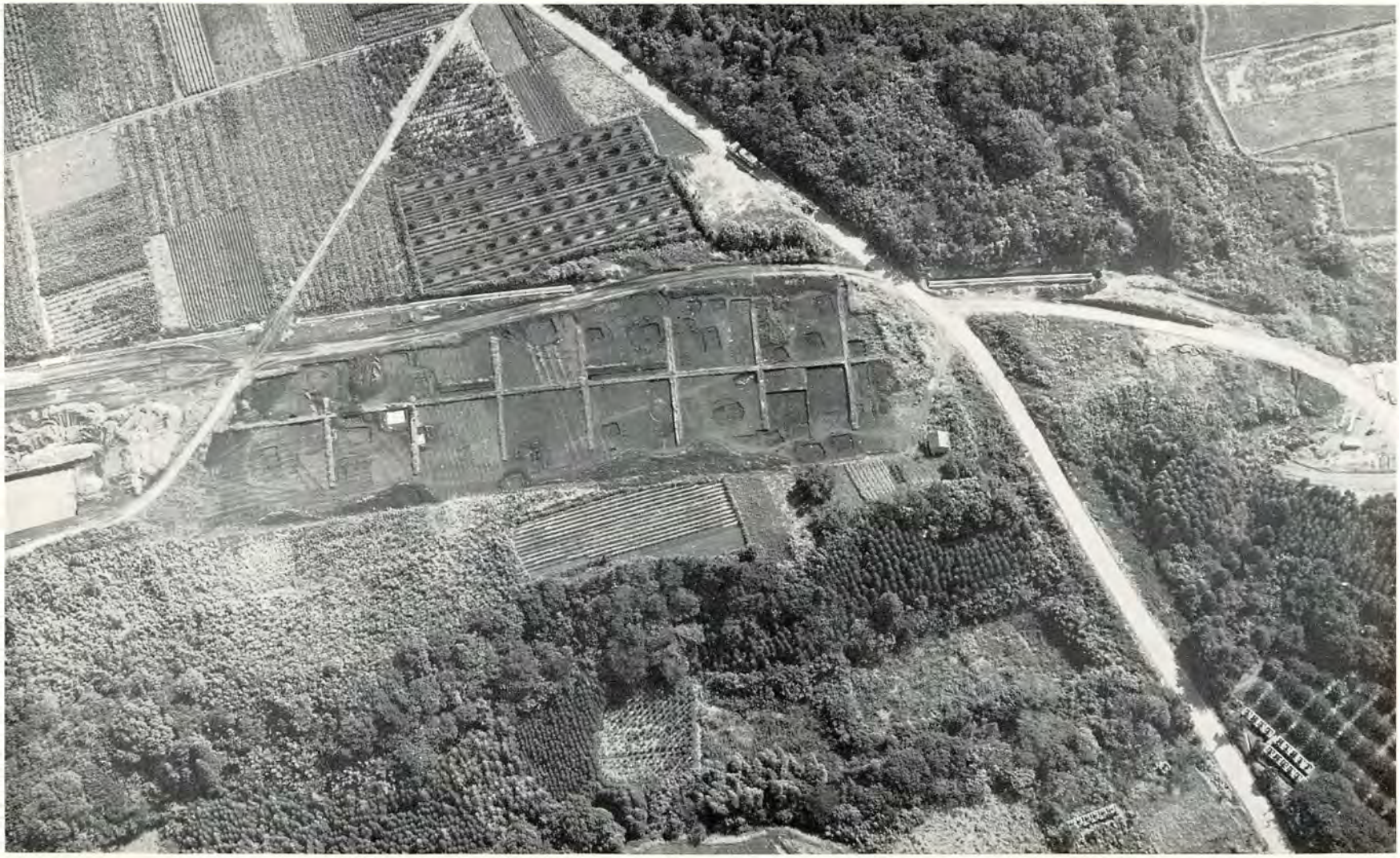
熊本県文化財調査報告　第13集

沈目（しずめ）

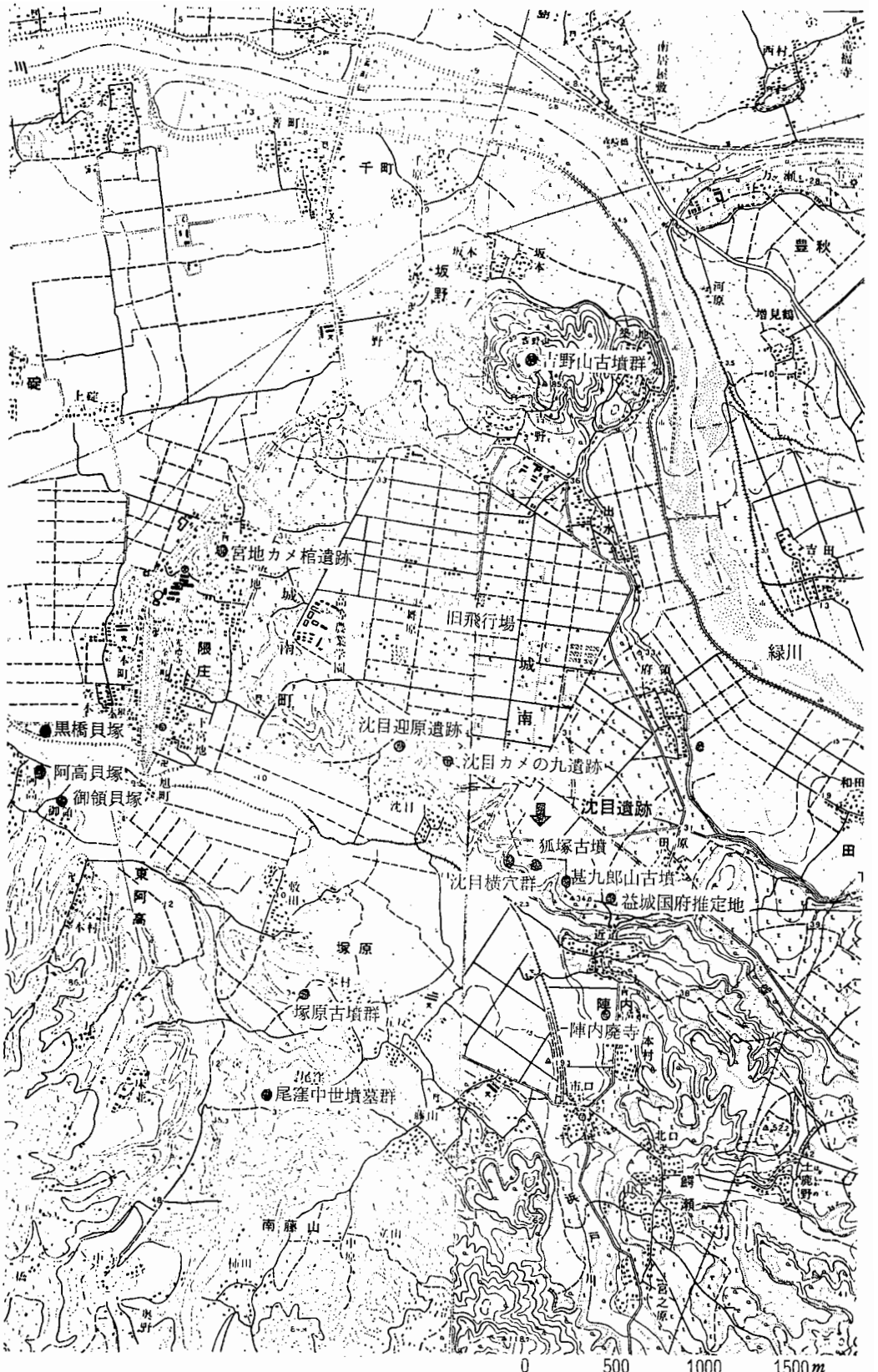
——熊本県下益城郡城南町沈目遺跡の調査——

1974

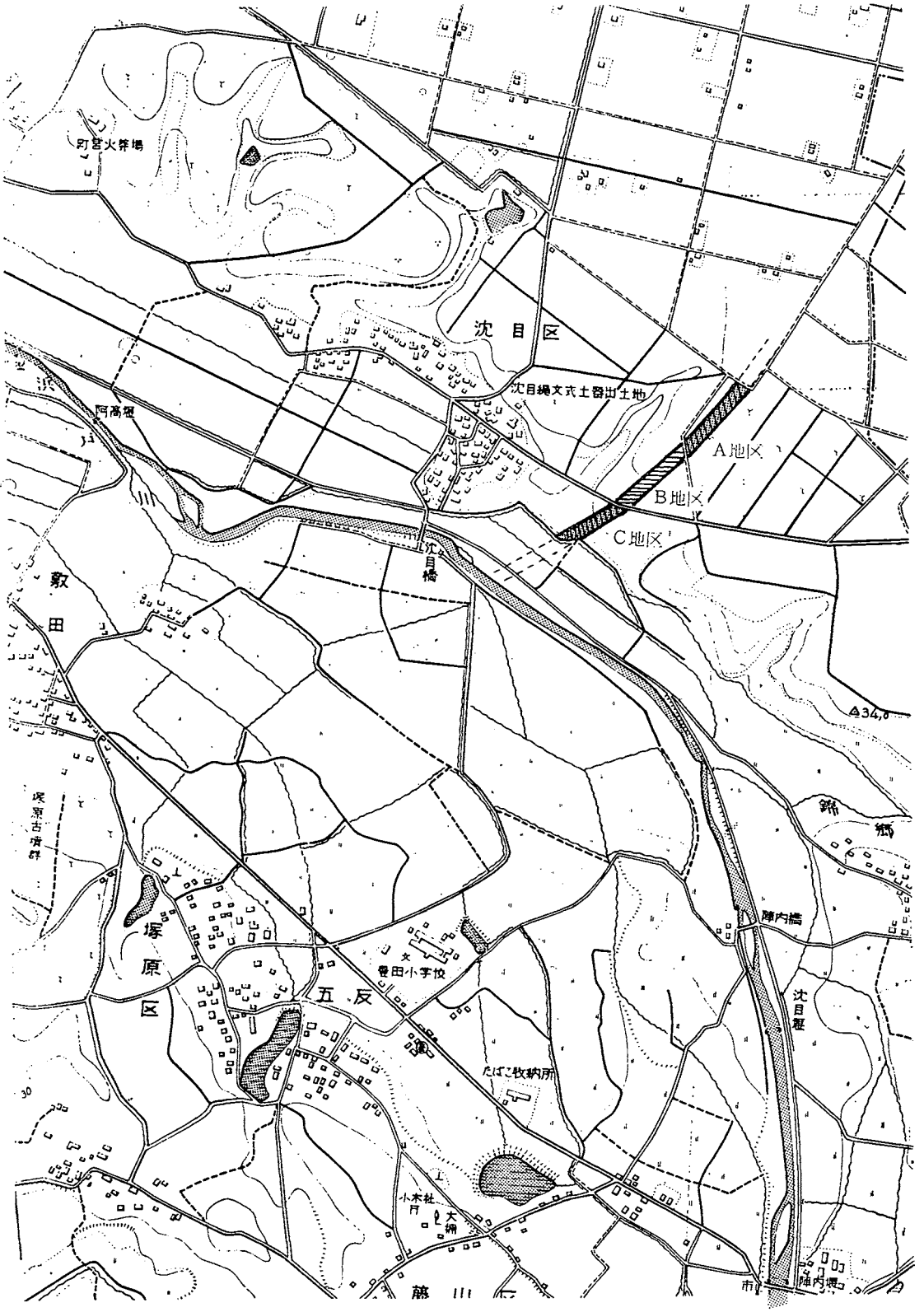
熊本県教育委員会



沈目遺跡全景（航空写真）

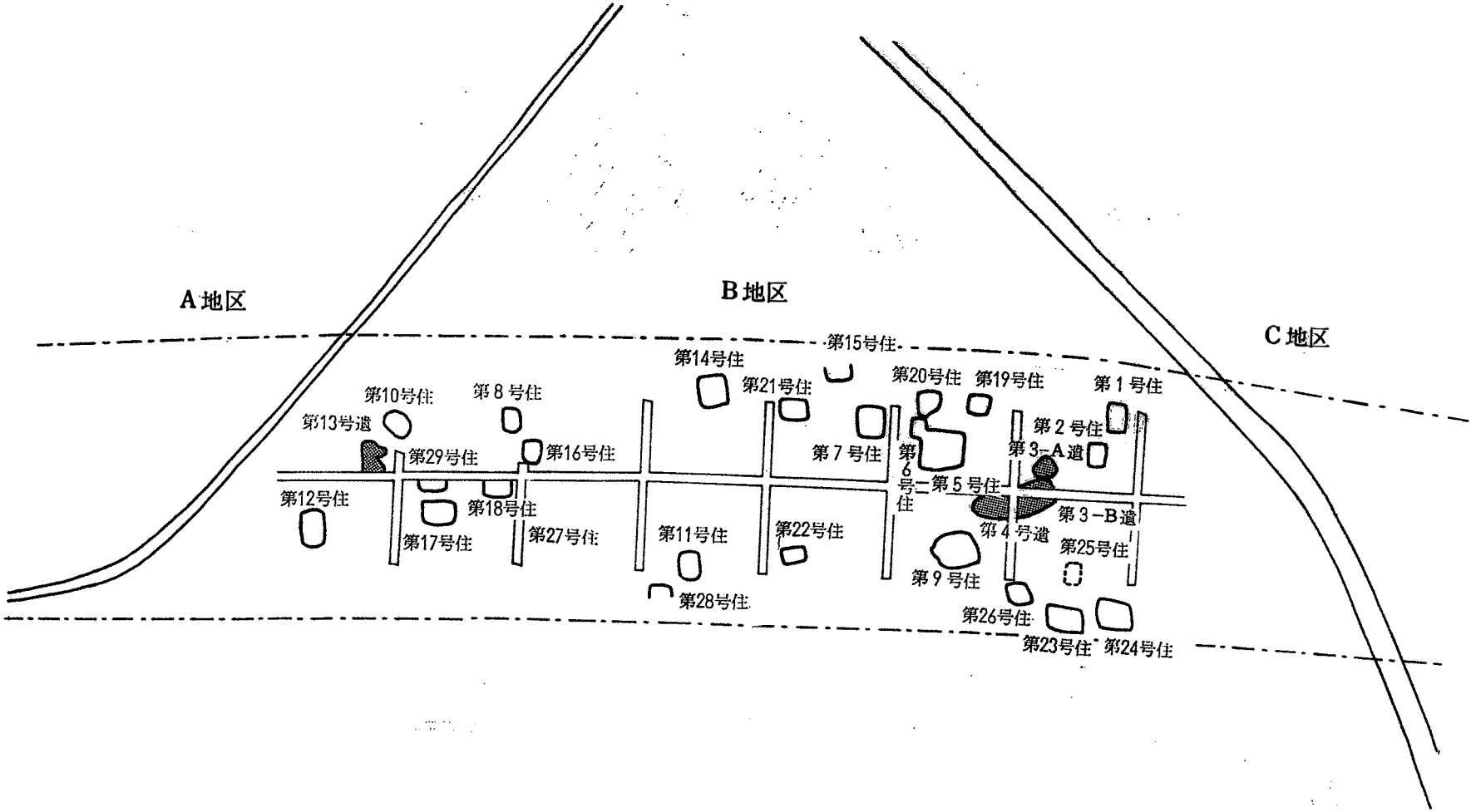


第1図　沈目遺跡と周辺の遺跡

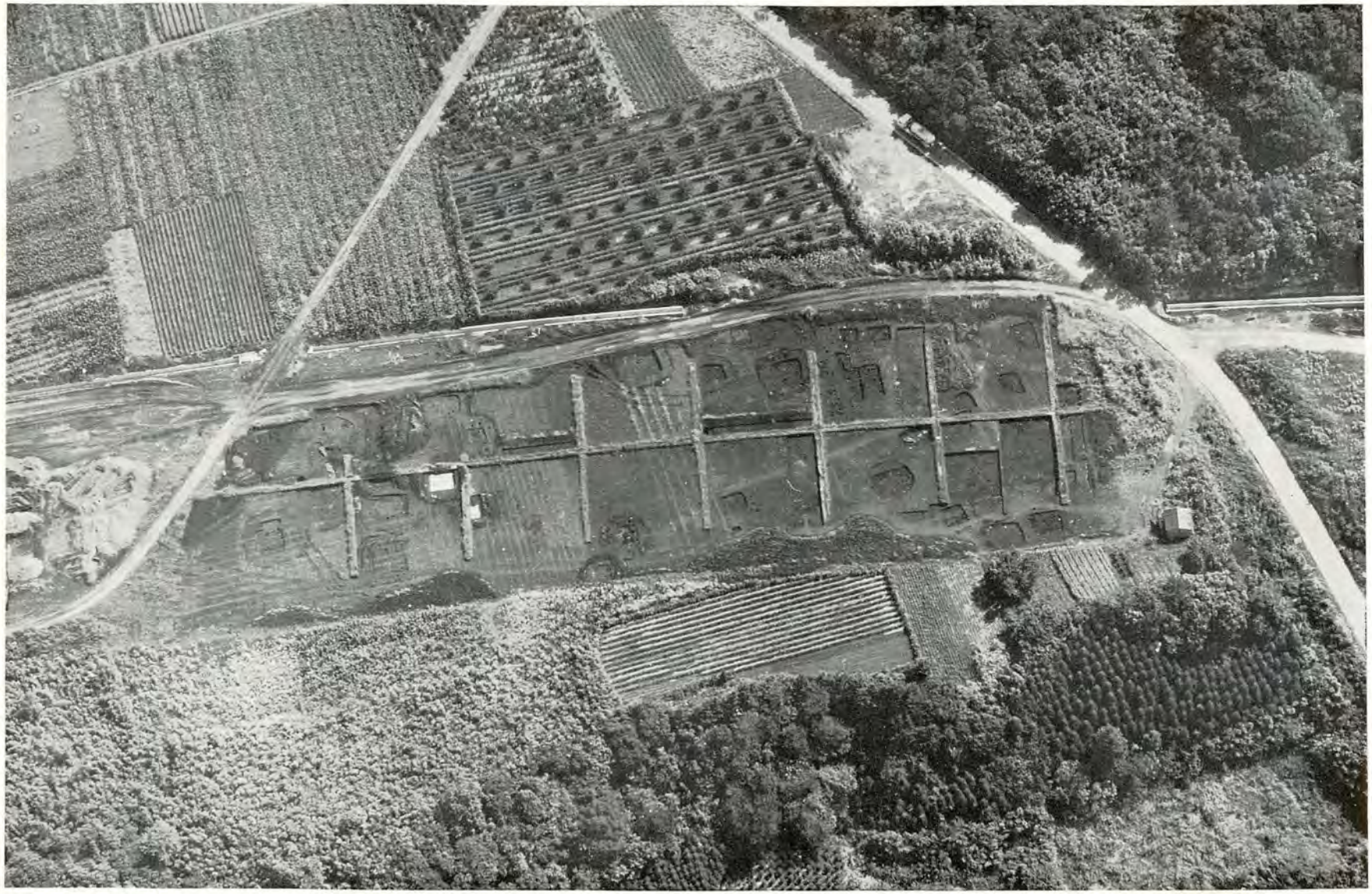


第2図 遺跡位置図

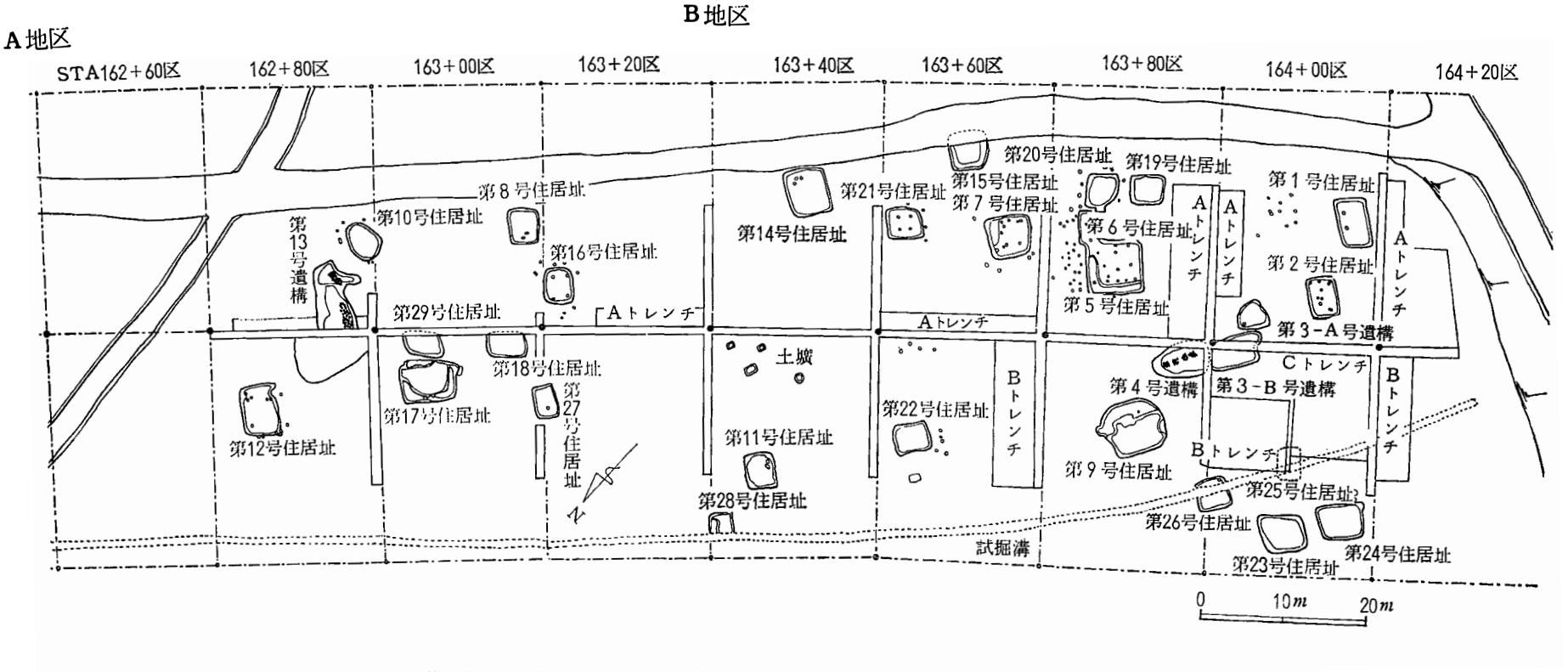
100 0 500 1000m



第3図　沈目遺跡住居址配置状況



第3図　沈目遺跡住居址配置状況（航空写真）


A地区
B地区
STA162＋60区
162＋80区
163＋00区
163＋20区
163＋40区
163＋60区
163＋80区
164＋00区
164＋20区
第８号住居址
第10号住居址
第13号遺構
第16号住居址
第29号住居址
Aトレンチ
第14号住居址
第21号住居址
第20号住居址
第19号住居址
第15号住居址
第７号住居址
第６号住居址
第５号住居址
Aトレンチ
Aトレンチ
第１号住居址
第２号住居址
Aトレンチ
第３－A号遺構
Cトレンチ
第３－B号遺構
Bトレンチ
Bトレンチ
Bトレンチ
第４号遺構
第９号住居址
第25号住居址?
第26号住居址
第23号住居址
第24号住居址
土壙
第18号住居址
第17号住居址
第27号住居址
第12号住居址
第11号住居址
第28号住居址
第22号住居址
試掘溝
0
10m
20m

第４図　　住　居　址　配　置　図

序

昨年（昭和48年）は下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査報告書を刊行しましたが、今回は同じ城南町の沈目遺跡の調査報告書を刊行することになりました。開発事業の促進に伴なって、また一つの貴重な埋蔵文化財が消えさることは、学術上はもとより文化財保護行政の立場から申しましてもまことに残念でありますが、今回の沈目遺跡は事前に発掘調査を行ない、やむなく姿を消したものです。

しかしながら、発掘調査による記録、写真をもとに遺跡の全容を報告し、今後の研究の資料として少しでも役立てば、私どもの喜びとするところです。

発掘調査にあたりましては、日本道路公団当局のご理解とご協力をはじめとして、炎天のもと別府大学賀川光夫、橘昌信両先生以下多数の学生諸氏のご教示とご支援をいただきました。

また、地元城南町教育委員会をはじめとして、地元の方々のご協力とご鞭撻を賜りました。ここに心から厚くお礼申しあげます。

昭和49年3月

熊本県教育長　富永俊夫

例　　言

1　本書は九州縦貫自動車道（熊本一松橋間）建設事業に関連して、昭和47年度に発掘調査を実施した熊本県下益城郡城南町沈目遺跡の埋蔵文化財調査の報告書である。

2　調査は日本道路公団福岡支社の委託をうけて、熊本県教育委員会が実施した。

3　発掘調査にあたっては別府大学考古学研究室の賀川光夫教授、橘昌信講師以下専攻学生各位のご協力・ご支援をいただいた。また、航空写真の撮影にあたっては、陸上自衛隊西部方面総監部のご協力を得た。記して謝意を表するものである。

4　調査および本稿は主に江本直が担当した。原稿および実測者は目次と文末に記名する。表紙題字は、村田一美（文化課主幹）にお願いした。

5　土器の復原と実測は、文化財収蔵庫で行なった。製図と写真撮影は江本直が行なった。

6　報告書の編集には、隈昭志・江本直・西町圭子があたった。また、原稿の整理にあたっては、津川朱美・田中君代・山本幸子嬢の協力をいただいた。

調 査 団 の 編 成

調査責任者	田辺哲夫	熊本県教育庁文化課長
調査指導者	原口長之	熊本県文化財専門委員
	賀川光夫	別府大学文学部教授
	橘　昌信	〃　〃 講師
調査員（主任）	隈　昭志	熊本県教育庁文化課参事
	上野辰男	〃　〃　〃　〃
	緒方　勉	〃　〃　〃　〃
	高木正文	〃　〃　〃 技師
（主査）	江本　直	〃　〃　〃 嘱託
	安達武敏	〃　〃　〃 臨時職員
	木村民子	〃　〃　〃　〃

このほか、文化課野田拓治（技師）、丸山武水、田中義和、近延謙の参加がある。

調査補助員　井ノ上秀文、高谷和生、竹内弘、下村悟史、中川秀明、永峰文隆、多田久美子、高野信子（以上別府大学生）

地元協力者　城南町教育委員会、甲斐春雄、甲斐義美

作業員　入山フカシ、甲斐英子、甲斐澄枝、野口キクエ、緒方サチコ、堀内テルコ小夏静子、山口ケイ子、伊藤フタエ、山口キヨメ、秋芳アヤコ、田上タツコ、出口トミヨ、赤星ナツエ、岡崎ケイコ、入山ユキコ、大森ツユコ、久米田エイコ、甲斐由起子

整理員　山城仁恵、寺田京子、上村喜美子、本郷二三子、永田千代子、大畑美鶴、石橋律子、照屋トミエ

調査事務局　浜田勝、村田一美、松田安雄、西野英俊、東忠昭（以上文化課）

本　文　目　次

序　章……1

Ⅰ　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……4
Ⅲ　沈目式土器について……5

第一章　調査概要……7
Ⅰ　調査区について……7
Ⅱ　遺構の概要……8

第二章　縄文時代……10
Ⅰ　層　　位……10
Ⅱ　各トレンチについて……12
Ⅲ　B・Cトレンチについて（STA　164＋00(3)(4)区）……12
Ⅳ　ま　と　め……23

第三章　古墳時代……25
Ⅰ　住居址の分布状況と概要……25
Ⅱ　各住居址の遺構・遺物について……25
Ⅲ　ま　と　め……68

第四章　その他の遺構・遺物……80
Ⅰ　弥生式土器……80
Ⅱ　布　目　瓦……80
Ⅲ　土師・須恵器……80
Ⅳ　蔵　骨　器……80
Ⅴ　土　　壙……80
Ⅵ　排　　石……80

第五章　総　括……84
Ⅰ　沈目遺跡の周辺遺跡……84
Ⅱ　沈目遺跡の総括……84
あ　と　が　き……88

挿　図　目　次

沈目遺跡全景　航空写真　陸上自衛隊西部方面総監部（撮影）口絵

第1図　沈目遺跡と周辺の遺跡　口絵

第2図　沈目遺跡位置図　口絵

第3図　沈目遺跡住居址配置状況　航空写真　陸上自衛隊西部方面総監部（撮影）口絵

第4図　住居址配置図……下村、井上　口絵

永峰、江本（実測）

第5図　区分図……江本（製図）7

第6図　土層図……永峰、〃（実測）11

第7図　グリット図……〃（製図）12

第8図　土器出土状況（Bトレンチ Ⅲ C層）……下村、高野（実測）13

第9図　土器出土状況（Cトレン Ⅲ C層）……竹内、多田（〃）14

第10図　土器出土状況（Bトレン Ⅳa層）……永峰（〃）15

第11図　土器出土状況（Cトレン Ⅳa層）……〃（〃）16

第12図　土器出土状況（Cトレン Ⅳb層）……〃（〃）17

第13図　出土遺物拓本（Ⅲb～C層）……木村、江本（〃）18

第14図　出土遺物実測図及び拓本（Ⅳ層）……〃　〃（〃）20

第15図　出土遺物実測図及び拓本（表採）……〃　〃（〃）22

第16図　押型文土器復原図……〃　〃（〃）23

第17図　第1号住居址実測図……中川、中村

永峰、江本（〃）26

第18図　第2号住居址実測図……中川、永峰、

高野、江本（〃）28

第19図　第3－A号遺構実測図……中川、高野（〃）29

第20図　第3－B号遺構実測図……井上、江本（〃）30

第21図　第4号遺構実測図……〃（〃）31

第22図　第5号・第6号住居址実測図……〃（〃）33

第23図　第7号住居址実測図……下村、井上

中川、江本（〃）35

第24図　第8号住居址実測図……〃（〃）37

第25図　第9号住居址実測図……〃（〃）37

第26図　第10号住居址実測図……〃（〃）39

第27図　第11号住居址実測図……〃（〃）41

第28図　第12号住居址実測図……〃（〃）43

第29図　第14号住居址実測図……江本（実測）44
第30図　第15号住居址実測図……下村、中川、井上、江本（〃）46
第31図　第16号住居址実測図……江本（〃）47
第32図　第17号住居址実測図……〃（〃）49
第33図　第18号住居址実測図……〃（〃）50
第34図　第19号住居址実測図……〃（〃）53
第35図　第20号住居址実測図……下村、〃（〃）54
第36図　第21号・第22号住居址実測図……〃（〃）55
第37図　第23号住居址実測図……下村〃（〃）57
第38図　第24号住居址実測図……高谷、多田、〃（〃）60
第39図　第26号住居址実測図……〃（〃）62
第40図　第27号住居址実測図……〃（〃）63
第41図　第28号住居址実測図……高木（〃）66
第42図　第29号住居址実測図……江本（〃）67
第43図　主要遺物実測図……上村、木村、江本（〃）71
第44図　主要遺物実測図……〃〃〃（〃）72
第45図　主要遺物実測図……〃〃〃（〃）74
第46図　主要遺物実測図……〃〃〃（〃）75
第47図　遺物実測図……〃〃〃（〃）81
第48図　土壙、遺物実測図……高木（〃）82
第49図　第13号遺構図……〃（〃）83

表　目　次

第１表　住居址一覧表……69
第２表　主要遺物一覧表……76

序　　章

1　調査の経過

道路敷地の境界を示す幅杭STA160＋80のすぐ西側には、城南町教育委員会の手により、沈目式土器出土地の標木が立てられている。沈目遺跡は、[註1]縄文早期の押型文土器の出土地でいわゆる沈目式土器の命名地にあたる周知かつ著名な遺跡である。

昭和47年８月、日本道路公団福岡支社から遺跡調査の委託を受け、熊本県教育委員会文化課参事緒方勉が、二週間に亘る予備調査を行なった。

予備調査の結果、上層から須恵器や土師器、また下層からいわゆる沈目式土器に伴なうものと考えられる集石遺構などを検出した。その結果、縄文早期の押型文土器の出土する可能性と、土師式土器を伴なう大規模な住居址群が存在するであろうことを報告した。したがって、沈目遺跡は大規模かつ複雑な様相を呈する貴重な遺跡として捉えられることとなった。

昭和48年１月、田辺哲夫文化課長を調査責任者とする調査団を編成した。筆者が現場に向い調査を開始し専念する。

１月16日、安達武敏と作業員を加えて、幅約 300m・長さ500mに亘る$\frac{1}{500}$ の地形測量を開始する。また、Ｂ地区の南側から20mごとに幅２m・長さ約30mのトレンチを10ケ所設け、遺跡の全体的把握につとめる。

３月下旬から４月にかけては、年度末、年度始にあたり調査を一時中断したが、この間は主に地形図の整理を行なった。

５月上旬、調査を再開。限られた調査期間であることを考慮し、表土剝ぎ作業には、ツメを取り刃を平たくしたバックフォーを導入した。慎重な作業ではあるが、機械力の威力は大きく、見る見るうちに表土剝ぎ作業は進んだ。６月上旬にはＢ地区のほぼ全面に亘る表土剝ぎを終了した。このバックフォーを使った表土剝ぎに並行した表面の清掃で、早くも第１号、第２号住居址を検出した。次に姿を現した第３号、第４号遺構は、プランが不明確で正確な性格をつかむことができなかったが、新たにSTA163＋80(1)(2)区で、第５号、第６号各住居址を明確に検出した。

このようにバックフォーを使った表土剝ぎが進展するにしたがい、住居址プランをつぎつぎに検出し、６月中旬で、すでに10数基を確認した。梅雨期ではあったが、幸いなことに連日晴天が続き、作業は大きく進展した。６月12日には別府大学賀川教授が現地を視察。

すでに確認をおえている15基の住居址の中で、第１号、第２号の２基の住居址は床面まで発掘する。また STA164＋20 (1)区を第Ⅳ層まで掘り下げ、縄文早期押型文土器と集石遺構、さらにピット群の存在を確認し、沈目遺跡が広く縄文早期と古墳時代の両時期にわたる遺跡であることを確証した。

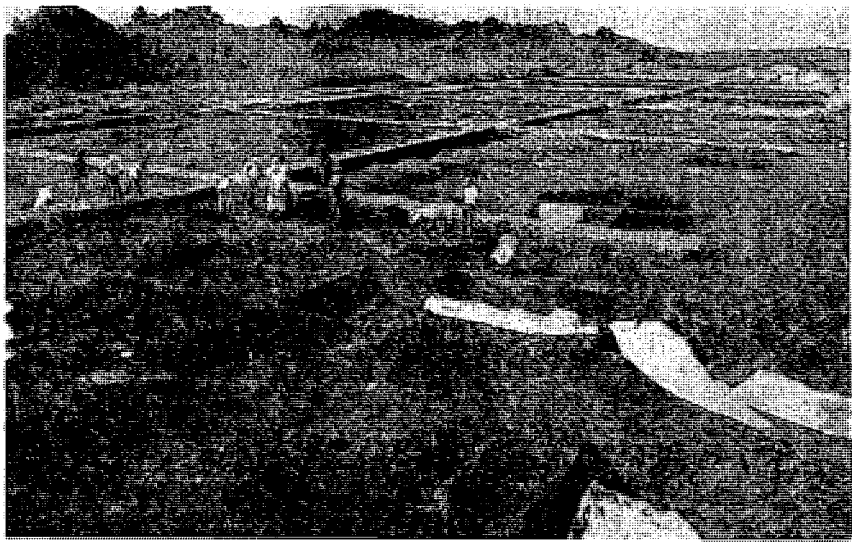
また、表土剝ぎ作業中、数点の布目瓦の破片が出土、おりから塚原古墳群の調査に来熊中の別府大学小田富士夫助教授に説明を請うた。このような作業下において、限られた期間内での

調査であることを考慮し、急遽別府大学考古学研究室に専攻生の応援を依頼。７月15日より調査補助員として、学生７名が参加することになった。

７月は、合計20基の住居址と、主にSTA164＋00(3)(4)区に出土した縄文早期押型文土器の調査を並行して行なった。

住居址群の保存状態は非常によく、土師式土器の壺・甕・小形坩・高坏などが豊富に出土した。なかでも、第６号住居址では完形の小形坩を出土し、第16号、第23号住居址では多量の土器が出土した。

酷暑の中、学生と地元作業者一体になっての調査であり、豊富な遺物の出土は、一滴のカンフル剤となった。学生が主として調査したSTA164＋00(3)(4)調査区にも押型文と集石遺構が現われ始める。



調　　査　　風　　景

８月に入り、橘昌信講師も来訪、指導を受ける。STA 164＋00(3)(4)区、STA 164＋20(3)区の押型文土器を主とした遺構の調査をほぼ完了した。確認した古墳時代の住居址はほぼ７割を終了し、つづいて写真撮影・実測を開始する。

９月の声を聞くとともに、暑さも幾分柔らぎ、残りの住居址の検出と並行して、主に写真撮影・実測を行なう。さらに、Ａ地区に３カ所のトレンチを設け、バックフォーを使って深さ約1.5m 掘り下げる。このＡ地区は、旧陸軍舞ノ原飛行場建設のあおりをうけ、攪乱がひどく、出土した遺物は土師式土器、高坏の破片数点だけに終わる。第Ⅵ層赤色ローム層まで掘り込みを行なったが、全体的に攪乱がひどく遺物・遺構は皆無の状態であり、Ａ地区の調査を断念した。

10月に入り、新たに３基の住居址を確認。多量の遺物が出土した第11号、第16号、第23号住居址らに続いて、新しく検出された第18号住居址から出土する遺物の数は実に多量で、床一面足の踏み場もないほどであった。残された実測、写真を終え、10月15日をもって調査を終了す

る。

調査を行なった遺構は、下記の通りである。

縄文時代遺構	STA	164＋00(3)(4)区
	STA	164＋20(1)(3)区
古墳時代住居址		26基
土壙		4基
石組を中心とする遺構		2基
その他の遺構		1基

A—1・2・3トレンチ

10月16日調査事務所であるプレハブを撤去、現地調査を完了する。調査終了後、ただちに文化財収蔵庫において遺物の整理を開始した。並行して、図面および本格的な報告書の作成に取りかかった。（江本）

註

1. 小林　久雄　「所謂楕円捺型文土器について」　考古学　第五巻　第六号　1934
　「九州における捺型文土器の諸問題」　肥後考古学会第53回例会　1948
　「沈目式土器について」　城南町公民館報第23号　1957
　「九州縄文土器の研究」　小林久雄先生遺稿刊行会　1967
　城南町史　「沈目式土器」　城南町　1965
　乙益重隆　「九州西北部」　縄文時代日本の考古学Ⅱ河出書房　1967
　杉原　荘介　「弥生式土器と土師式土器との境界」　駿台史学第33号　1974

Ⅱ　遺跡の位置と環境（口絵参照）

沈目遺跡は、行政区、熊本県下益城郡城南町沈目字奥野に所在する。国土地理院発行50,000分の1「熊本」の東側線上から0.5㎝、南側線上から6.5㎝上に位置する。調査地は平坦な状態を示し、海抜約29～30ｍ上にある。

遺跡一帯は、舞ノ原台地の南端にあたり、台地南側を流れる浜戸川をはさみ、目下調査が続いている塚原古墳群[註1]が存在する塚原台地と相対する。

舞ノ原台地は、城南町の北東部にあたり、東側は甲佐町と接する。太平洋戦争当時、この台地上には舞ノ原飛行場が建設されており、今回の調査地であるＡ地区の北側、農道をはさんだ広々とした一帯が、その敷地である。飛行場建設に伴なう大きな攪乱と、終戦後における開墾で、地形は大きく壊され、ＳＴＡ160＋80 以北におけ遺構の検出は不可能であった。したがって、沈目遺跡の調査はこの道路を境とし、ＳＴＡ160＋80から南側台地下ＳＴＡ165＋60までと決定した。すなわち、道路幅60ｍ×全長480ｍ、総面積28800ｍ²の広大な調査地である。調査前においては、陸稲・麦・蔬菜の栽培に加えて、桑・園芸樹木の植樹が行なわれていた。

沈目遺跡は、いわゆる縄文早期沈目式土器を出土するところとして早くから知られていた。このほか『城南町史』に台地の南側崖面に五・六基に及ぶ沈目横穴群の存在が記されている。

この城南町は、尾窪遺跡[註2]で紹介されたように縄文早期から歴史時代に至るまでの県下屈指の遺跡密集地である。この沈目遺跡の周囲を見渡すと，昭和47年５月から現在まで延々と調査が行なわれている塚原古墳群をはじめ、著名な御領[註3]（国指定）・阿高[註4]（県指定）・黒橋貝塚[註5]等がある。また、舞ノ原台地北側を県下屈指の大河川である緑川が流れており、この緑川を見おろすように吉野山古墳群[註6]がある。さらに宮地甕棺遺跡[註7]・沈目迎原[註8]・甕の九遺跡[註9]などがある。また、東側には前方後円墳の狐塚・甚九郎山古墳が存在する[註10]。この南東方向 600ｍ地点は、益城国府推定地[註11]で、台地下南方には、この国府の勢力を背景に陳内廃寺が所在する[註12]。北方、緑川流域をのぞむ地点には、現在も府領という地名が残り、当時の名残りをのこす[註13]。今回の調査で表土剝ぎ中に検出した数点の布目瓦は、これらに関連のあるものであろう。

沈目地区に限っても、沈目迎原・沈目甕の九遺跡・沈目横穴古墳群等の遺跡が所在するが、主に、縄文早期の押型文と土師器・須恵器を主とする遺跡である。

今回の調査地は、城南町大字沈目字奥野と字東原に当り、沈目遺跡と命名した。台地下を流れる浜戸川と、八つ手状になった窪地には豊富な湧水があり、これらの水系と肥沃な水田地、さらに台地一帯の豊富な自然物の採集および狩猟等を背景に沈目遺跡は立地したものである。ちなみに台地上は海抜約29ｍ、台地下にある水田面との比高約10ｍを計り、台地の南側一帯にも縄文晩期・土師器・須恵器[註14]等の土器片が採集され、遺跡が大きく広がる可能性がある。

Ⅲ　沈目式土器について

河出書房発行の『日本の考古学Ⅱ・縄文時代の九州編』[註15]の中に、沈目式土器は縄文早期に位置づけられ、命名された土器は現在、熊本大学法文学部東洋史研究室に保管されている。

沈目式土器の命名は、故小林久雄氏の一連の研究の中から生れたもので、著書の中には、『沈目式土器について』『九州縄文土器の研究』などがある。これらの著書に記された沈目式土器の明確な出土地・出土層は不明であるが、沈目迎原もしくは麓の九遺跡から農地開墾中に出土したものと考えられる。

『城南町史』には、「器形は、底部が平底をなし、口縁がやゝ外反し、器面に山形・穀粒文（楕円）・格子目文・条痕文の押捺が施されたものである。」[註16]と記されている。

この沈目式土器は、御領貝塚では御領式土器の出土層と同一層から出土し、一時、御領式土器との共伴が考えられたこともあった。おりから日本各地から出土する押型文は、縄文早期から遅くとも前期初頭までに位置づけられた。さらに、カブト山遺跡らの調査などを経て、縄文早期末に位置づけられ形態的には口縁が外反し、平底を呈するところから押型文土器の中でも特異な土器として取り扱われて来た。

さらに『城南町史』には、この押型文土器を出土する遺跡として、約10
る。近年、各地で押型文土器を調査および採集した遺跡が数を増している。この中には同じ縦貫自動車道建設地の下益城郡松橋町古保山Ｃ遺跡や[註17]、下益城郡城南町塚原・尾窪遺跡、このほか上益城郡御船町久保遺跡[註18]、菊池郡大津町の鞍岳の麓の広大な台地に広がる牟田ノ原遺跡[註19]などがある。これら、いわゆる沈目式土器を出土する遺跡には、集石遺構を伴なう例が多い。集石遺構そのものの性格が明確にはつかめていないが、住居址と関連をもつものか、墓地としての集石となるものであるか、今後の研究が待たれているものである。　　（江本）

註

1. 九州縦貫自動車道建設に伴なう埋蔵文化財の事前調査が昭和47年から続けられており、多数の方形周溝墓・円形周溝墓・円墳・前方後円墳が発掘されている。
2. 「尾窪」熊本県文化財調査報告第12集熊本県教育委員会　1973
3. 「九州縄文土器の研究」小林久雄先生遺稿刊行会　1967
4. 小林久雄「阿高貝塚と御領貝塚」城南町公民館報第22号　1957
「城南町史」　縄文時代　P18～24　ほか　1965
5. 1973年の集中豪雨の時浜戸川が氾濫し、決壊した堤防と水田面から発見された貝塚で、縄文後期を主とする多数の土器・石器・人骨が出土した。熊本大学調査。　1973
6. 吉野山古墳群「城南町史」P76～80　城南町教育委員会　1965

註

7. 弥生時代「城南町史」城南町教育委員会　1965
8. 同　上
9. 現在の民家近くに弥生後期を主とする土器が耕作中に発見された。
10. 豊田地方の古墳群「城南町史」城南町教育委員会　1965
11. 松本雅明「益城国府」　〃　〃　〃
12. 〃「白鳳文化と陳内廃寺」〃　〃　〃
13. 11に同じ
14. 耕作中に多く発見された。
15. 乙益重隆「九州西部」縄文時代　日本の考古学Ⅱ　河出書房　1967
16. 三島格「沈目式土器」城南町史、城南町教育委員会　1965
17. 1972年熊本県教育委員会が調査、近く報告書刊行予定
18. 1973年　〃
19. 1973年に坂本経堯氏、菊池高校考古学クラブ、熊本市博物館が発掘、多数の押型文土器と集石遺構が発見された。

第一章 調 査 概 要

Ⅰ 調査区について

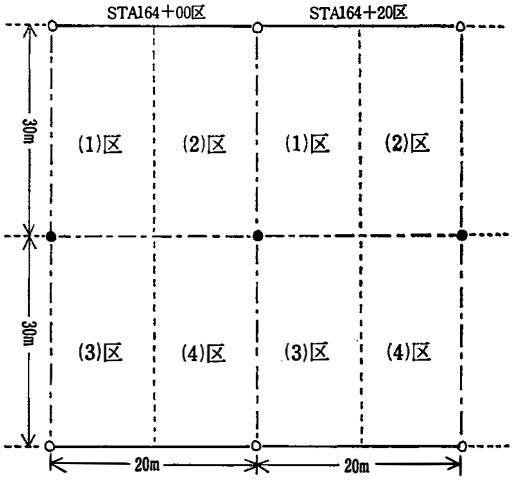
今回の調査地は、STA160＋80からSTA165＋60の間と決定したが、トレンチおよびグリッド設定に当っては、道路公団により事前に設置されている道路敷地の中心杭および幅杭を利用した。160＋80は、道路公団熊本一松橋間において、北側の熊本を起点とし、16000m＋80mの距離にあることを意味する。20m単位ごとの基点グイ打ちが行なわれている。

調査地内にある県道松橋一甲佐線と二つの農道とをはさんで三つの調査地を設定し、北側からA・B・C地区とした。[註1]

A地区は、STA160＋80からSTA164＋60にあたり、北側と南側を農道にはさまれた区間である。B地区は、STA162＋60からSTA164＋40までにあたり、北側を農道に、南側を県道にはさまれる区間で、幅約60m、長さ約180mにおよぶ広大な調査地である。C地区は、STA164＋60からSTA165＋60にあたる北側の県道と水田面とにはさまれた台地の傾斜面である。

縄文早期の押型文土器の調査については、慎重を期するため2m四方のグリッドを設定した。さらにB地区のSTA164＋00からSTA164＋20区間は、第5図に示すように4つの区間に分け、それぞれをSTA164＋00(1)～(4)区とした。[註2] 2m方眼のグリッドには、北側から南側へ1～10、中心線から東側へA～R、西側へA¹～R¹とグリッド番号を用いた。

なお、B地区の東側には、工事用の道路が幅約5mに亘り作られ、またC地区にも工事用道路や表土カットのために遺跡が破壊されており、やむなく調査区から除外した。



第5図 区分図 (SAT164＋00～20)

註

1. 第2図 遺跡位置図参照
2. 第7図 グリッド図参照 (P12)

Ⅱ　遺構の概要

1、A地区

Ａ－１、Ａ－２、Ａ－３の三つのトレンチを設け、赤色ローム層まで掘り下げた。しかしながら明確な遺構は検出できず、出土した遺物は土師器数点である。全体的に攪乱がひどく、第Ⅵ層赤色ローム層の直上に飛行場建設当時のものと考えられる鉄クズを確認した。飛行場建設の際にこのＡ地区が削平され、低いＢ地区に運ばれ、全体が平たくならされたものと考えられる。

2、B地区

今回の沈目遺跡の調査では、このＢ地区に遺物・遺構が集中した。この遺物・遺構は縄文早期の押型文土器から歴史時代にまで及んだ。

縄文時代

押型文土器に伴なうものと考えられる集石が、予備調査時に設けた試掘溝の断面に数カ所みられた。また、Ｂ地区の表土剝ぎ作業中に、土師式土器に混じって押型文土器が出土し、集石を伴なう押型文土器の存在する可能性が強まった。

最初に設けたSTA164＋20区Ａトレンチの第Ⅲ・Ⅳ層から断片的に押型文土器が出土し、全体的な遺構の広がりを調べるため、さらに９カ所にのぼるトレンチを設けた。その結果、主にSTA164＋00区に遺物が集中してみられた。とくにＢ・Ｃトレンチは、耕作や後世の住居址などで比較的壊されることなく、プライマリーな状態で包含層が残されていた。慎重を期するため２ｍ方眼のグリットを設定し、層序ごとに10㎝掘りを行なった。

遺構としての確認はできなかったが、STA163＋00(3)(4)区を中心に表土中より縄文晩期の土器片や、同時期のものと考えられる土製の勾玉を採集した。またSTA164＋00(1)(2)区からも晩期土器と石斧や土錘などを採集した。

弥生時代

弥生時代の遺構はなく、第４号遺構中の石組の中に弥生時代前期に比定されるような土器片二点が出土した。他に出土をみず、弥生時代の集落址は地理的に他の地域に所在するものと思われる。

古墳時代

Ｂ地区の重要な遺構の多くは、古墳時代である。25基の住居址は、おおくが土師式土器を伴なう。これらの住居址の貯蔵庫とも考えられる二つの土壙もある。このほか、住居址の周囲には多量のピットや須恵器などを検出・採集した。

歴史時代

明確な遺構として検出することはできなかったが、表土中から内面を黒く研磨した高台付埦・皿などが出土した。このほか、布目瓦や石組の遺構と、燈明皿を伴なう四基の土壙がある。土壙はそれぞれ方形および円形に掘り込まれ、一つの墓群を形成している。

その他

第4号遺構や第13号遺構は、土壙とともに多量の石組がある。第4号遺構の石組は、石積墓としての可能性があるが、第13号遺構の性格は不明である。（江本）

第二章　縄　文　時　代

第一章で調査概要を述べたが、ここで、縄文時代各時期の遺構・遺物について報告したい。

1　層　位

沈目遺跡における土層は、第6図のとおりである。

第Ⅰ層

現在の耕作土で、飛行場建設時における客土と考えられ、傾斜した低い部分に厚く、高い部分に薄い。すなわち、旧地表は北から南へ、東から西へと低くなる自然傾斜が認められる。土質は黒褐色土層で、小石や砂の混入が多い。乾燥するのが早く、硬い。

註　この第Ⅰ層土は、B地区のほぼ一帯を覆いつくしており、各遺構が保存よく残った理由ともいえる。すなわち、戦争前における開墾や耕作は、今日のような機械力を用いることなく、人力による作業だけであり、各遺構は大きく破壊されることなく、客土で覆われ保存よく残されたものであろう。

第Ⅱ層

旧地表土で、もとの耕作土であり、熊本県地方に普遍的にみられる阿蘇火山灰・黒色ローム層である。全体的に層は薄く、厚さは20㎝程度で、縄文後・晩期から現代に至る文化層である。

第Ⅲ層

黄褐色を呈するキナコ状の土質で、第Ⅱ層と同じく阿蘇火山がもたらした火山灰土と考えられる。

第Ⅳ層

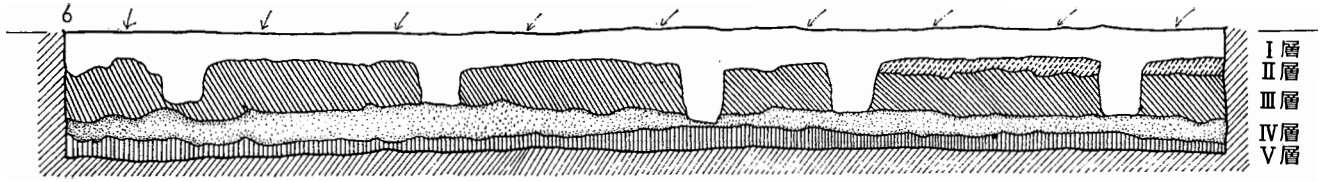
黒褐色粘質土層で、起伏があり、層は厚い部分と薄い部分とがある。

第Ⅴ層

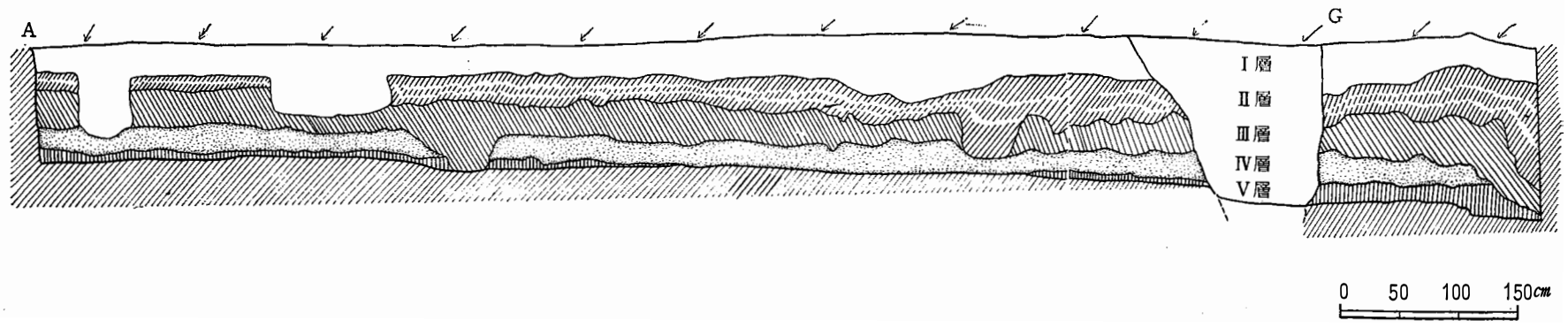
暗褐色粘質土層であり、パミス混りで硬い土塊と粘質土で構成される。

第Ⅵ層

赤色ローム層で、俗に赤土と呼ばれる土層である。



STA164＋00(3)(4)区東壁



STA164＋00(3)(4)区南壁

第6図　土　層　図

Ⅱ　各トレンチについて

表土の全面剝ぎによる住居址および各遺構の調査・検出に加えて、縄文時代の遺構・遺物を調べるため、さらに、大小あわせて10カ所のトレンチを設けた。

ＳＴＡ	162＋80区	Ａトレンチ（２×18m）
ＳＴＡ	163＋20区	Ａトレンチ（２×18〃）
ＳＴＡ	163＋60区	Ａトレンチ（２×18〃）
		Ｂトレンチ（４×23〃）
ＳＴＡ	163＋80区	Ａトレンチ（４×22〃）
ＳＴＡ	164＋00区	Ａトレンチ（３×15〃）
		Ｂトレンチ（10×11〃）
		Ｃトレンチ（９×17〃）
ＳＴＡ	164＋20区	Ａトレンチ（２×22〃）
		Ｂトレンチ（４×18〃）

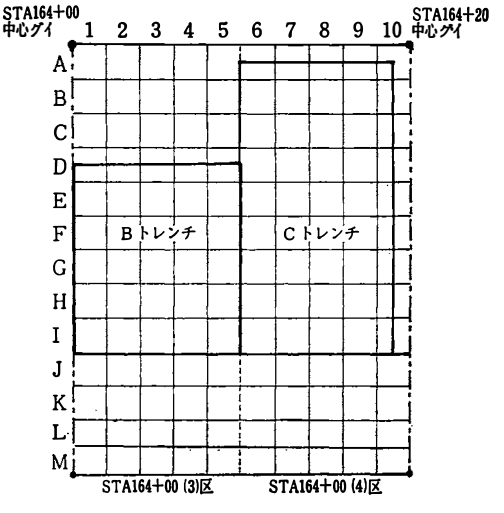
10カ所のトレンチによる調査の結果、押型文土器に伴なう遺構・遺物を確認できたのは、ＳＴＡ163＋80区Ａトレンチ、ＳＴＡ164＋00区Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ、ＳＴＡ164＋20区Ａ・Ｂトレンチで、ＳＴＡ164＋00区を中心とした地域に限定された。これらの中で、ＳＴＡ163＋80区Ａトレンチおよびｓｔａ164＋00区Ａトレンチ、ＳＴＡ164＋20区Ａ・Ｂトレンチでは、わずかに山形・楕円形を主とする押型文土器の出土をみたが、土器片は断片的な資料にとどまった。

このように、押型文土器の出土地域が限定されたなかで、ＳＴＡ164＋00(3)(4)区Ｂ・Ｃトレンチにおいては、第Ⅲ層以下に耕作等の大きな攪乱を受けることなく、ほぼプライマリーな状態で、集石遺構および押型文土器を主とする遺物を検出することができた。

Ⅲ　Ｂ・Ｃトレンチについて

ＳＴＡ164＋00(3)(4)区に、Ｂ・Ｃトレンチを設けたが、Ｂトレンチは ＳＴＡ164＋00区の中心杭から西へ７ｍの地点から18ｍ地点、北から南へ10ｍ、すなわちグリッド番号縦Ｄ～Ｉ、横１～５相当区である。Ｃトレンチは、グリッド番号縦Ａ～Ｉ、横５～10相当区である。

調査は、両トレンチとも第Ⅰ・第Ⅱ層の排土作業を終えたのち、押型文土器の重要包含層と考えられた第Ⅲ・第Ⅳ層は、10㎝掘りによる調査を行なった。各層は10㎝掘りの調査につき、上部層から順にⅢａ～ｃ層、Ⅳａ～ｂ層とした。



第7図　グ　リ　ッ　ト　図

1. 出土状況

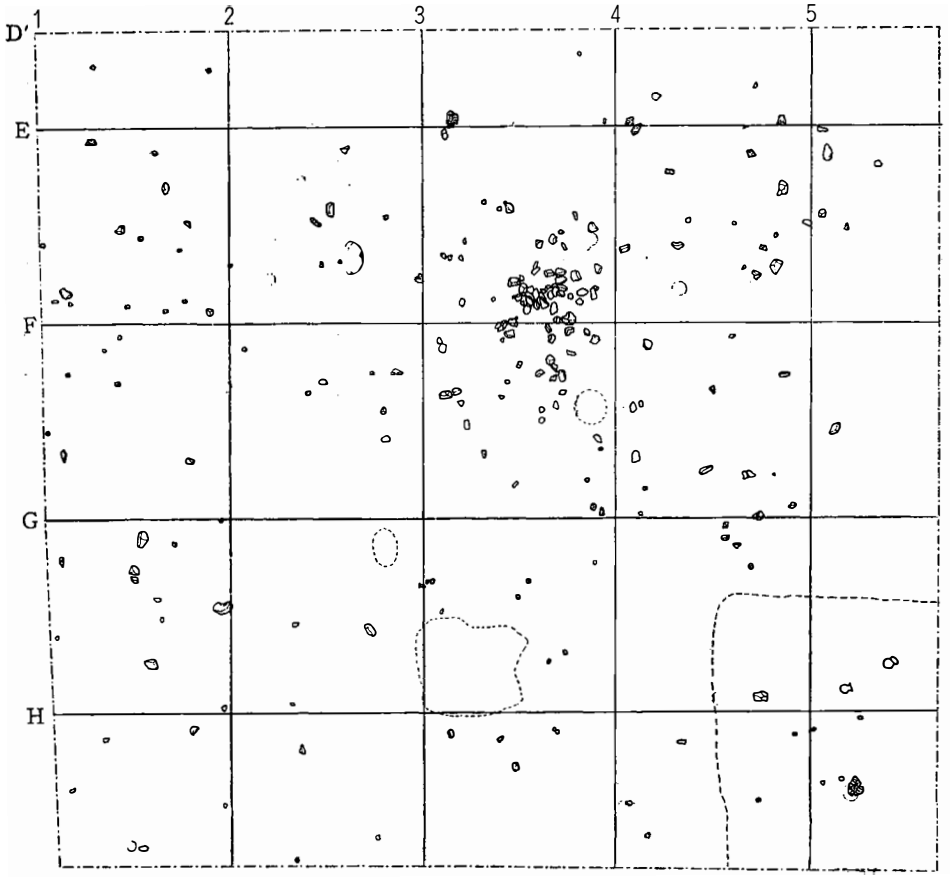
第Ⅰ・Ⅱ層

第Ⅰ・Ⅱ層は客土および耕作土層であり、一括して排土作業を行なった。排土中からは、押型文土器・土師器・須恵器・布目瓦・土錘・石錘らを採集した。数点の押型文土器を含む縄文時代の遺物についてはこの章で、またそのほかの遺物については第Ⅳ章で後述したい。

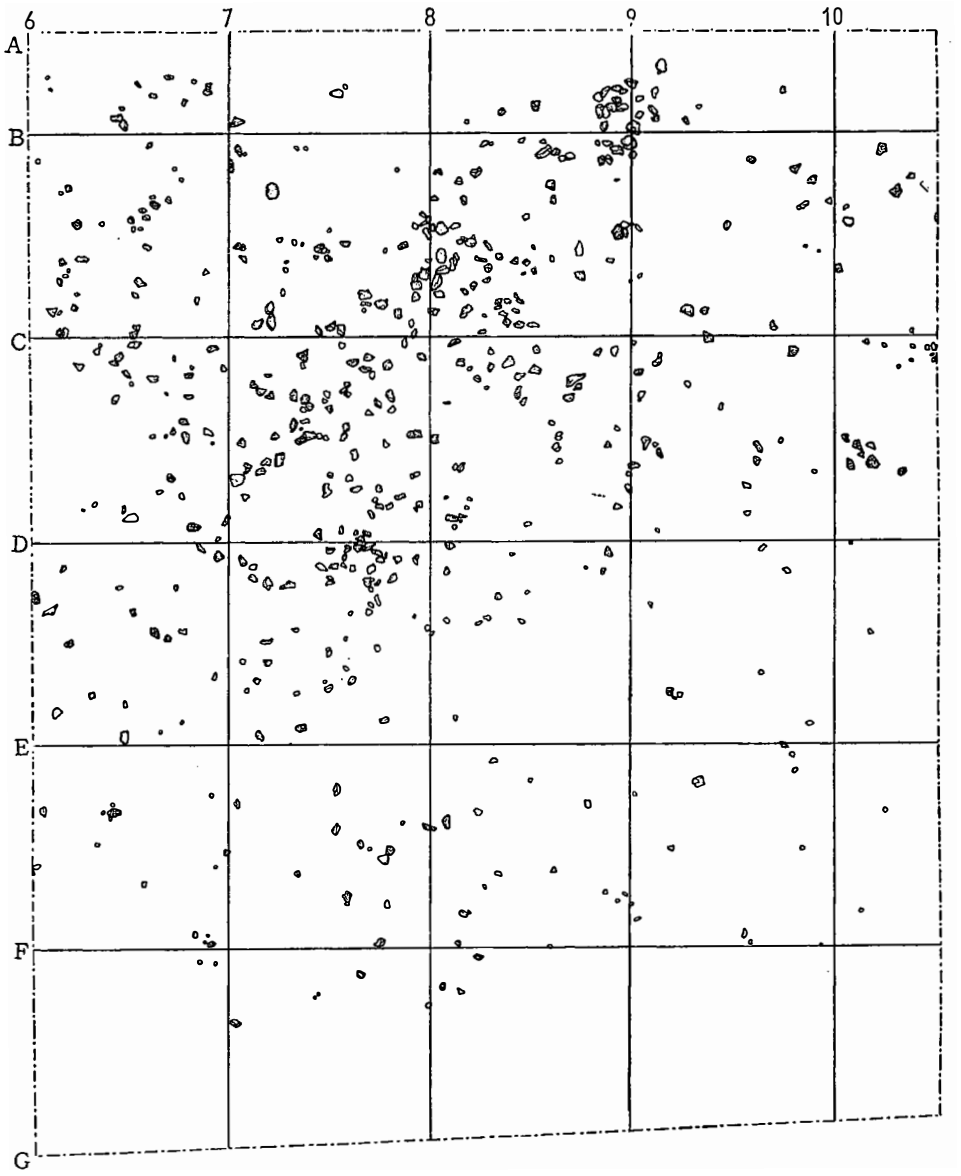
第Ⅲ層

＜Ⅲａ層＞　耕作をはじめとして、第Ⅱ層からの攪乱が多い。数点の土器片が出土したが、プライマリーな状態での出土ではない。

＜Ⅲｂ層＞　Ⅱ層からの攪乱も少なくなるが、遺物の出土はきわめて少ない。数点の押型文土器片と石片が認められた。石片は10㎝内外の砂岩質で新しい割れ口は赤褐色を呈する。焼石として用いられた痕跡はなく、もろい石質で、石器の石材として用いられたとも思われない。



第8図　土器出土状況（Ｂトレンチ Ⅲc層）



第9図　土器出土状況（Cトレンチ Ⅲc層）

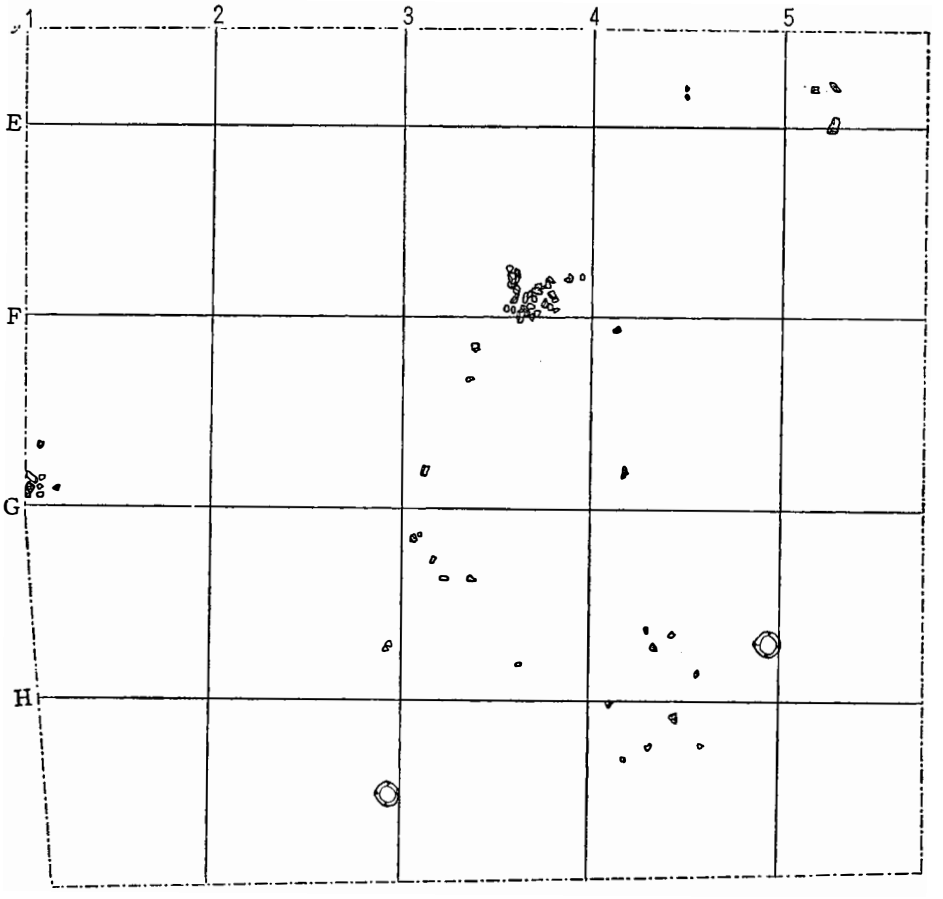
＜Ⅲｃ層＞（第８・９図）

第８図～第12図は出土状況実測図である。Ⅲc層からは遺物と石片が多量に出土した。Ｂトレンチ（第８図）では中央部（Ｅ－３グリッド）に石片が固まり、まわりにも石片が散在する。約20点の押型文土器片が出土したが、まとまりはみられない。土器の出土レベルは第１原点下（海抜29.13m）　100～120cmに含まれる。

Ｃトレンチ（第９図）は、石片の量が多く、円形状に４カ所に集石された可能性がある。押型文土器片の出土も多く、小片まで含めると合計47点をかぞえる。土器の出土レベルは、第１原点下 100～120cm内に含まれる。

第Ⅳ層

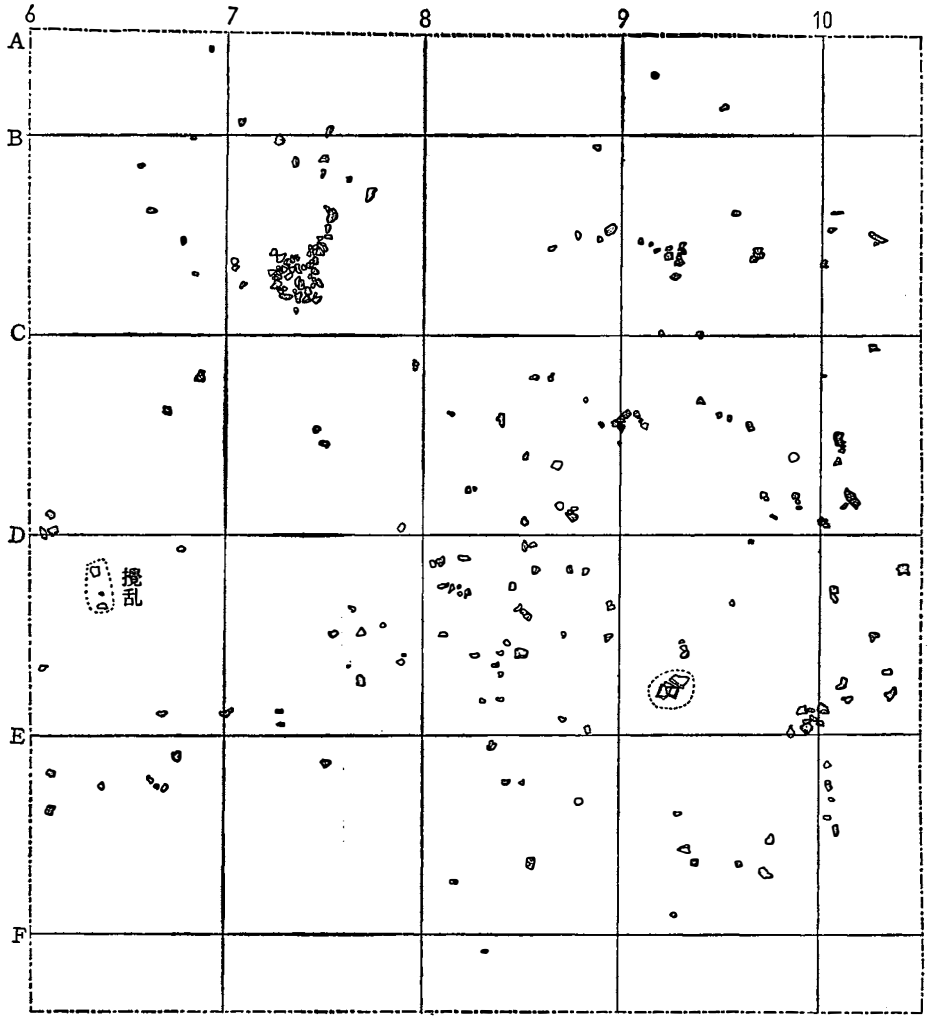
Ⅲc層を境として、B・C両トレンチとも、遺物および石片の出土は少ない。



第10図　土器出土状況（Bトレンチ Ⅳa層）

＜Ⅳa層＞（第10・11図）

Bトレンチでは中央部の一ケ所（E—3グリッド）に集石があり、14点の押型文土器片が散在する。G—4とH—2グリッドに見られるピットは攪乱である。

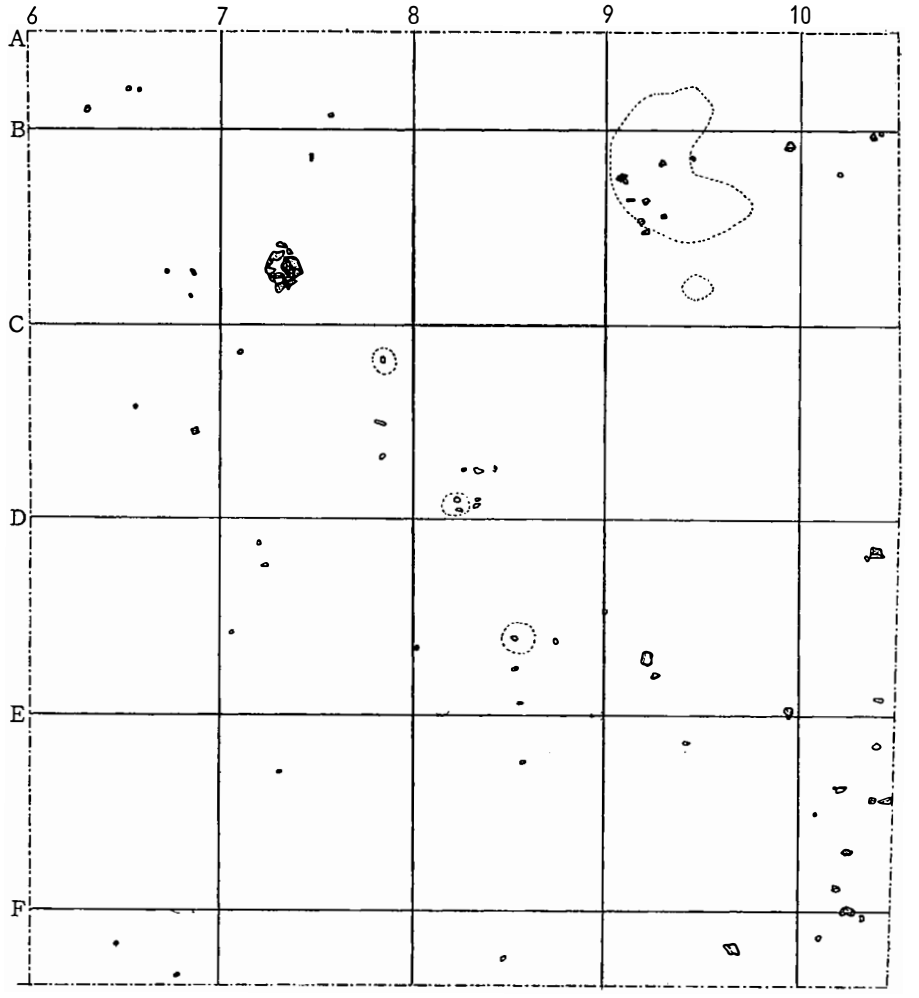


第11図　土器出土状況（CトレンチⅣa層）

Cトレンチ（第11図）は、石片・遺物量ともⅢc層にくらべて少なくなるが、土器片は集まり、大きめのものが多い。

＜Ⅳb層＞（第12図）

Bトレンチでは石片・遺物とも少なくなり、Cトレンチ（第12図）に少量の石片・土器片が認められるだけである。南隅（B—9グリッド）には、皿状を呈する二つの大きな掘り込みがあり、中に土器片と、柱穴とも考えられるピットが一個認められた。土器の出土レベルは、第1原点下122～129㎝である。土器片の文様は、山形・楕円・条痕・無文がほぼ均一して出土する。また、西隅（E—10グリッド）から二点の石器が出土した。



第12図　土器出土状況（Cトレンチ Ⅳb層）

2. 遺物（第13図～第15図）

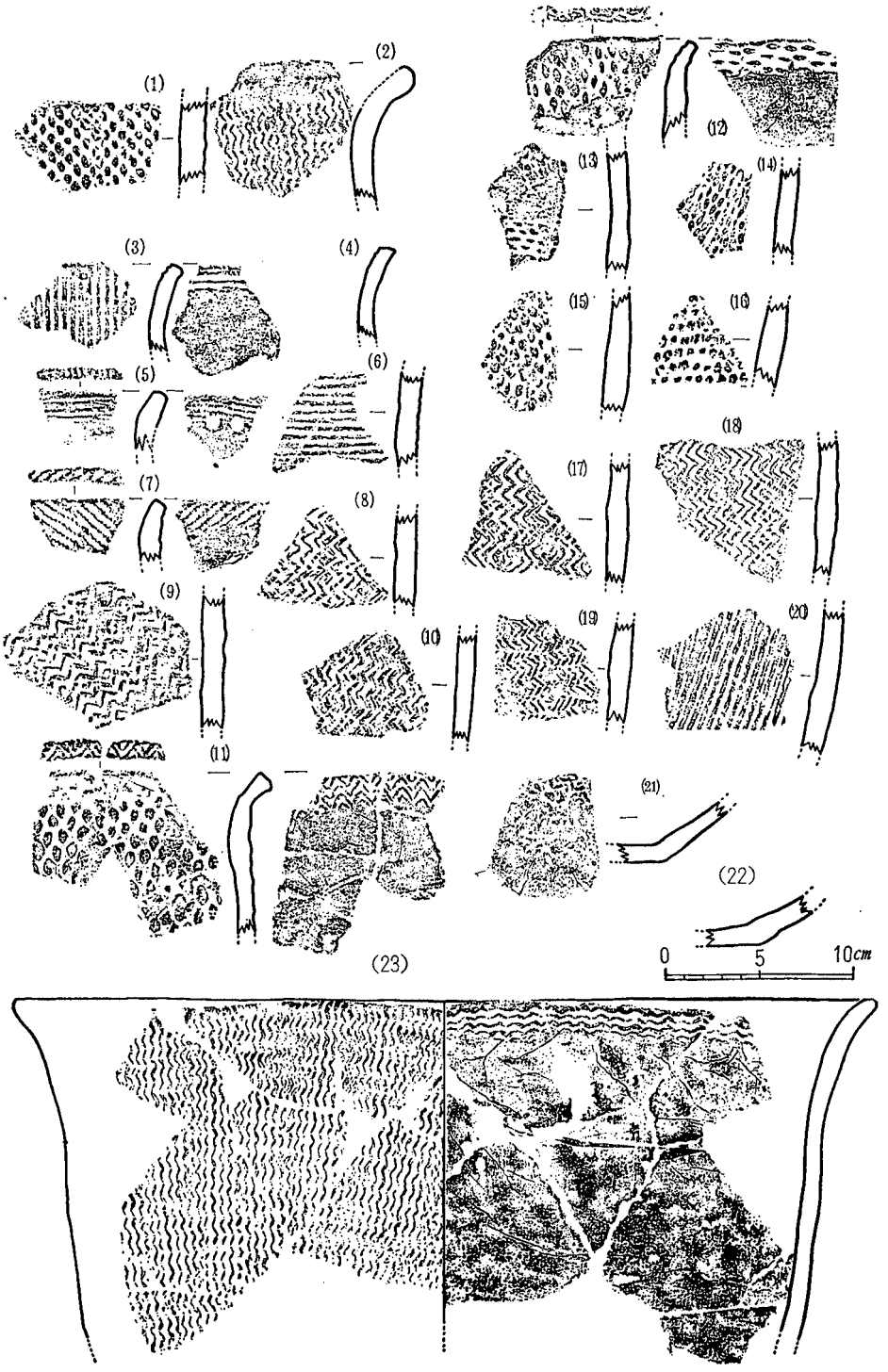
第Ⅲ・第Ⅳ層から約50点の土器片と、2点の石器が出土した。各層ごとに遺物の特徴を述べたい。

第Ⅲ層

＜Ⅲb層＞

Bトレンチ（第13図1～4）

(1)は胴部破片で楕円が縦方向に施文され、一部施文が重なる。(2)は反りの大きい口縁部で鈍角な山形を縦回転して施文をしている。中央部に施文が重なり合うが、この重なり合う部分を境として山形文様は逆向きに並ぶ。色調は黄褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成良好である。



第13図　出土遺物拓本（Ⅲｂ～ｃ層）

(3)・(4)も口縁部であるが反りは小さく、条痕文が施されている。とくに、(3)は内・外面および口唇部に施文がある。

＜Ⅲc層＞

Bトレンチ（第13図5～11）

(5)は口縁部で、色調は濃茶色を呈し、胎土は雲母・滑石が混り、焼成良好である。内外面および口唇部に条痕の施文があり、内面には、さらに直径7㎜を計る連点文がある。(7)は縄文、(8)～(10)は山形の施文があり、(9)の山形文は斜行する。(11)は反りの大きい口縁部で、外面に大粒の楕円文、内面および口唇部には山形の施文がある。色調は黄褐色を呈し、胎土は多量の砂粒を含み、焼成は良好である。

Cトレンチ（第13図12～22）

(12)は口縁部で、色調は濃茶色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成良好である。内・外両面および口唇部に大粒の楕円文がある。(13～(16)は胴部破片で、楕円文がある。(14)の楕円文は小粒で、(15)・(16)は大粒であり、(13)には大粒と小粒の楕円が合わせて施文されている。(17)～(19)は、山形で施文の重なる部分があり、いずれも胴部片である。(20)は底部の近くの破片と考えられ、施文は条痕文である。色調は灰色を呈し、胎土は多量の砂粒を含み、焼成は不良である。(21)・(22)はいずれも底部で、平底を呈する。(21)の色調は淡黄褐色を呈し、胎土は小石を含み、焼成は不良である。底部近くまで山形および楕円の施文がある。

第Ⅳ層

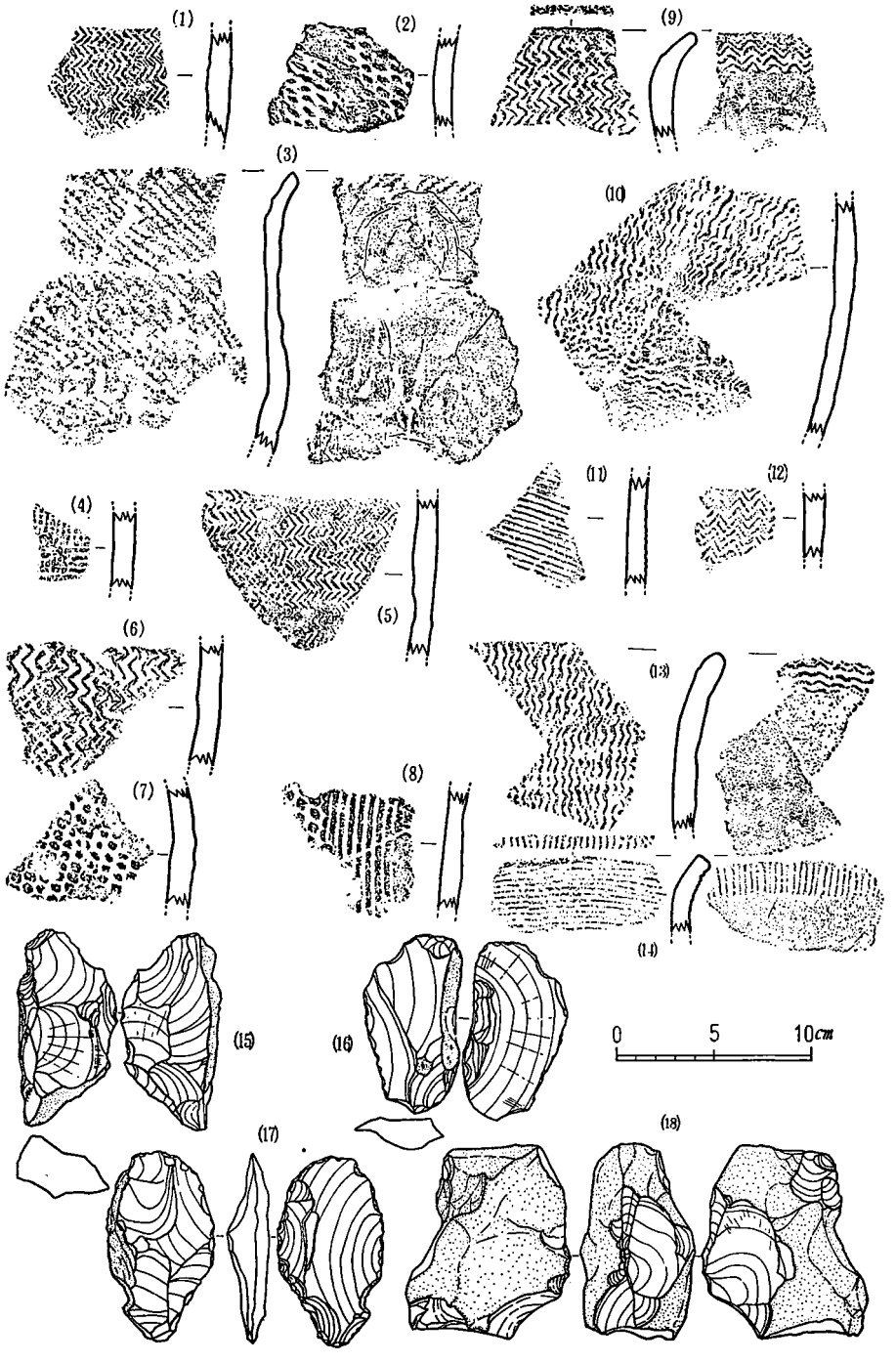
＜Ⅳa層＞

Bトレンチ（第14図1・2）

(1)・(2)とも胴部破片で、(1)は山形が重複し、(2)は大粒の楕円文である。

Cトレンチ（第13図23・第14図9・10・11・13）

(23)は、口縁の反りがやや大きく、口唇部は丸みがあり、推定口径約45㎝を計る大形の土器である。外面は山形文が縦回転され、口唇部の内面に横回転による施文がある。原体の幅は 3.5㎝で内面は平滑に仕上げられている。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒混りで、焼成良好、堅緻である。(9)は反りの大きい口縁部で、山形が内・外両面および口唇部に施文されている。(10)は胴部破片で胎土は粗く、鈍角を呈する山形の施文がある。文様は斜回転が主で、底部にかけては横回転による施文である。色調は薄茶色を呈し、砂粒を含む胎土で、焼成良好である。前記の第13
で、横方向に条痕文が施される。



第14図　出土遺物実測図及び拓本（Ⅳ層）

＜Ⅳｂ層＞

Ｂトレンチ（第14図３～８）

(3)は、縄文原体を斜めに回転した施文である。口縁の内面にも、一部施される。口縁がやや外反し、胴部がふくらむ。器厚は頸部で薄く、胴部から底部にかけては厚い。色調は褐色を呈し、胎土は小石を含む。焼成は不良で、表面の風化がいちじるしい。また、煤の付着が認められ、煮炊きに用いられたと考えられる。(4)～(8)は、胴部破片で、(4)は縦と横方向の条痕文が重なり格子目文状にあり、(5)・(6)は山形の施文で、文様の大きさにはかなりの違いがある。(7)は楕円文であり、(8)は楕円文と掘り込みの大きい条痕文とが組み合わされている。

Ｃトレンチ（第14図14～16）

(14)は口縁部で、反りが大きい。内・外両面および口唇部に、条痕文が施されている。色調は黄褐色を呈し、多量の砂粒を含む胎土で焼成良好である。

石器（第14図15～18）　(15)(16)は表土層から出土したものであるが、押型文土器に共伴するものと考えられる。(15)はサヌカイトを素材とする石核で、剥離面は灰白褐色を呈し、パティナは進んでいる。綿密な打面調整剥離は見られず、剥片は不規則な剥離で取得されている。(16)は横剥ぎで取得された剥片を素材とし縁辺を刃部としたスクレーパーで、打剥部もバルブカットを加え刃部としている。石材はサイカイトで灰褐色を呈する。(17)は、第Ⅳｂ層からの出土で、(16)と同形態を示すスクレーパーである。自然平坦面を打面として横剥ぎで取得された素材で、鋭い縁辺を刃部とするが、さらに主要剥離面にプレッシャーフレーキング様の剥離を加え刃部を形成する。石材はサヌカイトで一部自然面がのこる。(18)は第Ⅳｂ層から出土したチョッパーで、石質は良質の頁岩である。自然面が多く残り剥離面は乳白色を呈する。数度の大きな剥離を基調とし、さらに小剥離を加えて刃部を形成する。

＜第Ⅰ・第Ⅱ層および表面採集遺物＞（第15図１～10）

(1)～(6)は口縁部で、いずれもいくぶん外反する。

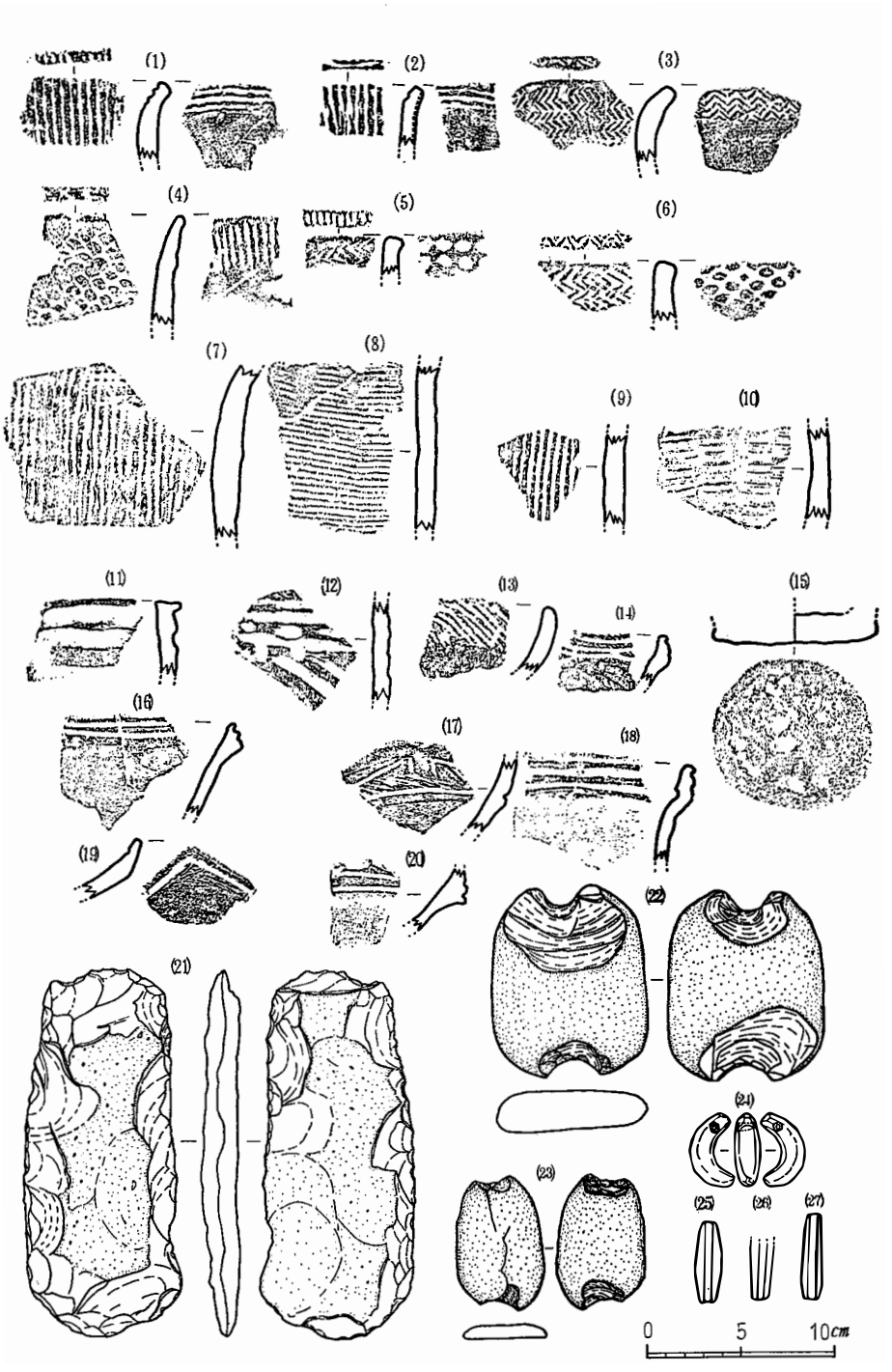
(1)・(2)の施文は条痕で、内・外両面および口唇部に施されている。口唇部の施文は、(1)は縦、(2)は横方向に行なわれている。

(3)は内・外両面と口唇部に山形の施文があり、外面は縦回転で、内面は横回転である。(4)は外面と口唇部に大粒の楕円文、内面に条痕文が施される。内側から二カ所、外側から一カ所、焼成後に施した穿孔がある。(5)は外面に山形文、内面には直径約７㎜の連点文が横に並列する。さらに、口唇部は幅広く、えぐりの大きい条痕文が施されている。(6)は山形文と楕円文との組み合せである。(7)～(10)は胴部破片で、条痕文が施されている。

＜その他の縄文時代遺物＞（第15図11～27）

明確な遺構としてつかむことはできなかったが、前記の押型文土器と時期を異にする遺物を検出した。表面からの採集遺物も含めて報告したい。

土器（第15図11～20）(11)(12)は縄文中期の阿高式土器と考えられる。(11)は口縁部で(15)は底部と



第15図　出土遺物実測図及び拓本（表採）

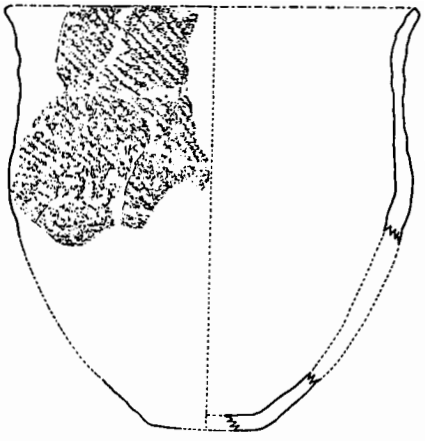
思われる。⑬⑭は口縁部で、⑭にはスリ消し縄文が見られ、縄文時代後期の遺物と思われる。⑯～⑳は口縁部で後期の遺物である。

石器（第15図21～23）縄文晩期土器に伴なうと思われる三点の石器がある。㉑は大型の打製石器で石鍬と考えられる。石質は安山岩で重さ440gを計る。㉒・㉓は偏平な河原石を用いた石錘である。

土製品（第15図24～27）㉔は土製の勾玉で、㉕㉖㉗は土錘であり、ともに縄文晩期土器に伴なうものと思われる。

Ⅳ　まとめ

押型文土器は、各層ごとに明確に分けられるような、著しい器形および文様の変化はみられない。完形資料はないが、縄文が施された第14図⑶と第13図㉑の資料で復原すれば、右図に示す器形が求められよう。一般的に口径は20～30cmを計るものが多く、[注1]中には40cmをこえる大形のものもある。



第16図　復　原　図

胎土は、一般的に粗く、小石、砂粒を含む。色調は、黄褐色・黒褐色を呈するものが多いが、赤褐色・灰色を呈するものもある。焼成は、良好なものと不良なものとの差が大きく、良好なものは堅緻であり不良なものは風化がいちじるしい。器厚は、1cm内外を計るものが多く、厚いものは1.5cmをこえる。口縁は、反りの小さいものが多く、反りの大きいものや直口するものは少ない。胴部はややふくらむが、口径を大きく越えることはない。底部は平底を呈し、器形の大きさに左右され重厚なものと薄いものとがある。文様は口縁から底部近く、口縁の内側および口唇部にも、施文がある。文様には、山形文・楕円文・条痕文・撚糸文・連点文がある。また、条痕が縦と横の二方向に施文されるものもある。口縁部から胴部にかけては縦回転が多く、底部の近くでは横回転が多い。口縁の内側は、条痕文を除きほとんどが横回転である。一個体は同一の施文で行なわれているものが多いが、なかには、山形と楕円、楕円と条痕、条痕と連点など、二種類の原体を組みあわせたものもある。さらに、外面に山形、内面に連点、口唇部に条痕と三種の施文を行なったものもある。

遺物と石片は、第Ⅲ層から第Ⅳ層に出土したが、とくに、Ⅲc層とⅣa層とに集中した。このことは、押型文土器がⅢc層、Ⅳa層をベースとしたものであることがうかがわれ、この上・下層にあたるⅢb層を上限、Ⅳb層を下限とみることができよう。すなわち、押型文土器が時期的にかなり長期に亘る文化であることを指摘できよう。

CトレンチⅣb層では、二カ所の皿状を呈する掘り込みと、柱穴と考えられるピット一個を検出したが、プランとしてはつかめないものの、まわりに散在する土器片の多いことから住居

址としての可能性をもつものである。

押型文土器と石片の出土層が一致し、両者が密接なる関係をもつことは、疑がいのないものである。しかし、石片が焼石とされた痕跡はなく、炉に用いられたと断定はできない。また一方、Ⅳb層から二点の石器が出土しており、石器の石材には、サヌカイトおよび頁岩が用いられ、砂岩質でもろいこれらの石片が、石器の石材として用いられた可能性はない。これらのことは一面に散在する石片が生活に密着して何らかの道具として用いられたとは考え難い。

さすれば、円形状に集石し、墓地としたとも考えられるが、集石下における土壙もなく、推測の域を脱しない。生活の場に用いられたのであるか、墓地として集石されたのか、さらには両者が近接して存在するのか、今後の研究にゆだねられるものである。　（江本）

註　器形は大きさや文様の違いにより、いくぶん変化があると考へられる。

第三章　古　墳　時　代

Ⅰ　住居址の分布状況と概要

Ｂ地区で古墳時代の29ヵ所の遺構を検出、ただちに発掘調査を行なった。検出した順に第１号～第29号住居址とした。この中で第３号、第４号、第13号は調査の結果、住居址でないことが判明した。また、第５号と第６号住居址は、当初切り合いがあるものと考えていたが、調査の結果、切り合いではなく第６号は第５号の建て増し、もしくは張り出し部分に当るもので、第５号住居址と同じものであることが判明した。そこで、第５・６号住居址で一括することにした。したがって、第１号～第29号のうち住居址は25基である。

つぎに、各住居址ごとの概要を、竪穴状況・遺物出土状況・遺物の三つに大きく分けて報告したい。

Ⅱ　各の遺構、遺物について

第１号住居址

Ｂ地区の最南部に位置し、第２号住居址と近接する。耕作により上部を削り取られているが、形状は方形を呈する。現存する壁面の上部から床面の深さは、20㎝内外で、25基の住居址群の中ではもっとも深い。床面は第Ⅳ・第Ⅴ層の土が踏み固められているが、粘土張りなどの顕著な張り床の痕跡はなく、生活を続けるうちに踏み固められたものであろう。

壁は、南北両壁ともほぼ垂直に立ちあがるが、東西の両壁はやゝスロープを持つ。しかし、強く固めた状態ではない。

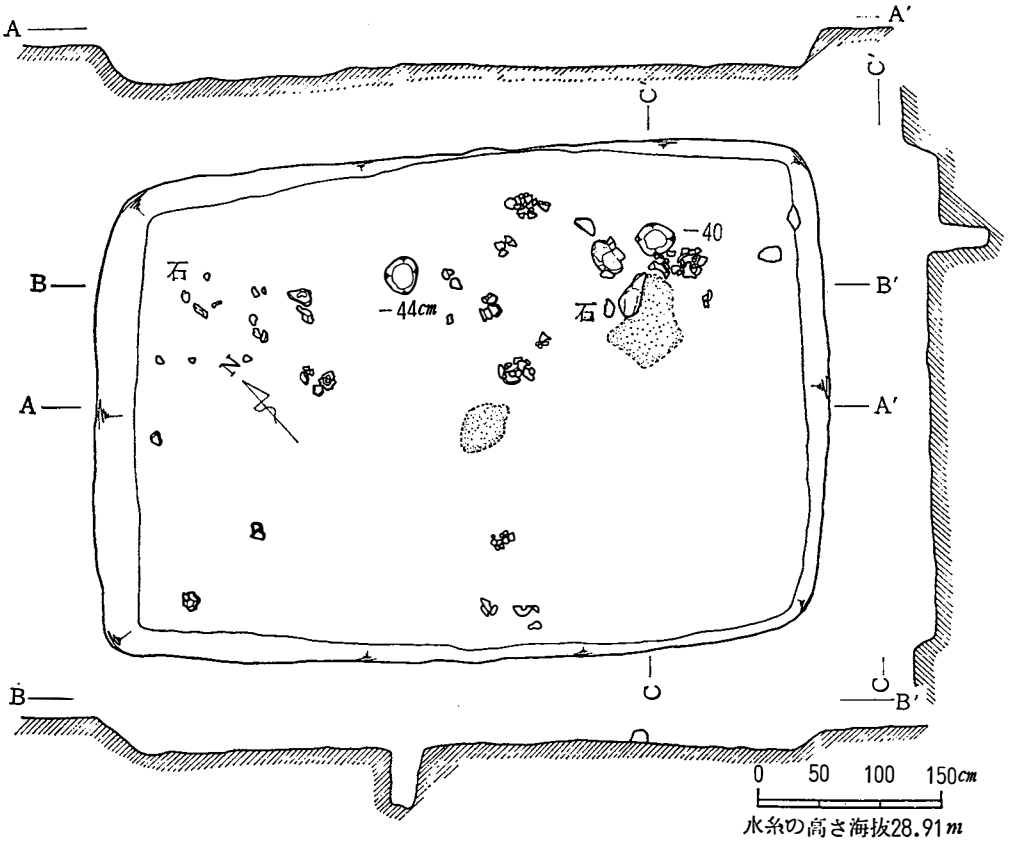
柱穴は２個を検出、それぞれに現在の床面から―40㎝、―44㎝掘り込まれている。床面の直上から二ヵ所の焼土が検出され、かなりの量に及ぶカーボンも同じく出土した。その中で東側隅の焼土の周囲には、二個の大きな河原石がある。さらに煤の多量についた壺が近くにあり、炉を形成していたものと考えられる。

出土遺物は、この多量に煤の付着した壺をはじめ数個の高杯・壺がある。一部が10㎝内外床面から浮いた状態で出土したほかは、床面の直上から出土した。とくに、二つの焼土の近くに土器片が集中して出土した。

遺　物　（図版１）（第１図１～６）

壺（第１図１～３）

⑴壺である。淡黄褐色を呈するが、底部を欠損し表面には煤の付着がある。口縁がかなり外反し、複合口縁の名残りを思わせる屈曲がある。胎土は砂粒混りで焼成もやゝ悪い。表面は櫛目を用い、内面は箆調整を施している。肩から胴部にかけての器厚は厚く、胴部から底部にか



第17図 第１号住居址実測図

けては薄くなり、ずんぐりした形態を示す。多量の煤が付着することから煮炊に用いたものと考えられるが火の当たる部分が薄くなり、熱をこもらせる肩の部分が厚くまた、頸部がしまり煮炊用として合理性に富むものである。

. ⑵小形の壺であるが口縁部を欠損。赤褐色を呈し、胎土は大粒の砂粒を含み、焼成不良である。全体的にいびつである。器面には荒い櫛目を施し、内面は胴部以下を縦に、胴部以上を横に篦削りの調整を行なっている。また、器面全体に亘り煤の付着がある。

⑶壺の口縁で頸部以下を欠損。砂粒混りの胎土で、焼成不良。色調は黄褐色で、口縁部に煤が付着する。

高坏（第１図４～６）⑷黄褐色を呈する高坏で、胎土は多量の砂粒が混り、焼成はやゝ不良である。器面と坏部内側は櫛目による調整が、また脚部の内側は篦による横なで調整が施されている。坏部は深く、脚部は屈曲することなくストレートに広がり、脚端近くで外側にはねる。坏部の口唇部はやゝ平たく、接合部は突帯状に凸部が走る。脚部との接合部分は横なでを行なったのち櫛目調整を施す。

⑸高坏の脚部で、坏部を欠損。色調は淡黄褐色で、少量の砂粒を含むがキメの細かい良質の

胎土を使用。焼成も良好で堅緻である。坏部との接合部には、接合しやすく又強固にするため刻みが施されている。

(6)脚部であり、淡黄褐色を呈する。(4)・(5)に比して小さい。胎土は砂粒を含み、焼成はやゝ不良である。器面は横なでと櫛目で調整し、内側は箆削りである。屈曲部から脚端にかけては丸味を持ち、脚端はつまみ上げられた状態にある。

第2号住居址

第1号住居址と同じく、

面までの深さは現地表からおよそ30～40㎝を計る。第Ⅳ・第Ⅴ層の硬い土がベースとなり、踏み固められた状態を示す。壁は四方ともにやゝ傾斜する。北東部隅に掘り込みがあり、貯蔵穴もしくは入口部分にあたるものと考えられる。

合計9個の柱穴があるが、深さは－8㎝～－32㎝とバラエティに富む。四隅と中央の2個の柱穴が主柱となるものであろうが、北西部隅の柱穴は検出できなかった。東側の中間の柱穴は、いわば支柱となるもので、入口を形成する柱穴と考えられる。2カ所に焼土が集まって出土し第1号住居址と同様に、中央に炉をもったものであろう。

焼土とともにおびたゞしい量のカーボンが、炉と考えられる中央の焼土のまわりにとくに集中してみられる。遺物はカーボンとともに床に密着した状態で検出したが、床面からやゝ浮いた状態で出土したものもある。

時期を異にするが、東隅の肩部に大型の石斧一点が出土した。付近から表採される縄文晩期土器に伴なうものと考えられる。[註1]

遺　物　（図版1）

壺（第2図1～3）

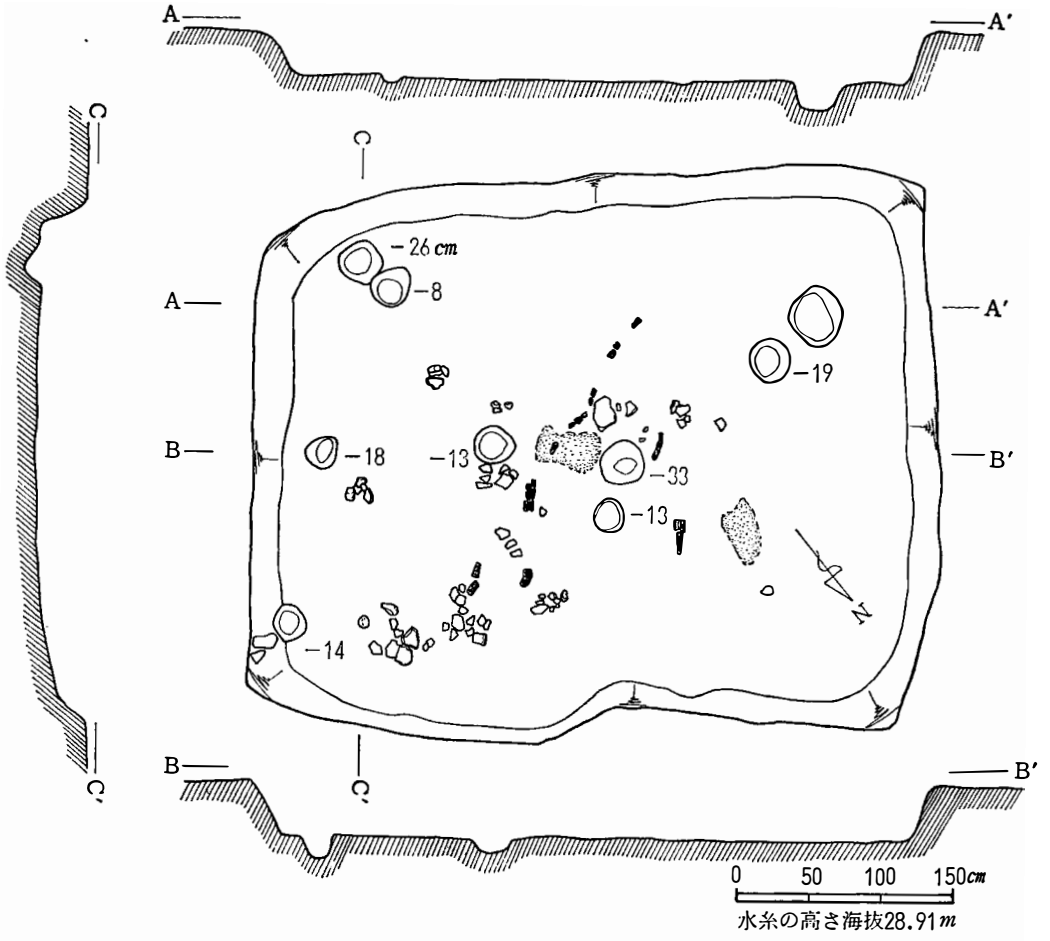
(1)大形の壺であるが、口縁と胴部以下を欠損。砂粒混りの胎土で焼成は普通。器面は櫛目で調整するが、内側は横なでを基調とし、一部は手なでと目の荒い櫛目とを使って調整。煤の付着はない。

(2)器面は褐色で、内面は黒褐色を呈する。胎土は砂粒混りで、焼成は普通。口縁は頸部からくの字状に外反し、口唇部は箆様のもので平たくなでられている。器面は細かい櫛目で調整され、内面は頸部から底部にかけて箆削りが行なわれている。器面には煤が付着する。

(3)器面は褐色で、胎土は砂粒混りである。器面は櫛目、内面は箆削りによる調整が施され、煤の付着がある。口縁は頸部から一度外反するが、途中から幾分内彎する。口唇部は平たくなでられている。

小形坩（第2図4）

(4)薄い褐色で、焼成不良である。胴が張り頸部はしまり、口縁はうすく長い。器面は櫛目調整で、内面は底部近くが箆削り、胴部から頸部にかけては手なでによる調整を施す。内面の頸



第18図 第 2 号 住 居 址 実 測 図

部から胴部にかけては罅割れ状の凹が走る。

註

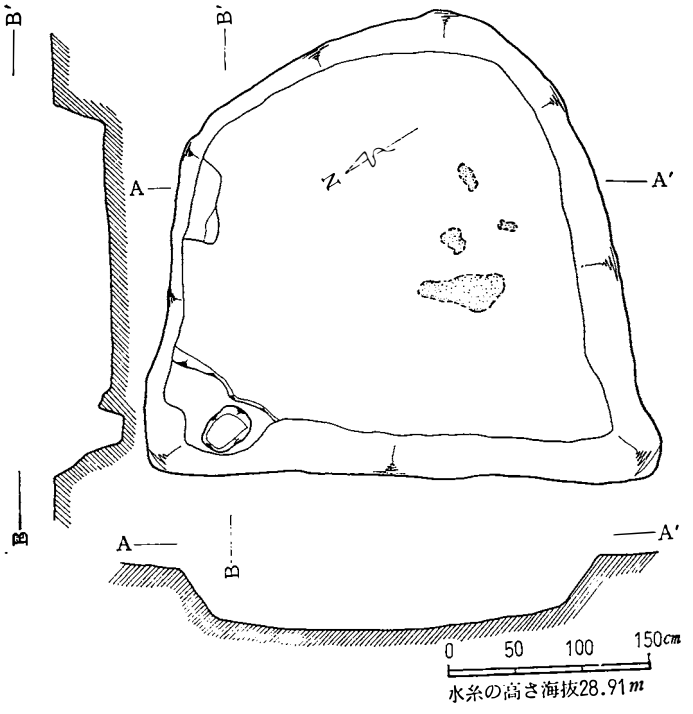
1. 第15図 ㉑参照 P22

第３－A号　遺　構

ＳＴA164＋00(1)区に、第３－Ｂ号、第４号遺構と近接して検出された。当初、第３号住居址としたが、調査の結果、住居址に該当しないことから近接する第３－Ｂ号、第４号共々遺構としてとりあつかった。

この第３－Ａ号遺構は、193㎝×177㎝の大きさで隅丸の台形に近い平面形である。床面までの深さは－40㎝～－50㎝を計り、北側隅に１個のピットがある。床面には一部焼土があるが、他の住居址にみられるように硬く踏み固められた状態ではない。四壁ともに、ゆるやかな傾斜がある。

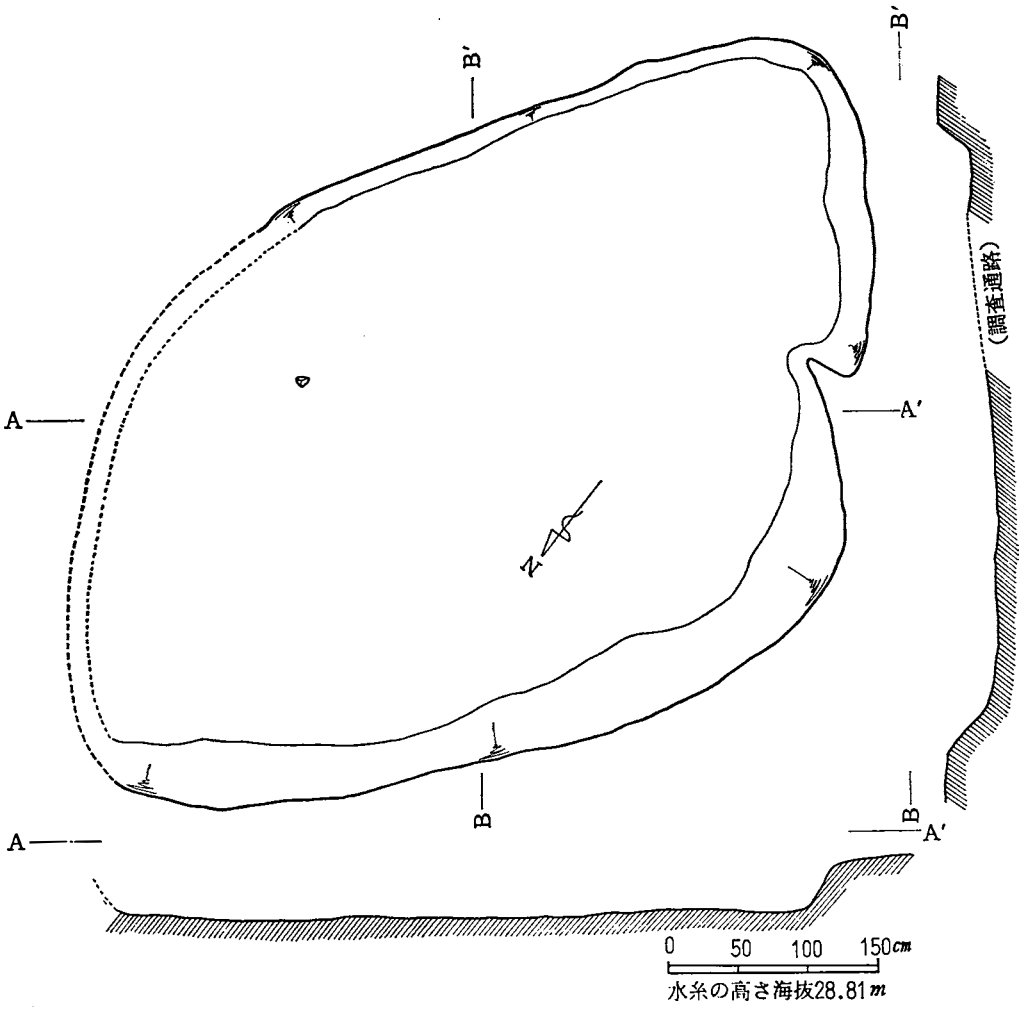
以上のように、住居址としては小規模すぎており、他の住居址群に貯蔵穴が存在しないことから共同の貯蔵庫とも考えられる。



第19図　第３－Ａ号　遺構実測図

第３－B号遺構

第３－Ａ号遺構に近接してＳＴA164＋00(3)区に、推定263㎝×225㎝を計る土壙がある。約30㎝の深さを持ち、床面はほゞフラットな状態で、柱穴・貯蔵穴等の掘り込みはない。床面は強く踏み固められた状態ではない。遺物は、床面からかなり浮いた状態で土師器２点が出土した。



第20図　第３－Ｂ号　遺構実測図

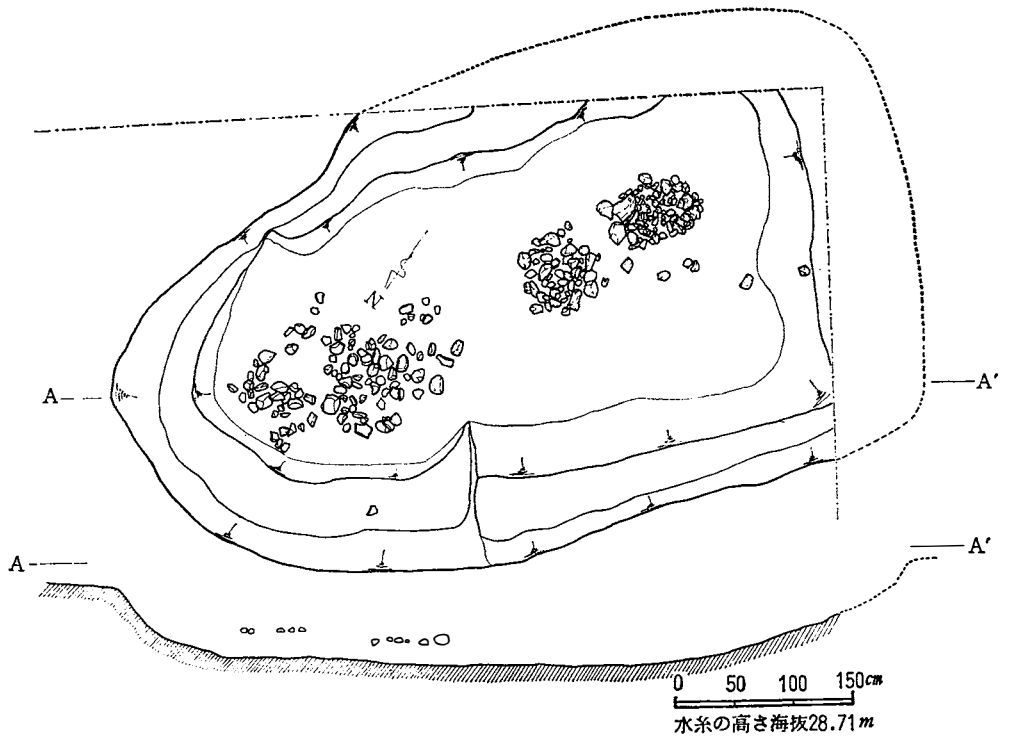
遺　物　（図版２）（第３図１～２）

土師器（第３図１～２）

(1)は、口径9.9㎝器高3.1㎝を計り、糸切底を呈する。褐色で、少量の砂粒を含むが、キメの細かい胎土を用いている。焼成は普通。(2)は、短頸壺で色調は薄茶色を呈する。細かな胎土を用い、焼成は普通である。口縁が頸部からほぼ垂直に立ちあがり、器面には、箆削りおよび水引きによる調整が施される。内面にも、水引きと刷毛めを用いた調整が施される。

このように、第３号遺構には他の住居址に伴なうような土師器は出土せず、後世の遺物が上層から出土する。他の住居址群に何らかの意味をもった土壙が掘られ、後世の遺物が混入したものとも考えられる。

第4号　遺　構



第21図　第4号　遺構実測図

第4号遺構は、ＳＴA164＋00区の中心杭の西約1～3mにあり、土壙の大きさは推定で350cm×210cmである。最深部は約80cmあり、三つに大別できる石組みがある。三つの石組みのうち南側および中央の二つには、さらに円形の掘り込みがある。石組みの中には、布目瓦をはじめとして燈明皿・土師器・須恵器・弥生式土器・縄文時代押型文土器・石製品・磁器など多種多様な破片が出土した。これらはすべて石とともに積み重ねられた状態であり、耕地整理の際に寄せ集められたものと考えられる。しかし、石組みの下に二つの土壙が存在することから、新しい時代の墓としての可能性もある。

遺物は、第Ⅳ章・その他の遺構・遺物の章にまとめて記したい。

第５号住居址

ＳＴＡ163＋80(1)(2)区にあり、第７号、第19号、第20号住居址と近接する。主軸をＮ-50°-Ｗにとり、形状はほゞ正方形を呈し、大きさは684㎝×682㎝を計る。

北側と西側に、幅約100㎝・高さ約20㎝のベッド状の遺構がある。また、 東側の壁はゆるやかではあるが二段にわたる階段状を呈し、入口部分にあたると考えられる。

床面は、踏み固められた状態でほゞフラットである。

柱穴は内側に19個、外側に18個、合計37個を確認した。西側の５個の柱穴はベッド状遺構の裾下にほゞ等間隔に並んでいる。北側の外には、二列に並んで15個の柱穴がある。住居址の内部は貯蔵穴らしきものの掘り込みもなく、貯蔵庫の性格をもつものが作られていたと考えられる。焼土は二カ所にみられる。

遺物は、床面の直上から出土するものと、上層で流れ込んだ状態で出土する土器とがある。前者は高坏を主とし、後者は須恵器および新しい土師器を出土した。

遺　物　（図版２・３）（第５図１～20）

壺（第５図１～２）

(1)胴部以下を欠損した口縁である。赤褐色を呈する。胎土は小石粒を含み、焼成も良好である。調整は器面を櫛目、内面を箆で行なっている。口縁は、くの字状の頸部を示し外反するが途中からゆっくり内彎する。口唇部は平たく調整されている。器面は剝落があり、荒れている。

(2)球状を呈する壺である。口縁および底部を欠損している。色調は部分的に黒褐色と淡黄褐色を呈する。胎土は砂粒混りで、キメ細かい。焼成も良好で硬い。

高坏（第５図３～８）

(3)～(7)は同一形態を示すが、(8)の脚部は、接合部から脚端へかけて顕著な屈曲部を持つことなく、ストレートに広がる。坏部は全体的にふくらみ、ずんぐりとしている。胎土は少量の砂粒を含み、全体的にキメが細かい。器面は、櫛目調整で平滑に仕上げられている。また、脚部の内側は箆による調整が施されている。

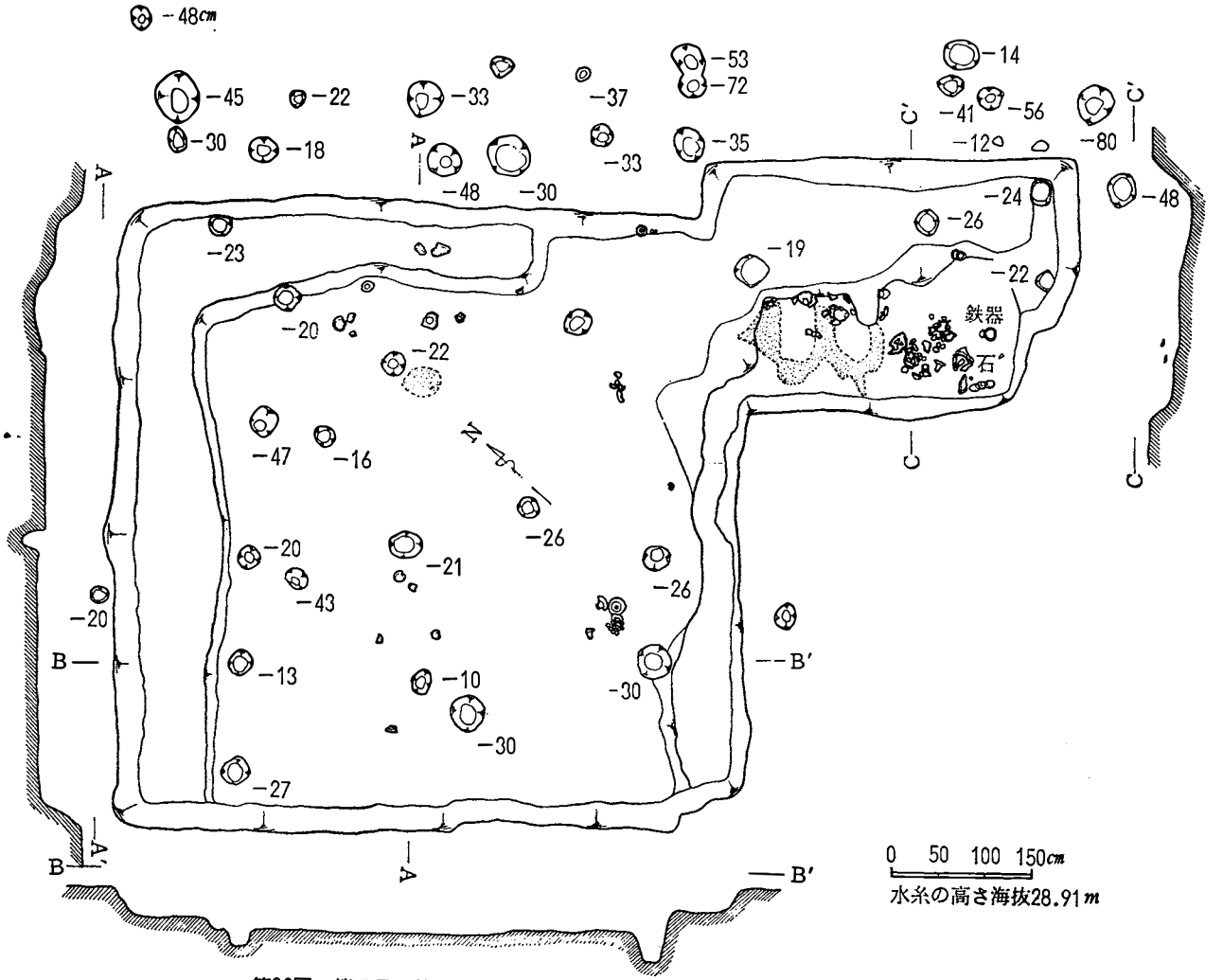
小形坩（第５図９～11）

(9)は完形である。器厚は全体的に薄い。胴部の張りが大きく、ずんぐりとしている。色調は赤褐色を呈し、胎土は細かな砂粒混りである。焼成は良好。器面および口縁部の内側は櫛目を用いた調整がなされ、胴部内面には手なでの跡が残る。

(10)も同一形態を示し、(9)にくらべると全体的に造りが粗雑である。

その他の遺物・埦（第５図12～20）

住居址との時期は異にするが、上層から６点の埦が出土した。明るい褐色で、キメの細かい胎土を使用。焼成は不良で、表面はもろく風化がいちじるしい。底部は、平底・上げ底・高台付の三種類に分けられる。(12)・(15)は糸切り底である。



第22図　第５号・第６号住居址実測図

第６号住居址

主軸をＮ―48°―Ｗにとり、形状は方形を呈し、長辺210㎝短辺141㎝を計る。

床面は踏み固められた状態で、北側が低く南側が一段高くなり、第５号住居址の床面とは同一レベルでつながる。柱穴とみられるものは、内側に４個外側に５個ある。南側の一段高くなった部分に、焼土・カーボン・遺物が固まった状態で出土する。とくに、焼土はコの字状に並列し、二つの竈を思わせる。壺・小形坩・鉄器が出土した。

第５号住居址の遺物が高坏を主としたものであるのに対し、第６号住居址の遺物は多量の煤が付着したものが多く、第５号住居址を居間とすれば、おそらく第６号住居址は炊事場に該当するものであろう。

遺　物　（図版３・４・５）（第６図１～16）

壺（第６図１～７）

いずれも胴部以下を欠損している。(1)は、赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成不良である。頸部はくの字状を呈する。口唇部は平たく、頸部から肩にかけては肉厚である。器面は櫛目調整が施されているが、口縁には横なで調整痕が認められる。内面は箆削りで、頸部から肩にかけては指圧痕が残る。口縁内面にも櫛目による調整が行なわれている。胴部には、顕著な煤の付着がある。

(2)は口縁が長い。(3)・(4)・(5)は幾分小形であり、口縁は頸部がくの字状に立ちあがるが、やゝ外彎がみられる。口唇部は丸みをもつものと、平たく横なでされたものとがある。(6)は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成良好である。口縁は、複合口縁を思わせる屈曲を持つ。器面調整は、刷毛目と横なでを使って行なわれている。内面は箆削りで、調整方法は何ら変ったところはない。(7)は、小形壺の口縁である。調整方法は、(1)～(6)の壺と何ら変らない。煤の付着があり、煮炊き用に使われたものであろう。

高坏（第６図８～11）

４点の高坏があり、坏部を欠損し、脚部だけである。

(8)の色調は褐色で、小石粒を含み、焼成良好である。接合部から脚端にかけては途中屈曲部をもつことなくストレートに大きく広がり、屈曲部を持つ他の三点とは異なる。

(11)は、(9)・(10)に比して小さい。

小形坩（第６図12～14）

三点の小形坩がある。

(12)は薄い褐色を呈し、小粒子を含む胎土で焼成良好である。器面は箆で削り調整を行なった後、横なで及び櫛目による仕上げを行なっている。胴部内壁には、手なでによる指圧痕が残る。(14)は、口縁部で頸部以下を欠損。

その他の遺物（第６図15～16）

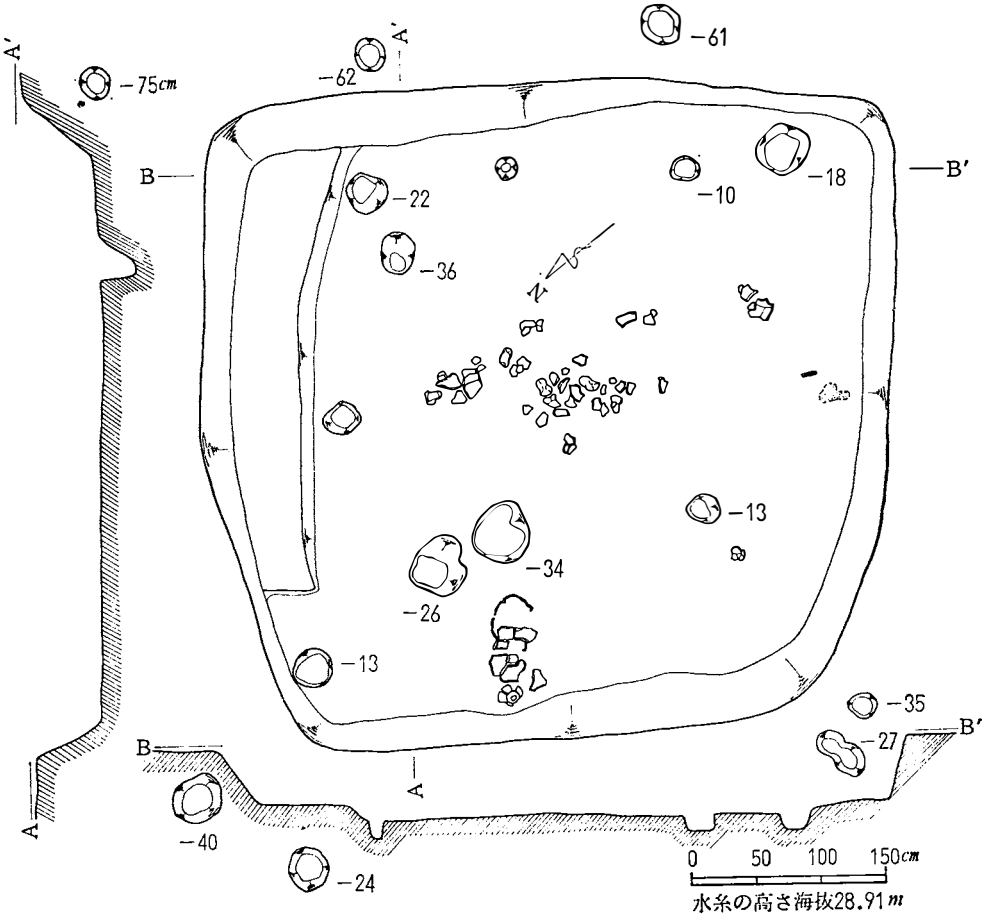
時期は異にするが、上層から須恵器と高台付埦の出土がある。

(15)は、須恵器で平瓶と考えられる。回転台を使ったものであろう。

⑽は、高台を持ち、椀の内部は黒塗りが施され、器面の色調は褐色で、焼成良好である。

第７号住居址

ＳＴＡ1　　⑵区に、第５号、第６号、第14号、第15号、第20号住居址と近接している。主軸の方位は、Ｎ―40°―Ｅをとる。形状は隅丸方形を呈し、269㎝×254㎝を計る。 四方の壁はやゝ傾斜を持ち、床面はほゞフラットな状態で、部分的に小さな凹凸がある。現存する肩部から床面までの高さは―50㎝内外であり、かなり深い。さらに、北側には床面から高さ1
外のベッド状の遺構がある。床面およびベッド上は、顕著な張り床ではなく、踏み固められた状態である。柱穴は、内側に９個、外側に９個ある。内側の４個の柱穴を主柱として構築されたものであろう。遺物は、中央部および西側を中心に床面からやゝ浮いた状態で出土した。焼土は少なく、南壁のすぐ下に確認されるだけである。



第23図　第７号住居址実測図

遺　物　（図版５・６）（第７図１～９）

壺（第７図１～５）

(1)は、大形の壺である。色調は黄褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成は普通である。口縁は非常に短かく、胴部が部分的に大きくふくらみ、いびつである。器面は粗い櫛目による調整であるが、内面は箆削りを基調とし、胴部から頸部および口縁部にかけては櫛目による調整が施されている。器面に煤の付着がないことから、水甕として用いられたものであろう。

(2)は、薄い赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成は良好である。口縁はくの字状に外反するが、頸部の直上はやゝふくらみ、内彎するかのようにみえる。器厚は全体的にうすく 0.5㎝～0.7㎝を計る。器面は櫛目による調整で、内面は箆削りによる調整である。煤の付着がある。

(4)色調は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成は良好である。口縁は外彎し広がる。口唇部は、平らたい部分と丸みを持つ部分とがある。器面は櫛目調整が行なわれ、内面は箆削りである。全面に多量の煤が付着し、煮炊き用にしたものであろう。頸部の約半周には煤の付着がなく、あるいは吊り下げられて用いられた可能性がある。(5)は小形の壺であるが、口縁及び底部を欠損。

高坏（第７図６～７）

(6)・(7)は高坏で、(6)は脚部の屈曲部以下を欠損し、(7)は坏部を欠損。焼成は良好で、堅緻である。

小形坩（第７図８～９）

(8)は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成は普通。(9)は、非常に小形である。色調は黄褐色と黒褐色の部分とがある。器面は、丸い小竹様のもので研磨し、焼成も良好で堅緻である。

第８号住居址

ＳＴＡ163＋00(2)区で、第16号住居址に近接して存在する。主軸をＮ―45°―Ｗの方位にとり長辺448㎝×短辺364㎝を計る。耕作により上面をかなり削平され、壁高20㎝内外の状態で残存している。西隅が耕作により攪乱をうけている。形状は方形を呈し、南壁および西壁はほゞ垂直に立ちあがり、北壁はやゝ傾斜する。床面は踏み固められており、かなり厚く固い。東側に向ってやゝ傾斜し、意図的なものかどうか不明であるが東壁寄りに凹部がある。柱穴は内側に２個確認されたが、顕著な焼土はない。遺物は散発的に、床面から10㎝内外浮いた状態で出土するが、出土量はきわめて少ない。

遺　物　（図版７）（第８図１～５）

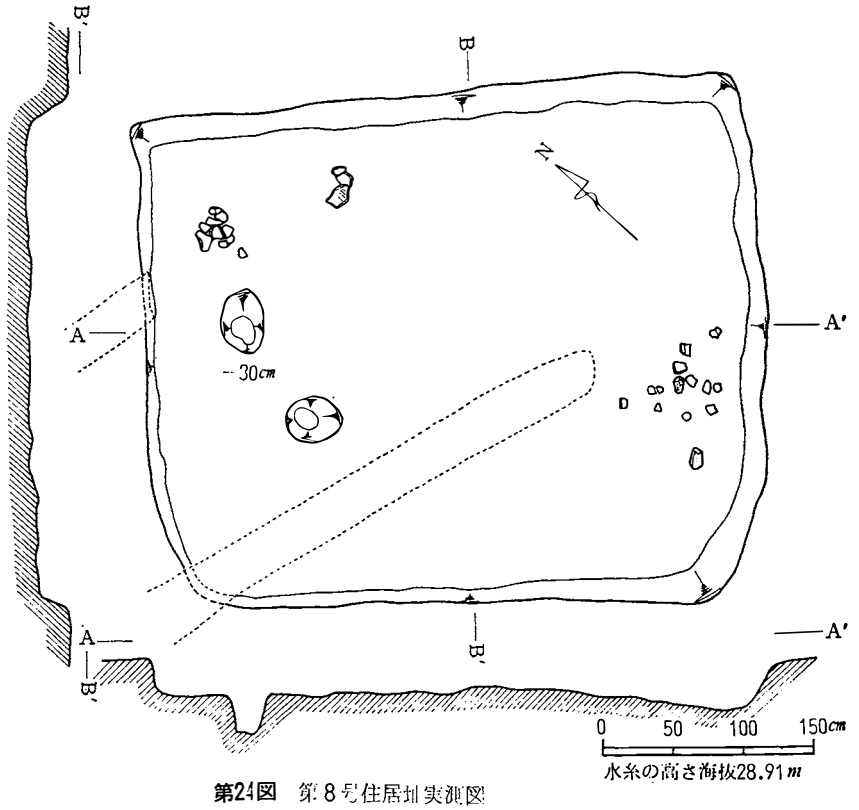
壺（第８図１・２）

(1)壺であるが胴部以下を欠損。色調は褐色で、砂粒を多量に含み、焼成不良である。

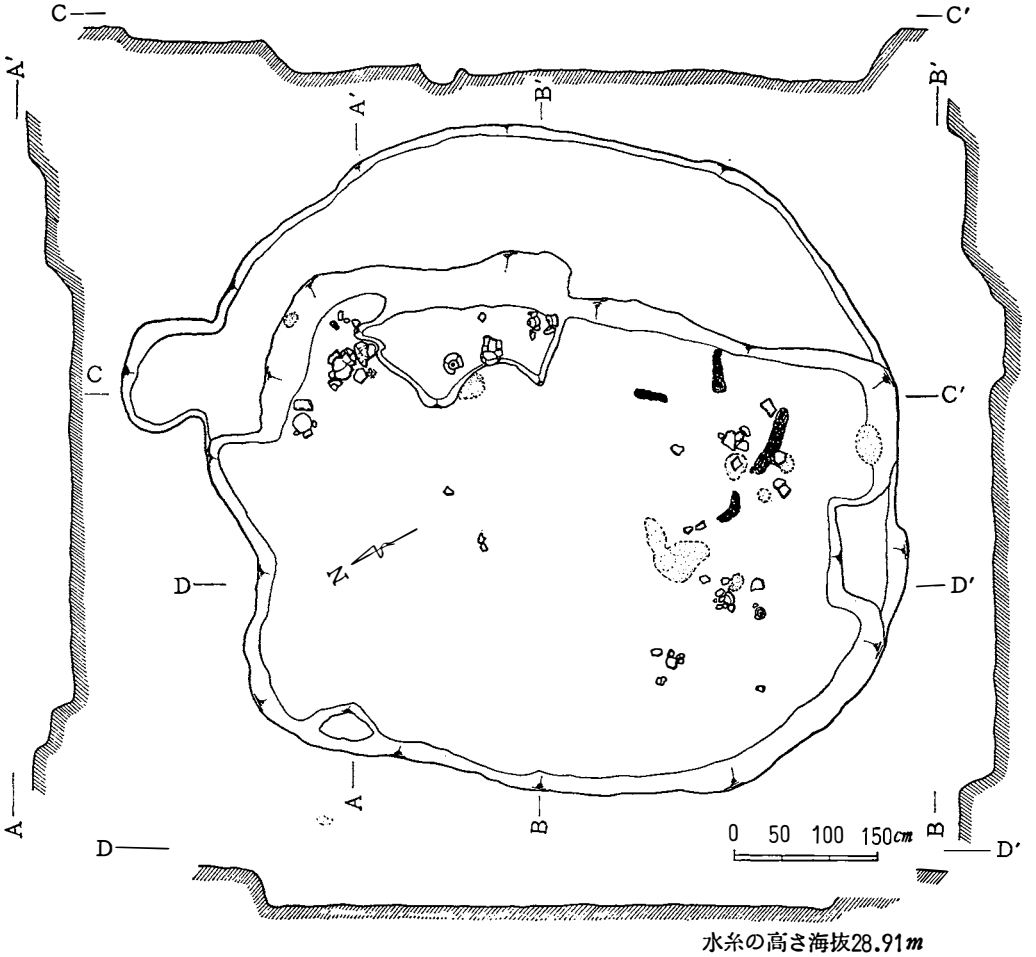
(2)は、淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口縁部及び底部を欠損する。胴部が丸みをもって張り、球形を呈する。煤の付着がある。

高坏（第８図３・４）

二点の高坏脚部がある。(3)は黄褐色で、砂粒を含み、焼成は良好である。器面は箆削りで調整した後、手なでによる調整が施されている。



第24図　第8号住居址実測図



第25図　第9号住居址実測図

第９号住居址

ＳＴＡ163＋80(3)(4)区に主軸をＮ―30°―Ｗにとり、大形の住居址で、長辺412㎝×短辺349㎝を計る。方形プランが主となり、半円のプランが付け加えられた状態である。南側には出入り口と考えられる階段状の遺構がある。

床面は全体的にフラットな状態を示すが、東側ベッドに接続して凹部がある。壁も幾分スロープするが、固められた痕跡はなく、床面からの立ちあがりはゆるやかである。

東側に床面から約40㎝程高くフラットな面があり、半円形を呈する。この部分がベッドと考えられるものである。

柱穴は、このベッドの西側に１個確認されたのみである。焼土は５カ所に認められ、まわりに多量のカーボンがある。とくに、南側のカーボンの量は多く、火災で焼け落ちた住居址と考えられる。

遺物は、高坏・壺・甕・小形坩・カーボンなどで、器形は全体的に大形のものが床面に密着して出土し、焼土・カーボンの近くには多量の煤が付いた土器がある。

遺　物　（図版７・８）（第９図１～８）

壺（第９図１～３）

(1)　淡黄褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成は普通である。口縁は、急角度でやゝ内彎しながら立ちあがる。口唇部は平たく整形され、中央部には凹状に線が走る。肩から胴部にかけては薄い。口縁部の調整は横なでであるが、内面は櫛目調整である。肩部から胴部にかけての櫛目調整は縦方向、胴部は斜行し、胴部から底部にかけては横方向に施されている。

(2)　底部を欠損。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成不良である。胴部には櫛目調整が斜行する。口縁の内側にも、横方向に櫛目調整を施している。内面は篦削りが行なわれ、底部から胴部にかけては斜行し、胴部以上は横方向に調整されている。多量の煤が付着している。

(3)　小形の壺で、完形に復原できた。色調は淡黄褐色を呈し、砂粒混りの胎土で、焼成が悪く表面は皹（ヒビ）割れが多く、ざらざらしている。口唇部は、ゆるやかな波状を呈する。器面は目の細かい櫛目を使い、斜行及び縦方向に調整されている。内面は、篦を横方向に使い調整している。

高　坏（第９図４～６）

(4)・(5)は復原完形である。

(4)　赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含み焼成良好であるが、器面は風化がいちじるしい。坏部は深く、脚部は低い屈曲部をもつ。坏部は屈曲部で稜を形成し、稜から脚部との接合部にかけて櫛目調整が施されている。脚部は横方向への篦磨きが行なわれ、さらに屈曲部付近には櫛目調整がみられる。脚部内面は、篦削りである。

(5)　褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成不良である。復原完形で、よく整った形態を示

す。坏部は肉厚で、屈曲部に稜を形成する。脚部はストレートに大きく広がり、脚端につまみ状の凸帯を形成する。調整には櫛目が用いられ、坏部内面にも横方向の調整がある。脚部内面は、篦削りによる調整である。

(6) (4)と同形態を示すが、坏部を欠損。

小形坩（第9図7・8）

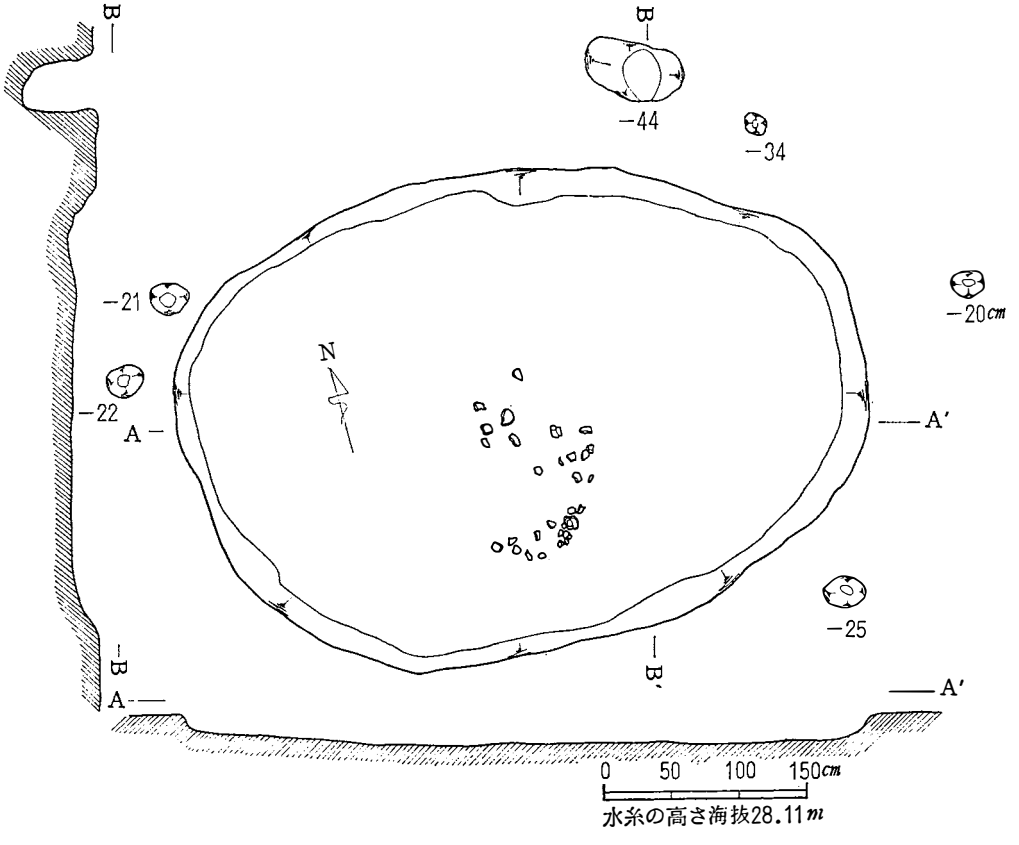
(7) 復原完形である。色調は淡黄褐色で、胎土・焼成とも不良である。器面は風化による剝落がいちじるしい。

(8) 底部を欠損しており、台付の可能性が強い。色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成は普通である。器面は肩から胴部にかけては縦方向に櫛目を施し、胴部は横方向の櫛目調整を施している。内面は篦削りを行ない、手なでの調整を施している。

壺・小形壺・高坏・小形坩の組み合せをみることができ、高坏は脚部が屈曲をもつものと、ストレートに広がるものとの二種類が共伴する。

第10号住居址

ＳＴＡ162＋80 (2)区とＳＴＡ163＋00(1)区にかけて存在する。主軸はＮ－69°－Ｗの方位をとり、長辺504㎝×短辺360㎝の楕円形(卵形)を呈する。第8号住居址と同じく地形的に低い部分



第26図　第10号住居址実測図

に構築されており、上部は削平されている。

残存する壁高は、約20㎝である。床面は踏み固められた状態であるが、さほどの固さ・厚さはない。中央部が自然に凹部となり、炉があったものと考えられる。遺物は、中央部から土器の破片を検出した。

柱穴は、内側には確認出来なかったが、周囲に合計６個ある。うち、北側のピットは大きさが約70㎝×40㎝で、深さも一44㎝を計り、貯蔵穴の可能性もある。

第11号住居址

ＳＴＡ163＋40(3)区に、主軸をＮ一51°一Ｗの方位をとり、第28号住居址に近接して存在する。長辺460㎝×短辺388㎝を計り、形状は隅丸方形を呈する。三隅は、床面より幾分高い。壁はやゝスロープを持ち、固められた痕跡はない。床面もさほどの硬さはなく、やゝ起伏があり、外側より中央部にかけて自然に傾斜し、中央部が低くなる。

焼土の検出はできなかったが、南側隅に大きさ約70㎝×50㎝・深さ約60㎝のピットがあり、貯蔵穴の可能性がある。

柱穴は合計16個で、内側に４個、外側に12個ある。深さは20㎝～40㎝が大半を占る。おびただしい数の遺物が、床面直上および15㎝内外浮いた状態で出土する。

遺　物　(図版８・９・10)(第11図１～24)

遺物は、壺・小形壺・高坏・小形坩・深鉢・手捏ね土器などが豊富に出土した。

壺（第11図１～４）

(1)　胴部以下を欠損。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒混りで、焼成は普通である。頸部は広く、口縁はくの字状に内彎しながら立ちあがる。口唇部は平たくなでられている。口縁は横なでの調整が施されている。胴部には、縦方向を基調とする櫛目調整が施されている。口縁の立ちあがりからみて、甕とも呼べそうである。

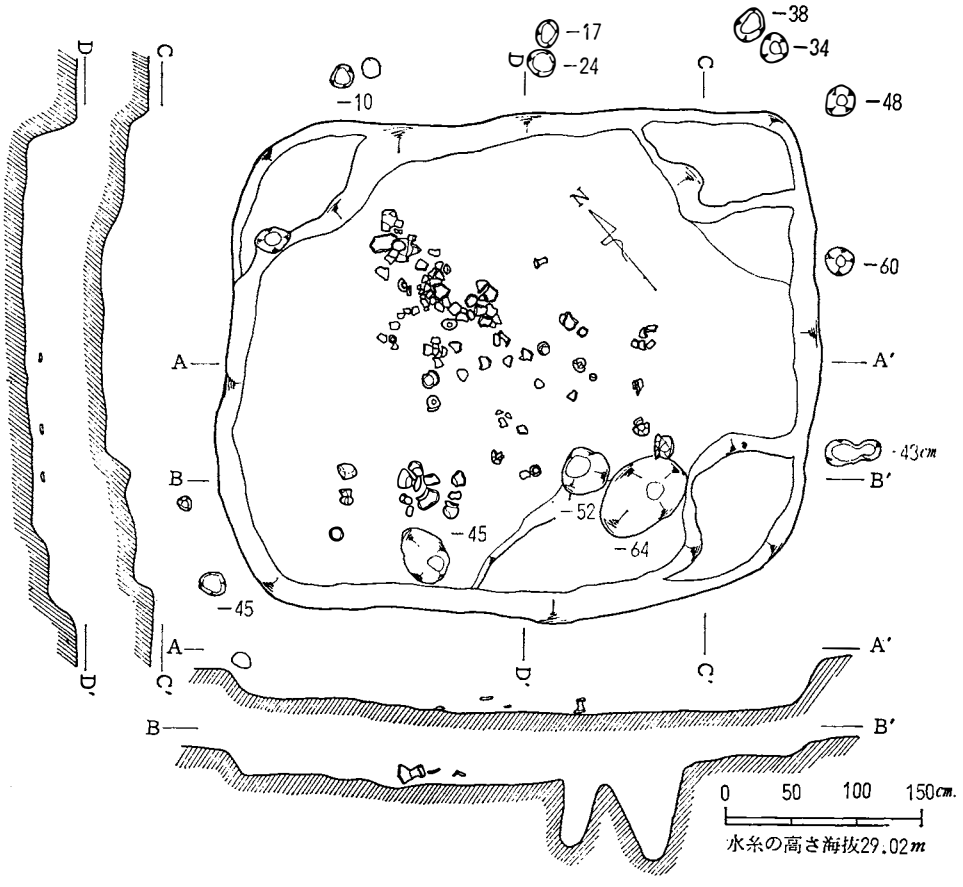
(2)　底部を欠損。色調は暗褐色を呈し、胎土は粘質が弱く、焼成は普通である。口縁は、頸部からくの字状に屈曲し、途中でほゞ垂直に立ちあがる。口唇部の内側は、少しつままれたようにふくらむ。器面は、縦方向を基調とした調整が行なわれている。器厚はうすく、全面に煤が付着している。

(3)　口縁と胴部以下を欠損。

(4)　小形壺であるが、胴部以下を欠損。色調は淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも普通である。内面には、輪積みの跡が残される。口縁は、頸部で接合されるが、頸部からほゞ垂直に立ちあがり、さらに内彎しながら広がる。口縁から胴部にかけて櫛目調整が施されている。内面は、輪積みのあとを横なでしている。

高坏（第11図５～11）

(5)・(6)・(7)は復原完形である。(5)・(6)はともにいびつな形態を示す。



第27図　第11号住居址実測図

(5)　赤褐色を呈し、胎土・焼成は良好。研磨が施され堅緻である。

(7)　赤褐色を呈し、坏部・脚部とも屈曲をもたない。口唇部は幾分波状を呈する。器面は手なでにより生じた凹凸を、櫛でひっかき調整する。坏部及び脚部の内面は、篦調整を行なった後、櫛目による調整が施される。さらに、脚部の裾内側には、刷毛目による調整がある。

(8)・(9)・(10)・(11)は脚部だけ残されている。

鉢形土器（第11図12）

(12)　復原完形の鉢形土器で、今回の調査における唯一の形態を示す資料である。色調は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で焼成は普通である。肩部から胴部にかけては縦方向に、胴部から底部にかけては横方向及び斜行する櫛目調整が施される。内面は篦調整である。

小形坩（第11図13～18）

(13)・(14)・(15)は、復原完形である。頸部が広く、(13)は肩の張りが大きく、(14)は平底状になる。(15)は、頸部と胴部が大きく張り、特殊な形態を示す。器面には櫛目と刷毛目による調整があり、内面には櫛目調整で、一部手なでの指圧痕が残る。(16)・(17)・(18)は、ほゞ同一の形態を示し、(16)・(17)は復原完形である。(16)は明褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。頸部は広く、

口縁は長い。⑰・⑱は小形で、口縁がやゝ内彎しながら立ちあがる。器面は櫛目を施しているが、口縁内側にも一部残る。さらに、⑱は研磨され堅緻である。

手捏ね土器（第11図19～23）

注目されるものに、５点の手捏ね土器（ミニチュア）がある。

⑲・⑳は、深鉢をミニチュア化したものと思われる。⑲は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で焼成は普通である。底部には、櫛目調整が施されている。㉑は壺を㉓は埦をミニチュア化したものと思われ、全面に手捏ねによる指圧痕が残る。

その他の遺物（第11図24）

㉔は、脚台である。脚台の出土は、この一点だけである。裾部は手なでののち櫛目調整を施し、裾部内面は綿密な櫛目調整が施される。時期的には、古い様相を示す土器である。

この第11号住居址は、第22号住居址と第28号住居址に近接するが、他の住居址とはある空間をおいた状態で位置する。住居址の三隅には床面よりも幾分高い部分があり、造りを異にする。床面には、焼土の検出はみなかった。

合計24点の遺物が出土したが、その中で高坏は全体的にいびつな感じを与える。また注目される土器に鉢形土器の出土があるが、他の住居址からの出土例はない。さらに、手捏ね土器が５点出土し、破片ではあるが時期的に古い様相を示す脚台の出土もある。

このように、この住居址は他の住居址と性格を異にし、祭祀的な様相の非常に強いものである。他の住居址とある程度の距離を置くことも、この住居址を中心に広場が形成されていた可能性を想定できるのではあるまいか。

第12号住居址

ＳＴＡ162＋80(3)(4)区に、主軸をＮ―47°―Ｗの方位にとり、住居址群のなかでは北端に位置し、第13号遺構が近くに所在する。隅丸方形を呈し、長辺660㎝×短辺450㎝を計る。上部が耕作により削平されているが、残存する肩から床までの深さは30㎝内外である。西隅には、小規模な張り出しが認められ、この周囲から多量の焼土・カーボンが検出されたので、作り付けの炉であると推定される。焼土は、このほか数カ所に認められる。床面は、北から南にかけて幾分傾斜するが、踏み固められた状態でほゞフラットな状態を示す。たゞ東側の張り出し部分の床面は、さほどの硬さはない。

柱穴は合計13個を数え、そのうち４個は外側にある。平行する８本の柱穴を主柱に構築されたものであろう。

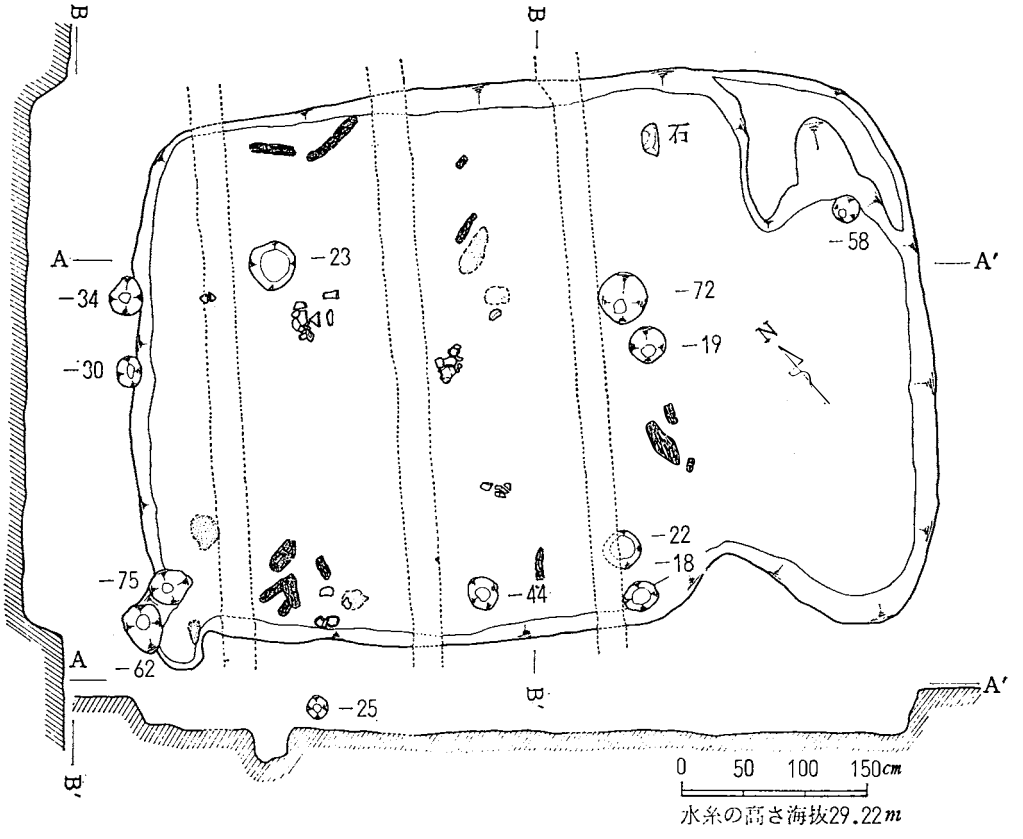
遺物は、床面からやゝ浮いた状態で出土する。

遺　物　（図版10）（第12図１～５）

小形壺（第12図１・２）

(1) 底部を欠損した小形壺である。胴部の張りが著しい。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒混りで、焼成は良好で堅緻である。器面は、櫛目と箆調整が行なわれ、一部指圧痕が残る。内面は手なでおよび箆削りを基調とし、一部櫛目調整が施される。煤が付着している。

(2) 口縁が、幾分内彎しながら立ちあがる。器面の頸部から胴部にかけては縦方向、胴部には横方向と斜行する櫛目調整が施される。櫛目調整は、口縁内側にも一部認められる。内面は箆削りである。煤が付着している。



第28図　第12号住居址実測図

小形坩（第12図３・４）

ともに、調整方法に特有のものはみられない。

高坏（第12図５）

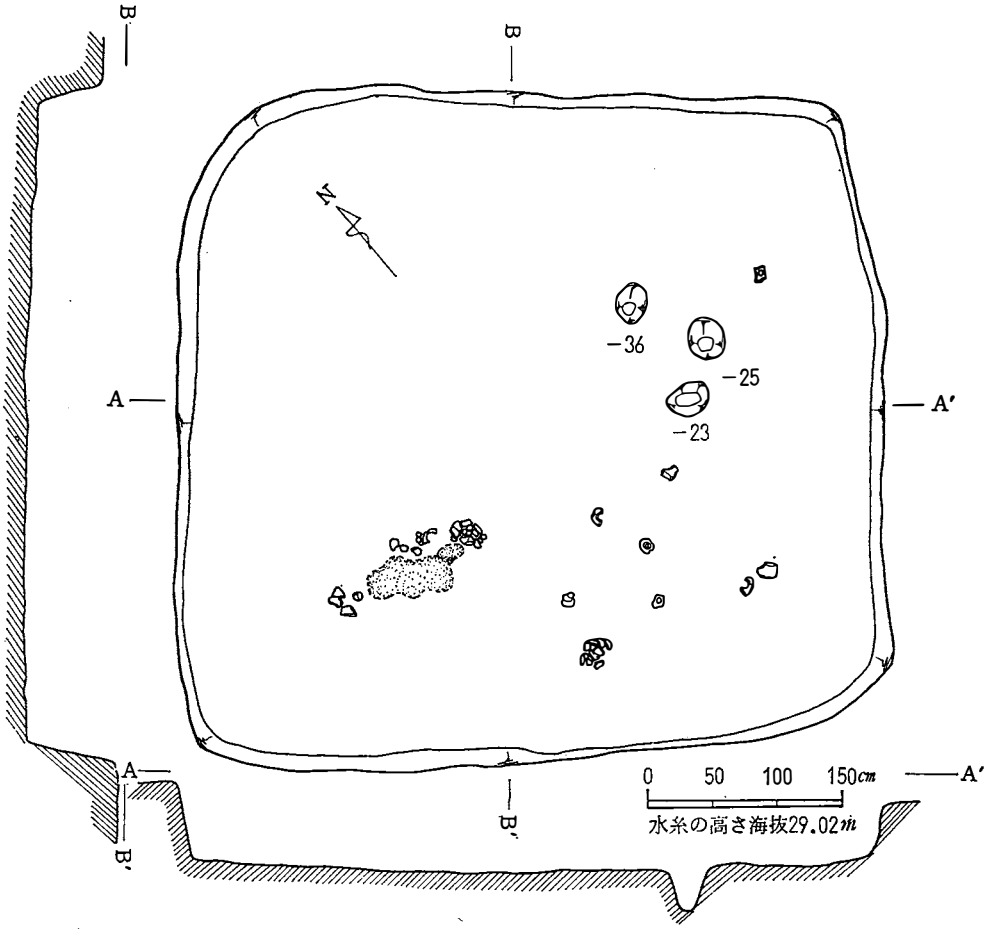
坏部を欠損した高坏である。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成良好である。器面は箆削りで、研磨されている。低い屈曲部を持ち、脚部内面は箆削り、裾部内側は横なで調整が施されている。

第14号住居址

ＳＴＡ163＋40(1)(2)区に、主軸をＮ―52°―Ｗの方位にとり、第21号住居址と近接する。形状は方形を呈し、長辺550㎝×短辺516㎝を計る。耕作による攪乱は少なく、保存状態はきわめて良好であった。北および南側の壁高は65㎝～70㎝を計り、25基の住居址中、最も深いものである。入口は不明であり、階段はプランを築造したのちに追加して構築したとおもわれ、壁面には階段状の掘り込みを検出することはできなかった。

床面は踏み固められた状態にあり、壁はほぼ垂直に立ちあがる。

柱穴は、内側に３個あり、それぞれ―36㎝、―25㎝、―23㎝の深さである。床面には、70㎝×30㎝の広さで焼土が検出でき、土器片は西側にかたまって出土した。



第29図　第14号住居址実測図

遺　物　（図版10）（第14図１～８）

実測可能なものは７点で、壺・高坏・小形坩の三種である。

壺（第14図１・２）

⑴は、小形壺の口縁で内彎しながら立ちあがる。器面は櫛目調整で、内面は箆削りである。色調は黄褐色で、胎土は多量の小石粒を含み、焼成は良好である。

⑵は、口縁を欠損した長頸壺である。頸部がしまり、胴が張る。色調は褐色を呈し、小粒子を含む胎土を用いている。器面は櫛目、内面は箆削りを行なっているが、焼成が悪く表面の風化がいちじるしい。この器種の出土は、これ１点であるが、形態的に古い様相を示すものである。

高坏（第14図３～６）

高坏は四点とも坏部を欠損し、脚部だけである。

⑶は、屈曲部が低く、裾部はややふくらみがある。色調は淡褐色で、胎土は小石粒を含み、焼成不良である。器面および内面は箆削りが施され、裾部は櫛目調整である。

小形坩（第14図７・８）

⑺は、復原完形である。色調は部分的に赤褐色と暗褐色を呈する。胴が張り、底部は丸みが少ない。口縁がくの字に立ちあがり、よく形が整っている。器面は櫛目調整で、指なでの跡が残る。内面は箆削りで、同じく手なでによる指圧痕が残る。

⑻は底部を欠損し、表面は風化がいちじるしい。頸部は広く、口縁は短かい。横なでの調整を行ない、胴部には斜行する櫛目調整がある。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を含み焼成良好である。

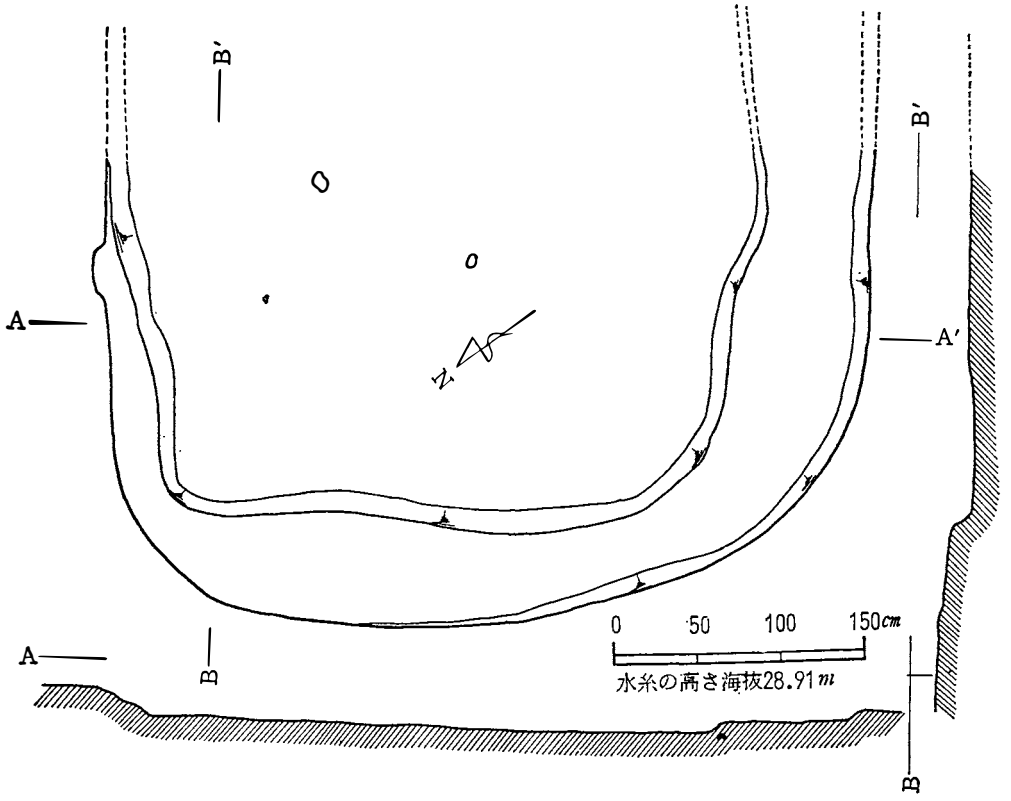
第15号住居址

ＳＴＡ163＋80⑶⑷区にある。工事用道路が作られ、壁の上部と東側半分を削平、消滅してしまっていた。正確な形状は不明であるが、二つの隅が残存することから方形を呈すると考えられる。残存する床面は、現地表下約15㎝で、正確な壁の状態は不明である。

床面での焼土・ベッド・貯蔵穴等は検出されず、少量の土器片が散在するが、一応第15号住居址とした。

第16号住居址

ＳＴＡ163＋20⑴区に、主軸をＮ－48°－Ｗの方位にとり、第８号、第17号住居址と近接して存在する。形状は方形を呈し、長辺398㎝×短辺366㎝を計り、ややいびつである。耕作で攪乱を受け、上部を削平し、出土遺物の両脇を溝が走る。四壁は立ちあがりに、ややスロープをもつ。床面は踏み固められ、一部ローム土が混じることから張り床と考えられる。



第30図　第15号住居址実測図

柱穴は、外側に８個、内側に５個、合計13個を教える。この中で、３個の柱穴には丸石が混入しているが、根じめとして用いられた可能性がある。ベッド・貯蔵穴は、認められない。焼土は小規模に点在し、炉の位置を確認することはできない。

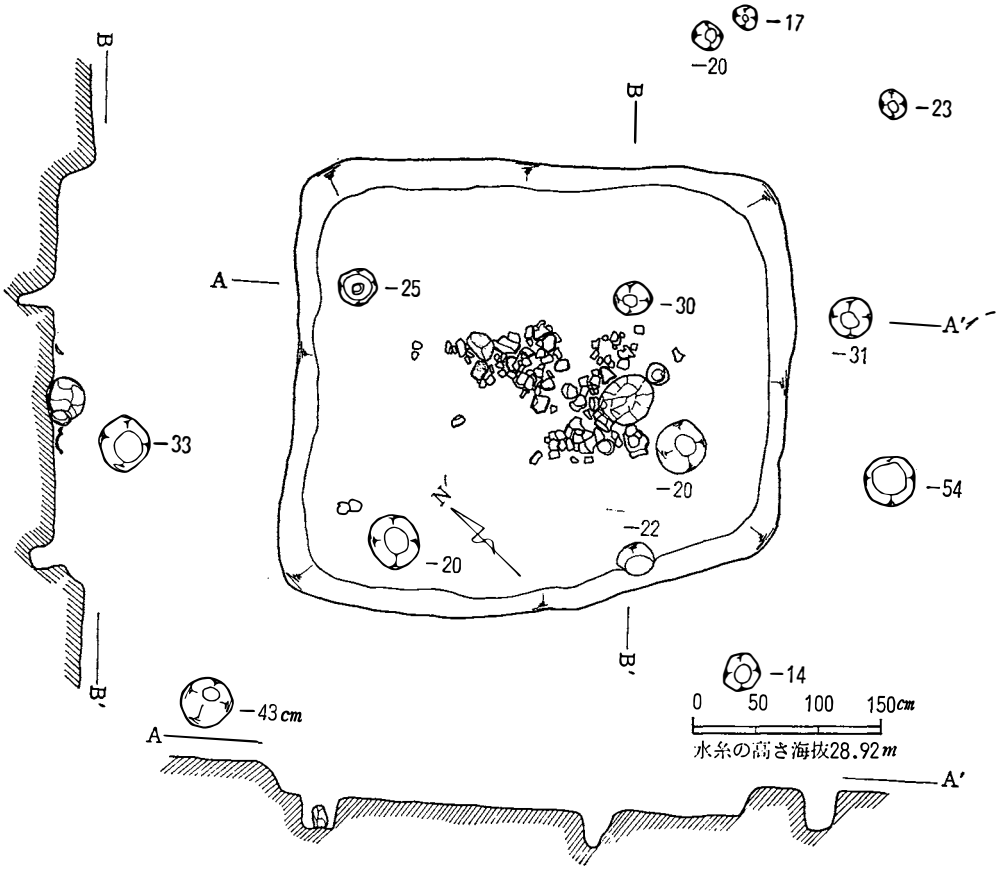
遺物は、中央部に集中して、床面の直上およびやや浮いた状態で出土した。壺・高坏・小形坩・甑・脚付小形坩などバラエティに富み、かつ多量に出土した。

遺　物　（図版11・12）（第16図１～20）

壺（第16図１～９）

(1)は、大形の壺で復原完形で、器高46.5㎝・口径18.2㎝・胴径36.6㎝を計る。頸部はしまり、複合口縁である。胴部から底部にかけては、丸みがいちじるしい。器面は、肩から胴部にかけては斜方向に目の細かい櫛目調整であり、胴部から底部にかけては縦・横方向に目の粗い櫛目調整を施す。色調は黄褐色で、胎土、焼成とも普通である。

(2)　複合口縁をもつ壺である。胴部が丸みをもち、球状を呈する。色調は赤褐色を呈し、胎土は滑石混りで、焼成良好である。器厚は全体的に薄い。器面は、斜行を主とする櫛目調整がなされている。内面は箆削りである。



第31図　第16号住居址実測図

(3) 口縁だけであるが、複合の名ごりがある。屈曲部から逆に外彎しながら立ちあがる。口唇部は丸みをもつ。器面は、横なでのあと櫛目調整が施される。屈曲部以上の内面にも、櫛目調整がみられる。

(4)～(8)は、「く」の字状の口縁をもつ壺である。口縁は、内彎しながら立ちあがる。口唇部は(7)を除いて、すべて平たくなでられている。器面調整は、櫛目が施され、内面は箆削りである。(4)の器厚は、頸部から胴部にかけて非常に厚く、胴部から底部にかけては極端に薄くなる。煤の付着がある。(8)は、小形で胴部が張る。丹塗りの跡と、煤の付着とが認められる。

高坏（第16図10～14）

高坏は、脚部だけが残る。ほぼ同形態を示すが、(12)の屈曲部はやや高い。器面調整は箆削りおよび箆磨きが行なわれ、裾部は横なで調整が施されている。内面は、手なでと箆削りである。

脚付坩（第16図15）

復原完形の脚付坩である。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒混りで、焼成はやや不良である。口縁部の器面は櫛目調整が施され、胴部には箆削りの跡が残る。内面は箆削りで、口縁の内面にも箆を立てて調整を行なっている。脚部内面は箆調整が行なわれ、さらに裾部内面には櫛目調整が施されている。

鉢（第16図16）

小形の鉢である。色調は黒褐色を呈し、胎土・焼成とも良好で堅緻である。口縁は櫛目調整が、胴部には箆調整が施されている。内面は、口縁が目の粗い櫛目を用い、胴部は箆調整である。

小形坩（第16図17～19）

三点の坩が出土した。⑰・⑱は、復原完形である。⑰・⑱の胴部は丸みが大きく、口縁は「く」の字に立ちあがる。

甑（第16図20）

底部に穿孔のある甑である。色調は、部分的に赤・黄・黒褐色を呈する。胎土・焼成とも不良で、風化がいちじるしい。内面に、箆削りの跡が残る。甑は、他の住居址からの出土例がなく、ただ一点である。

このように、器形は全体的に古い様相を示しているが、複合口縁をもつ壺と、他に例をみない甑・脚付坩・高坏・小形坩との組み合せは、貴重である。

第17号住居址

ＳＴＡ163＋00(3)区に、主軸をＮ―50°―Ｅの方位にとり、第29号住居址と近接して存在する。南壁の一部を耕作により壊されているが、全体的にみて保存状態は良好である。長辺 646㎝×短辺506㎝を計る。東側の一部を除いて、コの字形にベッド状の高い部分がつながる。中央部が低くなり、遺物はコの字形のベッドが切れる低い床面上に集中する。

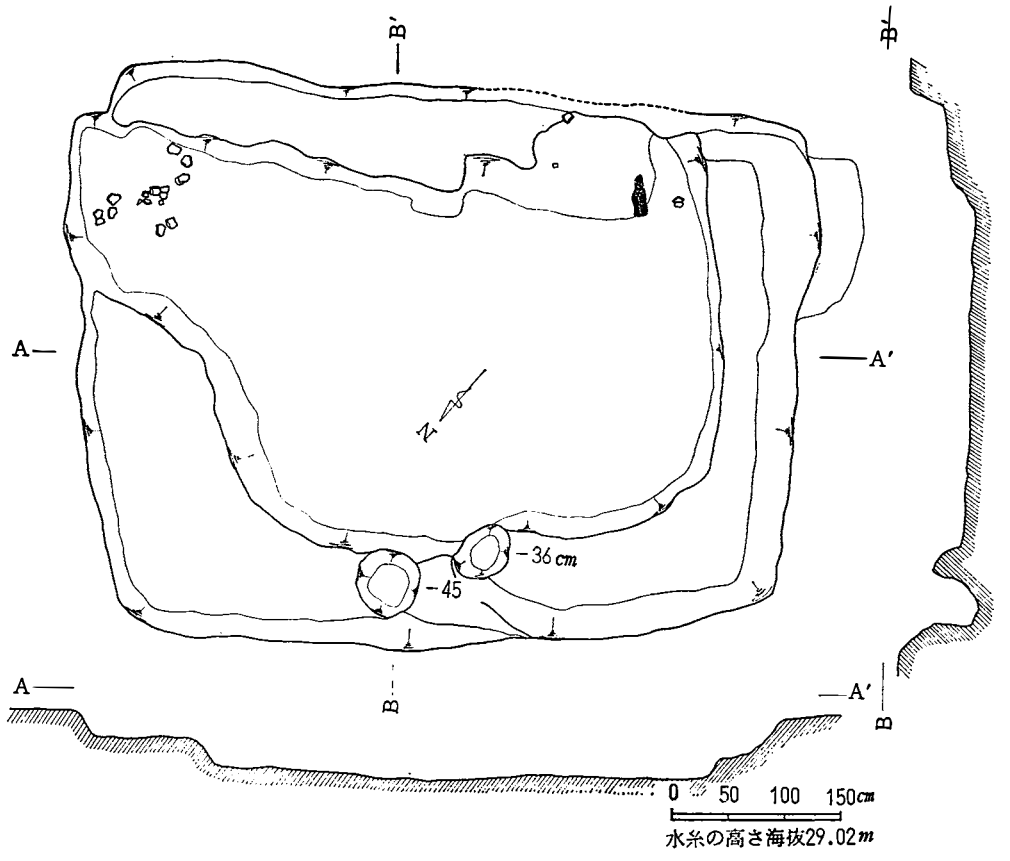
中央部の床面上はほゞフラットな状態でさほど硬くない。焼土は少なく、バラついた状態である。南側隅にカーボンがみられる。また、南側の隅が階段状に掘り込まれており、入り口部分に相当すると考えられる。

西側のベッド上に、二つの大きなピットがある。それぞれに、深さ―45㎝・―36㎝を計る。この二個のピットが柱穴と考えられるが、規模の大きいことから貯蔵穴としても可能性をもつものである。

遺物は少なく、実測可能なものは一点であったが、上層のもので時期的に異なると考えられる。

遺　物　（図版12第17図）

底部だけである。色調は明るい褐色で、胎土は小粒子を含み、焼成は良好であるが、器面はローリングを受け、磨耗がいちじるしい。



第32図　第17号住居址実測図

第18号住居址

ＳＴＡ163+00(4)区に主軸をW—45°—Ｅの方位にとり、第８号、第16号、第17号、第27号、第29号住居址に囲まれた状態で位置する。西壁の一部は、耕作により破壊を受けている。形状は隅丸方形を呈し、推定で長辺474㎝×短辺334㎝を計る。

床面はほゞフラットで、固く踏み固められており、張り床を思わせる。北壁はほぼ垂直に、東壁はややゆるやかに立ちあがる。

柱穴は、北壁の外側に二個あるが、住居址の中には検出できなかった。ベッド・貯蔵穴らしきものの存在はないが、ほゞ中央部は炉と考えられ、焼土およびカーボンを検出した。このほか、少量ではあるが焼土・カーボンが住居址内に散在する。

おびただしい遺物が、床面の直上およびやや浮いた状態で出土する。遺物は完形の高坏・小形坩・壺をはじめ、大小の壺・甕・高坏・小形坩が出土した。

遺　物　（図版12・13・14）（第18図１～36）

壺（第18図１～23）

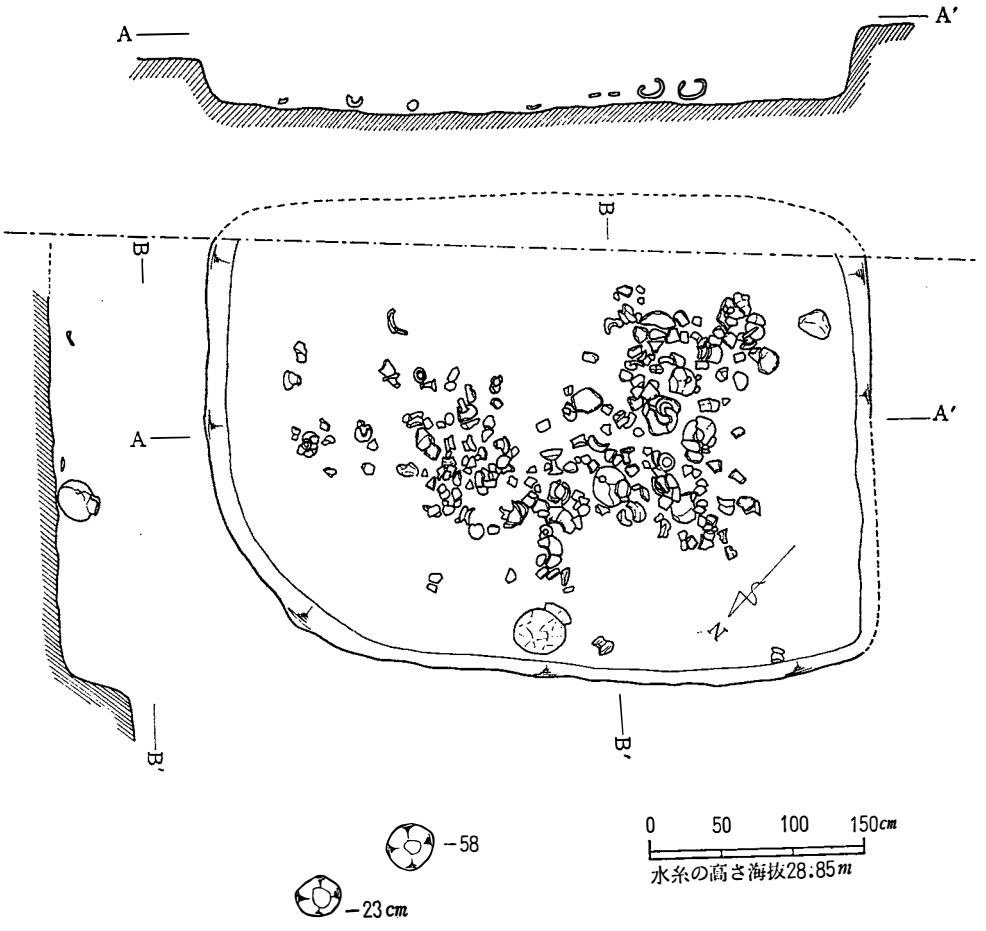
実測可能な壺が、23個ある。

(1)は、大形の壺である。底部の一部を欠損するが、推定器高は39.4cmで、口径21.2cm・頸部14.7cm・胴部33cmを計る。口縁部が長く、くの字状に立ちあがる。器面は櫛目調整、内面は箆削りが施されている。全体的に器薄で、全面に煤の付着がある。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。甕とも呼べそうで分類が困難である。

(2)・(3)は、複合口縁をもつ。(2)は頸部が厚く、口唇部は平たくなでられる。(3)の内面には、手なでによる指圧痕が残る。色調は黄褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成良好である。

(4)は、口縁が直口する。頸部から胴部にかけて肉厚で、胴部から底部にかけては薄くなる。色調は明褐色で、胎土・焼成とも良好である。器面および口縁内側は、目の粗い櫛目調整が施されている。内面は箆削りである。

(5)は、復原完形の壺である。頸部が広く、口縁が「く」の字状に外反することから、甕との区分が難かしい。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒混りで焼成良好である。器面は櫛目調整、内面は箆調整が施される。全体的に器厚は薄く、全面に煤の付着がある。



第33図　第18号住居址実測図

(6)は、口縁が長い。器面は、縦方向を基調とする櫛目調整が施され、煤の付着がある。

(7)・(8)は、「く」の字状の口縁がやゝ外反し、口唇部は平たくなでられている。

(9)は、肩部が肉厚である。(12)・(13)の口縁は、やや内彎して立ちあがる。

(14)は、目の粗い櫛目を用いる。内面は輪積みの跡が残り、篦削りが施されている。全体的に雑な仕上げである。

(15)は、復原完形である。小形の壺で、胴部は球形状を呈する。色調は淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。器面および口縁内側には、櫛目調整がある。器厚は非常に薄い。

(17)・(18)は、口縁が幾分内彎する。(17)には煤の付着がある。

(22)は、底部を欠損。胴部の張りが大きい。煤の付着がある。色調は暗褐色で、焼成不良である。

小形坩（第18図24～27）

(24)は、口縁を一部欠損。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも不良で表面は荒れている。口縁は長く、中央部でやや内彎しながら立ちあがる。器面の一部に櫛目調整が施されている。

(25)は、頸部がしまり、底部を欠損。

(26)は、口縁と底部を欠損する。器面には、肩部から胴部にかけて櫛目調整があり、内面は手なでの跡が残る。

(27)は、完形品である。形態的には、(24)～(26)と異にする。色調は黄褐色を呈し、砂粒混りの胎土で焼成はやや不良である。頸部が広く、口縁が短かい。器面は、肩部から胴部にかけて櫛目調整が施され、内面には篦削りの跡がある。

台付小形坩（第18図28）

口縁部を欠損し、風化がいちじるしい。色調は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で焼成は普通である。器面および台部内面には、櫛目調整の跡が残る。内面には手なでによる指圧痕が残る。

高坏（第18図29～36）

(29)は完形の高坏で、住居址のほぼ中央に横に倒れた状態で出土した。色調は赤褐色で、胎土は砂粒混りで焼成良好である。坏部の口唇部外側および屈曲部外側には、帯状に凸帯が走る。脚部の屈曲部は高く、裾部はやや上彎しながら脚端へつながる。脚端の外側にも、小さな凸帯が一周する。坏部と裾部の器面および坏部内面には、細かな櫛目調整が施され、脚部内面は篦削りである。非常に均整のとれた高坏である。

(30)は、坏部がやや傾き、脚部の屈曲部は低い。色調は薄い褐色を呈し、砂粒を含み焼成不良である。坏部に丹塗りらしきものの痕跡がある。

(31)～(36)は、坏部を欠損し脚部だけである。(32)・(33)は、幅広でずんぐりした状態を示す。(36)は、坏部との接合部から脚端へ屈曲部をもつことなく、ストレートに広がる。

第19号住居址

ＳＴＡ163＋80⑵区に、主軸がＷ―50°―Ｅの方位をとり、東側に第20号住居址、北側には第５号・第６号住居址が近接して存在する。長辺410㎝×短辺324㎝を計り、方形を呈する。壁高は50㎝内外と深く、四壁とも立ちあがりの傾斜はゆるやかである。西壁はとくにゆるやかであり、入口部分にあたるものと考えられる。

床面は粘土混りで、踏み固められた状態である。中央部分に、約40㎝×50㎝の範囲に亘る焼土があり、炉を形成している。

柱穴は、内外ともに検出できず、ベッドや貯蔵穴と思われるような遺構はない。

遺物は、完形の壺をはじめとして、甕・高坏・小形丸底壺があるが、いずれも床面直上および10㎝内外浮いた状態で出土した。

遺　物　（図版15）（第19図１～９）

壺（第19図１～６）

⑴は、胴部以下を欠損。口径18.7㎝・頸部径13.3㎝を計る大形の壺である。大形の土器ではあるが、頸部以下の器厚は薄い。器面および口縁の内側には櫛目調整があり、内面は箆削りである。内面の頸部には、指圧痕が残る。色調は黄褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成不良である。

⑵の器厚は、肩部が厚く、胴部から底部にかけては非常に薄い。煤の付着がある。

⑸は、複合口縁の名ごりがある。煤の付着がある。

⑹は、完形品である。

高坏（第19図７・８）

⑺・⑻は、高坏の脚部である。⑺の屈曲部は高いが、⑻は低い。⑻は幅広で、ずんぐりとしている。⑺は、裾部の内外面ともに櫛目調整がみられ、⑻は刷毛を用いている。内面は双方とも箆削りである。

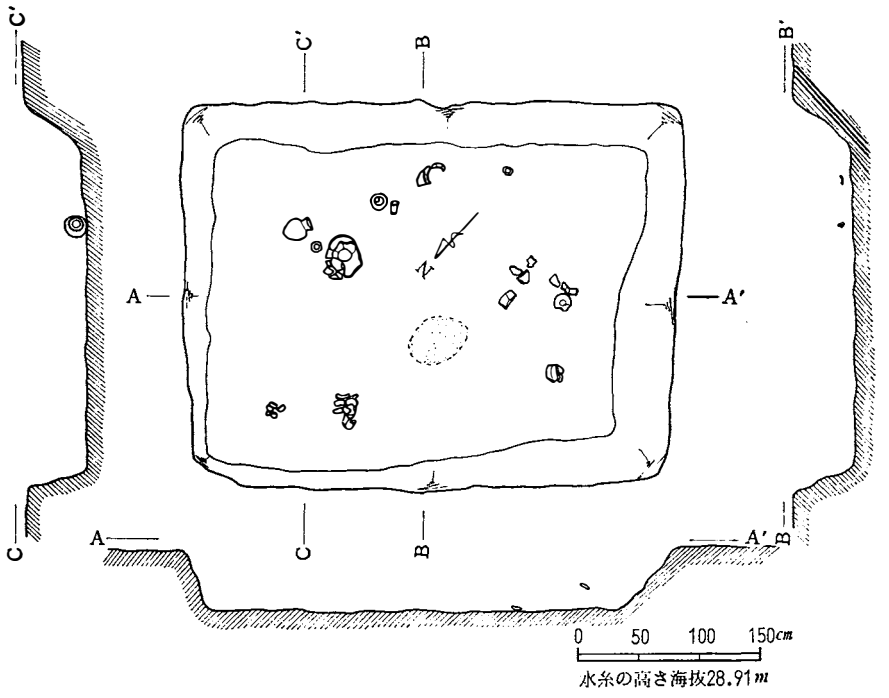
小形坩（第19図９）

三点の小形坩が出土したが実測可能なものは一点であった。

⑼は、口縁の一部を欠損。色調は明褐色で、胎土・焼成とも不良である。肩から胴部にかけては縦方向、胴部は横方向を主調とした櫛目調整がみられる。底部近くに、うがったとも考えられる欠落がある。

第20号住居址

ＳＴＡ163＋80⑴区に、主軸をＮ―48°―Ｗの方位にとり、第５号、第６号、第７号、第15号第19号住居址と近接して存在する。長辺480㎝×短辺380㎝を計り、西壁が内側にくい込み、変形した方形プランを呈する。西壁も立ちあがりはゆるやかであるが、壁高は50㎝内外でかな



第34図　第19号住居址実測図

り深い。

北壁に階段状の掘り込みがあり、入り口部分にあたると考えられる。床面は硬く踏み固められ、部分的には凹凸もあるが全体的にフラットな状態を示す。

柱穴は、まわりを一周するように合計８個と、入り口部分に一57㎝を計る柱穴とがある。内側には検出をみなかった。

ベッド・貯蔵穴らの遺構はない。また、焼土・カーボンの量も少なく、正確な炉の位置をしることはできない。

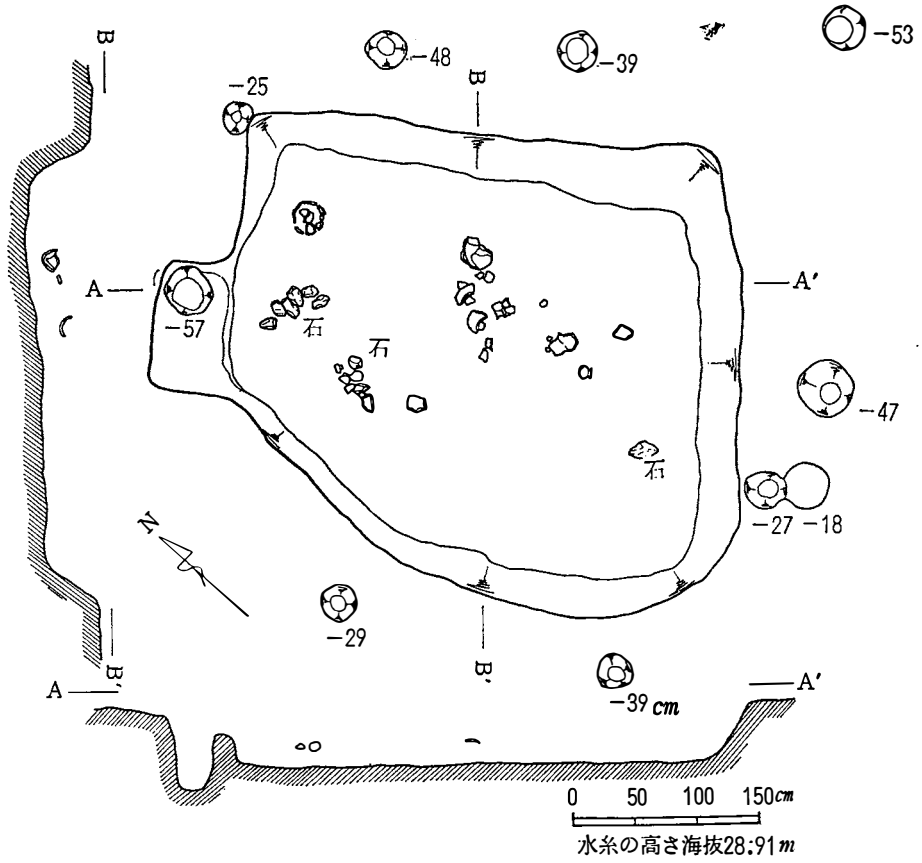
遺物は、全体的に散らばり、10㎝内外浮いた状態で出土した。入り口部分には、６個の河原石がまとめて検出された。

遺　物　（図版15）（第20図１～４）

復原し、実測可能となったものは４点である。

壺（第20図１）

(1)は頸部が広く、甕と区分し難い。色調は赤褐色を呈し、砂粒混りの胎土で焼成は普通である。口縁は、「く」の字状にやや内彎しながら立ちあがる。器面および口縁内側に櫛目調整があり、内面は箆削りである。全面に煤の付着がある。



第35図　第20号住居址実測図

高坏（第20図２）

坏部を欠損した高坏である。屈曲部は低く、裾部はやや上彎して脚端にいたる。脚端には、箆描き線が一周する。裾部には、櫛目調整がある。煤の付着と、丹塗りの跡がある。

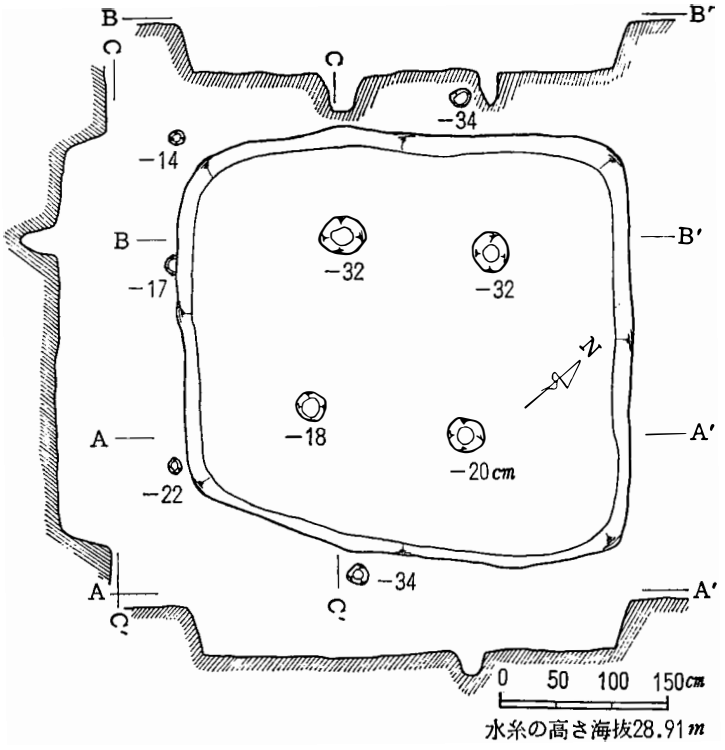
小形坩（第20図３・４）

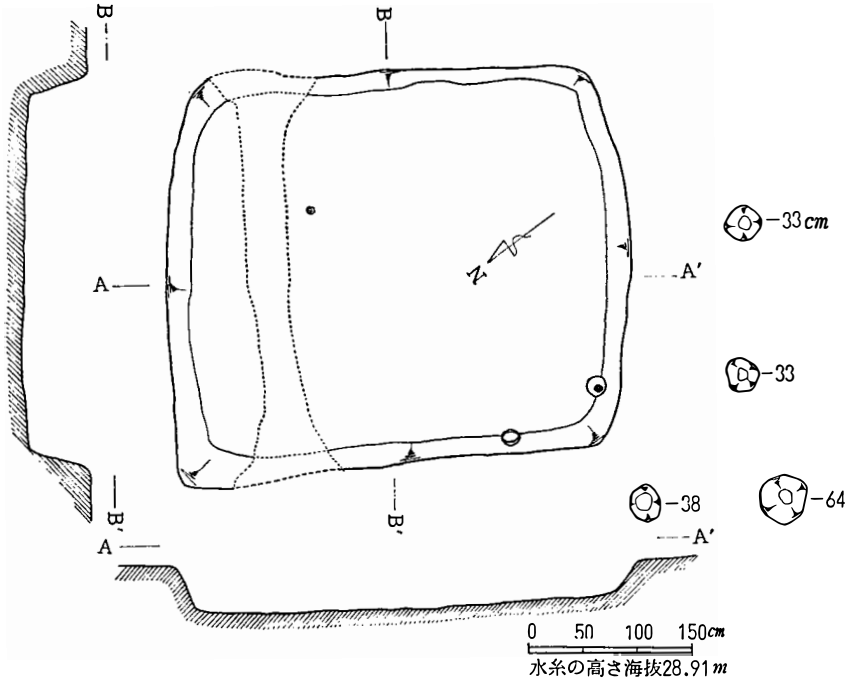
⑶は、形のよく整った小形坩である。頸部が広く、底部はやゝ尖底となる。色調は黄褐色で、器面および口縁の内側には入念な櫛目調整がある。一部、丹塗りの痕跡がある。

⑷は頸部がしまり、口縁が長い。

第21号住居址

ＳＴＡ163＋60⑴区に、主軸をＮ−41°−Ｅの方位にとり、第７号、第14号、第15号住居址に囲まれた状態にある。長辺416㎝×短辺388㎝を計り、四壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は40㎝内外と深い。床面は全体的にフラットで、部分的に凹凸があり、踏み固められた状態を示す。





第36図　上（第21号住居址実測図）　　下（第22号住居址実測図）

内側には、等間隔に四つの柱穴がある。深さは、それぞれ—32㎝・—32㎝・—20㎝・—18㎝を計り、ほぼ垂直に掘り込まれている。外側にも合計五個の柱穴があるが、掘り込みの規模は小さい。ちなみに、深さは—34㎝・—14㎝・—17㎝・—22㎝・—34㎝を計る。

床面上における遺物の出土は皆無であり、焼土もない。西壁に焼土らしきものの固まりがあるが、カマドと断定するまでには至らなかった。

第22号住居址

ＳＴＡ163＋60(3)区に、主軸をＮ—36°—Ｅの方位にとり、他の住居址からかなり離れて存在する。東壁から西壁にかけて、幅約40㎝の耕作による帯状の攪乱がある。他の部分の保存状況は悪くない。形状は長方形をなし、長辺430㎝×短辺362㎝を計る。

四壁とも立ちあがりはやや傾斜するが、壁高は30㎝から40㎝を計る。

床面は南から北へとやや傾斜がみられるが、全体的にフラットな状態を示す。第Ⅴ層の砂粒混りの黒褐色土層が踏み固められ、部分的に小さな起伏がある。

柱穴は、西壁と南壁の外側にやや距離をもって合計４個検出され、それぞれ—33㎝・—33㎝・—38㎝・—64㎝の深さをもつ。

床面上における顕著な焼土およびカーボンの検出はできなかった。

出土遺物も少なく土師式土器片一個と横瓶二個だけである。

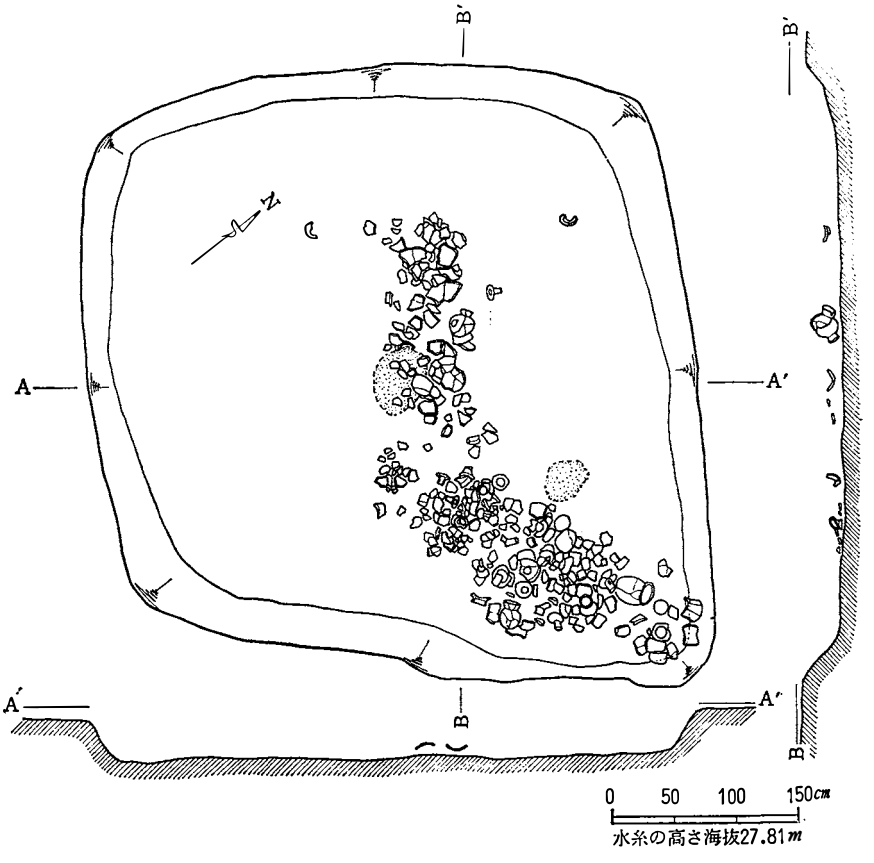
第23号住居址

ＳＴＡ164＋00(3)(4)区に、主軸をＮ－39°－Ｅの方位をとり、第24号、第25号、第26号住居址と近接して存在する。東隅が異状に張り出し、変形の隅丸方形プランを呈する。長辺498㎝×短辺478㎝を計る。上部がかなり削平されており、残存する壁高は約30～40㎝を計る。西壁隅に向ってやや傾斜するが、全体的に床面はフラットである。第Ⅴ層の暗褐色土層がベースとなるが、部分的に硬く踏み固められた所と柔かい部分とがある。

内外ともに柱穴の検出はできず、焼土・カーボンの量も少ないが、中央部に残る焼土は、炉に伴なうものと考えられる。

遺物は東隅から中央に向って、帯状におびただしく出土した。この遺物は、床面の直上から十数㎝の高さまでぎっしりとつまっている。

壺・高坏・小形坩・甕が主なもので、復原し実測可能となったものの数は、56個を数える。内訳は、甕２個・壺39個・小形坩６個・高坏９個である。



第37図　第23号住居址実測図

遺　物　（図版16・17・18・19）（第23図1～58）

甕（第23図1・2）

(1)は復原完形で、器高は28.7㎝・胴径17.1㎝・口径14.7㎝を計る。頸部が広く、口径の屈曲が大きいことから壺との分類を行なった。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成とも普通であるが、堅緻な感を与える。器面は櫛目調整が施され、内面は箆削りである。全面に煤の付着がある。

(2)は底部を欠損。口縁は頸部から著しく屈曲するが、途中いくぶん内彎し立ちあがる。肩から胴部にかけては櫛目調整であるが、胴部以下に敲き様の目の粗い櫛目調整がある。全面に煤の付着がある。

壺（第23図3～41）

(3)・(4)は、複合口縁を呈する。(3)は底部を、(4)は胴部以下を欠損する。(3)・(4)とも器厚が薄い。

(6)の口縁も、複合口縁状に内彎する。

(7)は大形で頸部がしまり、口縁は高く、外彎しながら立ちあがる。

(8)は、甕形土器との分離が困難である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。全面に煤の付着がある。

(12)・(13)・(14)は肩から胴部への張りが大きく、球形を呈する。(12)・(13)には煤の付着がある。

(31)～(38)は、胴部がまるくふくらみ、球形を呈する小形の壺である。(31)は色調が黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土で焼成は良好である。口縁が内彎し、口唇部はまるみをもつ。器面には、斜行を主調とする櫛目調整がある。内面は箆削りである。

(32)は、復原完形である。

(33)には、入念な櫛目調整がある。口縁と肩部から胴部にかけては縦方向、胴部から底部にかけては斜行、底部付近は横方向を主調とし、それぞれ入念な櫛目調整がある。口縁内側には、頸部からひっかくように櫛目調整が施されている。内面は箆削りである。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

(41)は、口縁が長く、長楕円形を呈する。色調は暗褐色で、胎土・焼成とも普通。煤が付着する。

高坏（第23図42～51）

(42)は大形の高坏で、復原完形である。器高19.6㎝・坏部径26.9㎝・脚部径18.7㎝を計る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。坏部は屈曲することなく、スムーズに広がるが、途中接合部で器面に凸帯状の帯が一周する。脚部の屈曲部は低く、脚端で上につまみあげられた状態を示す。器面には、櫛目調整が施され、脚部には箆様のもので研磨された痕跡がある。また、内面は箆削りが行なわれている。(45)の坏部は屈曲部がなく、深い。脚部は、途中屈曲部をもたず図版9第11図(7)と同一形態を示す。(50)の脚部には、長楕円形のうがった透かしがある。

小形坩（第23図52～56）

合計６個の小形坩がある。

(52)は胴が張り、口縁の長い均整のとれた形態を示す。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒混りで焼成は不良。器面は櫛目調整が施され、一部丹塗りの痕跡がある。内面には、手なでの跡が残る。

(53)は、口縁が直口し、口唇部は平たくなでられている。器面は櫛目調整で、内面には手なでの跡が残る。色調は褐色を呈し、小粒子を含む胎土で、焼成良好である。

(54)は頸部が広く、口縁は「く」の字状を呈し、短かい。口縁内側にも櫛目調整が施され、内面は箆削りである。

(56)は口縁を欠損しているが、胴の張り具合からみて、(52)と同一形態を示すものであろう。色調は暗褐色で、胎土・焼成とも普通である。器面は、目の細かい刷毛様のもので調整されている。

手捏ね土器（第23図57・58）

二点の手捏ね土器（ミニチュア）がある。これらの形はいびつであるが、埦を形どったものと考えられる。

(58)色調は明褐色で、胎土・焼成とも普通である。

第24号住居址

ＳＴＡ164＋00(4)区に、主軸がＮ－40°－Ｅの方位をとり、第23号、第25号住居址に近接して存在する。隅丸方形プランを呈し、長辺536㎝×短辺400㎝を計る。耕作により上部を削平されており、残在する壁高は約20～30㎝である。四壁ともややゆるやかに立ちあがり、壁を固めた痕跡はない。南隅部分に階段上の掘り込みがあり、入口部分に当たるものと考えられる。

床面は、第Ⅴ層の黒褐色粘質土層がベースとなり、部分的には起伏もあるが全体的にはフラットな状態である。床面直上およびいくぶん浮いた状態で、多量のカーボンと焼土が出土した。東壁寄りの焼土は床面に密着し、かたまった状態を呈し、炉に最も近い存在である。およびただしいカーボンの出土から、火災にあったものと考えられる。

遺物の出土量は少なく、甕・高坏・小形坩が主なものである。小形坩は完形であるが、床面から出土したものでなく大きなカーボンの直上から出土したものである。

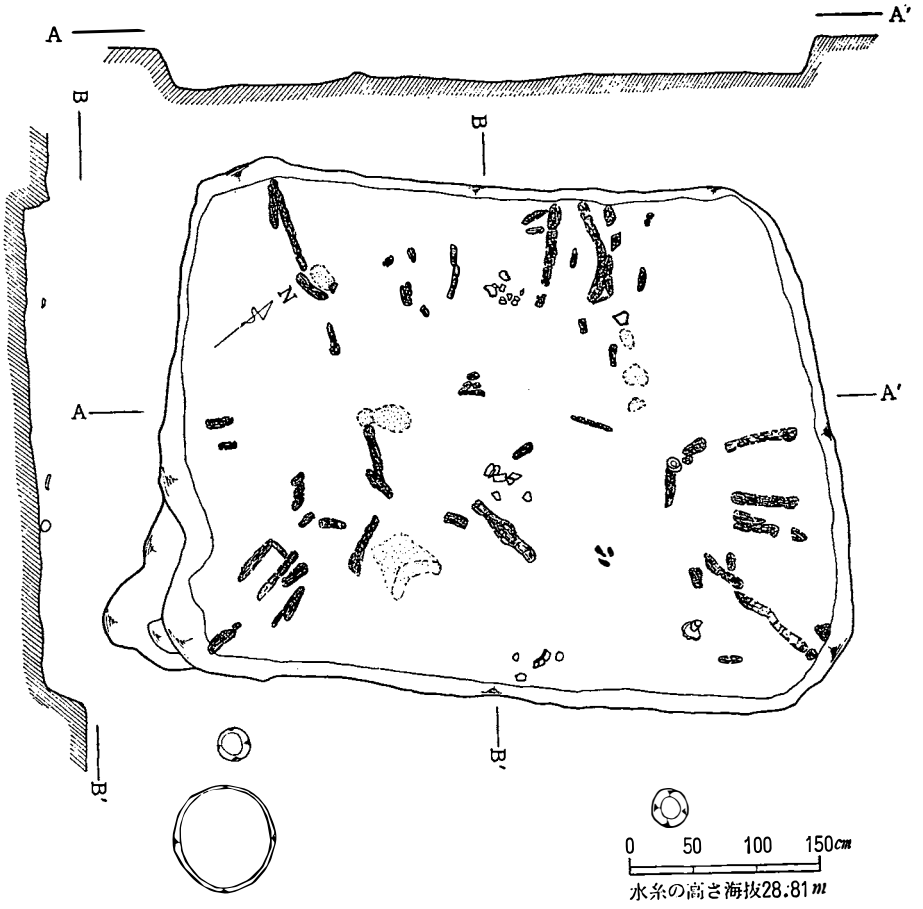
柱穴は内部では検出できなかったが、東壁外に２個確認された。また、直径80㎝、深さ約10㎝の土壙が近くに検出され、貯蔵穴と考えられる。

遺　物　（図版19）（第24図１～６）

壺（第24図１～３）

いずれも、胴部以下を欠損する。

(1)　口縁が「く」の字状に外反し、口唇部は平たく整形される。一部、つまみあげた状態で



第38図　第24号住居址実測図

突起状にはみだしている。器面は櫛目調整が施され、内面は箆削りである。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒混りで焼成良好である。

⑵は、口縁がやや内彎しながら立ちあがる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒の割合が多く、焼成は普通である。接合において、第23号住居址内の破片が接合された。これは、第23号住居址と密接な関係があったことをうかがわせるものである。⑶口縁は、典型的な「く」の字状を呈する。煤の付着がある。

小形坩（第24図４・５）

⑷頸部が広く、口縁が短かい。⑸胴が張り、口縁が長く均整のとれた形態を示す。ともに、器面は櫛目調整が施されるが、⑷の内面には箆削りの跡が残る。

台付小形坩（第24図６）

主要部分を欠損している。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好で堅緻である。器面は櫛目調整が施され、脚部は箆様のもので研磨された痕跡が認められる。

第25号住居址

ＳＴＡ164＋00(3)(4)区に、第23号、第24号、第26号住居址に近接して存在し、耕作のため上部が削平され、また予備調査時における試掘溝のため全体的な形状を知ることはできない。主軸は、東西にとるものと思われる。かすかに床面が残り、その直上から六点の小形坩・高坏が出土した。

遺　物　（図版20）（第25図１～５）

小形坩（第25図１～３）

(1)　頸部がしまり胴が張り、また口縁部が長く、よく均整のとれた小形坩である。色調は黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土で焼成は良好である。器面は、口縁から底部まで入念な櫛目調整が施されている。内面は箆削りであるが、横なで時の指圧痕が残る。

(2)　(1)に比して、肩がやや丸みをもち、口縁部もいくぶん短かい。色調は薄い褐色で、焼成はよくない。

(3)　頸部が広く、口縁が短かい。器面は、櫛目と箆削りで粗い調整が施されている。内面も箆削りである。胴部と底部近くに、二個の穿孔がある。これは焼成後にうがったものである。

高坏（第25図４・５）

(4)～(5)は、坏部を欠損した高坏の脚部である。屈曲部は二点とも低く、屈曲部から脚端部へむかう裾部は、やや上彎する。器面は箆調整が行なわれており、一部に櫛目調整がみられる。内面は箆削りである。二点とも色調は黄褐色で、胎土は砂粒混り、焼成は良好である。二点同時に製作された可能性がある。

第26号住居址

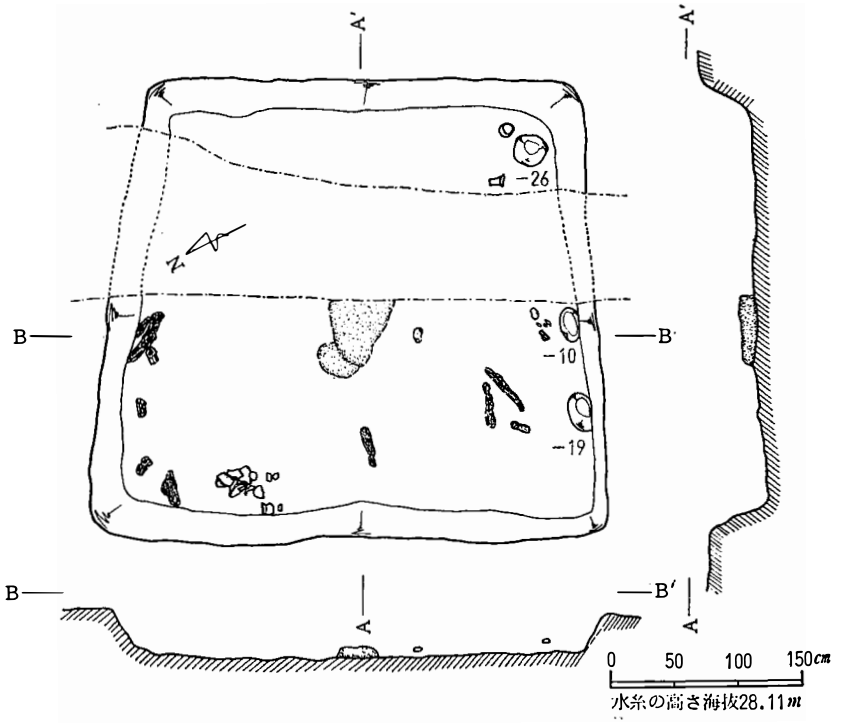
ＳＴＡ164＋00(3)区に、主軸をＮ―30°―Ｅにとり、第９号住居址と第23号住居址との中間地点にある。第25号住居址と同じく、予備調査の際の試掘溝が南北に走る。西壁に比して東壁が短かく、台形を呈する。中心部では、長辺390㎝×短辺354㎝を計る。

四壁とも、ゆるやかに立ちあがる。壁高は約30～40㎝で、床面は第Ⅴ層の黒褐色土層がベースとなり、踏み固められている。さほどの硬さはないが、起伏が多い。

柱穴は南壁の裾下に３個並ぶが、深さは―26㎝・―10㎝・―19㎝と、やや小さく浅すぎるきらいがある。

中央部には予備調査時の試掘溝が走り、焼土の全体的な状況を知ることはできないが、残存するもので約60㎝×50㎝の広さをもち、床面から10㎝程推積している。炉、もしくはカマドを

形成していたものと思われる。焼土はこのほかにも、全体的に散在する。カーボンの量も多く、第24号住居址と同じように火災にあったものと考えられる。
遺物は全体的に少ないが、西隅と東隅の床面上にかたまってみられた。



第39図　第26号住居址実測図

遺　物　（図版20）（第26図１～４）

甕形土器（第26図１）

底部を欠損。色調は褐色を呈し、胎土は小石粒を含み、焼成良好である。器形は卵形で、口縁は大きく外反する。器面および口縁の内側には、幅のせまい櫛目で入念な調整が施されている。口唇部は、平たくなでられ、内面は箆削りである。胴部から口縁にかけて、煤の付着がある。

壺（第26図２）

胴部以下を欠損。頸部がしまり、口縁は短かい。器面は入念な櫛目調整が施され、内面は箆削りである。色調は暗褐色と明褐色とを部分的に呈し、胎土は砂粒混りで焼成は普通である。堅緻で、胴部を中心に煤が付着する。

高坏（第26図３）

高坏の脚部で、坏部および脚端を欠損。器面は箆による研磨があり、内面は箆削りである。

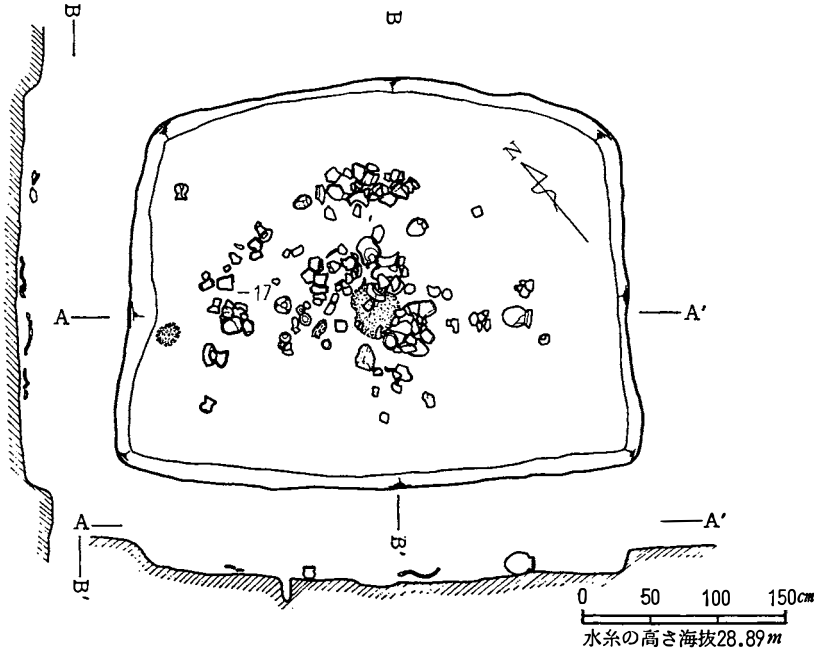
小形坩（第26図４）

口縁を欠損。色調は暗褐色を呈し、小石粒を含む胎土で、焼成は良好である。器面および口縁の内側は粗い櫛目調整が施され、内面にも粗い箆削りが施されている。全面に煤らしきものが付着する。

第27号住居址

ＳＴＡ163＋00(4)区とＳＴＡ163＋20(3)区とにかけて、主軸をＮ—50°—Ｗにとり、第17号、第18号住居址に近接して存在する。形状は長方形を呈し、長辺374㎝×短辺302㎝を計る。上部を耕作により削平されているため、壁高は20㎝弱と低い。床面はさほど硬くない。中央部には直径約40㎝の円形の焼土がある。さらに、深さ10㎝ほどの掘り込みがあり、摺り鉢状の凹を形成する。このほか、小規模ながら西壁近くに約15㎝四方の焼土がみられる。炉の北側に、深さ—17㎝の柱穴が一個ある。

床面直上および約10㎝内外浮いた状態で、おびただしい数の遺物が出土した。遺物は、壺・高坏・小形坩をはじめとして、手捏ね土器が多量に出土した。これらのミニチュアは、直接生活に使用されたものとは考え難く、第11号住居址と同じく祭祀に用いられたものであろう。



第40図　第27号住居址実測図

遺　物　（図版20・21・22）（第27図１～37）

甕形土器（第27図１・２）

⑴は、復原完形である。色調は、黒褐色と赤褐色の部分とがある。胎土は砂粒混りで、焼成は普通である。口縁は内彎をいくぶんみせながら、「く」の字状に外反する。器高は26.7㎝・口径17.2㎝・胴部22.8㎝で、器厚は0.5㎝から0.8㎝である。器面調整は肩から胴部にかけて入念に施され、口縁内側にも一部痕跡が残る。他の土器にはみられないが、胴部から底部にかけて敲き調整が行なわれた可能性がある。内面は箆削りである。⑵には、煤の付着がある。

壺形土器（第27図３～16）

⑶～⑻は、複合口縁を呈する。

⑶は、復原完形である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底部がかなりの尖がりをみ、卵形を呈する。複合口縁の屈曲部の角度は小さく、わずかに認められるだけであるが、屈曲のあおりをうけ、中央部は薄い。口縁内側と器面には、櫛目調整が施され、胴部から底部にかけては縦方向であるが、全体的には斜行を主調とする櫛目調整が施されている。内面は箆削りである。

⑷は、底部を欠損。頸部がしまり、全体的に器薄である。複合口縁を呈する口縁は、屈曲部からさらに外彎しながら立ちあがる。口唇部はなめらかで、内側につまみあげられている。

⑸は、胴部以下を欠損。肩が張りだし、⑶・⑷に比べて丸みをもつ。⑺の口縁には、屈曲部がかすかに残る。⑼は、底部を欠損、色調は淡黄褐色を呈し、胎土はきめ細かく、焼成は普通である。頸部以下丸みをもち、球形を呈する。器面と口縁内側には入念な櫛目調整が施され、内面は箆削りである。器厚は５㎜前後で薄く、器面には多量の煤の付着がある。⑽も器厚は６㎜内外と薄く、多量の煤の付着がある。

さらに、⑾～⑰の土器には、すべて煤の付着がある。⑮～⑰は、小形の壺である。

⑮は、復原完形である。色調は黄褐色を呈し、小石粒を含む胎土で、焼成は良好である。全体的に丸みをもち、球形を呈する。口縁は、やや内彎しながら立ちあがる。肩から胴部にかけては、非常に器薄である。器面は、幅がせまく目の細かい櫛目で調整、内面も幅をせまくとり入念な仕上げを施してある。

⑯の仕上げも入念で、器面には櫛目調整と箆磨きが併用されている。

高坏（第27図18～20）

⑱は、小形の高坏である。器高11.2㎝・坏部口径12.5㎝・脚端径9.6㎝を計る。器面には、櫛目調整のあとがある。内面は、箆削りが施されている。色調は褐色を呈し、胎土は小石粒を含み、焼成良好である。

⑲～⑳は、脚部だけである。⑱を含め全体的に小形である。

小形坩（第27図22～24）

三点の小形坩があるが、いずれも口縁が大きく、口径は胴径をうわまわる。

㉒は、復原完形である。色調は部分的に黒褐色と赤褐色を呈する。胎土・焼成とも良好で、堅緻である。口縁が大きく、形態的には古い時期の様相を示す。口径は11.2㎝で、胴径 8.7㎝を大きくうわまわる。口唇部はやゝいびつで、波状を呈する。器面および口縁の内側は、目の細かい櫛目調整である。また、胴部を中心に竹箆様のもので研磨を施している。内面には箆削りがある。

㉓は、㉒より小形であるが、よく均整がとれている。脚付の可能性がある。

㉔は頸部がひろく、口縁がやや内彎し短かい。

手捏ね土器（第27図25～37）

12点に及ぶ手捏ね土器がある。手捏ね土器（ミニチュア）の器形は、弥生時代後期の脚付甕・埦を形どったものと考えられる。土師式土器を中心とする時期に、古い時期の器形が残されていることは、多くの問題を提起する。㉕～㉙は壺をミニチュア化したもので、手捏ねの指圧痕が顕著である。

㉕は、器高5.5㎝・口径6.2㎝・胴径5.7㎝あり、手捏ね土器の中では大きい。色調は濃茶褐色を呈し、胎土は砂粒混りで焼成不良。器面および内面には手捏ねの跡が顕著に残り、不整形である。

㉗の頸部は広く、甕形土器様のミニチュアで、口縁がわずかにつくられている。

㉘は、底部を欠損。

㉙は、器高3.2㎝・口径3.2㎝・胴径3.6㎝と、とくに小さい。

㉚～㉝は埦をミニチュア化したものと考えられる。

㉚は、器高4.3㎝・口径6.1㎝・胴径6.3㎝で、底部は平たくなる。色調は淡黄褐色を呈し胎土・焼成とも不良で、手捏ね整形である。器面の一部と内面には、刷毛目調整が施されている。

㉛の内面には箆調整痕があり、器薄である。

㉜は、とくに作りが簡単で、器厚は厚い。

㉞は、甕形土器をミニチュア化したものと考えられる。色調は明褐色で、胎土・焼成とも普通である。口縁は不ぞろいで、底部は平たく、全体的にいびつである。

㉟・㊱は、脚付甕形土器のミニチュアである。両方とも色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成も不良であり、不整形な手捏ねでいびつである。

㊲は脚部だけである。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。器面は、櫛目調整が施されている。

第28号住居址

第28号住居址は、ＳＴＡ163＋40㈢区に第11号住居址と近接して存在する。第25号、第26号住居址と同様に、予備調査時の試掘溝により西側半分を消滅。残存する東壁および南北両壁の一部は、ややゆるやかな傾斜をもつ。床の硬さはさほどではなく、南から北へ向かってやや傾

斜し、北壁下に凹地を形成する。また、北壁の上部には、約60㎝×45㎝を計る楕円形状の焼土があり、竈の可能性がある。

遺　物　（図版22）（第28図１～３）

片口鉢（第28図１）

底部を欠損。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒混りで、焼成不良である。一方に口があり、全面に煤の付着がある。器面および口唇部の下は、粗い櫛目調整が施され、内面は横なでを基調とする調整である。

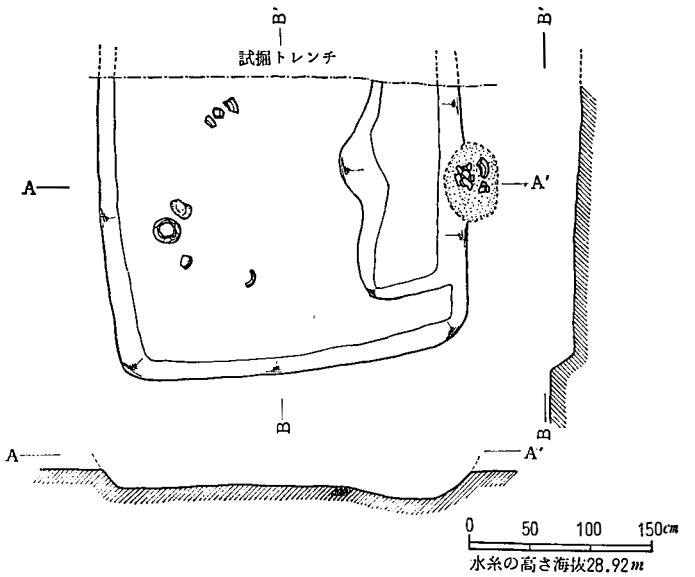
高坏（第28図２）

復原完形の高坏である。色調は褐色を呈し、小石粒を含む胎土で、焼成良好である。坏部は屈曲し、かすかに稜を形成する。坏部と脚部は同時製作で接合部はなく、頸部が非常に厚い。器面は、箆調整が施されている。

坏（第28図３）

須恵器の坏部である。口縁部の立ちあがりはゆるやかで、第Ⅲ型式の所産と考えられる。色調は灰褐色を呈し、焼成良好である。

第28号住居址に出土した遺物は以上の三点であるが、須恵器の坏をはじめとして、土師式土器を中心とする他の住居址群と、時期を異にする。高坏と片口鉢も、須恵器の坏に代表される時期の所産と考えられよう。



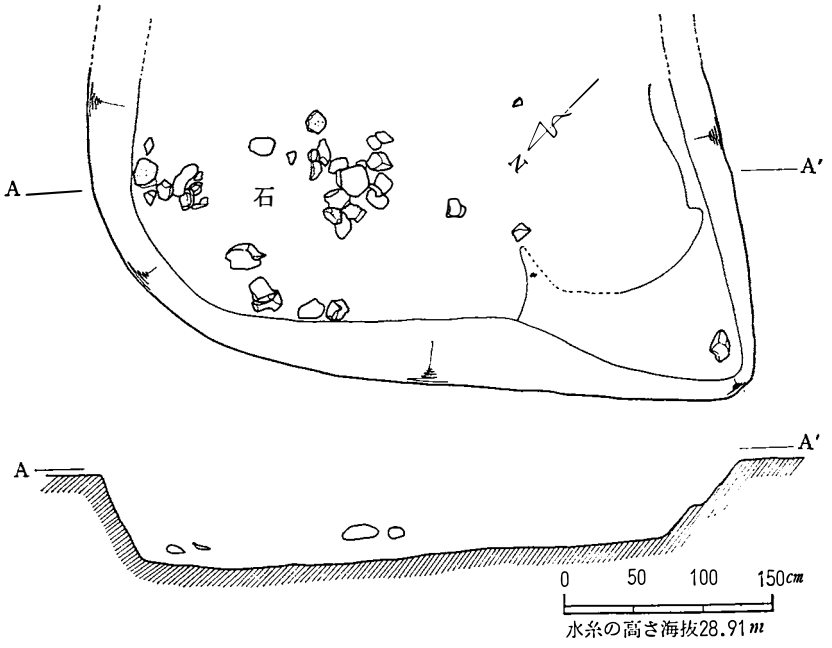
第41図　第28号住居址実測図

第29号住居址

ＳＴＡ163＋00(3)区に、第13号、第17号、第18号住居址に近接して存在する。調査を行なった部分の状況から判断して、主軸を南北にとり、方形プランを呈するものと考えられる。西壁および南北両壁は、傾斜して立ちあがり、南壁にはステップが形成される。床面の硬さはさほどではなく、南側の一部分には耕作による円形の攪乱がある。

遺物は、床面から10～20㎝浮いた状態で、土器片と陶磁器片とが一緒に出土した。また約20㎝の凝灰岩を主とする石が、多量にある。遺物は内外すべて二次的に混入した可能性がある。

遺物は破片のみで、実測可能なものはない。また、明確な柱穴・焼土も確認できず、住居址ではなく土壙の可能性もある。



第42図　第29号住居址実測図

Ⅲ　ま　と　め

(1)　住居址群の構成について

浜戸川により形成された沖積平野は、台地の南端から塚原台地へと向かって大きな広がりをみせる。住居址群が営まれる台地上から水田面へは比高10数mを計り、急角度をもって傾斜する。急傾斜面下から河岸との間は水田が営まれる湿地で、住居址を構成するスペースはない。ひっきょう水田面から10数mも高い台地上に住居址群が営まれたものであろう。また、台地の中央に向かって湧水をもつ窪地が方々に伸び、生活に必要な水の供給には充分である。

今回の調査地をはじめとして、遺跡は台地南端を基軸に、さらに大きく広がるものと考えられる。Ｂ地区で、25基の住居址を検出した。第14号、第21号、第29号住居址は遺物の出土がなく、第22号住居址には須恵器の平瓶が一点出土しているが、床面から浮き、流れ込みの状態を示しており、それぞれ住居址の時期判断ができない。また第25号住居址は、プランが不明確である。一応、以上の５基を除く20基の住居址は、出土した土器から判断してほぼ同時期に営まれたものと考えられる。最南端に位置する第１号住居址と、最北端に位置する第12号住居址との間は、直線にして約130mもの距離がある。とすれば、20基の住居址群の配置は、ＳＴＡ163＋40区を境に大きく北と南の二つのグループに分けられそうであり、南側のグループはさらに細分できそうである。

住居址群は今回の調査地にとどまることなく、四方にわたって広がる可能性が強く、遺跡の全容・性格を察することはできない。しかしながら、北側の第８号、第10号、第12号、第16号第17号、第18号、第27号住居址は、一つの集団的なまとまりをみせる。このことは、およそ７・８軒で構成される近親者集団を想定させ、近親者集団が幾つか集まり、大きな共同体社会を形成していたものと考えられる。

(2)　竪穴について

25基の住居址の形状・方位・規模・焼土・柱穴など、第１表に一覧表としてまとめた。正確な形状のわからない第15号、第25号住居址は除くとして、殆どが長方形と方形を呈し、隅丸にある。第10号住居址だけが楕円形を呈し、第９号住居址は付設されたベッドの部分が弧形を呈する。第12号住居址は建て増しが行なわれており、接合部にくびれが残る。第20号住居址の西隅は内側へひっ込み、逆に第23号住居址の東隅は大きく張り出し、いびつな形状を示す。

主軸方位は、およそ東南と北東方向をとるものが多い。一つの近親者集団と考える第８号、第10号、第12号、第16号、第17号、第18号、第27号住居址の中で、第17号、第18号住居址は主軸を東南に、第８号、第12号、第16号、第27号住居址は北東、第10号住居址は東西にとり、第17号住居址を中心におよそサークル状に形成されるかにある。

最大の住居址は第９号住居址で、長辺824㎝×短辺698㎝、最小は第27号住居址で、長辺 374㎝×短辺302㎝を計る。

耕作などで上部を大きく削平された住居址が多いなかで、難をのがれた第14号住居址は、現地表から床面までの深さは約65㎝～70㎝を計る。第Ⅱ層（黒色ローム層）からの掘り込みを確

第1表　住居址一覧表

	形状	規模 長辺×短辺	主軸方位	焼土	炉	カマド	カーボン	ベット	貯蔵穴	ステップ	柱穴 内側	柱穴 外側	遺物	備考
第1号住居址	長方形	610×412cm	N-45°-W	2カ所	○		多量						壺 3 高坏 3	
第2号住居址	長方形	484×392	N-52°-W	2	○		多量				9		壺 3 小形坩 1	火災
第3-A号遺構	方形	385×355	N-30°-W	3							1		なし	
第3-B号遺構	方形	526×450	N-51°-E										土師器 2	
第4号遺構	楕円形												弥生土器片 須恵器片 土師器片	土壙の可能性あり
第5号住居址	長方形	684×682	N-50°-W	2			少量	○	高床式倉庫付設？	○	19	17	壺 2 高坏 6 小形坩 3	第6号住居址と同一
第6号住居址	長方形	420×282	N-48°-W	2		○	少量				4	5	壺 7 高坏 4 鉄器 1	第5号住居址の建増炊事場？
第7号住居址	長方形(隅丸)	538×508	N-40°-E	1				○			10	7	壺 5 高坏 2	
第8号住居址	長方形	448×364	N-45°-W								2		壺 2 高坏 2	
第9号住居址	方形・楕円	824×698	N-30°-E	11	○		多量	○		○	1		壺 3 小形坩 2 高坏 3	
第10号住居址	長楕円	504×360	N-69°-W									6	破片	
第11号住居址	長方形(隅丸)	460×388	N-51°-W						○？		4	12	壺 4 小形坩 6 高坏 7 手捏ね 5 鉢形土器 1 他	三隅が高い祭祀的様相が強い
第12号住居址	長方形	660×450	N-47°-W	3		○	多量				9	3	小形壺 2 高坏 1 小形坩 2	張り出し建増
第13号遺構													瓦器 スリ鉢	排石？
第14号住居址	長方形(隅丸)	550×516	N-52°-W	1	○						3		壺 2 小形坩 2 高坏 4	
第15号住居址	長方形												破片	東半分消滅
第16号住居址	長方形(隅丸)	398×366	N-48°-W								5	8	壺 8 小形坩 3 高坏 4 甕 1 脚付鉢 1	
第17号住居址	長方形	646×506	N-40°-W				少量	○	○？	○	2	0	破片	入り口あり
第18号住居址	長方形(隅丸)	470×334（推定）	N-50°-E	2			少量					2	壺23 高坏12 小形坩4 脚付小形坩1	
第19号住居址	長方形	410×324	N-45°-E	1	中央		少量						壺 6 小形坩 3 高坏 2	
第20号住居址	方形(変形)	480×380	N-50°-E							○		10	壺 1 小形坩 2 高坏 1	入り口あり
第21号住居址	長方形	416×388	N-42°-W	1（西壁）		可能性あり					4	5		
第22号住居址	長方形	430×362	N-41°-E									4	須恵器 1	
第23号住居址	方形	498×475	N-36°-E	2	中央		少量						甕 2 小形坩 6 壺 39 手捏ね 2 高坏 9	
第24号住居址	長方形	536×400	N-39°-E	5			多量			○		3	壺 3 小形坩 2 脚付小形坩 1	入り口あり 火災
第25号住居址	不明	不明	N-40°-E										小形坩 3 高坏 3	不明
第26号住居址	長方形	390×354	N-30°-E	1	中央		多量				3		甕 1 小形坩 1 壺 1 高坏 1	火災？
第27号住居址	長方形	374×302	N-50°-W	2	中央		少量				1		甕形土器 2 小形坩 3 壺形土器15 手捏ね13 高坏 4	祭祀的様相が強い
第28号住居址	長方形			1	北壁		少量						片口鉢 1 高坏 1坏（須恵器）1	西側半分消滅
第29号住居址	方形												河原石	

認することができた。このうえさらに、水よけを目的とした盛土が施されていたとすれば、床面まではさらに深くなるものであろう。このほか、第７号、第21号住居址も深く、それぞれ50㎝・40㎝を計る掘り込みをもつ。このような状況をみると、当時の床面までの掘り込みはおよそ60～70㎝を計るものが、一般的なものと推定される。壁は、床からゆるやかに立ちあがり、途中から急角度で立ちあがるものが多く、壁面は軟かく、強く固められた痕跡はない。第５号、第９号、第17号、第20号、第24号住居址では、入口と考えられる階段状の遺構を検出できた。床面は、土塊やパミスを含む第Ⅴ層の暗褐色粘質土層を基盤とし、部分的に小さな凹凸が多いが全体的にフラットな状態を示す。焼土は、中央部に多い。第27号住居址では中央部を皿状に掘り込み、炉を形成している。第１号住居址では、まわりに焼土と大きな河原石を伴ない、多量の煤が付着した土器が出土した。第６号住居址では、床面から一段高くなった部分にコの字状に焼土が並列し、同じくまわりから煤の付着した土器が出土している。これらは、炉よりむしろカマドに近い存在であり、また第12号住居址は西隅に張り出し、カマドを形成していた可能性がある。第24号、第26号住居址は、多量の焼土とカーボンが出土し、火災にあったものと考えられる。貯蔵穴の例は少なく、わずかに第11号、第17号住居址の規模の大きいピットに、貯蔵穴の可能性があるだけである。このようななかにあって、第５号住居址の北側には並列する多数の柱穴を検出したが、これは貯蔵穴よりむしろ高床式の倉庫の付設を考えさせるものである。また、第１号住居址の北側には約10個の集中する柱穴を検出した。住居址に伴なう柱穴であれば、何らかの掘り込みが検出できるはずであるが、掘り込みもなく、また付近からは土器片の出土もないので第５号住居址と同じく、高床式の倉庫が付設されていたものと考えられる。

第５号、第７号、第９号、第17号住居址には、ベッド状遺構の付設がある。これらベッド状遺構をもつ４基の住居址は、他の住居址に比較して造りが大きい。ベッドの高さおよび大きさはまちまちで、第５号住居址はくの字、第９号住居址は弧形を呈する。

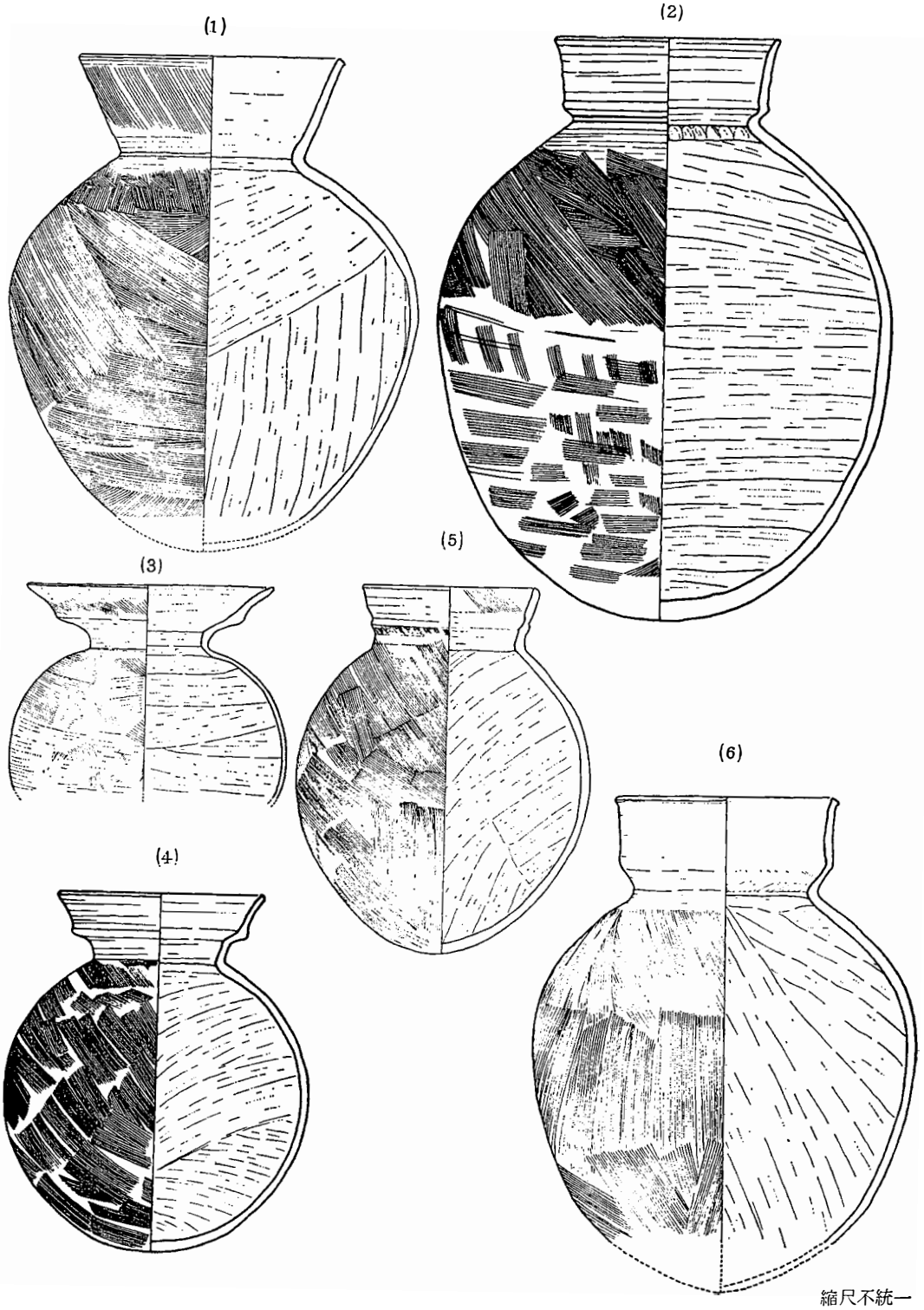
柱穴は、第16号住居址や第21号住居址を典型例とするものである。第16号住居址は、内側に５個・外側に８個を検出できた。四本柱を基礎とした構築が考えられ、外側の８個が周柱となったものであろう。内側に残る一本が主柱と組み、入口を形成したものと考えられる。同じく第21号住居址では、内側に４個・外側に４個を検出した。このほか、第７号・第12号住居址も四本柱を想定でき、住居の規模の大きい第１号、第２号住居址は六本柱、第５号住居址は九本柱を主柱とした構築が行なわれたものと考えられる。

柱穴の検出状況は全体的に悪いが、以上のような好例があり、家屋は竪穴内の四本・六本・九本を主柱とし、外側の周柱をもって構築されたことがわかる。

(3) 主な土器について

床面の直上およびやゝ浮いた状態で、多量の遺物が出土した。とくに、第11号、第16号、第18号、第23号、第27号住居址は、足の踏み入れ場もない状態であった。

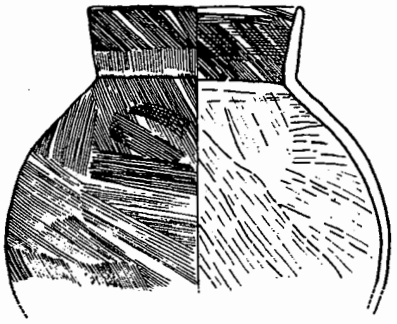
実測を終えた土器は、三百数十点を数えた。このなかで代表的な37点をあげ、特徴を述べたい。各土器についてはすでに各住居址の出土遺物として前述しており、ここでは主に形態的な特徴を述べることにしたい。



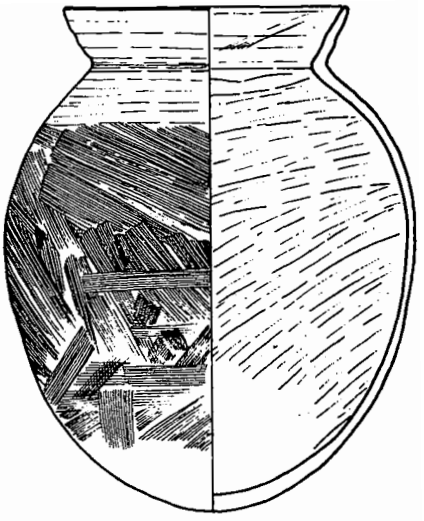
縮尺不統一

第43図 主要遺物実測図

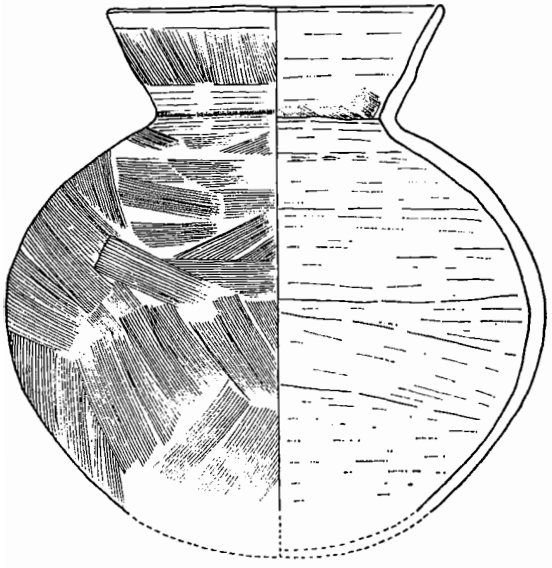
(7)



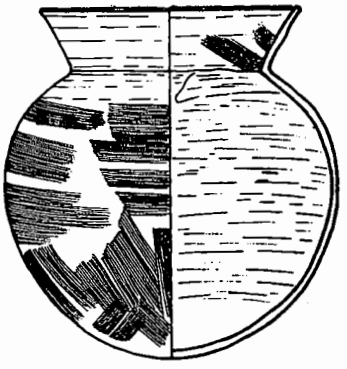
(8)



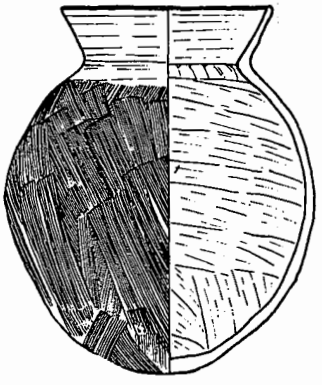
(9)



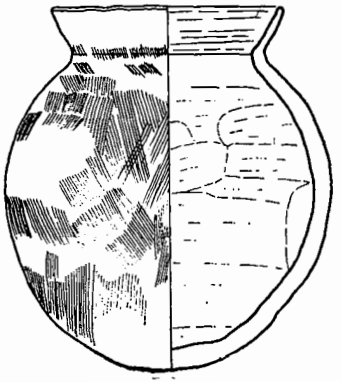
(10)



(11)



(12)



第44図　主要遺物実測図　　縮尺不統一

1. 壺形土器（1～13）

壺形土器として13点をあげ、器種の大きさから大形・中形・小形の三種類に分けてみた。

(イ) 大形（1・2）

(1)の口縁は高く、「く」の字状に立ちあがり口唇部は平たくなでられる。胴部が張り、器厚は胴部から底部にかけて薄い。対して(2)の口縁は複合で、屈曲部からほぼ垂直に立ちあがる。胴部から底部への丸みが大きい。

(ロ) 中形（3～9）

口縁が特徴的で、(3)・(4)・(5)・(6)は複合口縁を有する。とくに、(3)の複合口縁の開きは大きい。(6)は、かすかに屈曲部の痕跡を残すにすぎない。

(7)の口縁は直口する。(8)は頸部がひろく、口縁は「く」の字状に外反し、甕形土器との分類が難かしい。(3)・(4)の胴部は、丸みがあり球形を呈する。(5)・(6)・(7)・(8)は、卵形である。(9)は胴部から底部にかけては、急激にすぼむ。

(ハ) 小形（10～13）(10)は口縁が「く」の字状にあり、頸部が広く、胴部は球形を呈する。(11)・(12)は卵形を呈する。(13)は頸部がしまり、口縁は「く」の字状に外反する。器高に対して口径が大きく、胴部の張りが大きい。

以上13点の壺形土器の、主に器形について述べてきたが、さらに共通する特徴として調整方法があげられる。器面は櫛目および刷毛による入念な調整が行なわれている。口縁の内側に櫛目の調整を施したものも多い。内面は箆削りによる調整で、底部から胴部にかけては縦方向、胴部から頸部にかけては横方向を基調とした手法である。

2. 小形坩（14～23）

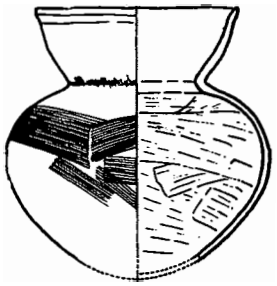
9点の小形坩をとりあげたが、器形は非常にバラエティに富む。

(14)は、小形坩の中では大きい。頸部が広く、口縁部が短かい。(15)は、前記(13)の壺形土器と同じ形態を示す。胴部はなめらかな曲線を描き、頸部が広く口径も大きい。(16)は頸部がしまり、口縁が高く口径は大きい。胴部が張り、整った形態を示す。(17)・(18)の頸部は広い。また口縁の広がりが大きく、口径は胴径をはるかにしのぐ。ともに焼成良好で、とくに(17)は器面に研磨が施され、堅緻である。(19)は胴長で、(20)は頸部が広く、口縁が短かい。また、(21)は口縁の広がりが大きく、胴が短かい。(22)は、(14)をいくぶん小形化した形態を示しているが、胴部および底部近くの二ヶ所に焼成後の穿孔がある。また、器面の調整には箆が用いられ、粗雑な造りである。(23)は口縁を欠損するが、脚付の小形坩である。

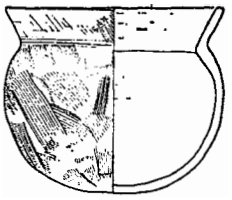
3. 高坏（24～30）

(24)は坏部が深く、脚部は途中屈曲部をもつことなく、ストレートに広がり、脚端に至り外側にはねる。(25)は非常に均整のとれた形態を示す。坏部は途中に屈曲部をもち、外側には稜を形成する。脚部の屈曲部は高く、裾部はややふくらみ、脚端で外側へいくぶんはねる。(26)は非常に大形で、器高19.6㎝、口径26.9㎝、脚端径18㎝を計る。(25)に比較すると、坏部は深く、脚部の開きが大きい。裾部のふくらみはないが、脚端でいくぶんはねる。(27)は、脚部の屈曲部が低く、脚端にむかうに従い器薄となる。(28)・(29)は、第11号住居址から出土したものであるが、

(13)

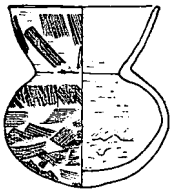


(14)

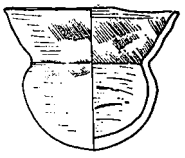


(15)

(16)

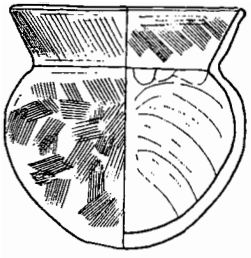


(17)

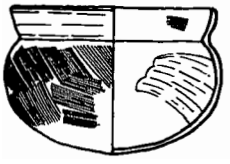


(18)

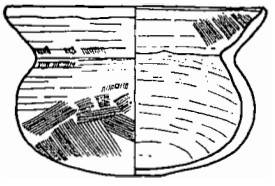
(19)



(20)

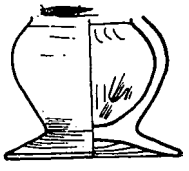


(21)

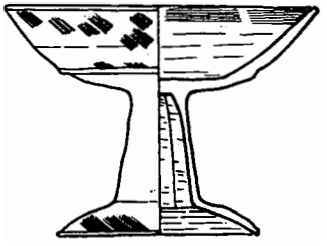


(22)

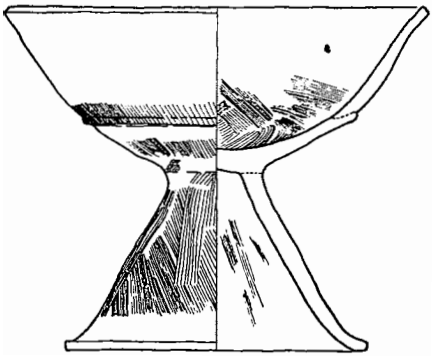
(23)



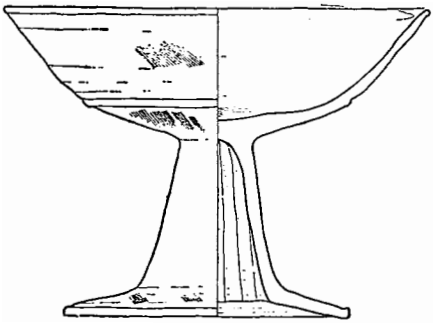
(25)



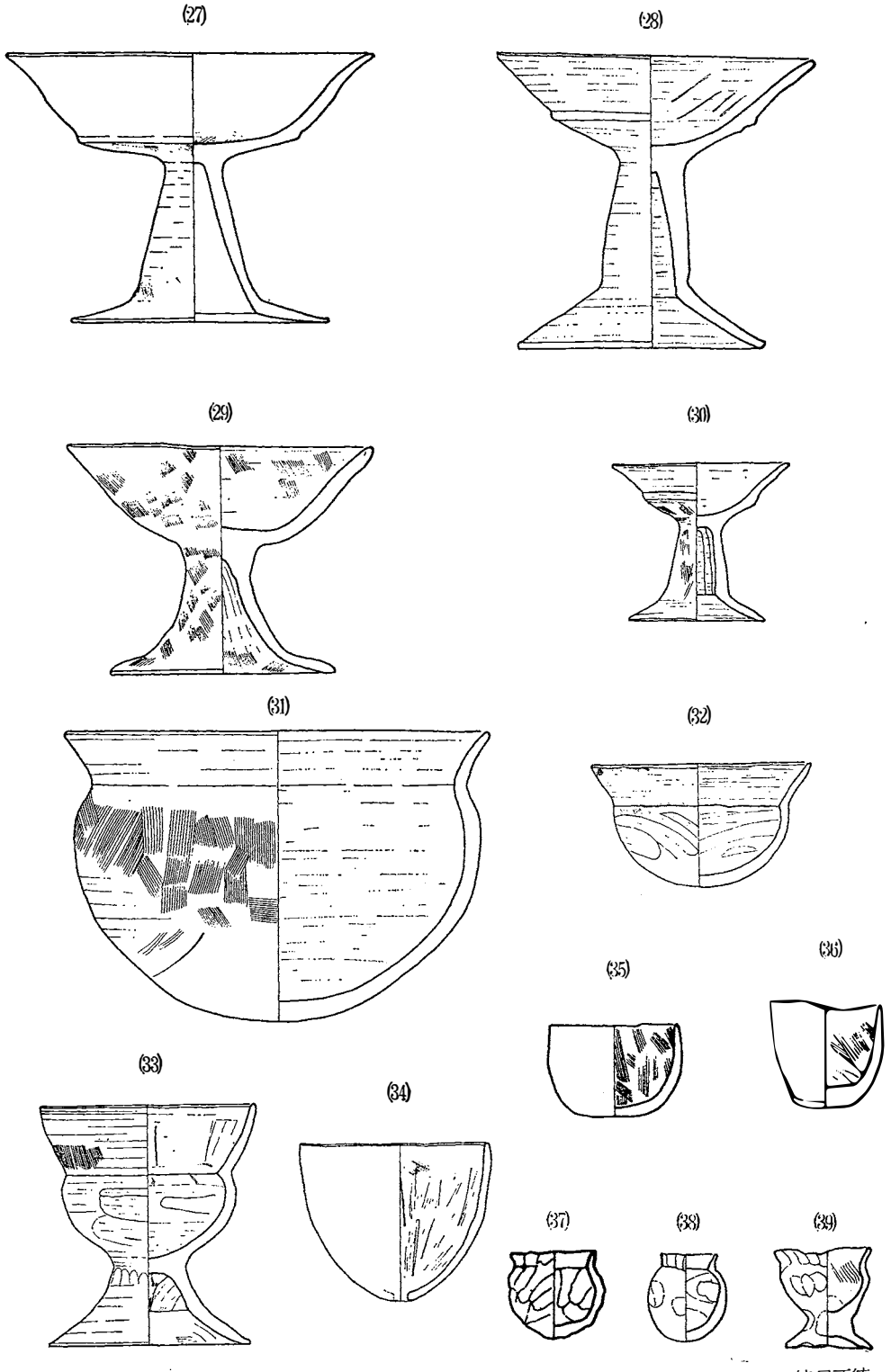
(24)



(26)



第45図 主 要 遺 物 実 測 図　　縮尺不統一



第46図 主要遺物実測図

縮尺不統一

第2表 主 要 遺 物 一 欄 表

番号	器名	口径㎜×胴径㎜×器高㎜	実測図	写真
(1)	大形壺	212 × 330 × 394	図版12 第18図(1)	(2)
(2)	〃	182 × 366 × 465	図版11 第16図(1)	(1)
(3)	中形壺	197 × 220 ×	図版12 第18図(3)	(6)
(4)	〃	166 × 245 × 290	図版11 第16図(2)	(5)
(5)	〃	147 × 244 × 301	図版20 第27図(3)	(4)
(6)	〃	135 × 234 ×	図版 8 第11図(2)	
(7)	〃	137 × 244 ×	図版13 第18図(4)	
(8)	〃（甕）	180 × 262 × 319	図版13 第18図(5)	
(9)	〃	152 × 242 ×	図版 1 第1図(1)	(13)
(10)	小形壺	166 × 212 × 223	図版13 第18図(15)	
(11)	〃	132 × 195 × 230	図版18 第23図(41)	
(12)	〃	112 × 157 × 176	図版 8 第9図(3)	(19)
(13)	〃	121 × 158 ×	図版14 第18図(22)	
(14)	小形坩	14 × 141 × 116	図版19 第24図(4)	(38)
(15)	〃	93 × 108 × 102	図版 3 第5図(9)	(37)
(16)	〃	96 × 104 × 114	図版20 第25図(1)	(36)
(17)	〃	112 × 87 × 89	図版21 第27図(22)	(32)
(18)	〃	84 × 78 × 70	図版21 第27図(24)	(38)
(19)	〃	110 × 113 × 113	図版 9 第11図(13)	
(20)	〃	126 × 132 × 87	図版14 第18図(27)	(30)
(21)	〃	123 × 110 × 79	図版 9 第11図(15)	(31)
(22)	〃	99 × 118 × 95	図版20 第25図(3)	
(23)	〃	× 94 ×	図版14 第18図(28)	(39)
(24)	高坏	190 × 135 × 155	図版 1 第1図(4)	(43)
(25)	〃	137 × 120 × 137	図版14 第18図(29)	
(26)	〃	269 × 180 × 190	図版19 第23図(42)	(45)
(27)	〃	196 × 138 × 140	図版 8 第9図(4)	(42)
(28)	〃	165 × 128 × 152	図版 9 第11図(6)	(47)
(29)	〃	160 × 117 × 117	図版 9 第11図(7)	(48)
(30)	〃	125 × 96 × 111	図版21 第27図(18)	(49)
(31)	鉢	223 × 212 × 151	図版 9 第11図(12)	(24)
(32)	小形鉢	152 × 114 × 85	図版12 第16図(16)	(29)
(33)	脚付小形坩	150 × 139 × 168	図版12 第16図(15)	(40)
(34)	甑	133 × 134 × 110	図版12 第16図(20)	(41)
(35)	手捏ね土器	61 × 63 × 43	図版22 第27図(30)	(54)
(36)	〃	53 × 51 × 48	図版22 第27図(34)	(55)
(37)	〃	41 × 45 × 42	図版22 第27図(26)	(57)
(38)	〃	28 × 39 × 46	図版10 第11図(22)	
(39)	〃	44 × × 47	図版22 第27図(36)	(53)

註 高坏の場合、胴径の欄は脚部径を記入した。実測図欄に示した各図の番号と、その土器の出土した住居址の番号は同じであるので、出土住居址は省略した。

㉘は特にいびつである。㉙は坏部、脚部とも屈曲部をもたず曲線を描く。㉚は小形で、坏部の屈曲は明確でない。脚部の屈曲部は、非常に高い。

4. 鉢（31）

ただ一点の資料で、小形壺を大きくした形態である。

5. 小形鉢（32）

口縁の広がりが大きく、小形壺と形態を異にし、小形鉢と称したい。

6. 脚付小形鉢（33）

稀有な形態を示し、今回ただ一点の資料である。

7. 甑（34）

㉜・㉝同様第16号住居址から出土したものであり、底部に一個の穿孔をもつ唯一の資料である。

8. 手捏ね土器（35～39）

㉟㊱は椀㊲㊳は壺を、また㊴は台付甕をミニチュア化したもので、弥生時代土器の影響を残すものである。

(4) 祭祀遺構と共同体社会について

近来、熊本県下においても古墳時代前期の方形周溝墓の存在が明らかにされつつある。沈目遺跡から至近距離にある塚原古墳群をはじめとして、熊本市健軍町広木[註1]・水源地[註2]遺跡が知られ、上益城郡益城町秋永遺跡[註3]や、八代郡竜北村高塚遺跡[註4]らにも可能性がもたれている。住居址が営まれる場所と、墓域との地理的な関係についても、いずれ明らかにされよう。沈目遺跡は広大な舞ノ原台地の南端に所在するが、台地周辺に方形周溝墓らしきものの存在は確認されておらず、また、台地中央を飛行場建設のため広く破壊され、墓域との関係を明らかにしえない。台地北側に吉野山古墳群があるが、台地下に緑川が流れ、浜戸川を中心とする沈目遺跡とは生活圏を異にするようである。しかし現状では台地は異にするものの、浜戸川を挟み約1200mの至近距離にある塚原古墳群を墓域とする可能性が強い。

第18号、第23号住居址からは、多量の土器が出土し、第18号住居址には、さらに刀子一本が出土している。日常に用いるにはあまりに多すぎる。何らかの理由で住居址そのものを墓地とし、多量の土器は副葬に用いたとも考えられる。また、従来主に副葬や祭祀用に用いられるとされていた高坏や小形壺が、各住居址から多量に出土し、単なる祭祀用だけの土器ではなく、日常の生活に用いられていた可能性を強くするものである。このような中にあって、多量の手づくね土器（ミニチュア）が第11号、第27号住居址に集中して出土し、第14号、第23号住居址にも断片的に出土した。各住居址から多量の高坏、小形壺が出土し、日常生活の土器として用いられた可能性が強いなかで、この手捏ね土器の出土は、第11号、第27号住居址を、祭祀的様相のとくに強い住居址とするものである。さらに、第11号と第27号住居址とを比較すれば、第27号住居址から出土する土器には煤の付着したものが多く、住居址の中央に炉があり、まわりに焼土がある。第11号住居址には、煤の付着した土器や、炉・カーボン・焼土らの痕跡がなく、三隅が高くなる独特のつくりが見られる。すなわち、第11号住居址は、最初から祭祀に用いる[註5]

べくして造られた可能性が強く、第27号住居址は、住居址として使用されたあと、二次的な行為によって、祭祀的様相が強くなったものであろう。また、第11号住居址と近接する第20号住居址は、出土する土器からみて、時期的に遅れて造られたものであろう。さすれば、第11号住居址は、他の住居址との間に距離空間を持ち、完全に孤立した状態にある。この距離空間を広場として、祭祀的様相の強い第11号住居址をとり囲むように、各住居址が配置された可能性がある。すなわち、おおよそ7～8軒を1グループとする近親者集団が、祭祀的様相の強い住居をとり囲む形で、いくつか集まり、共同体社会を形成していた可能性を推測させるものである。

5. 住居址群の時期的位置について

25軒の住居址群の主な配置状況と、住居址の構造および出土した代表的な遺物について述べて来たが、ここで時期的位置について述べてみたい。

25軒の住居址は、広々とした台地上に、各々が切り合うことなく所在し、切り合いによる先後関係を知ることはできないが、各住居址ごとに出土した土器は、セット関係を明確にしえた。

熊本県下における古墳時代前期の住居址の調査例は少なく、正確な土器編年および性格はつかまれていない。弥生時代後期に野辺田式土器[註6]なるものが横行する。玉名郡菊水町諏訪の原遺跡[註7]で、この時期の70数基の住居址が検出された。玉名郡岱明町山下遺跡[註8]からは、この時期にやや遅れる居住址が報告された。これらにいくぶん、間をおいて続くのが、熊本市健軍町広木遺跡であろう。このほか、断片的な資料として、八代郡竜北村高塚、玉名郡岱明町院塚[註9]、宇土郡不知火町弁天山遺跡[註10]などがある。さらに、現在、調査が続けられている塚原古墳群の報告がなされれば、土器の編年はかなり明確化されるであろう。

さて、今回の資料の中には、諏訪ノ原や山下遺跡にさかのぼる程の資料はない。あえて取り上げれば、第27号住居址の手捏ね土器の中に、脚付甕と埦をミニチュア化したものが見られ、第14号住居址の短頸壺に弥生式土器の影響が見られるだけである。逆に第28号住居址は、須恵器の坏と高坏・片口鉢を出土したが、坏からみて、およそ6C後半の所産と考えられる。同じく高坏を他の住居址群から出土したものと比較すると、かなりの時期的なへだたりがある。すなわち、弥生後期・野辺田式土器の横行する時期から間をおき、第28号住居址（6C後半）ともかなりの空間を持つ時期に相当しよう。

この時期に相当する他の地方の遺跡として、福岡県狐塚[註11]・有田[註12]・炭焼遺跡[註13]が上げられ、関東では・五領[註14]・和泉期[註15]に比定できよう。いずれにせよ、熊本県および九州の正確な総体的編年がなされねばならないが、およそ、4Cから5C前半にかけてを主要時期とする住居址群と考えられる。（江　本）

註

1. 広木方形周溝墓「熊本市東部地区文化財調査報告書」熊本市教委1971
2. 広木遺跡の西側の至近距離にある遺跡で、熊本市教委の調査で方形周溝墓2基と円形周溝墓2基ほかが明らかにされた。
3. 1967年造成工事に先だつ調査で石棺1基と多量の土師器を伴なった溝が発見されている。

註

4. 花岡興輝「八代郡龍北村における土師器埋没遺跡について」熊本史学第11号　1957
5. 坂本経堯氏のご教示による
6. 田辺哲夫「野辺田遺跡発掘調査中間報告」　1951
7. 諏訪原遺跡「埋蔵文化財緊急調査概報」熊本県教委　1972
8. 松本健郎「山下遺跡」玉高部報30号　1973
9. 乙益重隆ほか「院塚古墳調査報告」熊本県教委　1965
10. 資料は宇土市公民館にある
11. 「狐塚遺跡」筑後市教育委員会　1970
12. 「有田遺跡」福岡市　〃　1968
13. 「炭焼古墳群」福岡県文化財調査報告書　1968
14. 杉原荘介、大塚初重「土師式土器集成」東京堂　1971
15. 同　上

第四章　その他の遺構・遺物

Ⅰ、弥生式土器（第47図）　第４号遺構の石組中と、表土中から二点の弥生式土器片を採集した。いずれも刻目凸帯をもち、前期の所産と考えられる。

Ⅱ、布目瓦（第47図）　ＳＴＡ164＋00区の表土中から布目瓦数片が出土した。(3)は須恵器製の平瓦で、敲が施され、桶づくりの痕跡がある。(4)(5)は丸瓦で、(6)は平瓦である。

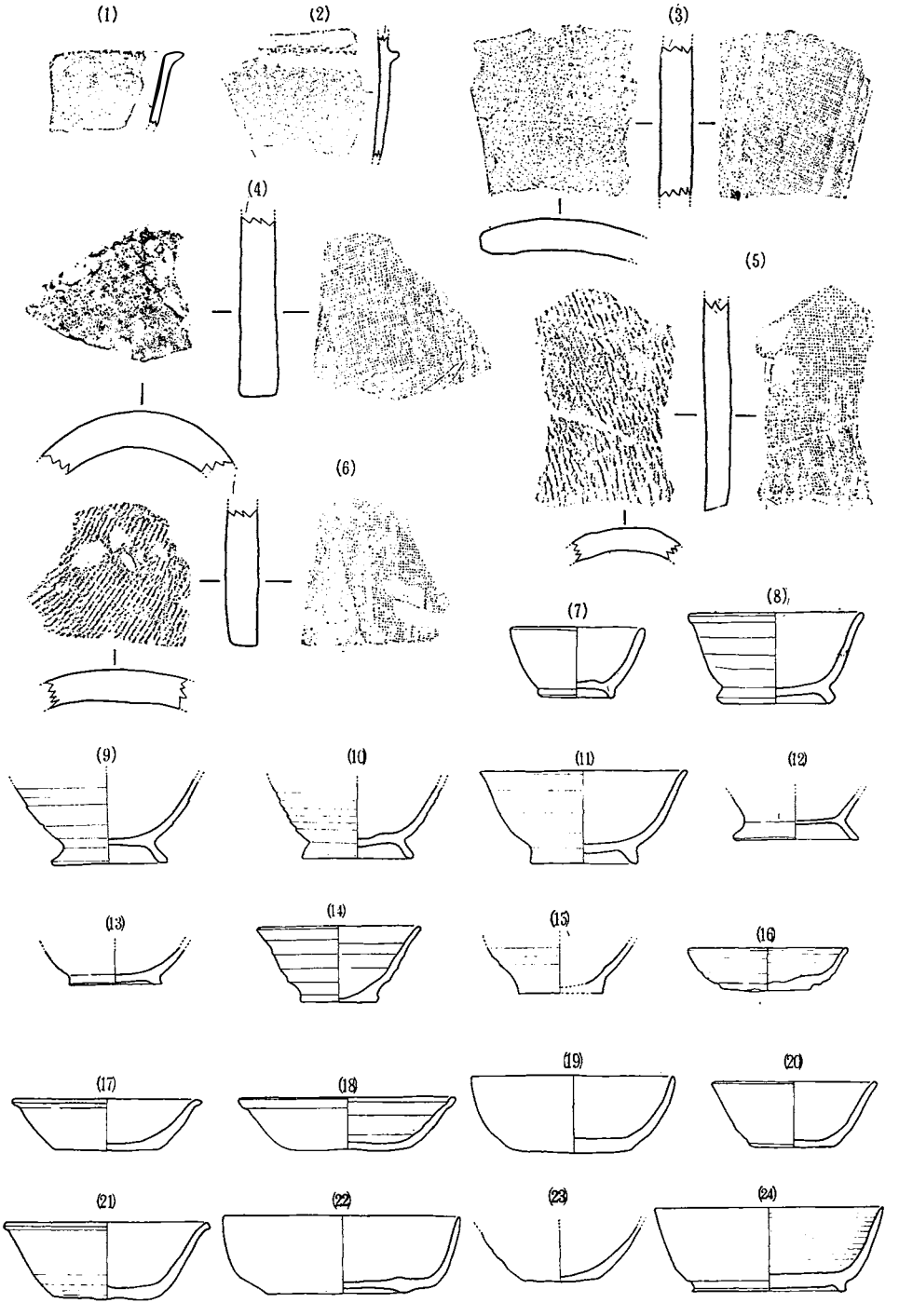
Ⅲ、土師器、須恵器（第47図）　各住居址の上層から出土した土師器、須恵器のほかに、ＳＴＡ164＋00区を中心に、表土中から約20点が出土した。

高台付椀（７～13･24）・椀（14･15･19～23）・皿（16～18）に分類でき、およそ奈良時代から、平安時代にかけてのものと考えられる。(5)は須恵器で、胎土、焼成良好で色調は灰白色を呈する。高台付でやや上げ底となる。(10)は、口径14.2㎝、器高6.2㎝を計る。口唇部がやや外反し、脚部は肉厚である。胎土は粘質が弱く、器面の風化が著しい。焼成良好で黄褐色を呈する。器面および内面には顕著な丹塗りが施され、焼成後に付着した煤が見られる。(7)の内面は黒色を呈する。薫されて付着した炭化物を、さらに篦で研磨したもので、内面だけに加工があり、外面にはない。胎土、焼成ともやや不良で器面は荒れている。横書きに、「東」と読める墨書がある。(10)は器面に沈線状に篦なでが施されている。(11)は、口径14.2㎝、脚径7.3㎝、器高6.2㎝を計る。口縁がやや外反し、高台は肉厚である。(12)(13)は(9)と同様に内面が黒色を呈する。(14)の底部は平底で、横なでの痕跡が顕著に残る。(15)も平底を呈するが、焼成後に穿孔された可能性があり、底部近くに墨書がある。「介」と読める可能性がある。(16)は完形資料で、口径10.9㎝、器高 2.9 ㎝を計る。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも不良で、器面はもろい。糸切底で、燈明皿とも考えられる。(18)には、綿密な丹塗りが施され、口縁部が一部くびれる。(19)(20)は横広の椀で、(22)の底部は中がくぼみ、上げ底状にある。(20)は、精良な胎土で焼成も良好である。内外面に丹塗りが施され、底部には篦切りのあとが残る。(21)の口縁は外側へはねる。(24)は須恵器で、胎土、焼成ともやや不良で表面はもろい。色調は、黄褐色、灰褐色を部分的に呈する。

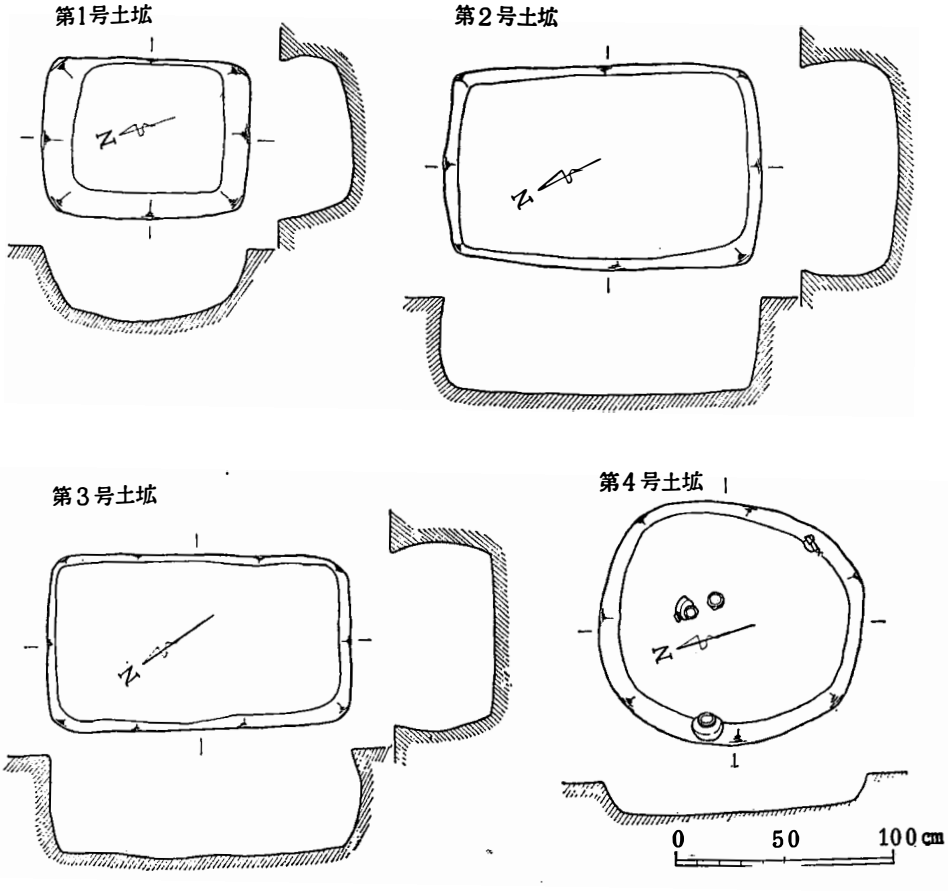
Ⅳ、蔵骨器　第48図(4)はＳＴＡ163＋80(2)区の表土中から採集した蔵骨器で、口径14.5㎝、胴径17.8㎝、器高15.5㎝を計る。須恵質で胎土、焼成とも良好である。正確な時期は不明である。

Ⅴ、土壙　ＳＴＡ163＋60(3)(4)区から４基の土壙を検出し、うち一基は円形で、高台付椀、椀、皿が出土した。正確な時期は不明であるが、出土した土器からみて、奈良～平安時代にかけてのものと考えられる。

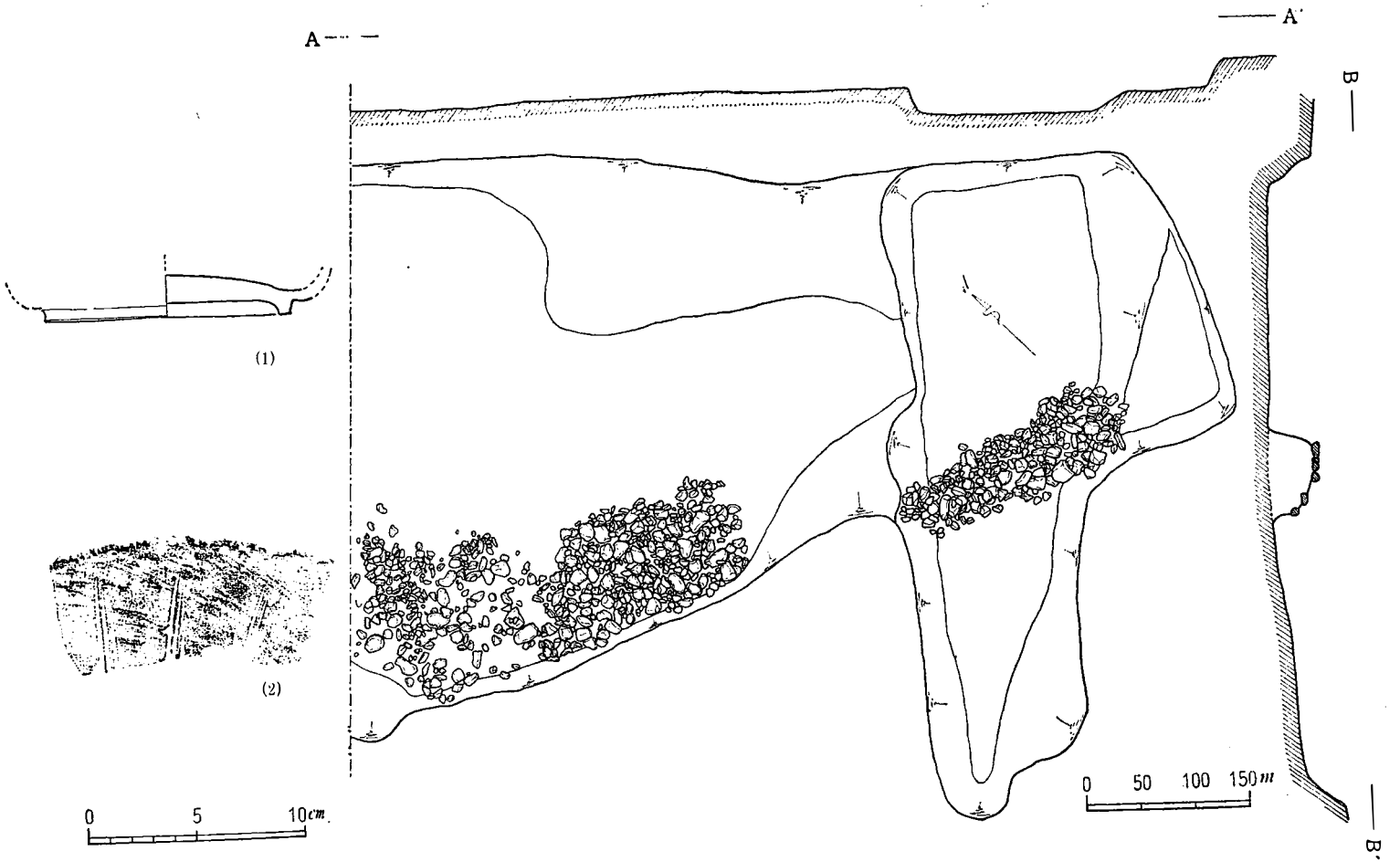
Ⅵ、排石（第13号遺構）（第49図）　ＳＴＡ162＋80(2)区にいびつな形をした掘り込みがあり、およそ３ヶ所に亘って多量の自然石が集められていた。多量の石は、30㎝内外浮いた状態で出土し、土器小片が含まれていた。(1)は須恵質の高台付椀の一部であり、(2)も同じく須恵質のスリ鉢である。時期および性格は不明である。　（江本）



第47図 遺 物 実 測 図



第48図　土壙遺物実測図



第49図　第 13 号 遺 構

第五章　総　　括

Ⅰ　沈目遺跡の周辺遺跡（第１図参照）

熊本平野の南部は緑川とその支流によって形成された沖積低地である。この平野にのぞむ山麓や低平な洪積台地および平野内の微高地には多くの遺跡が存在している。沈目遺跡はこの平野南縁にある遺跡の一つで、緑川とその支流である浜戸川によって南北をかぎられる舞ノ原台地上に立地している。舞ノ原台地は標高わずか30ｍ前後の低平な洪積台地で、第二次大戦中にはここに舞ノ原飛行場が建設されたほどである。今回の調査地は舞ノ原台地南縁の浜戸川にのぞむ遺物散布地である。

沈目遺跡といえば、故小林久雄氏によってはじめて学界に紹介された押型文の「沈目式土器」の出土地として知られた遺跡である。[註1] この遺跡の周辺には縄文時代から歴史時代にかけて多くの遺跡が分布している。

押型文の遺跡は舞ノ原台地のほか、浜戸川の南に発達する塚原から尾窪、藤山、鰐瀬にかけて分布しており、そのほか縄文時代の貝塚としては中期の阿高貝塚、後期を主とする黒橋貝塚[註2]晩期の御領貝塚など縄文土器の編年上きわめて重要な貝塚群が存在している。

弥生時代ではとくに後期から終末期の土器が宮地を中心に広く分布しており、それに伴なうとみられる貝塚も中尾（中宮地）、囲（隈庄城東側）などに存在する。

古墳時代になると、20数基をかぞえる北の吉野山古墳群[註3]、西の隈庄古墳群[註4]、沈目のすぐ東側には前方後円墳の甚九郎山古墳[註5]、狐塚古墳があり、浜戸川をはさんで南の塚原台地には同じく九州自動車道建設に伴なって調査した塚原古墳群[註6]が存在する。また、肥後の最初の国府といわれる益城国府推定地が舞ノ原台地南縁の宮地、沈目とされるし、さらに国府を背景にしたとみられる陳内廃寺跡は沈目の南方わずか600ｍのところにある。

Ⅱ　沈目遺跡の総括

遺跡の周辺は現在まで桑畑、樹木園、蔬菜などの畑として利用されているが、昭和19年飛行場建設の際に、調査区のＡ、Ｂ、ＣのうちＡ地区が削られてＢ地区に盛土されている。したがって、Ａ地区では包含層がみられず、調査対象にできなかった。なおＣ地区は急傾斜面ではあるが押型文を出土する包含層があった。しかし、工事によって削平されてしまって調査はできなかった。

発掘調査によって得られた遺物・遺構は縄文時代、古墳時代、歴史時代にわたるものであるが、その主体となるものは古墳時代の竪穴住居址群である。以下それぞれの特徴的な遺物・遺構等についてまとめてみたい。

縄文時代　　沈目遺跡の最下層、つまり黄褐色の下部（第Ⅲc層）からその下の黒褐色粘質土層の上部（第Ⅳａ層）にかけての層に、押型文土器と石器および集石遺構を検出した。

土器の文様としては山形文、楕円文、格子目文、条痕文、連点文などであり、器形は口縁がやや外反し、胴部でややふくらみ、底部は平底の鉢型を呈し、口径はほぼ20㎝内外のものが多い。胎土には砂粒、雲母を含み概して焼成も悪くもろいが、中には堅緻なものもあり、色調は黄褐色または黒褐色を呈している。器面の調整は口縁部では縦回転が多く、胴部から底部にかけて口縁の内側には横回転がみられる。

石器にはサヌカイトおよび良質の頁岩を使用した Chopping tool, Scraper, Core があり、おそらく押型文土器に共伴する石器と考えられ、先土器文化の石器との関連を考えるうえで貴重な資料といえる。

土器および石器と同一の層から砂岩質の礫を用いた集石遺構群を検出したが、同様の出土例は上益城郡御船町久保、下益城郡城南町塚原、松橋町古保山C遺跡などからも検出されており、炉であるのか埋葬遺構であるのか今後検討すべき問題であろう。なお押型文土器と集石遺構の分布範囲はB地区の南部からC地区の台地南縁の傾斜面にかけてと考えられる。また押型文土器は集石遺構群の分布する範囲に点在し、とくに集石遺構内に多いわけでもない。

以上のほか少量の晩期の土器片および石器などを検出したが遺構は不明である。今回の調査によって、いわゆる沈目式土器の文化層を確認できたことは収穫といえよう。

古墳時代　今回の調査の主要なものが古墳時代の竪穴住居址群で、調査地の中央部のB地区から29遺構を検出したが、第5号と第6号は一遺構と考えられ、また第3号、第4号、第13号は住居址とは考えられず、それを除く25遺構が住居址であると確認した。そのうち形状のはっきりした住居址の平面形はほぼ隅丸の方形ないしは長方形を呈しており、第10号住居址が一つだけ楕円形である。

方形ないしは長方形プランの住居址の中で第5号と6号、第9号、第12号住居址はやや変形プランである。つまり第5号と6号は一遺構で第6号部分が付設されたもの、第9号はベッド状遺構の部分が円形を呈し、第12号はくびれから南側の狭い部分がのちに建て増したものと推測できる。

住居址の大きさは一辺4～5mが平均的な大きさで、比較的大きな第5号、第7号、第9号、第17号に床面からやや高くベッド状の造り付けを設けている。竪穴の深さ（壁の高さ）については耕作によって上部が削平されているのではっきりしないが、ほぼ60～70㎝の深さで、上部が広がるような立ち上りである。また60～70㎝の深さともなれば、住居内への出入りに階段が必要となり、第5号、第9号、第17号、第20号、第24号住居址には階段状遺構を認めた。

床面の中央には多く炉あるいは焼土を認めることができる。第27号では中央部に凹みを設け、第1号では河原石を用いた炉を検出した。カマドと考えられる遺構は第6号、第12号、第21号に認められ、第6号では床面より一段高い部分に、第12号では西隅の張り出し裾部にそれぞれ遺存している。

各住居址の主軸の方向はほぼ南東一北西の方向と北東一南西の方向であり、同一の座標上に乗る方向であるといえる。このことは方向について一定の共通した条件を想定できるものと考えられる。例えば風向[注7]や採光などの自然的条件に左右された方向ではないかと考える。住居址

の全体的な配置からみた場合、上記のような一定の共通した方向であること、各住居址の間に切り合い関係がないこと、出土した土器の形式からもほとんど同一時期のものであることなどから、住居址の前後関係を考察するうえではかなりむずかしい。したがって若干の建てかえはあったとしても比較的短い時期の住居址群である可能性も考えられよう。

ただ、住居址内から出土した遺物でとくに注目すべきことは、第11号と第27号から多量の手捏ねの小形土器を検出したことである。他の住居址からは第14号、第23号からごく少量の手捏ね土器が出土したにすぎないことから推察すれば、この第11号、第27号の二つの住居址は他の住居址と異なった性格をもった遺構であるとも考えられる。しかも第11号では長方形プランの中に、三隅が高く造られており、他の住居址とは異なるもので、祭祀など特殊な様相をもった遺構の可能性が考えられる。また第5号住居址はほかよりいちじるしく大きく、しかも母屋にはL字状にベッド状遺構をもち、さらに別棟の釜屋が付設されている。屋外には母屋の東側に多数の柱穴が並んでいてそれらの状態から推察すればこの家屋はこの集落群の中では一きわ特殊な住居址であるということができる。

沈目の住居址群は土器の形式が和泉式に類似する形式よりさらに先行する一形式と見られ、ほぼ五世紀前半の集落址と考えられる。したがって浜戸川をはさんで南方に望む塚原古墳群ときわめて密接な関係にある集落址といえよう。[註8]

歴史時代　直接遺構とは関係ないが、表土層や表採資料の中から八世紀前後の須恵器、土師器、布目瓦などがみつかっている。従来、舞ノ原台地の南縁からは古墳時代末期～奈良朝にわたる須恵器、土師器をはじめ滑石製下駄、硯（須恵）、陳内第一期[註9]の瓦の出土が知られ、またすぐ南方600mにある陳内廃寺は国府の守護寺院として建てられたものだとして、松本雅明氏は「和名抄」に記されている益城国府の地をこの地区に想定されている。

今回の調査で検出した遺物の中にある墨書銘のある椀型土器はこの益城国府にきわめて密接な関係のある遺物であろう（第47図）。一つは椀に横書で「東」の一部とみられる墨書が認められるし、さらに他の一つは墨書の痕跡は認められるけれども、明瞭でないので文字であるのか絵画的なものなのかはっきり判断できない。もし文字だとしてその一裾を「介」と判読できるとすれば、国守を補佐しその政務を代行した「介」に関連ある遺物であることになろう。いずれにしても貴重な資料といえるもので、今後この地域の出土遺物に注目を要するものである。

（隈　昭志）

註

1　小林久雄　所謂楕円捺型文土器に就いて、考古学第5巻6号、昭和9年（「九州縄文土器の研究」所集）

2　昭和47年7月の大雨で浜戸川堤防が欠壊した際に徳本明氏によって発見された貝塚。昭和48年3月熊本大学の国分直一教授、小谷凱宣助教授、佐藤伸二助手により試掘された。阿高貝塚と御領貝塚との時期をうめる貝塚として重視されている。

3　吉野山を中心とする丘陵に円墳群、横穴群が存在する。松本雅明編「城南町史」昭40年、P76

4　舞ノ原台地西端に円墳４基、横穴群、石棺等がある。「城南町史」P80

5　昭和33年熊本日日新聞社主催で調査、全長36.9m、後円部径21m、前方部径15m、石室の残がいに赤、白、青の装飾が認められる。「城南町史」P82

6　全長23m、高４m、後円部に６区の屍床があった。昭和33年熊本日日新聞主催で調査、「城南町史」P85

7　この地方の気象は地形の影響をうけることが多い。寒暑の差が著しく大陸性気候の型を示すといわれる。風向は夏季は浜戸川方向から吹きあげ、冬季は吉野山からの吹きおろしが著しい。

8　塚原古墳群は五世紀前半から七世紀にかけて、方形周溝墓群、円墳群が同一台地上に存在する古墳群で、沈目住居址は塚原の初期の住居址と関連すると考えられる。
塚原古墳群中間報告（第１次所見48年６月１日）（第２次所見48年８月05日）（第３次所見49年３月31日）熊本県教育委員会

9　松本雅明編「城南町史」昭40　第２章第１節３、４　松本雅明　尾窪中世墳墓成立の背景　熊本県文化財調査報告　第12集　昭和48年、熊本県教育委員会

あ と が き

調査を終えて四カ月が過ぎたが、久し振りに現場を訪れると、沈目遺跡の姿は完全に消滅し、急ピッチで工事が進められていた。新しく九州縦貫自動車道として生れ変わり、地域社会の経済向上に大きく寄与するものと期待してやまない。

今回の調査では、縄文時代押型文土器を層位的に捉えることができ、また多量の土器をともなった古墳時代前期の住居址20数軒を検出し、報告することができた。熊本県地方における土師式土器の報告例は少なく、出土状況および型式編年も明らかではない。今後の研究に大きくゆだねられるものである。したがって、可能なかぎり土器実測図をのせることにとくに留意した。遺物整理および実測は、文化財収蔵庫で作業を行ない、成果をあげることができた。

残念なことは、報告書の作成期間が限られ、住居址から出土したカーボンのC^{14}測定、および柱穴をもとにした家屋復原図を作成することが出来なかったことである。そこでC^{14}の測定の結果については、近く刊行予定の塚原古墳群の報告書に補記を行ない、さらに沈目遺跡の全容を明らかにしたいと考えている。

調査および報告書の作成にあたっては、肥後考古学会長坂本経堯先生をはじめ、多数の方々の多大なご教授とご指導をいただきました。心から深謝いたします。

沈目遺跡は消滅し高速道と化するのもまぢかであるが、新たに学究の場に生れ変わることを期待し最後としたい。

昭和49年２月23日

隈　　昭志

江本　　直

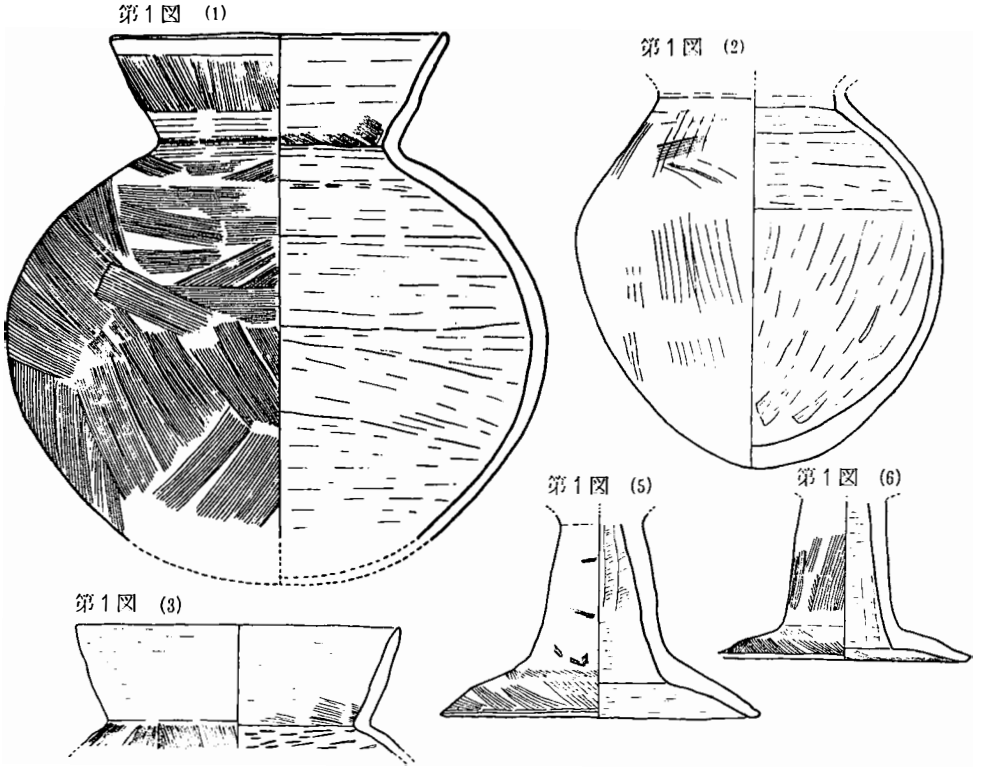
図　　版

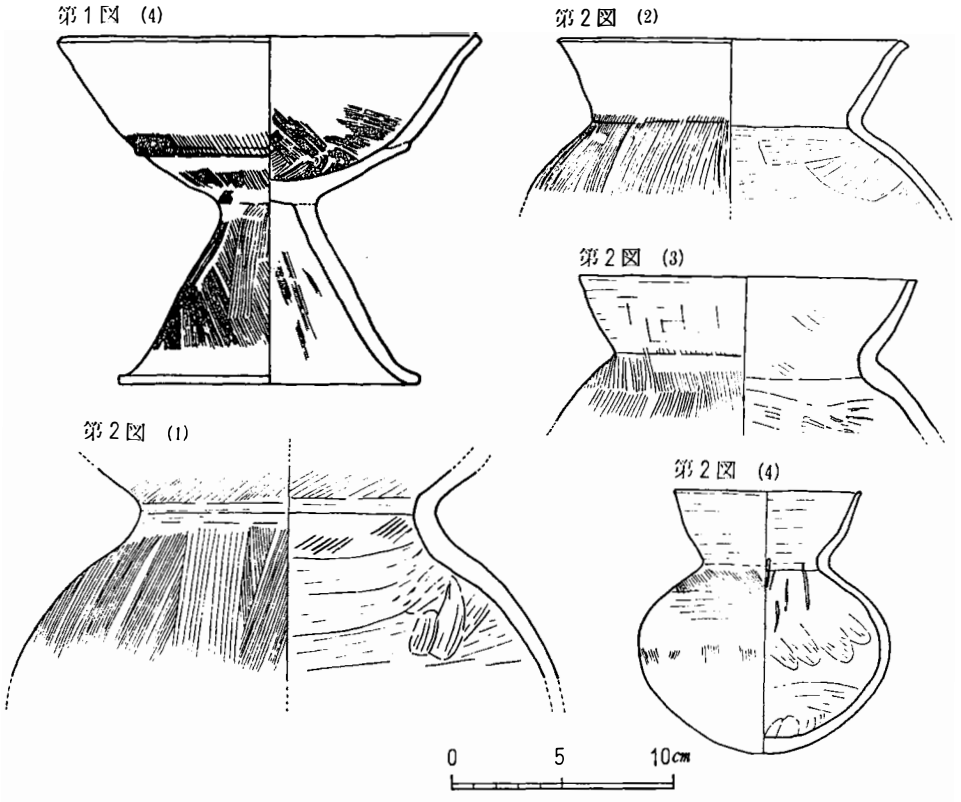
図　版　目　次

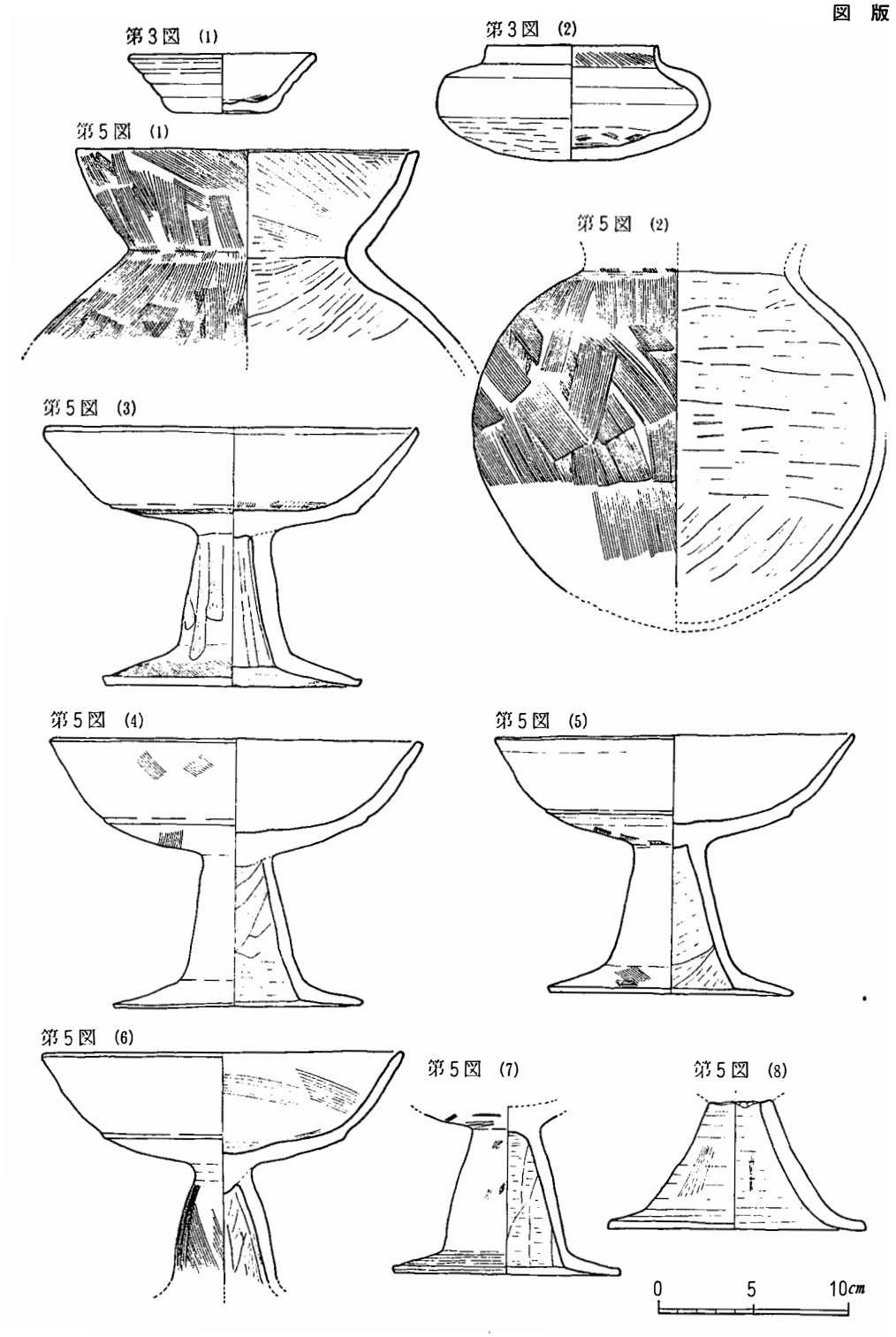
図版1　第1号、第2号居址出土土器実測図……1
図版2　第3－B号遺構、第5号住居址出土土器実測図……2
図版3　第5号、第6号住居址出土土器実測図……3
図版4　第6号住居址出土土器実測図……4
図版5　第6号、第7号住居址出土土器実測図……5
図版6　第7号住居址出土土器実測図……6
図版7　第8号、第9号住居址出土土器実測図……7
図版8　第9号、第11号住居出土土器実測図……8
図版9　第11号住居址出土土器実測図……9
図版10　第11号、第12号、第14号住居址出土土器実測図……10
図版11　第16号住居址出土土器実測図……11
図版12　第16号、第17号、第18号住居址出土土器実測図……12
図版13　第18号住居址出土土器実測図……13
図版14　第18号住居址出土土器実測図……14
図版15　第19号、第20号住居址出土土器実測図……15
図版16　第23号住居址出土土器実測図……16
図版17　第23号住居址出土土器実測図……17
図版18　第23号住居址出土土器実測図……18
図版19　第23号、第24号住居址出土土器実測図……19
図版20　第25号、第26号、第27号住居址出土土器実測図……20
図版21　第27号住居址出土土器実測図……21
図版22　第27号、第28号住居址出土土器実測図……22
図版23　調査風景・遺物検出状況……23
図版24　第1号、第2号住居址とピット群・第1号居住址……24
図版25　第2号住居址・第3－B号遺構……25
図版26　第4号遺構・第5号、第6号住居址……26
図版27　第6号住居址・第7号住居址……27
図版28　第8号住居址・第9号住居址……28
図版29　第10号住居址・第11号住居址……29
図版30　第12号住居址・第13号遺構……30
図版31　第14号住居址・第15号住居址……31
図版32　第16号住居址……32
図版33　第16号住居址・第17号住居址……33
図版34　第18号住居址・第19号住居址……34

図版35　第20号住居址・第21号住居址……35
図版36　第22号住居址・第23号住居址……36
図版37　第23号住居址・第24号住居址……37
図版38　第26号住居址・第27号住居址……38
図版39　出土遺物……39
図版40　〃　……40
図版41　〃　……41
図版42　〃　……42
図版43　〃　……43
図版44　〃　……44
図版45　〃　……45
図版46　〃　……46
図版47　〃　……47
図版48　〃　……48
図版49　〃　……49
図版50　土層と土器の出土状況・押型文土器出土状況……50
図版51　押型文器出土状況……51
図版52　押型文土器出土状況・石器出土状況……52
図版53　押型文土器……53
図版54　墨書土器……54

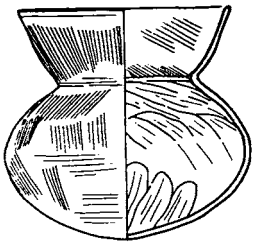
註　遺物の実測図（図版１～22）では、各住居址から出土した遺物と各図番号とを同一にした。すなわち第１図とは第１号住居址出土の遺物である。


第1図 (1)
第1図 (2)
第1図 (5)
第1図 (6)
第1図 (3)

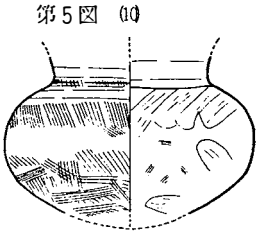

第1図 (4)
第2図 (2)
第2図 (3)
第2図 (1)
第2図 (4)
0 5 10cm


第3図 (1)
第3図 (2)
第5図 (1)
第5図 (2)
第5図 (3)
第5図 (4)
第5図 (5)
第5図 (6)
第5図 (7)
第5図 (8)
0
5
10cm

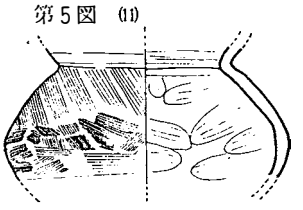
第5図 (9)



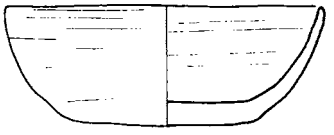
第5図 (10)



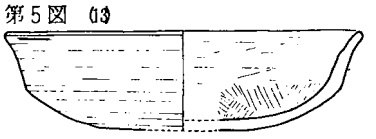
第5図 (11)



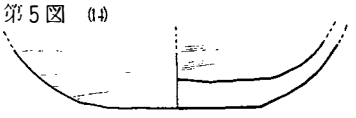
第5図 (12)



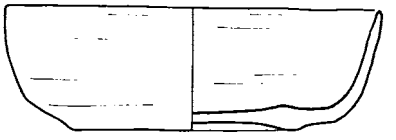
第5図 (13)



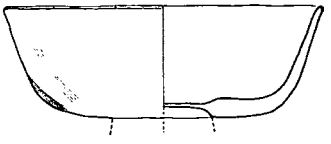
第5図 (14)



第5図 (15)



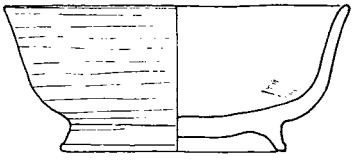
第5図 (16)



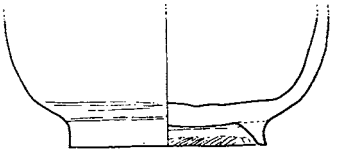
第5図 (17)

第5図 (18)

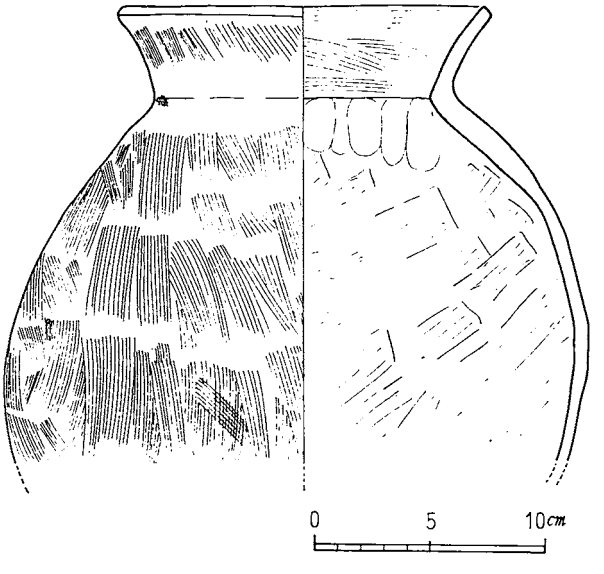
第5図 (19)



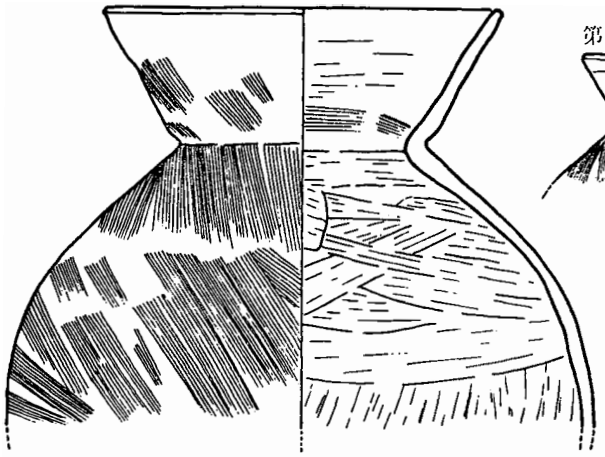
第5図 (20)



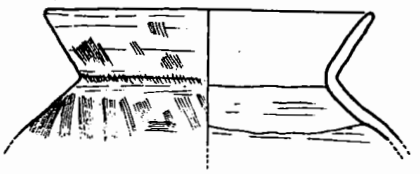
第6図 (1)



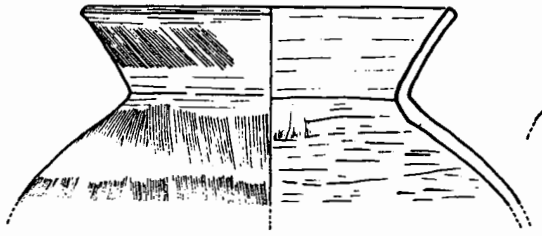
第6図 (2)



第6図 (4)

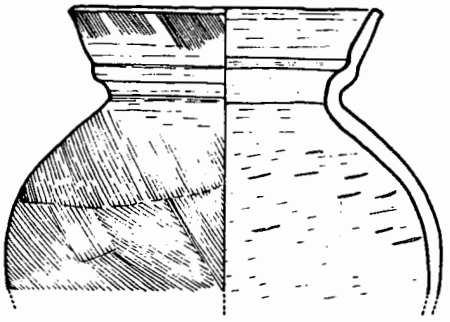


第6図 (3)

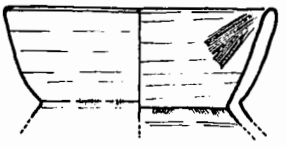


第6図 (5)

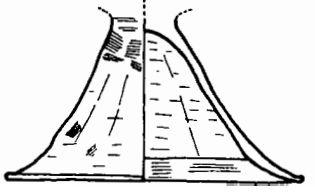
第6図 (6)



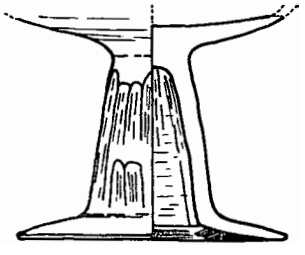
第6図 (7)



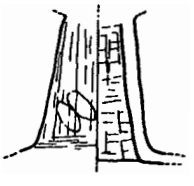
第6図 (8)



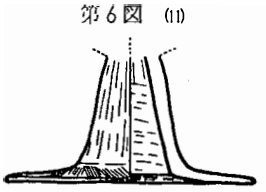
第6図 (9)



第6図 (10)

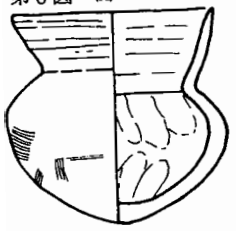


第6図 (11)

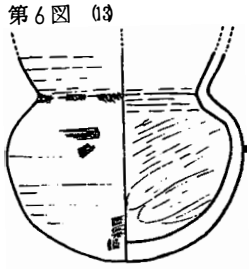


0 5 10cm

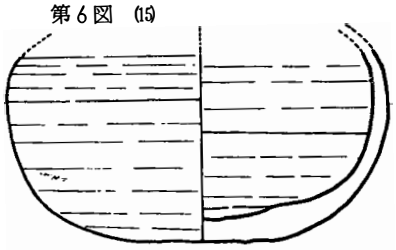
第6図 (12)



第6図 (13)



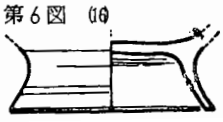
第6図 (15)



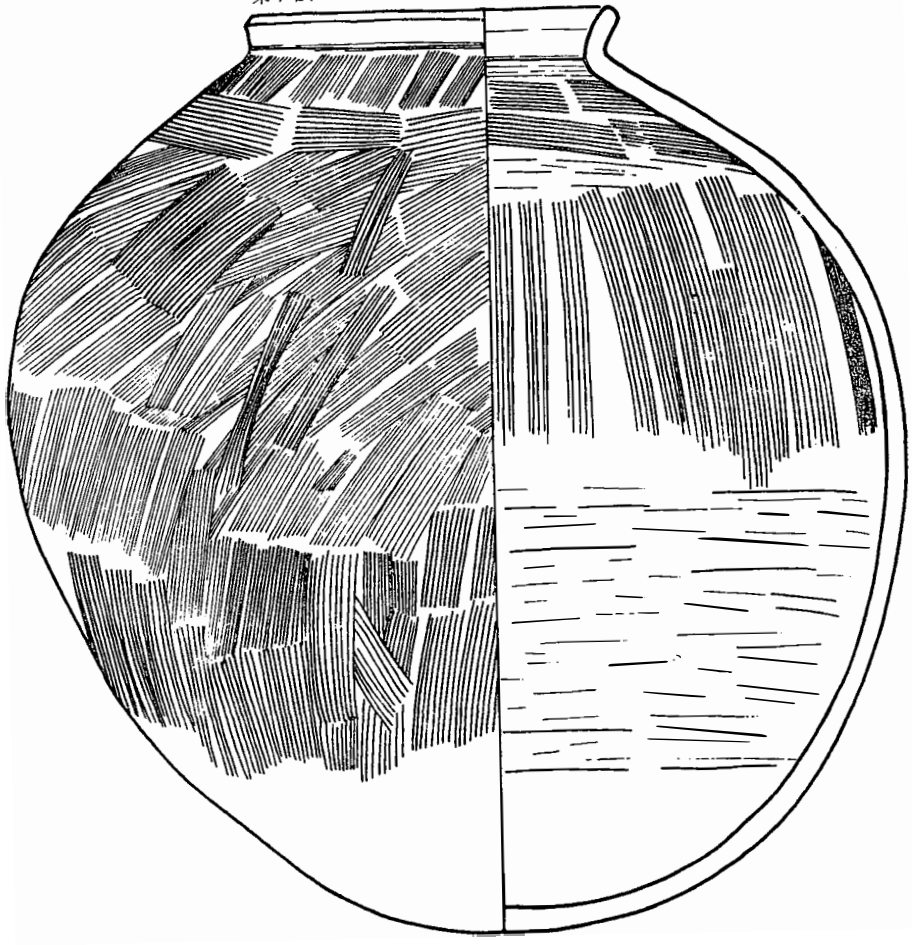
第6図 (14)

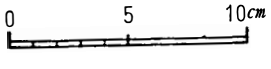
刀 子

第6図 (16)

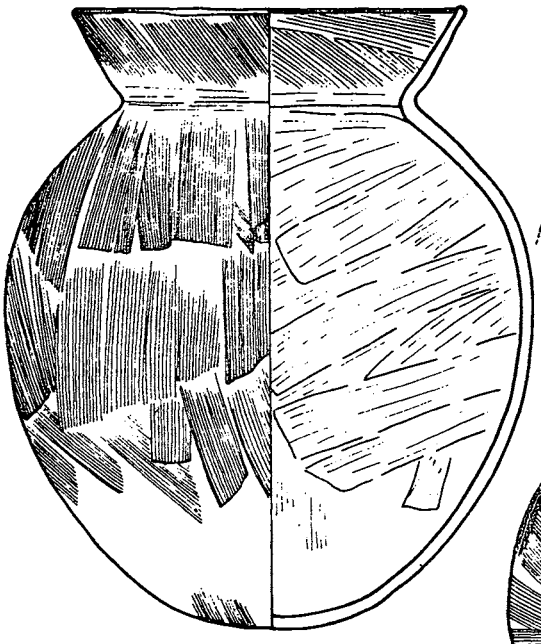


第7図 (1)

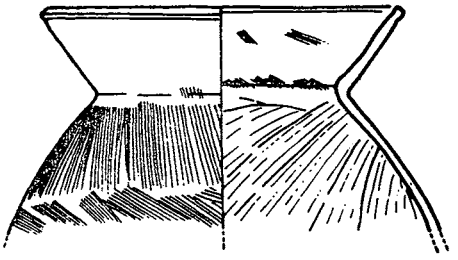




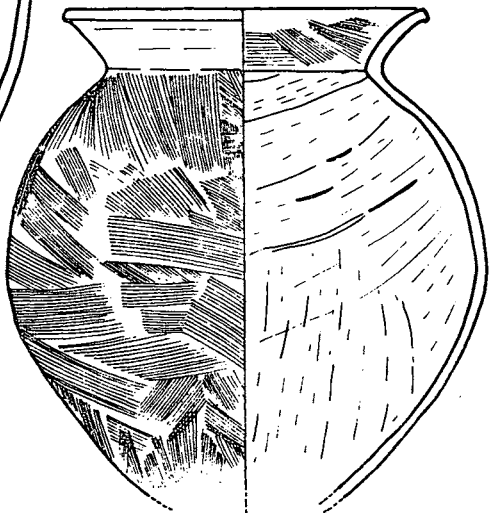
第7図 (2)



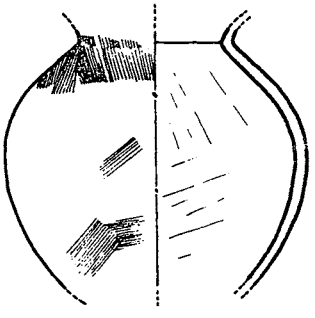
第7図 (3)

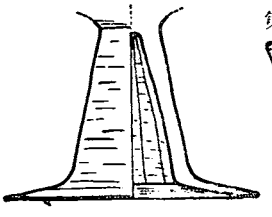


第7図 (4)

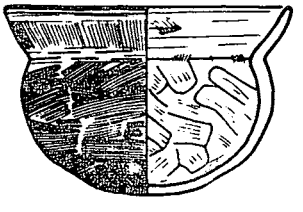


第7図 (5)

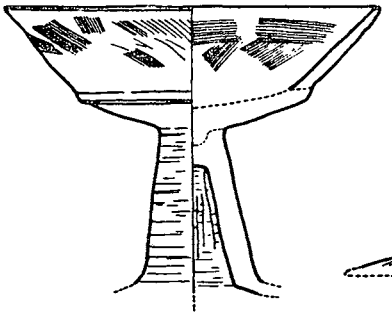




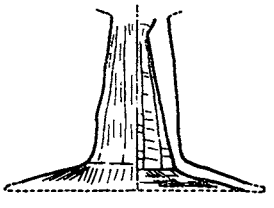
第7図 (8)



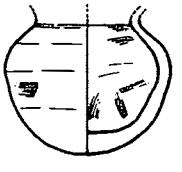
第7図 (6)

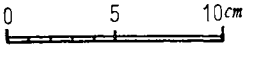


第7図 (7)

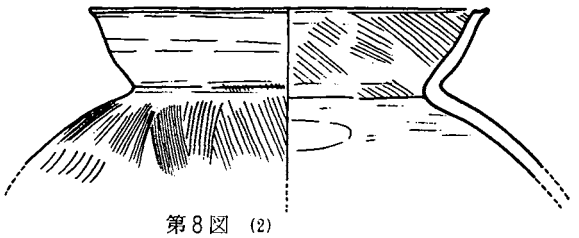


第7図 (9)

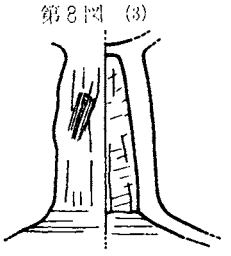




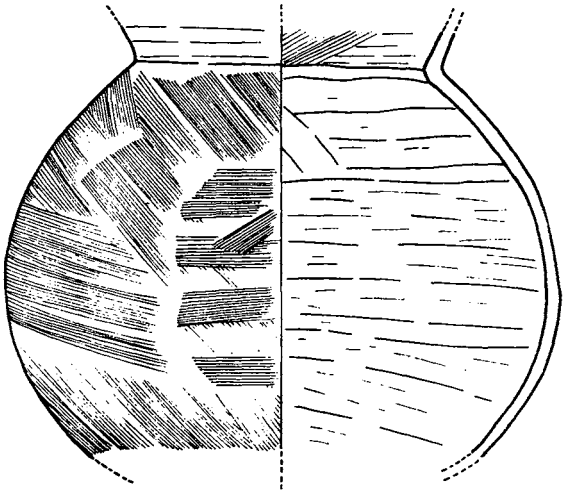
第8図 (1)



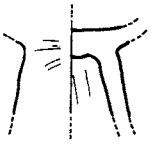
第8図 (3)



第8図 (2)

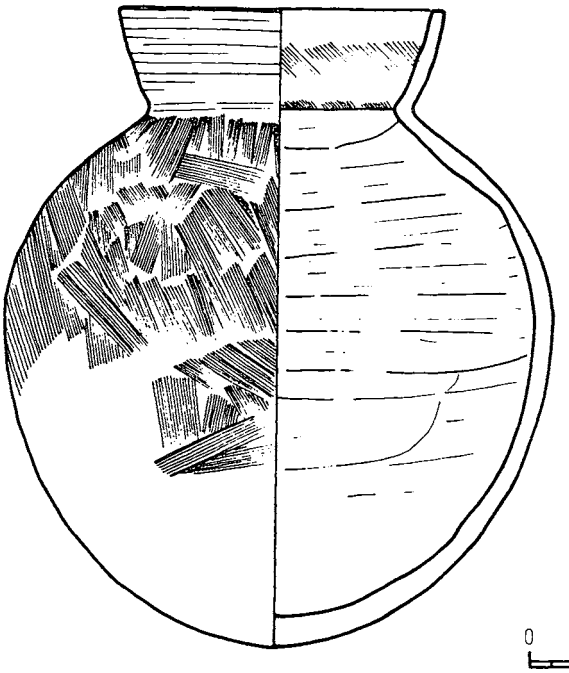


第8図 (4)

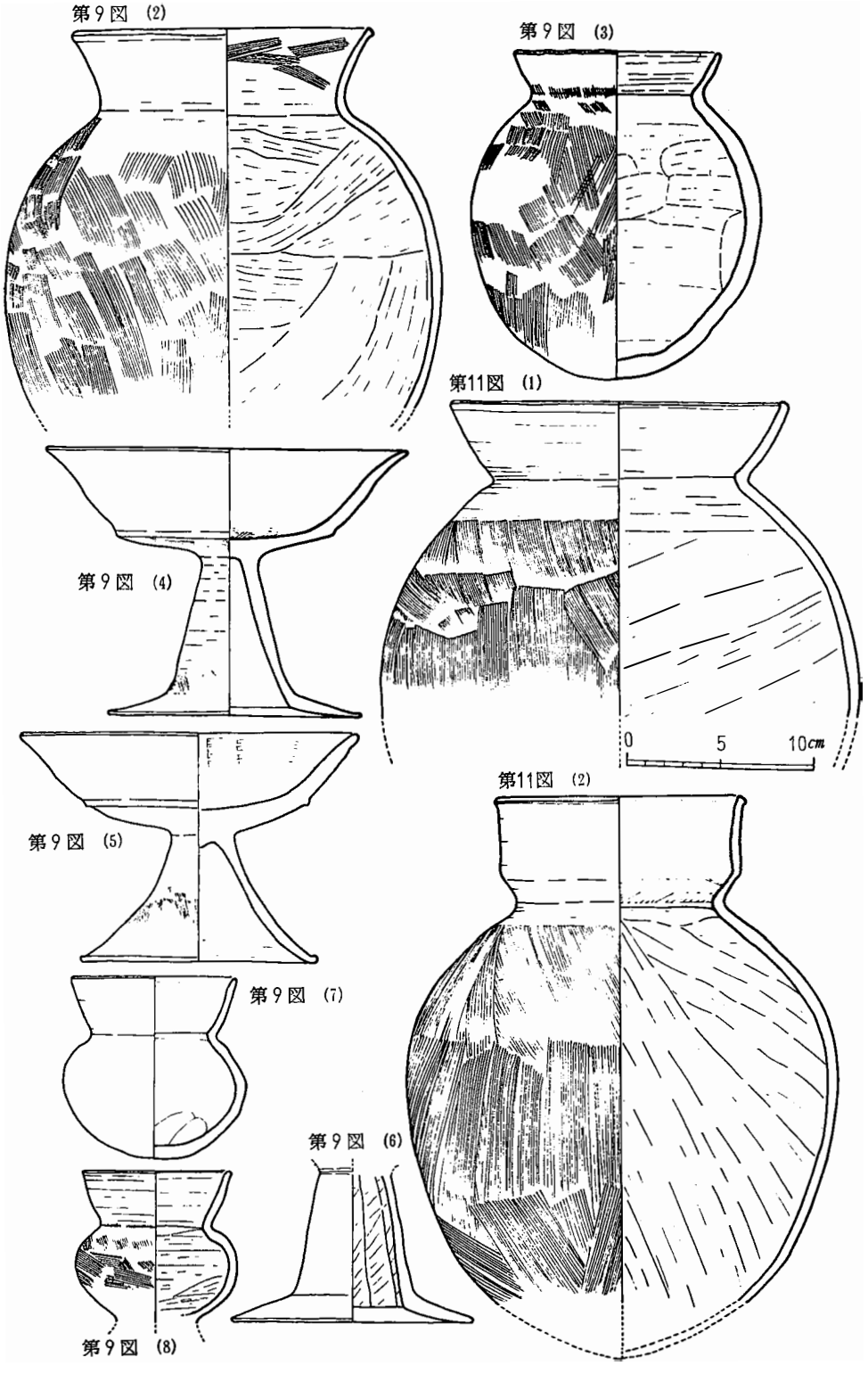


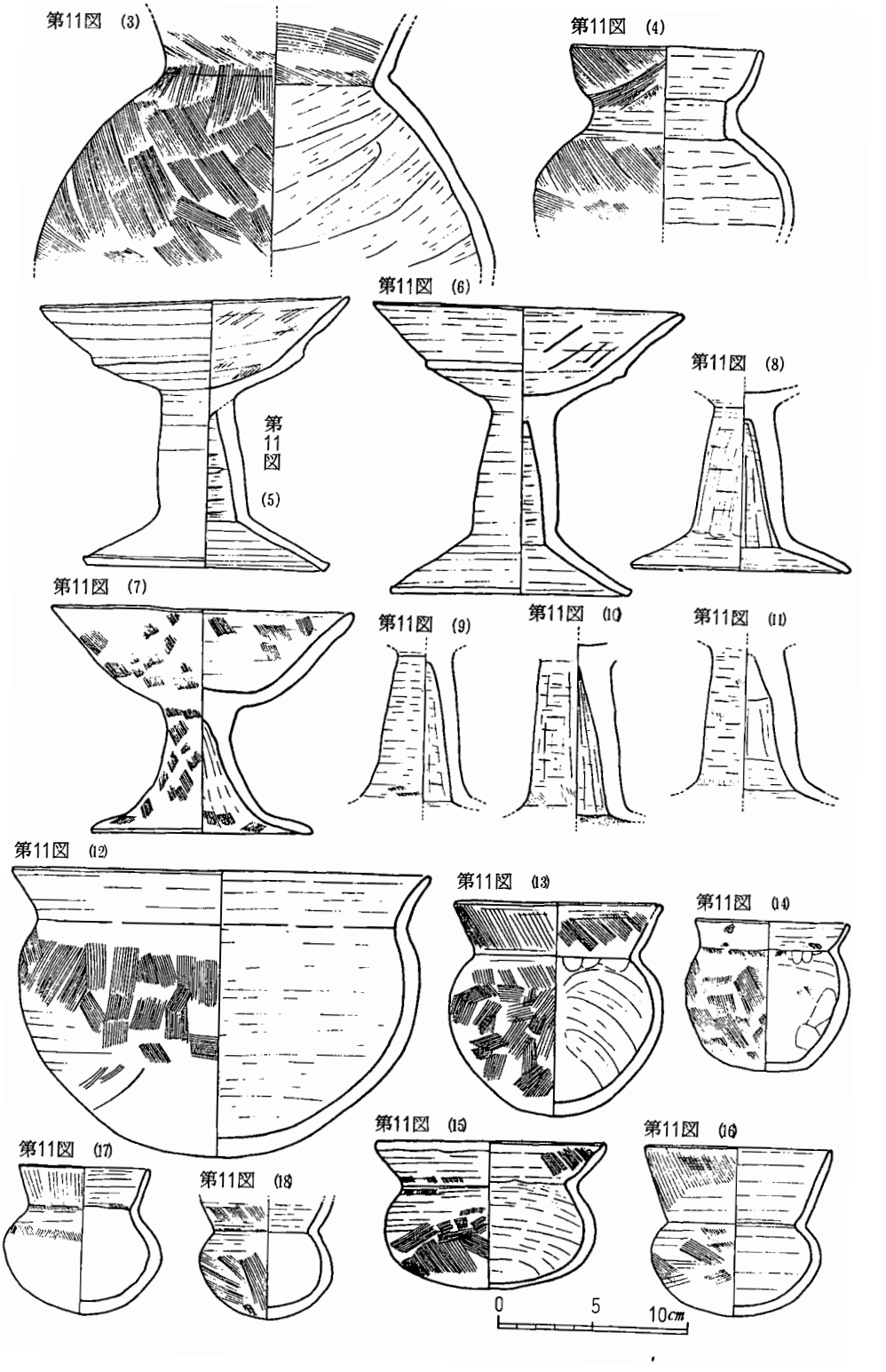
第8図 (5)

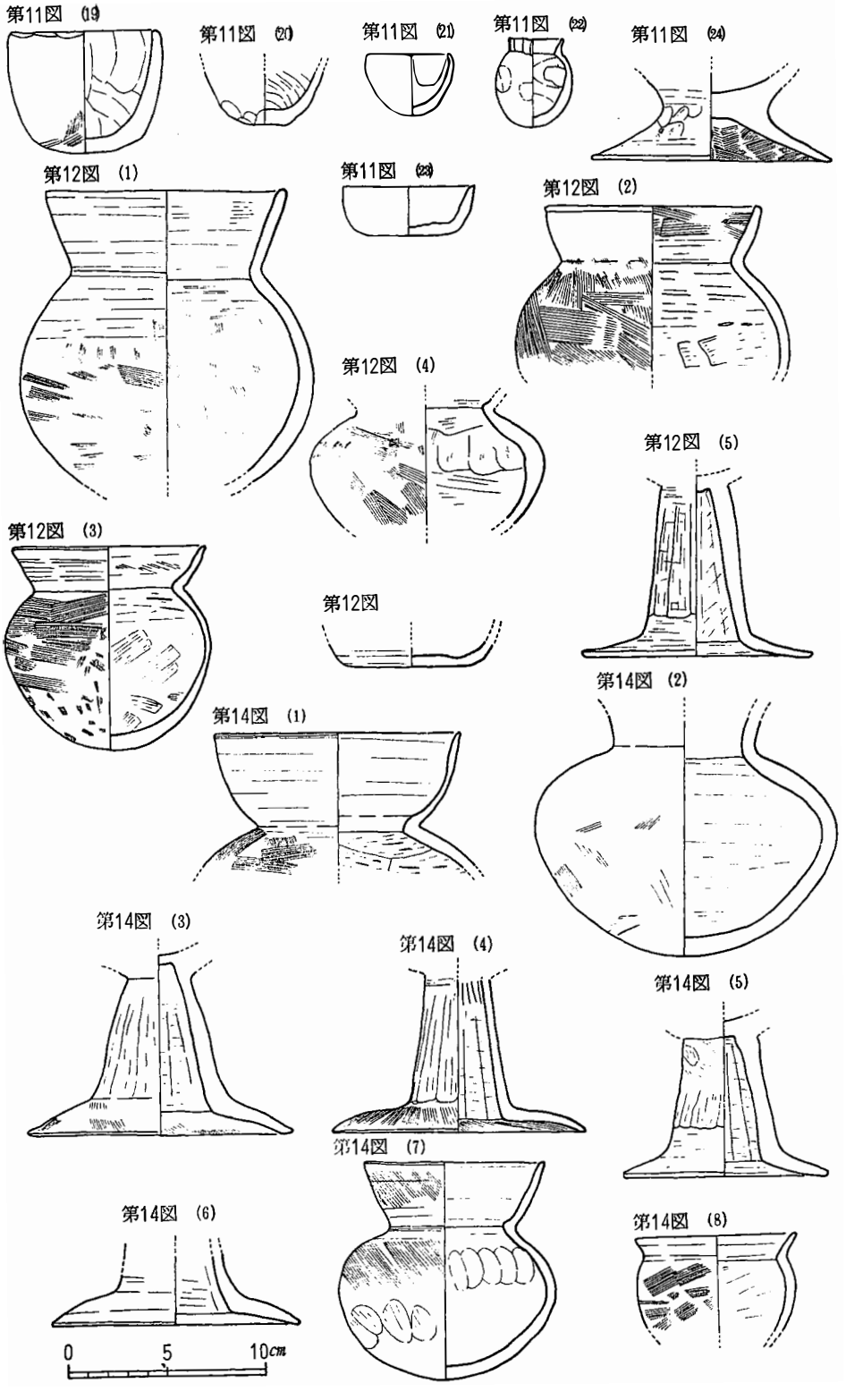
第9図 (1)

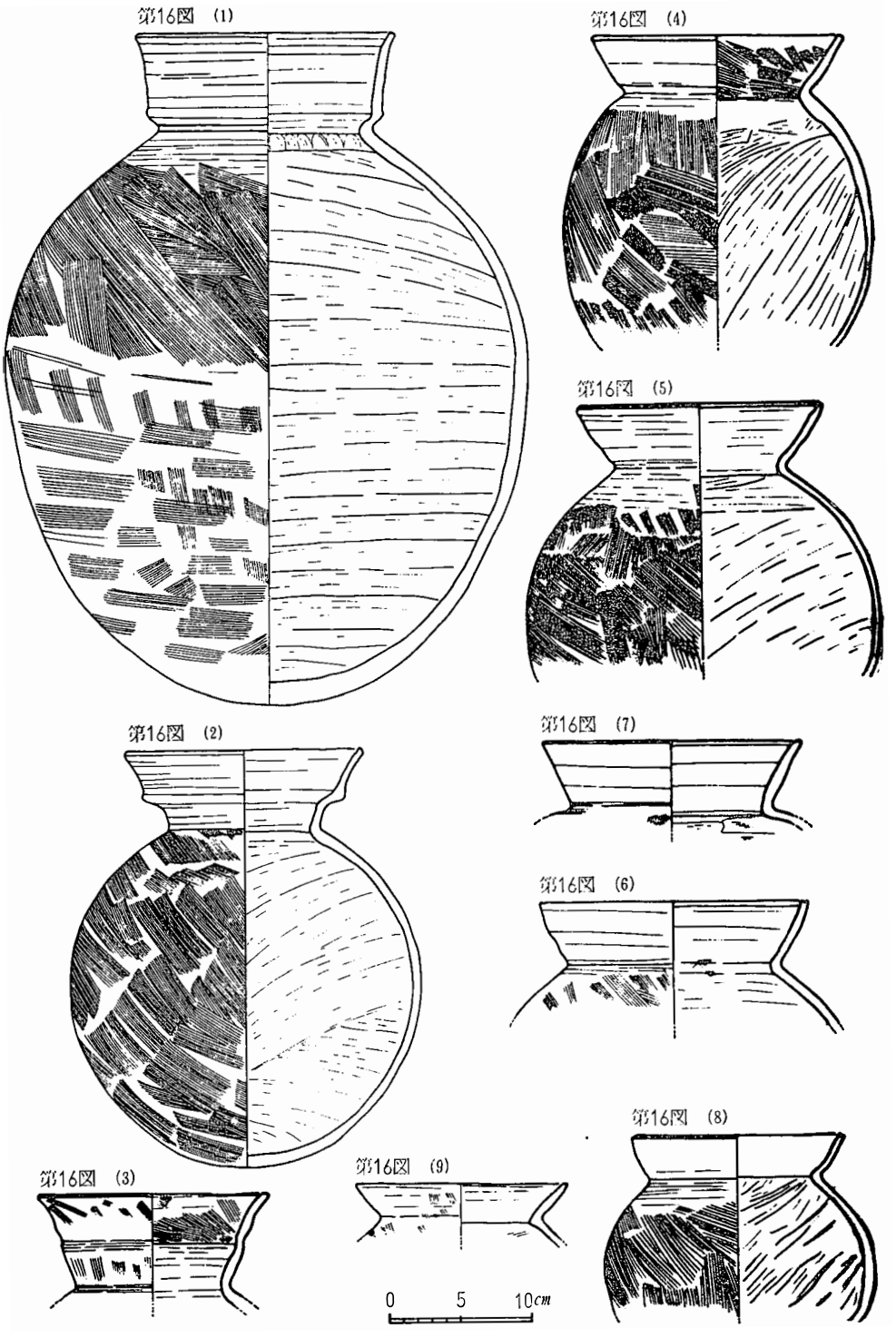


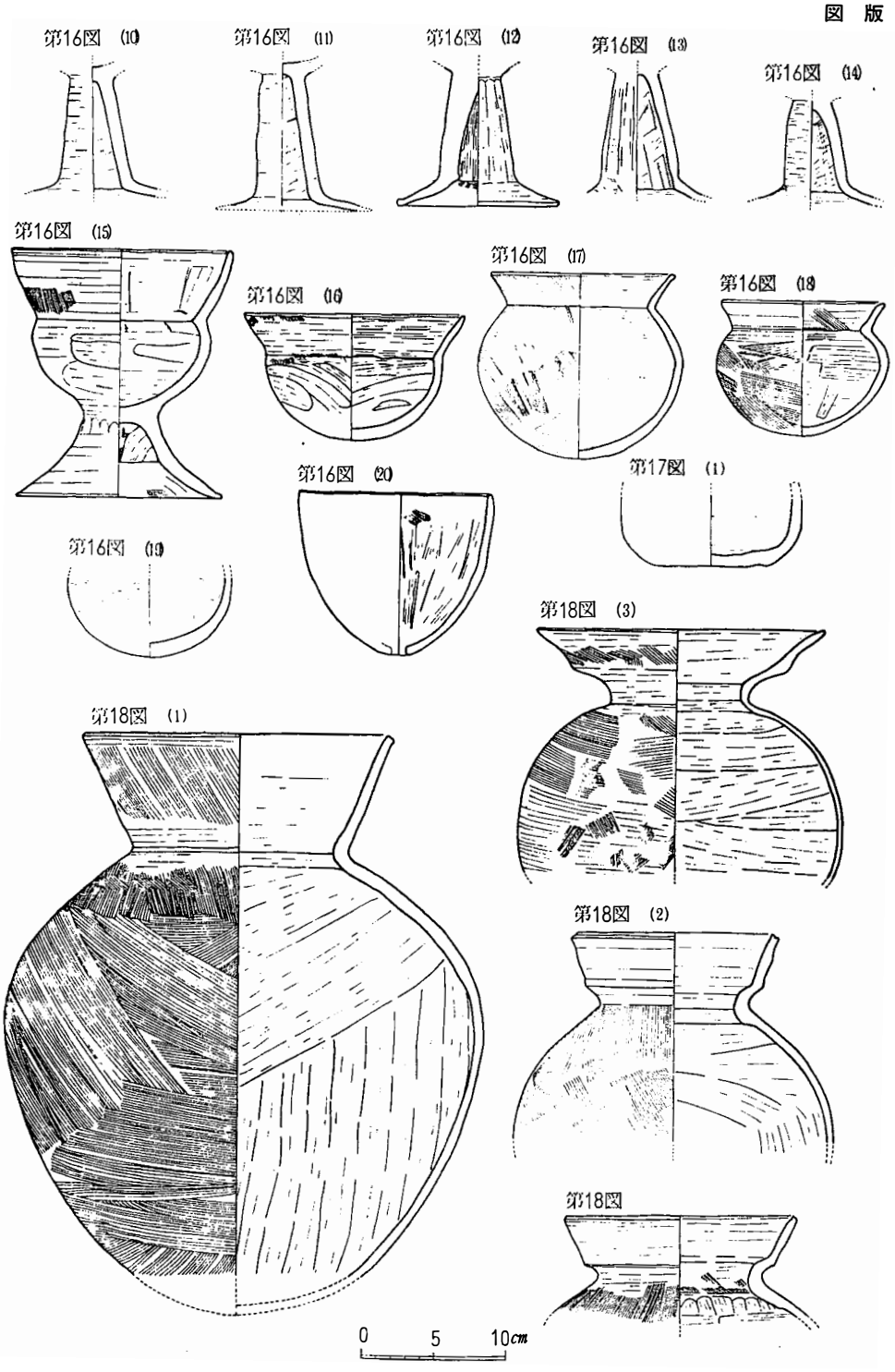
0 5 10cm

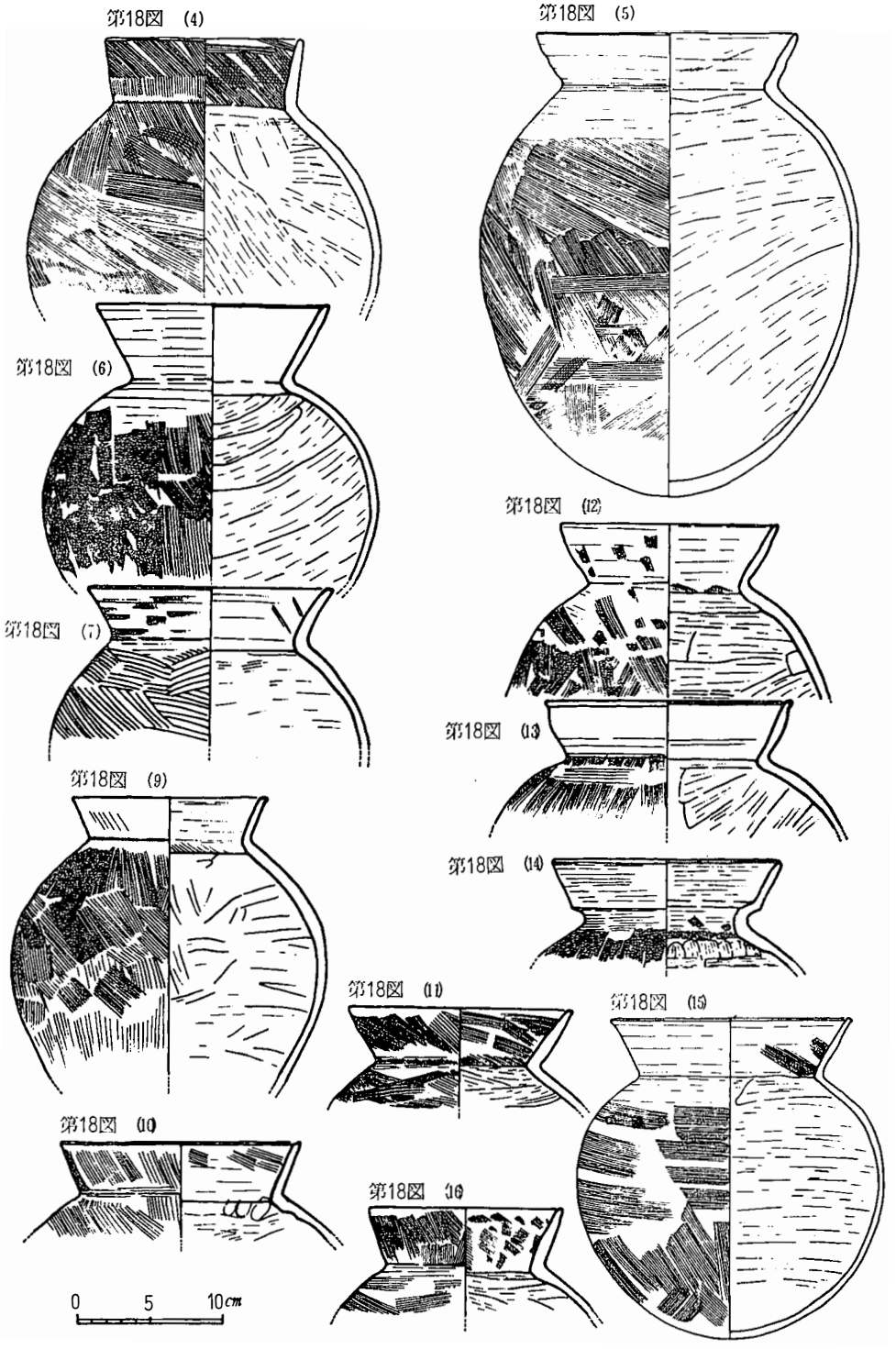

第９図 (2)
第９図 (3)
第11図 (1)
第９図 (4)
0
5
10cm
第９図 (5)
第11図 (2)
第９図 (7)
第９図 (6)
第９図 (8)

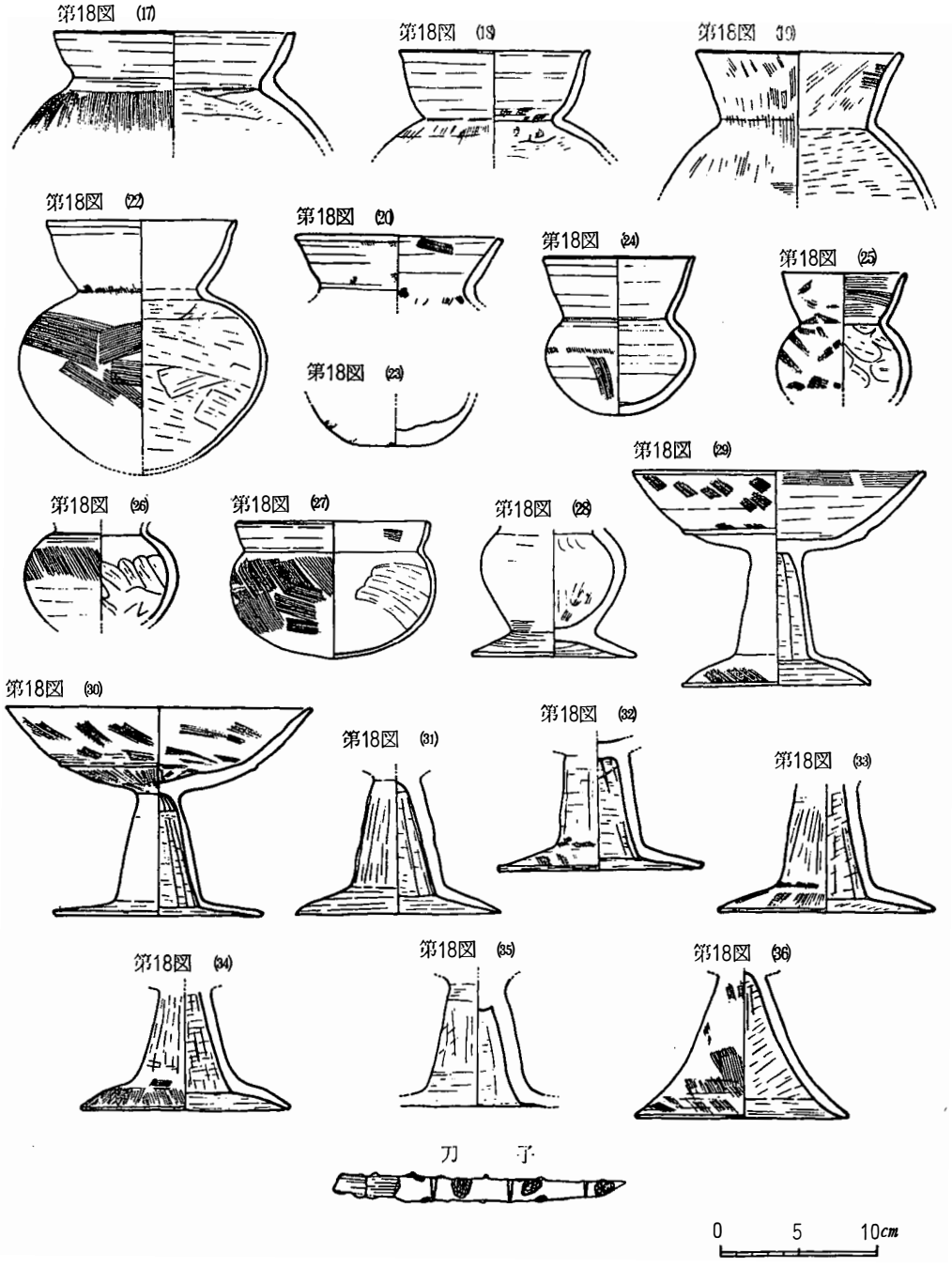

第11図 (3)
第11図 (4)
第11図 (6)
第11図 (8)
第11図 (5)
第11図 (7)
第11図 (9)
第11図 (10)
第11図 (11)
第11図 (12)
第11図 (13)
第11図 (14)
第11図 (15)
第11図 (16)
第11図 (17)
第11図 (18)
0
5
10cm

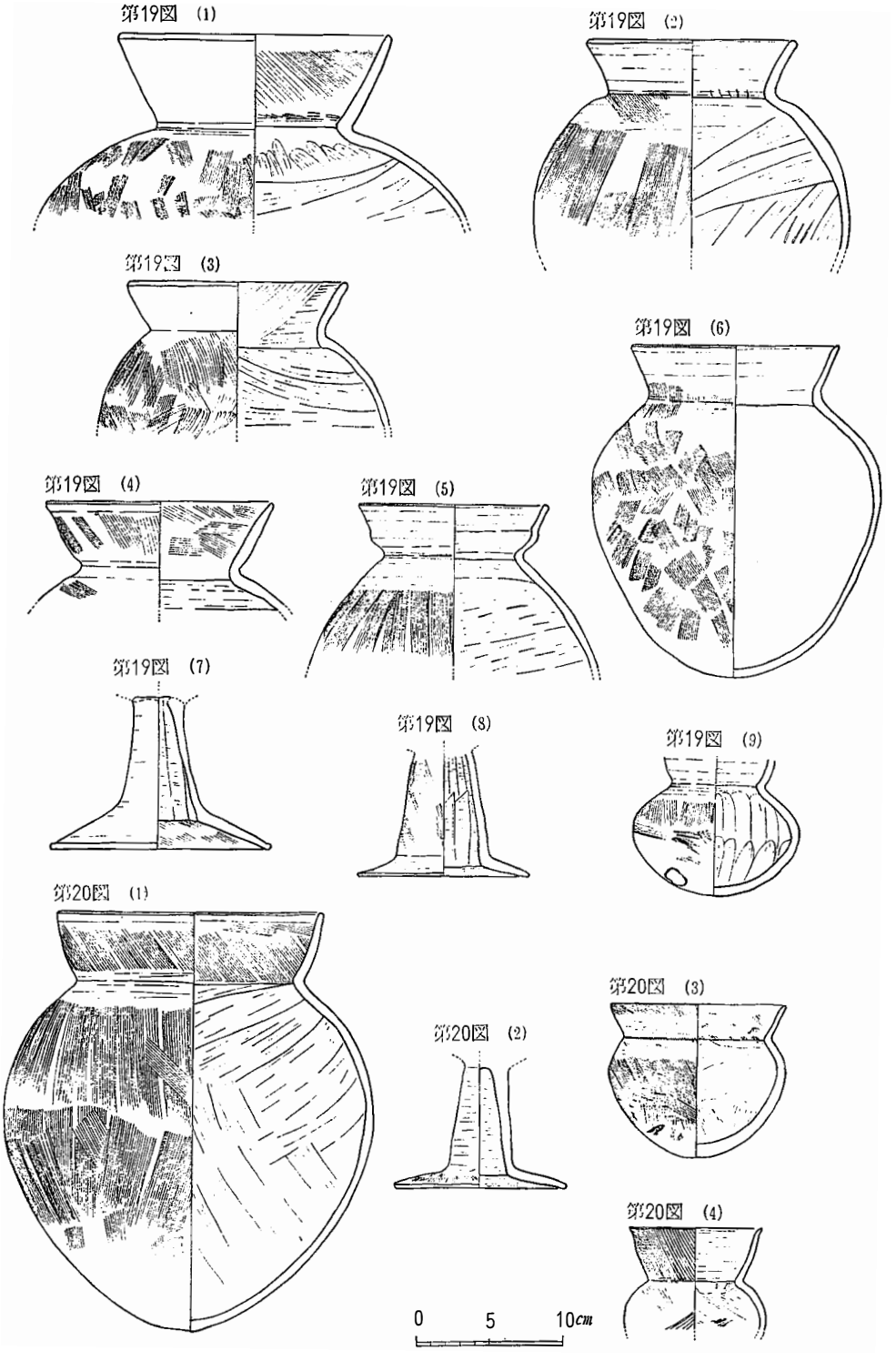

第11図 (19)
第11図 (20)
第11図 (21)
第11図 (22)
第11図 (24)
第11図 (23)
第12図 (1)
第12図 (2)
第12図 (4)
第12図 (5)
第12図 (3)
第12図
第14図 (2)
第14図 (1)
第14図 (3)
第14図 (4)
第14図 (5)
第14図 (7)
第14図 (6)
第14図 (8)
0 5 10cm

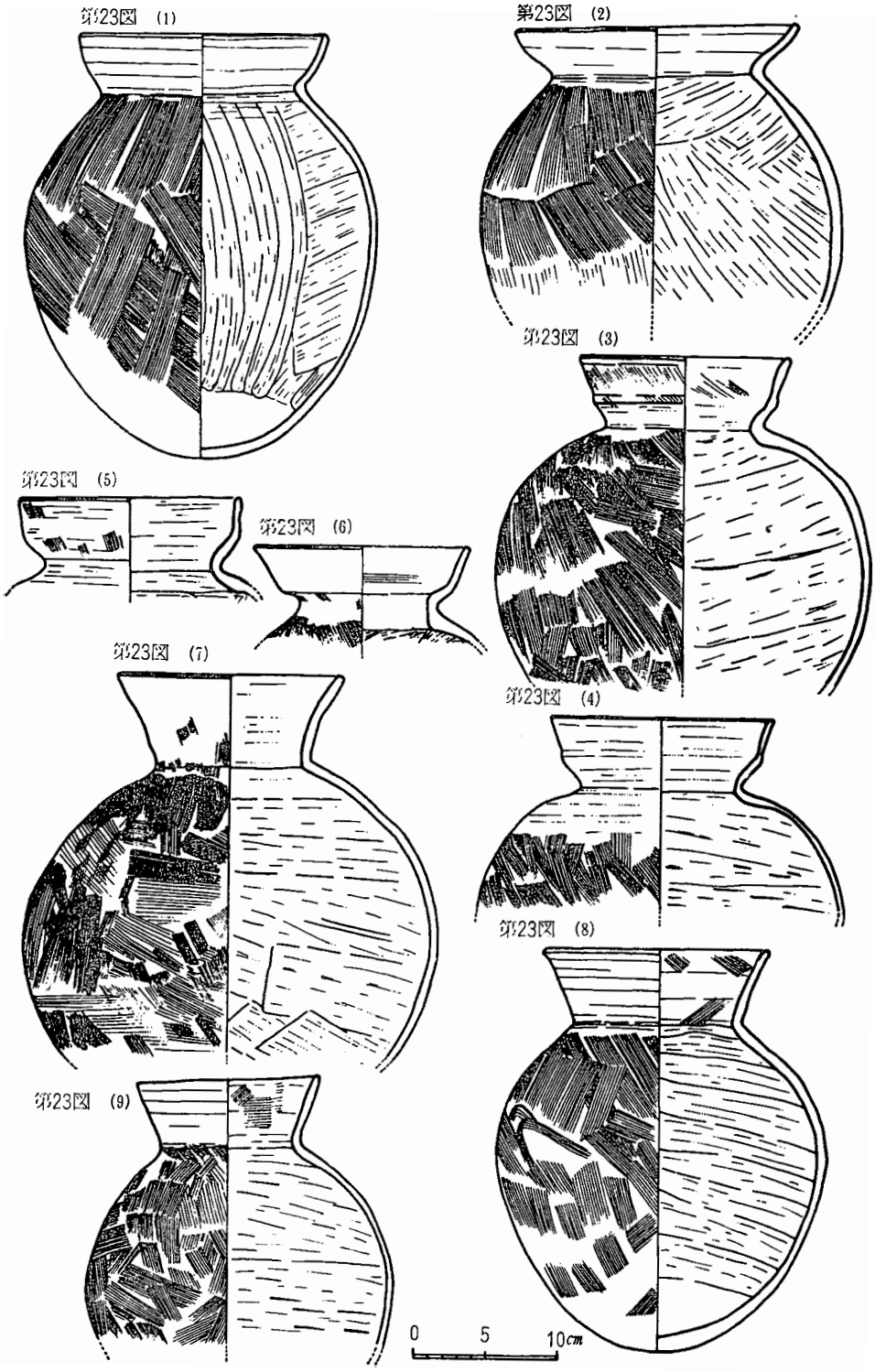

第16図 (1)
第16図 (4)
第16図 (5)
第16図 (2)
第16図 (7)
第16図 (6)
第16図 (8)
第16図 (3)
第16図 (9)
0 5 10cm

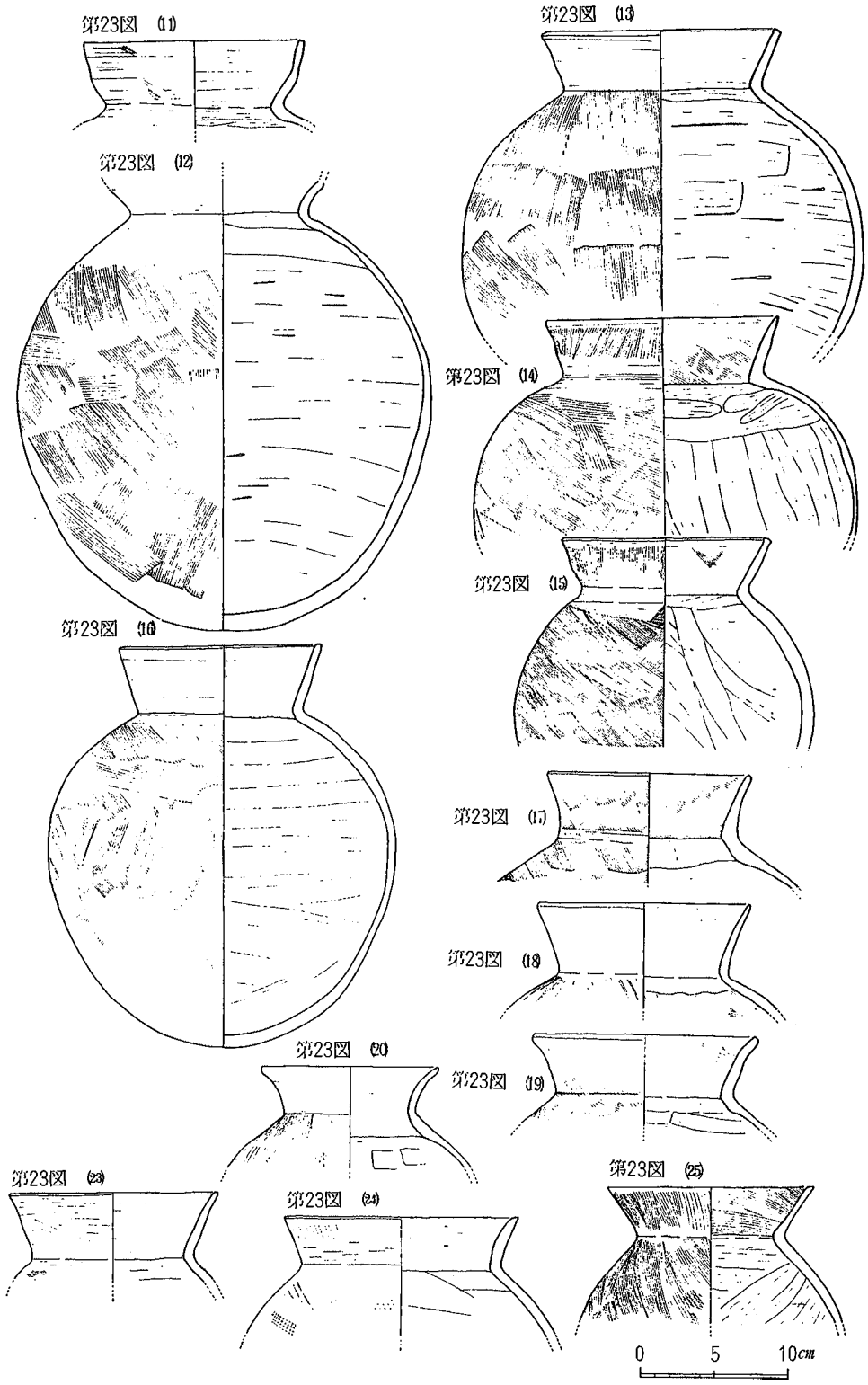

第16図 (10)
第16図 (11)
第16図 (12)
第16図 (13)
第16図 (14)
第16図 (15)
第16図 (16)
第16図 (17)
第16図 (18)
第16図 (19)
第16図 (20)
第17図 (1)
第18図 (1)
第18図 (2)
第18図 (3)
第18図
0 5 10cm

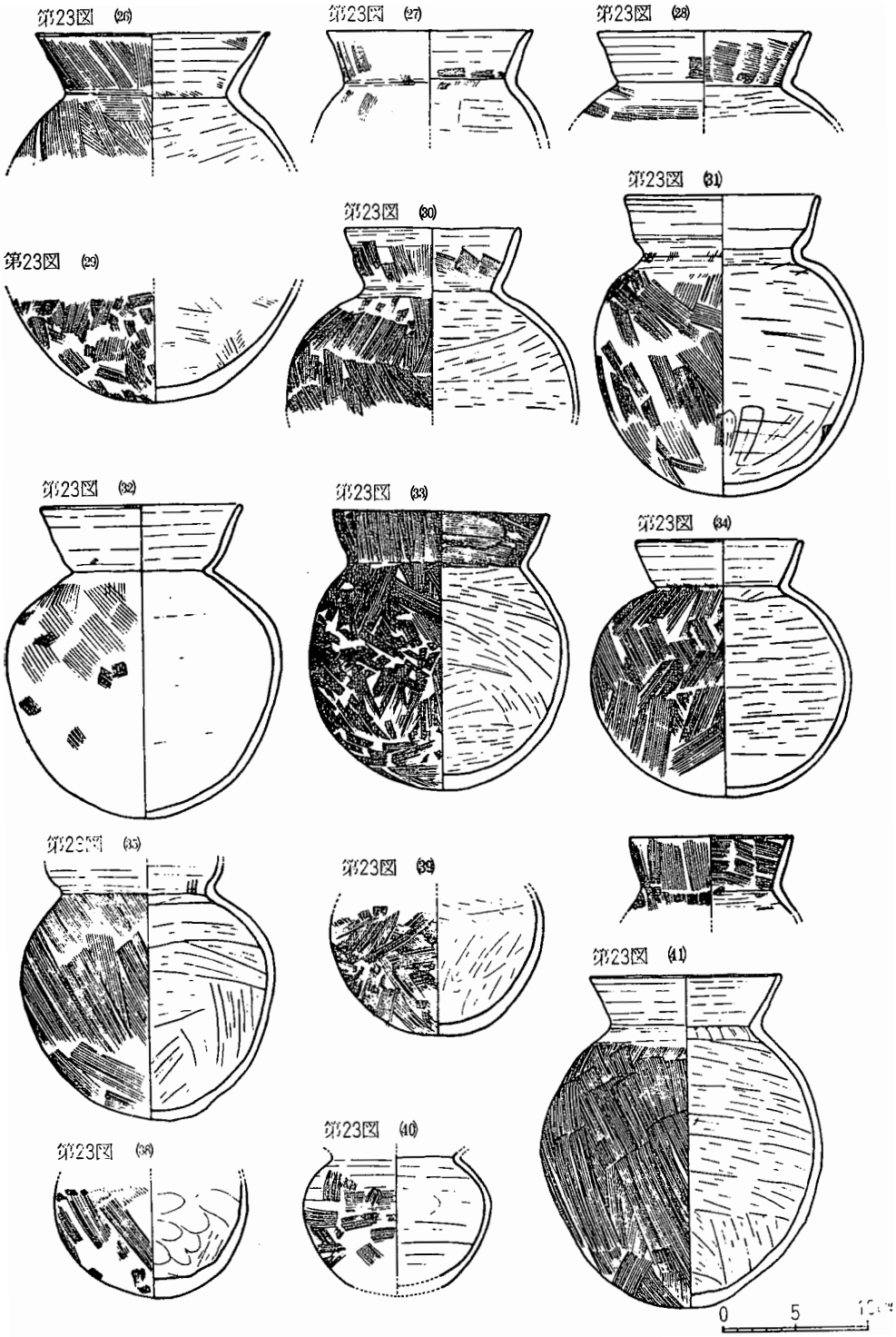

第18図 (4)
第18図 (5)
第18図 (6)
第18図 (7)
第18図 (12)
第18図 (13)
第18図 (14)
第18図 (9)
第18図 (11)
第18図 (15)
第18図 (10)
第18図 (16)
0 5 10cm

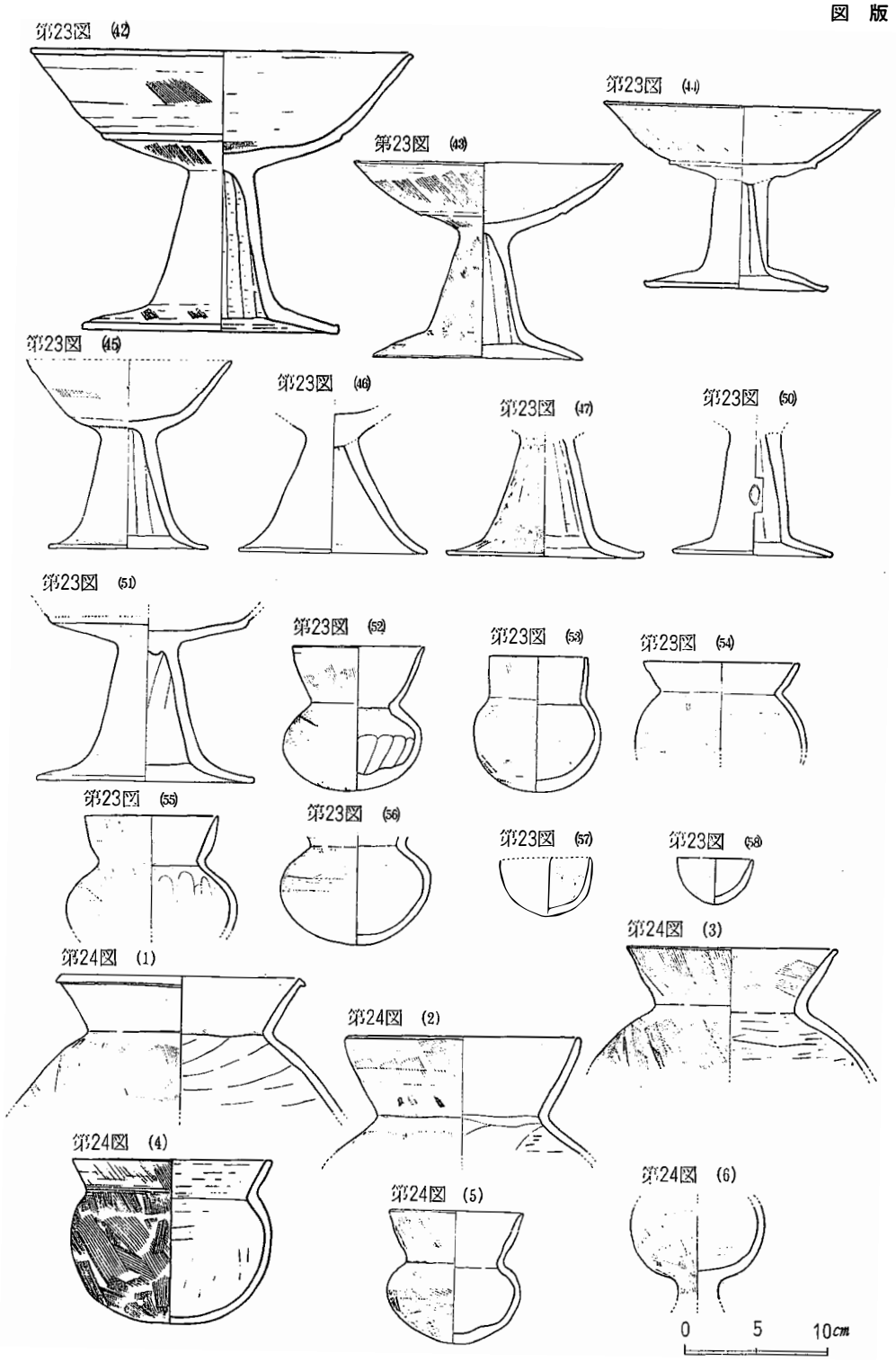

第18図 (17)
第18図 (18)
第18図 (19)
第18図 (22)
第18図 (20)
第18図 (24)
第18図 (25)
第18図 (23)
第18図 (29)
第18図 (26)
第18図 (27)
第18図 (28)
第18図 (30)
第18図 (31)
第18図 (32)
第18図 (33)
第18図 (34)
第18図 (35)
第18図 (36)
刀 子
0 5 10cm

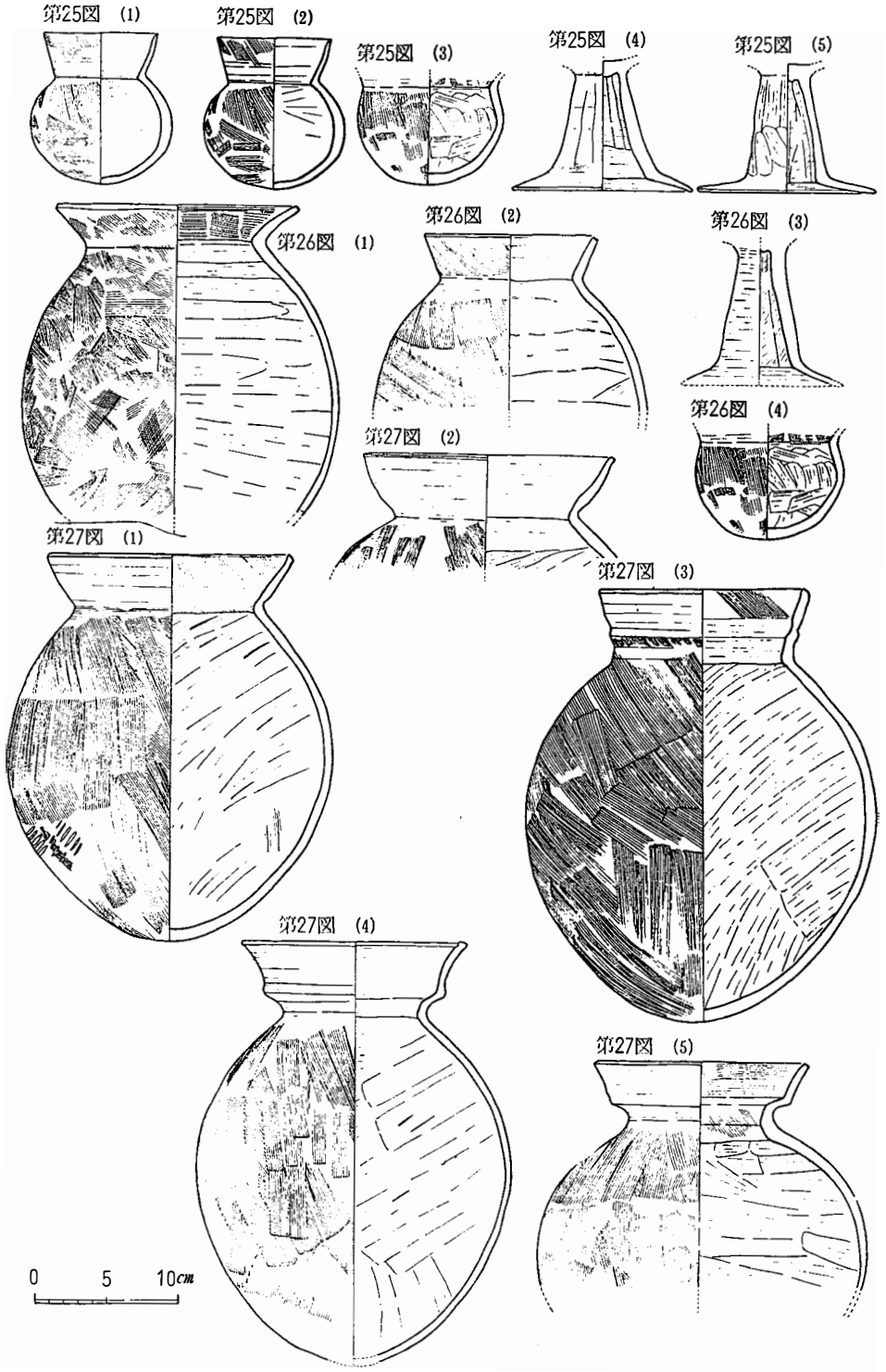

第19図 (1)
第19図 (2)
第19図 (3)
第19図 (6)
第19図 (4)
第19図 (5)
第19図 (7)
第19図 (8)
第19図 (9)
第20図 (1)
第20図 (2)
第20図 (3)
第20図 (4)
0 5 10cm

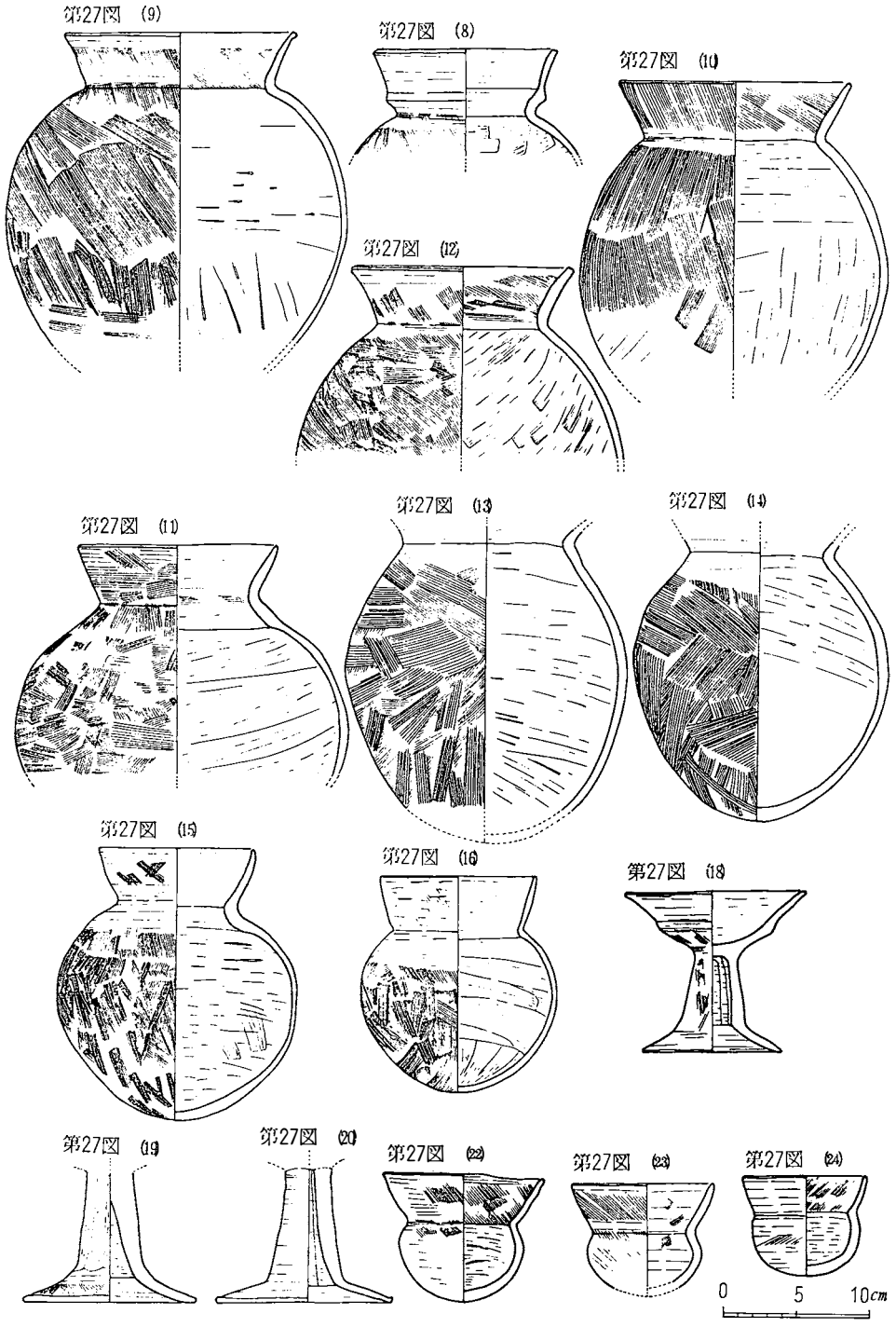

第23図 (1)
第23図 (2)
第23図 (3)
第23図 (4)
第23図 (5)
第23図 (6)
第23図 (7)
第23図 (8)
第23図 (9)
0 5 10cm


第23図 (11)
第23図 (12)
第23図 (13)
第23図 (14)
第23図 (15)
第23図 (16)
第23図 (17)
第23図 (18)
第23図 (19)
第23図 (20)
第23図 (23)
第23図 (24)
第23図 (25)
0
5
10cm


第23図 (26)
第23図 (27)
第23図 (28)
第23図 (29)
第23図 (30)
第23図 (31)
第23図 (32)
第23図 (33)
第23図 (34)
第23図 (35)
第23図 (36)
第23図 (39)
第23図 (40)
第23図 (41)
0
5

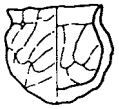

第23図 (42)
第23図 (43)
第23図 (44)
第23図 (45)
第23図 (46)
第23図 (47)
第23図 (50)
第23図 (51)
第23図 (52)
第23図 (53)
第23図 (54)
第23図 (55)
第23図 (56)
第23図 (57)
第23図 (58)
第24図 (1)
第24図 (2)
第24図 (3)
第24図 (4)
第24図 (5)
第24図 (6)
0 5 10cm


第25図 (1)
第25図 (2)
第25図 (3)
第25図 (4)
第25図 (5)
第26図 (1)
第26図 (2)
第26図 (3)
第26図 (4)
第27図 (1)
第27図 (2)
第27図 (3)
第27図 (4)
第27図 (5)
0 5 10cm


第27図 (9)
第27図 (8)
第27図 (10)
第27図 (12)
第27図 (11)
第27図 (13)
第27図 (14)
第27図 (15)
第27図 (16)
第27図 (18)
第27図 (19)
第27図 (20)
第27図 (22)
第27図 (23)
第27図 (24)
0
5
10cm

第27図 (25)

第27図 (26)

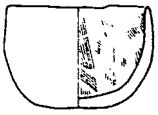


第27図 (27)

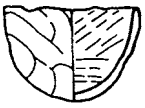
第27図 (28)

第27図 (29)

第27図 (30)



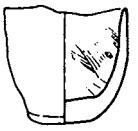
第27図 (31)



第27図 (32)

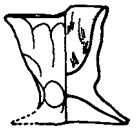
第27図 (33)

第27図 (34)

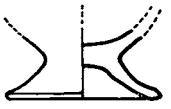


第27図 (35)

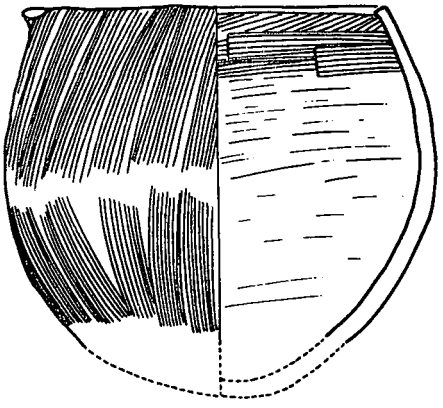
第27図 (36)



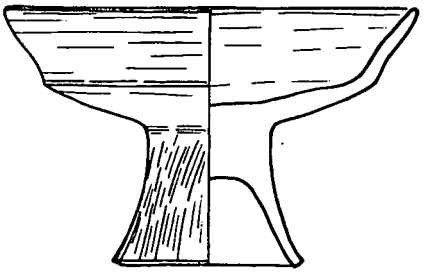
第27図 (37)



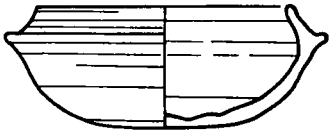
第28図 (1)



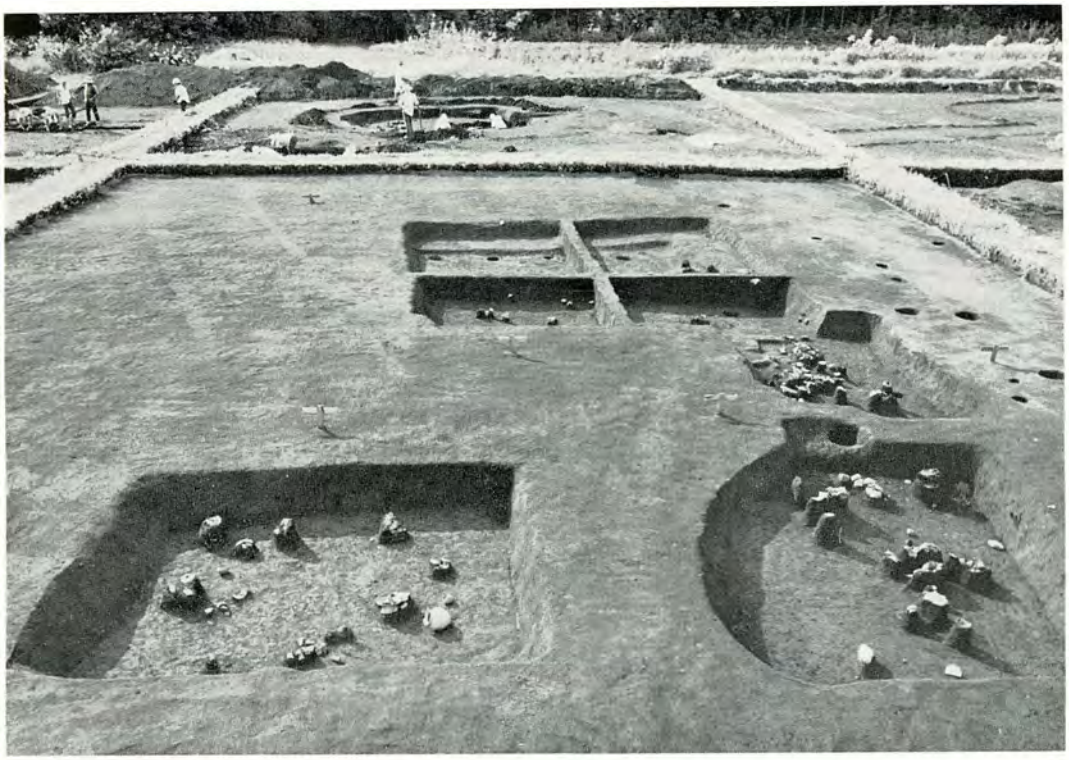
第28図 (2)



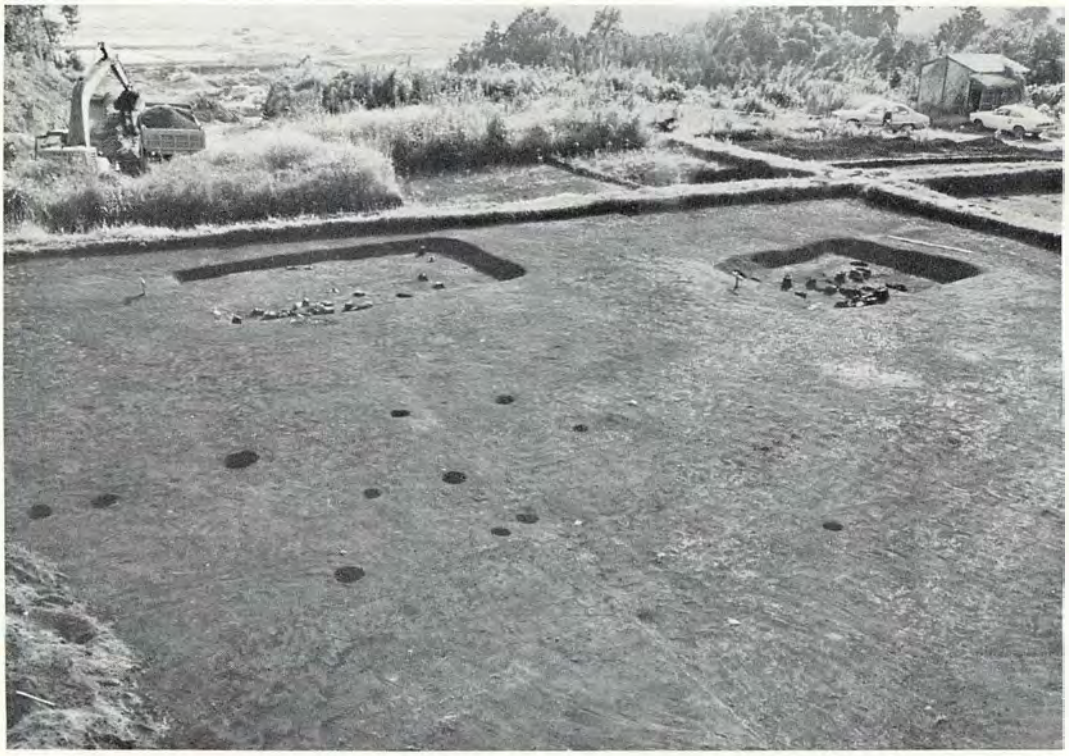
第28図 (3)



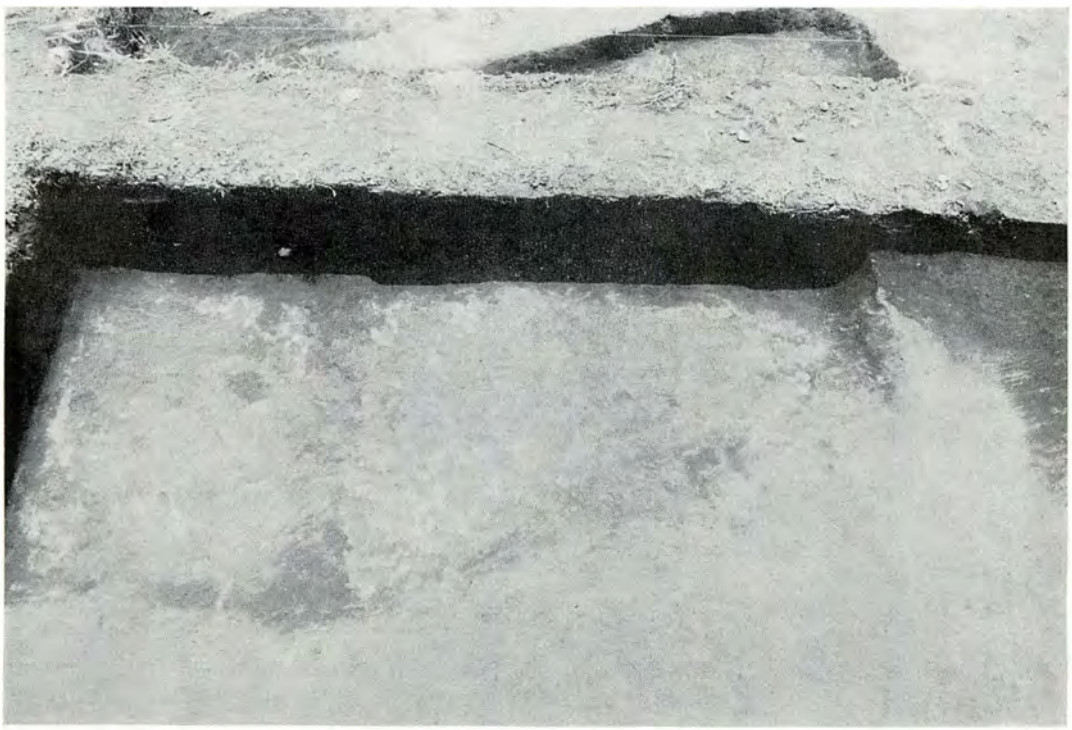
0 5 10cm



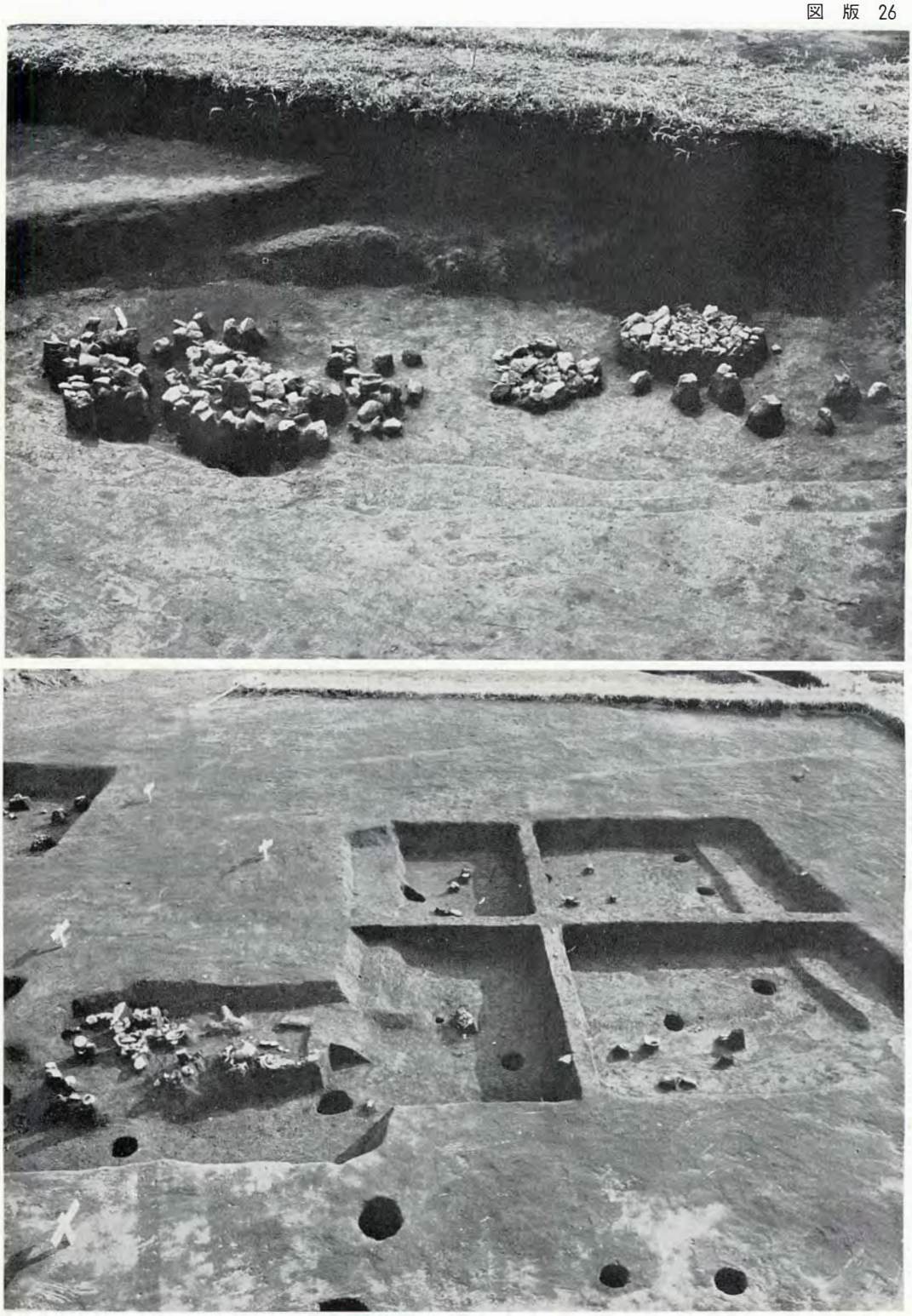
（上）調査風景　第19号、第20号、第６号、第５号、第９号居住址（手前から）
（下）遺物検出状況（第18号住居址）



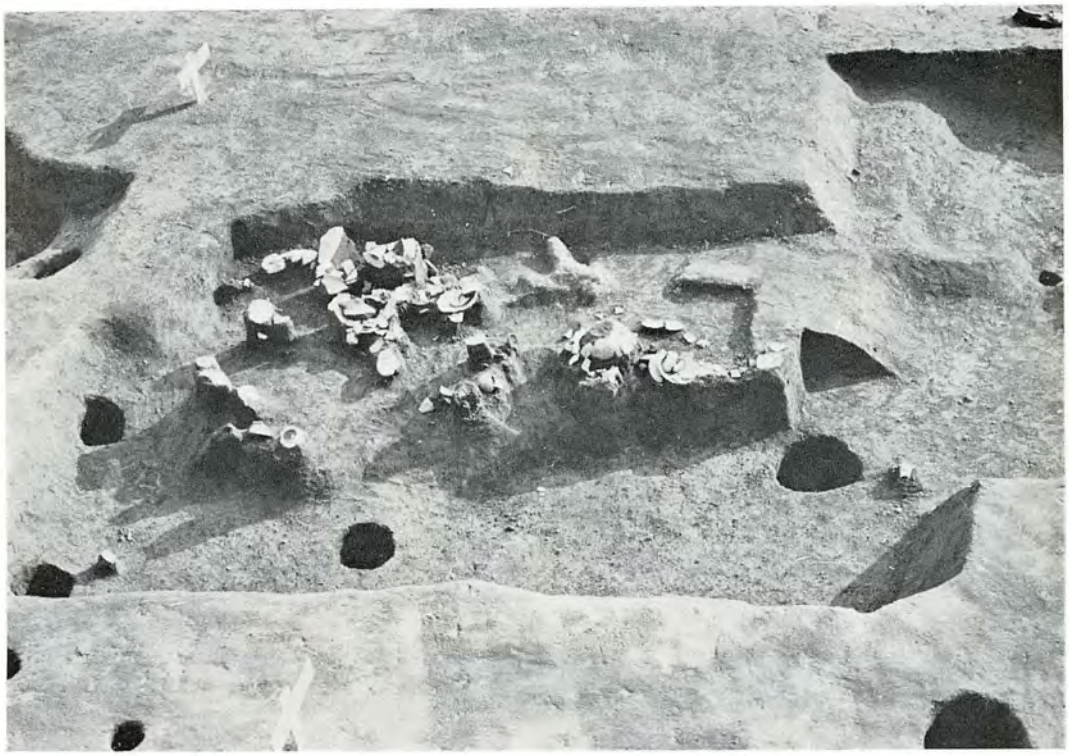
（上）第１、２号住居址とピット群（水田面と塚原台地を臨む）
（下）第１号住居址



（上）第２号住居址
（下）第３—Ｂ号遺構

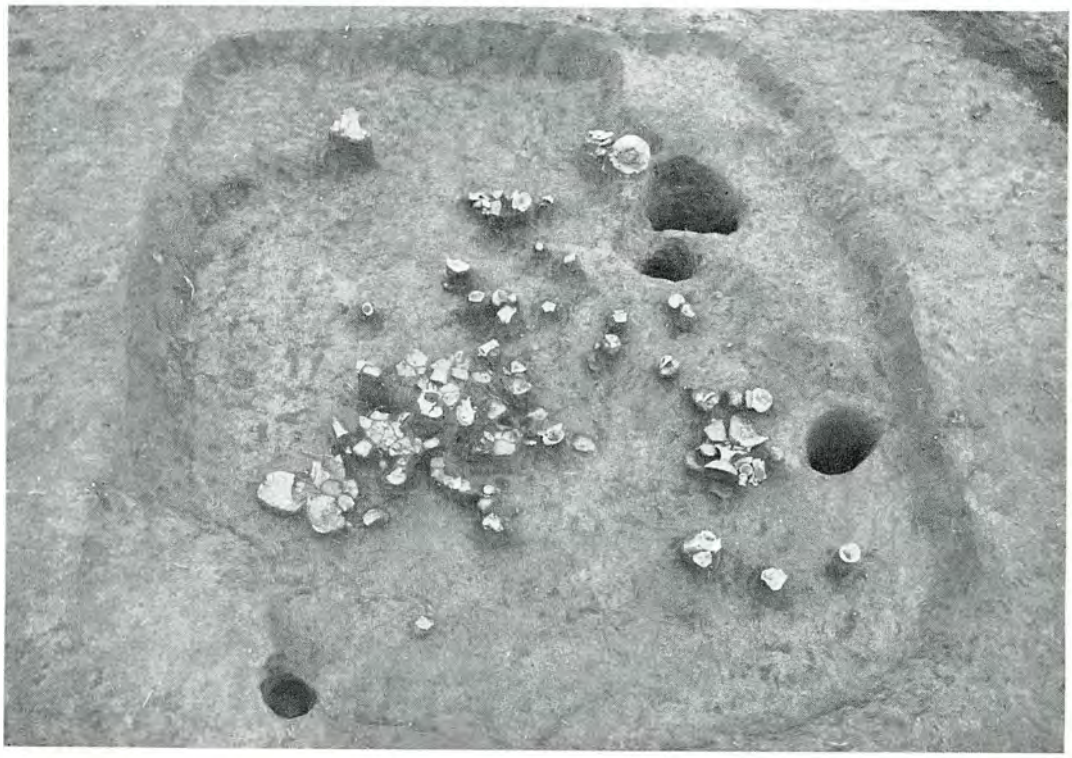


（上）第4号遺構
（下）第5．6号住居址



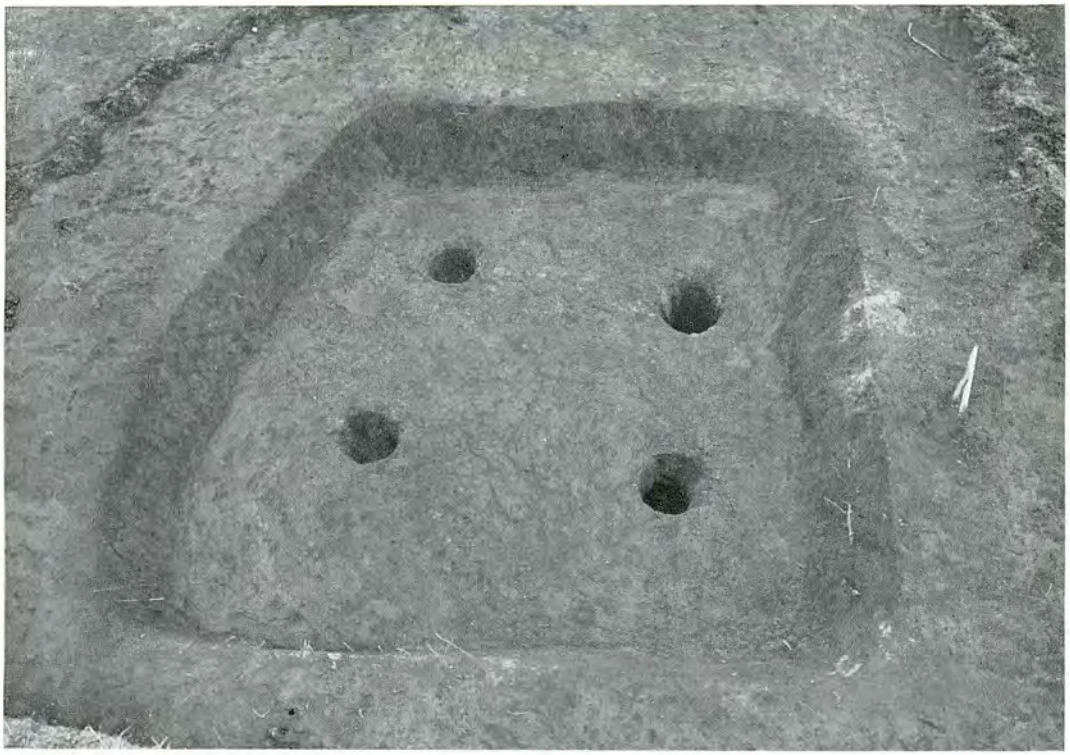
（上）第6号住居址
（下）第7号住居址

（上）第 8 号住居址
（下）第 9 号住居址



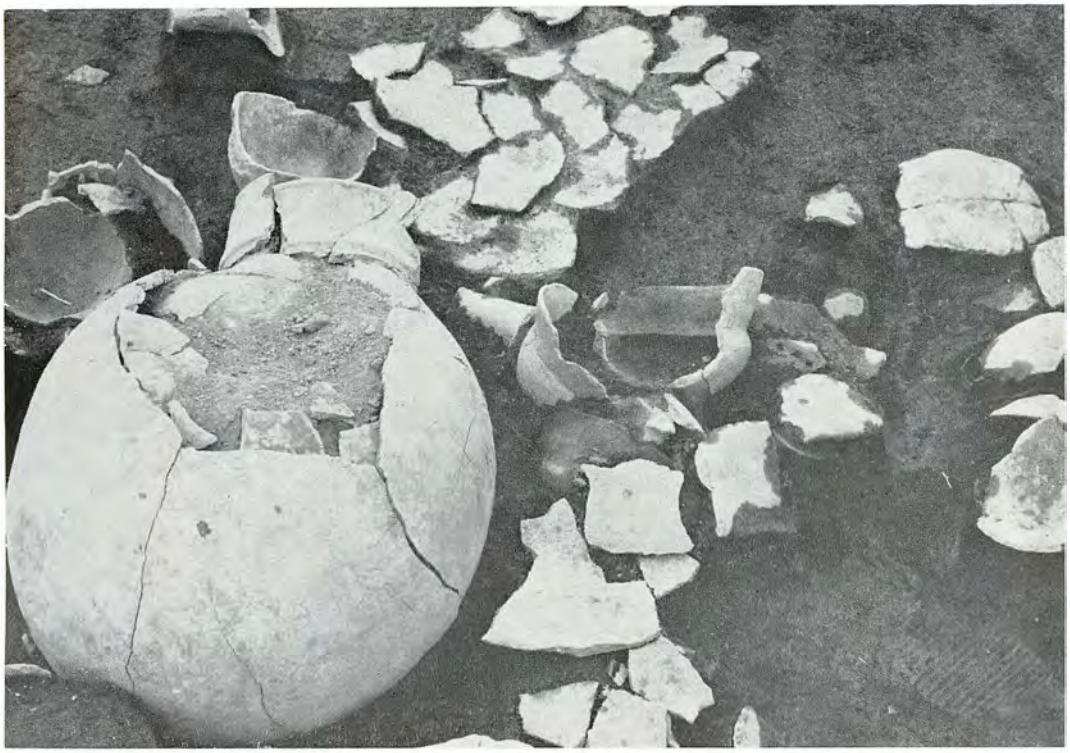
（上）第10号住居址
（下）第11号住居址

（上）第12号住居址
（下）第13号遺構



（上）第14号住居址
（下）第15号住居址

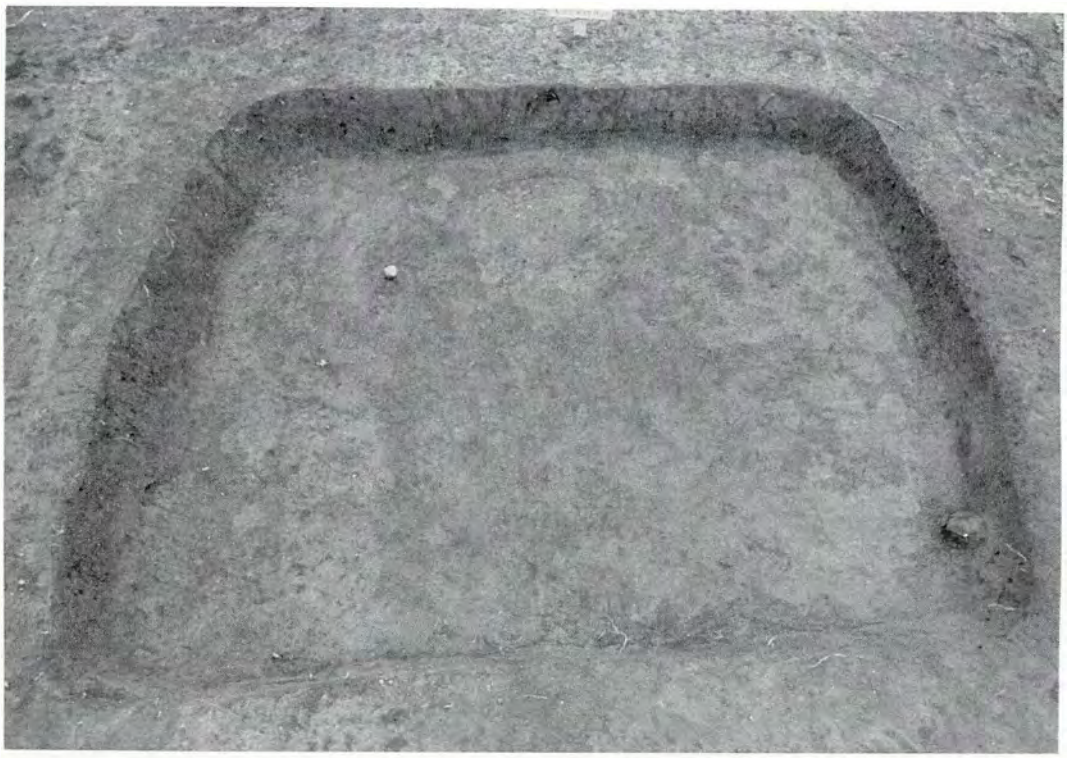
（上）第16号住居址を中心に（塚原台地を臨む）
（下）第16号住居址



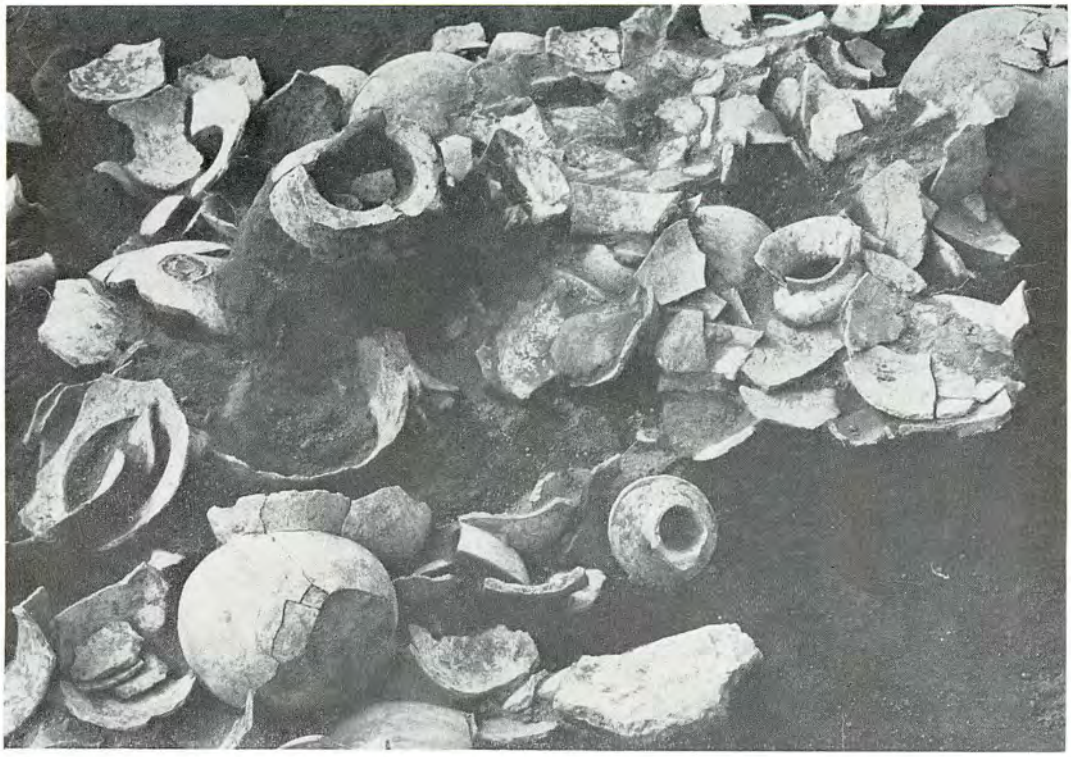
（上）第16号住居址（土器出土状況）
（下）第17号住居址

（上）第18号住居址
（下）第19号住居址

（上）第20号住居址
（下）第21号住居址

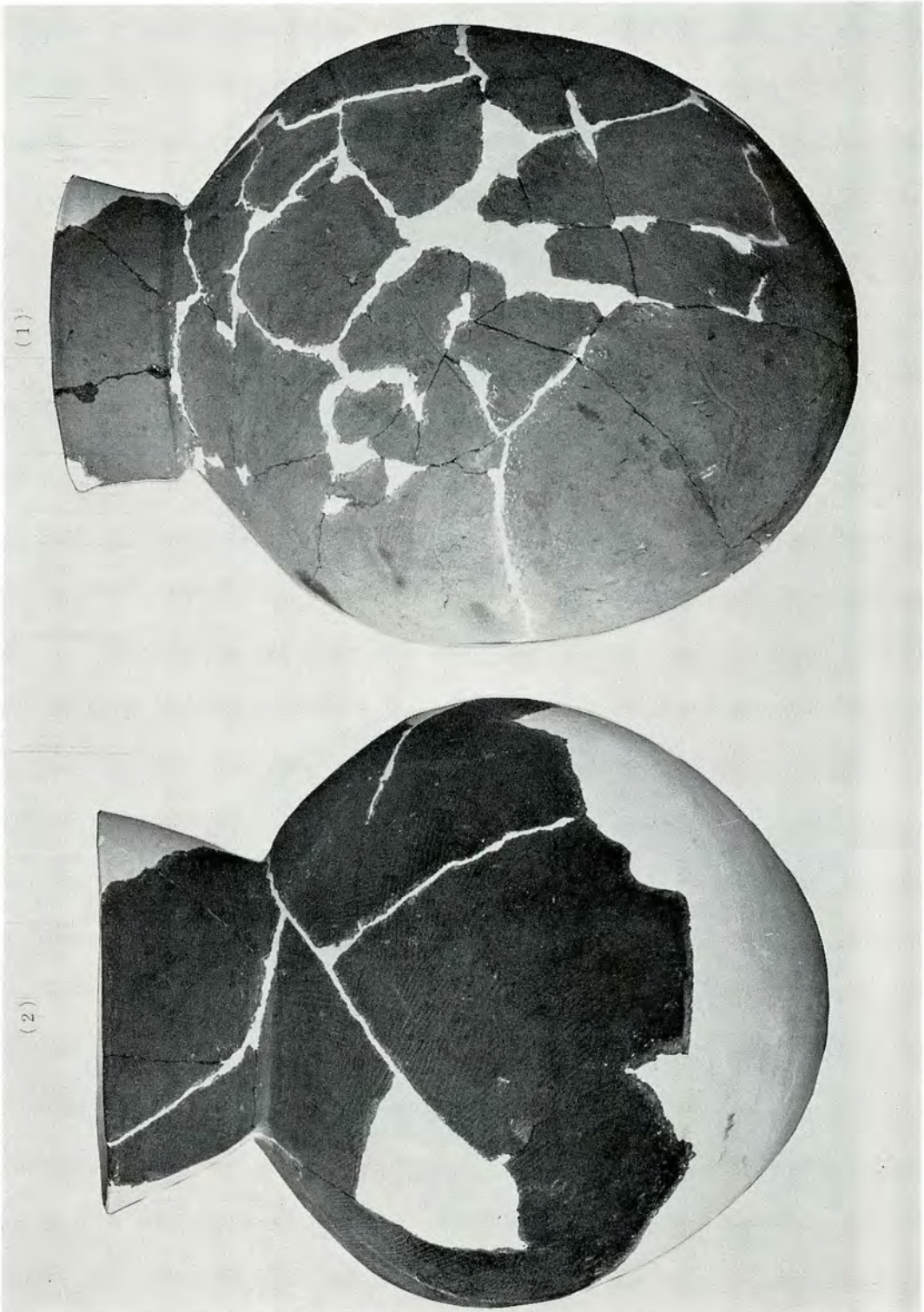


（上）第22号住居址
（下）第23号住居址



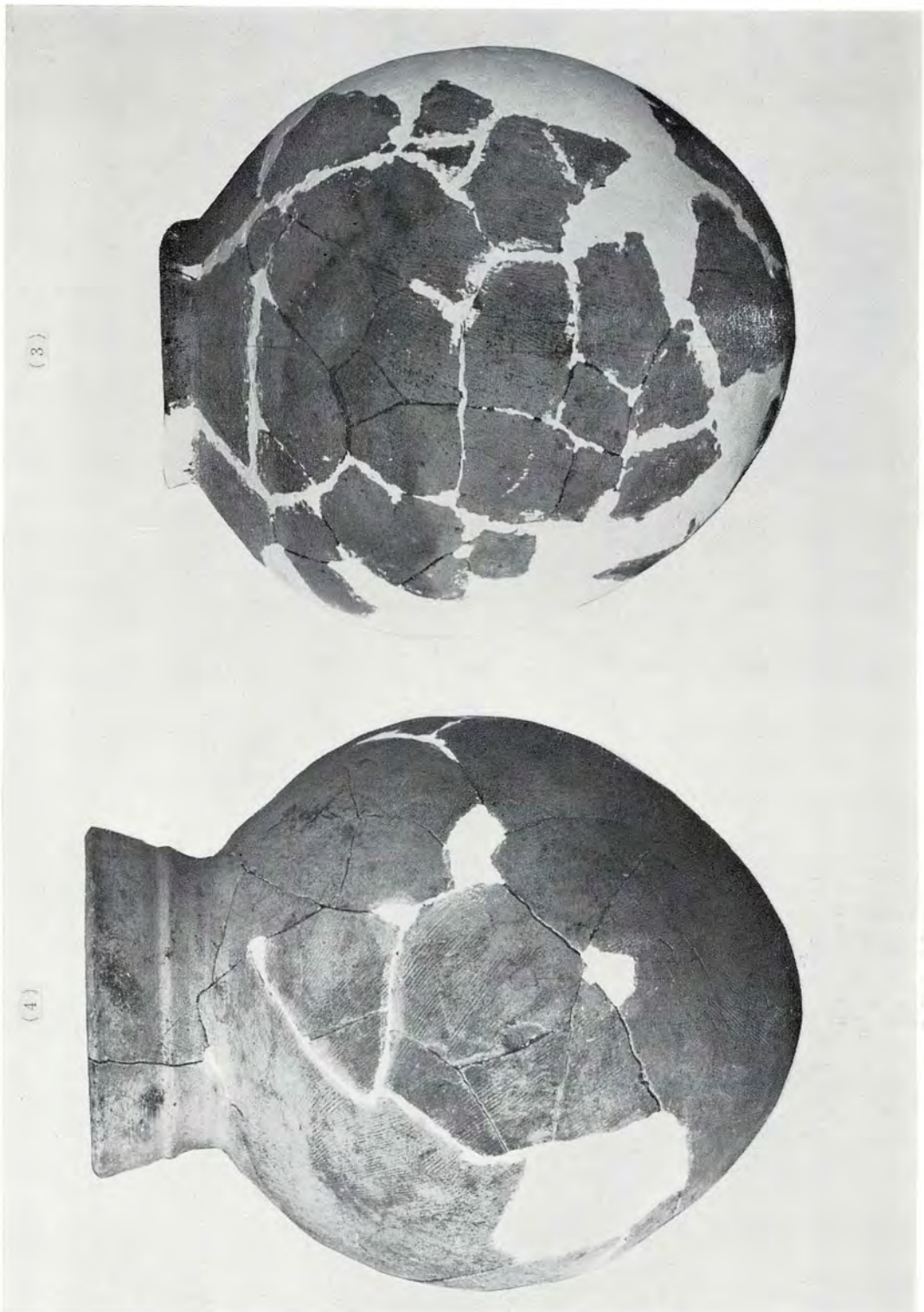
（上）第23号住居址（土器出土状況）
（下）第24号住居址

（上）第27号住居址
（下）第27号住居址



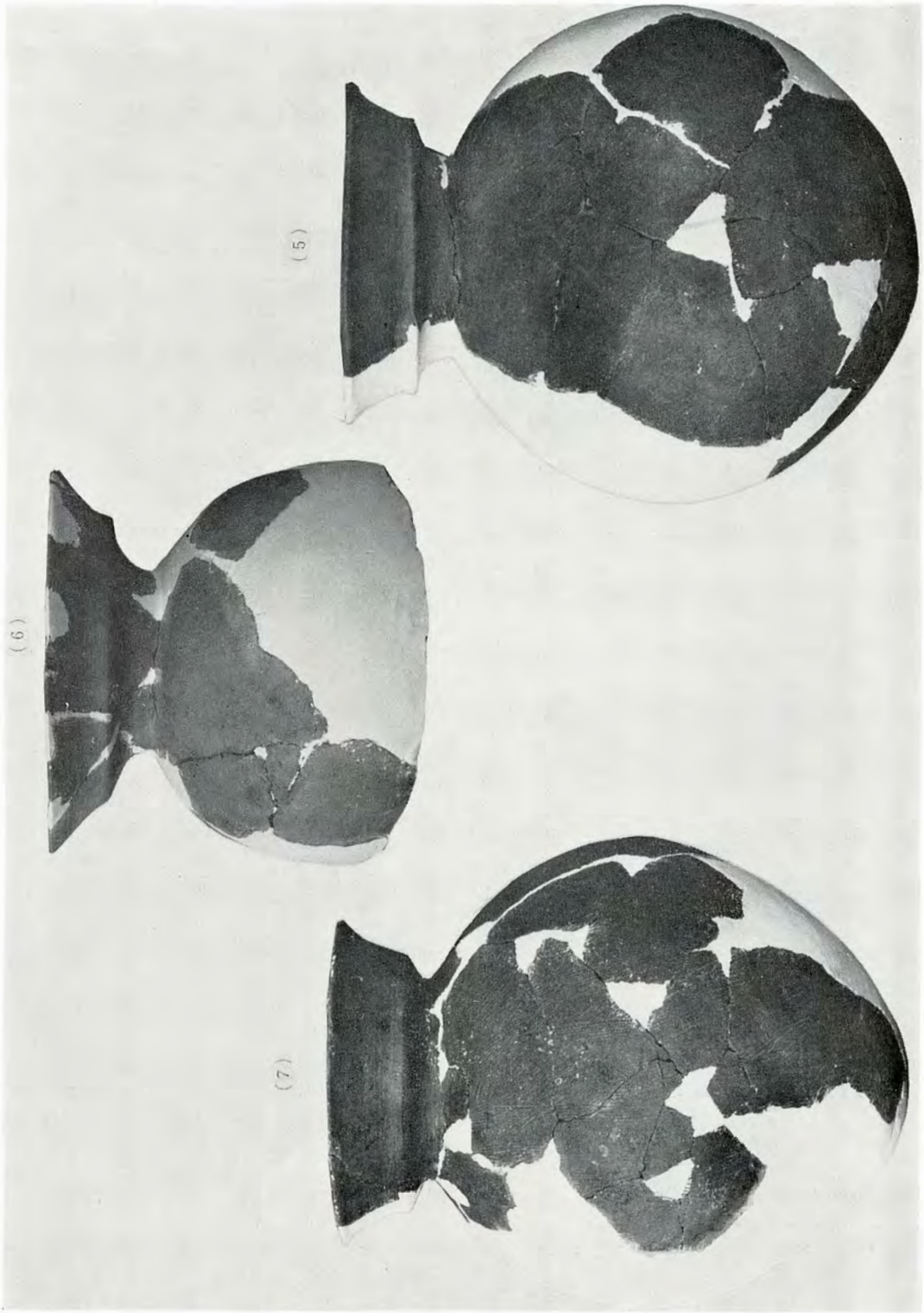
(1) 図版11．第16図(1)（第16号住居址出土）

(2) 図版12．第18図(1)（第18号住居址出土）

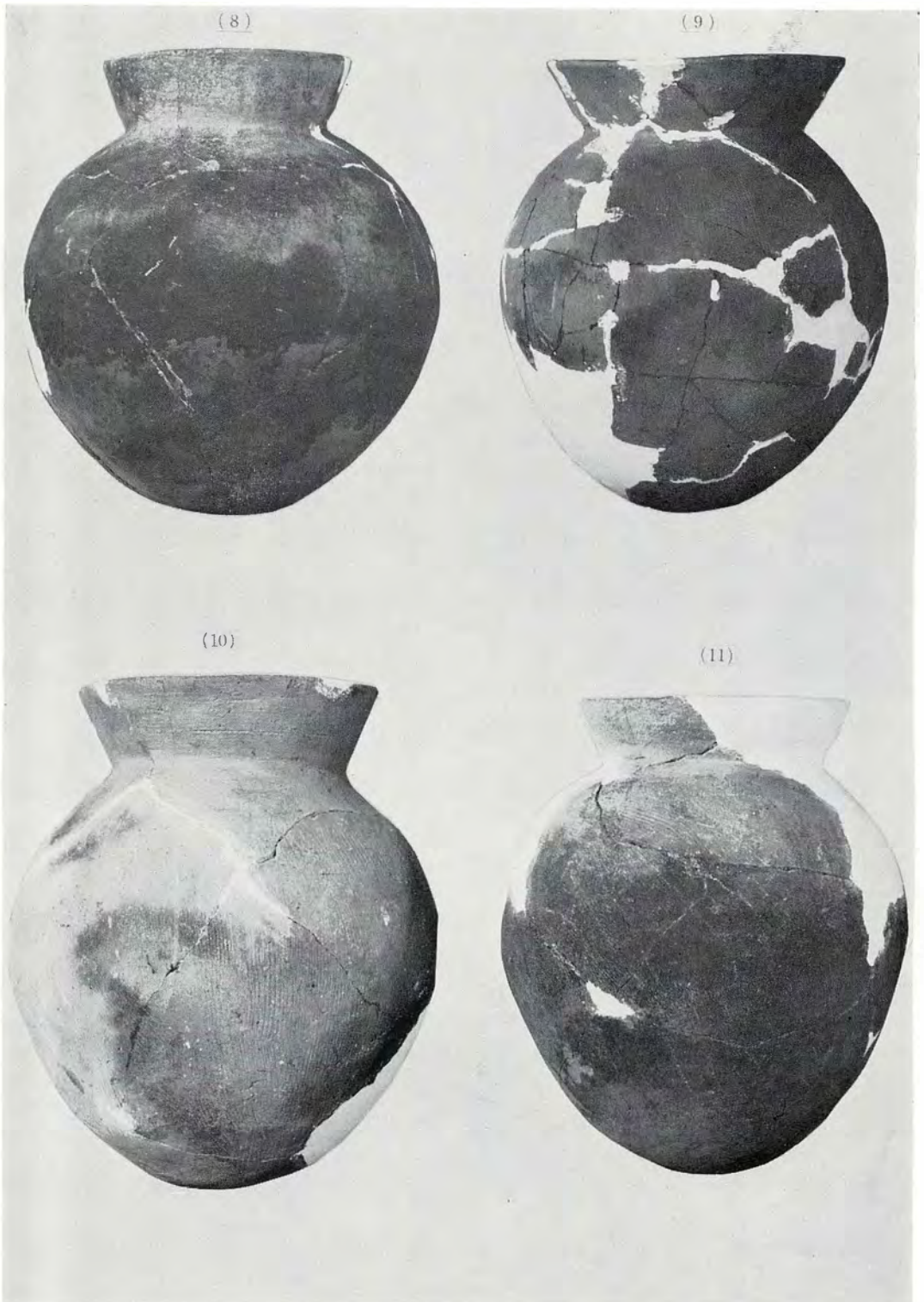


(3)　図版５、第７図(1)（第７号住居址出土）

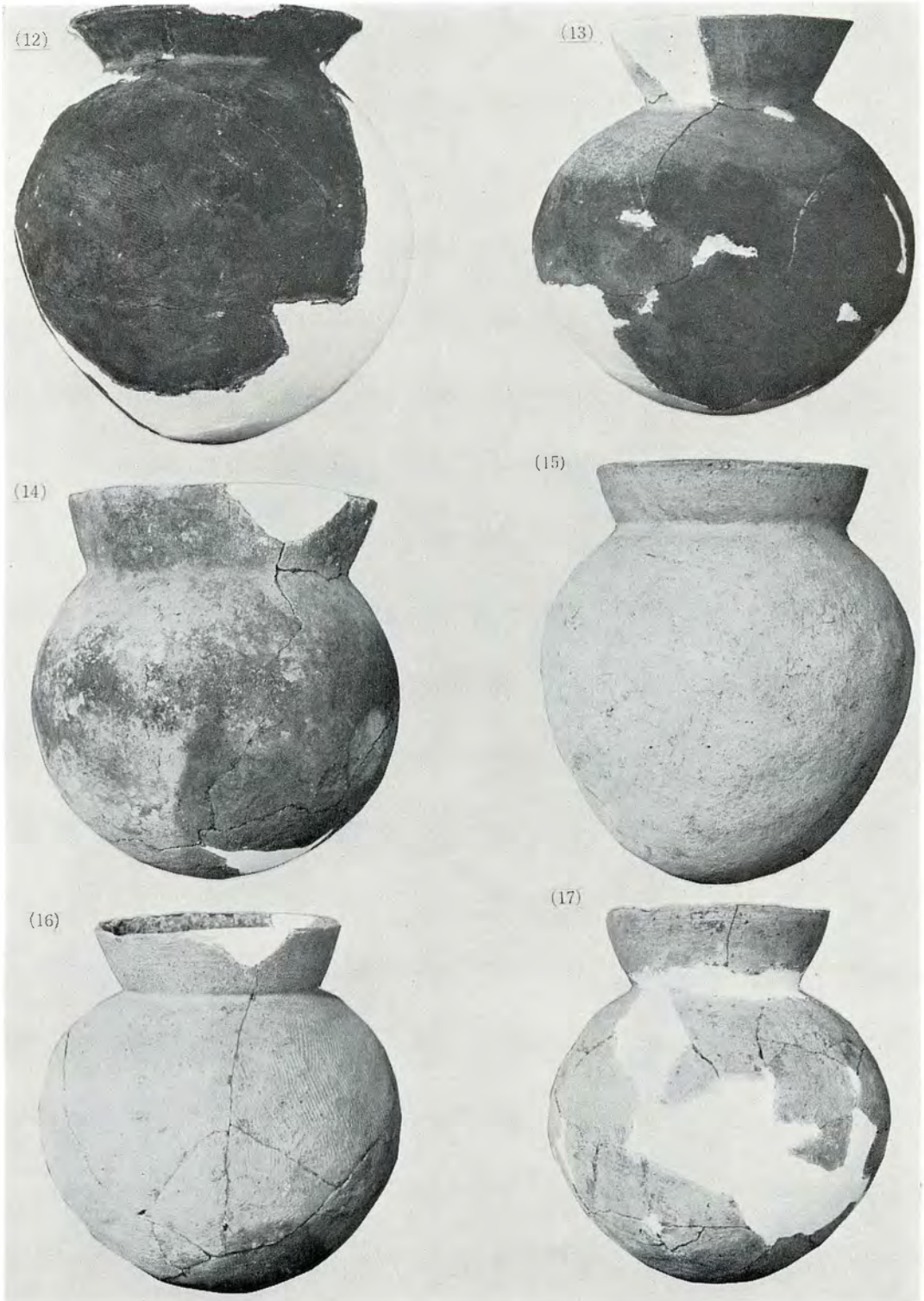
(4)　図版20、第27図(3)（第27号住居址出土）



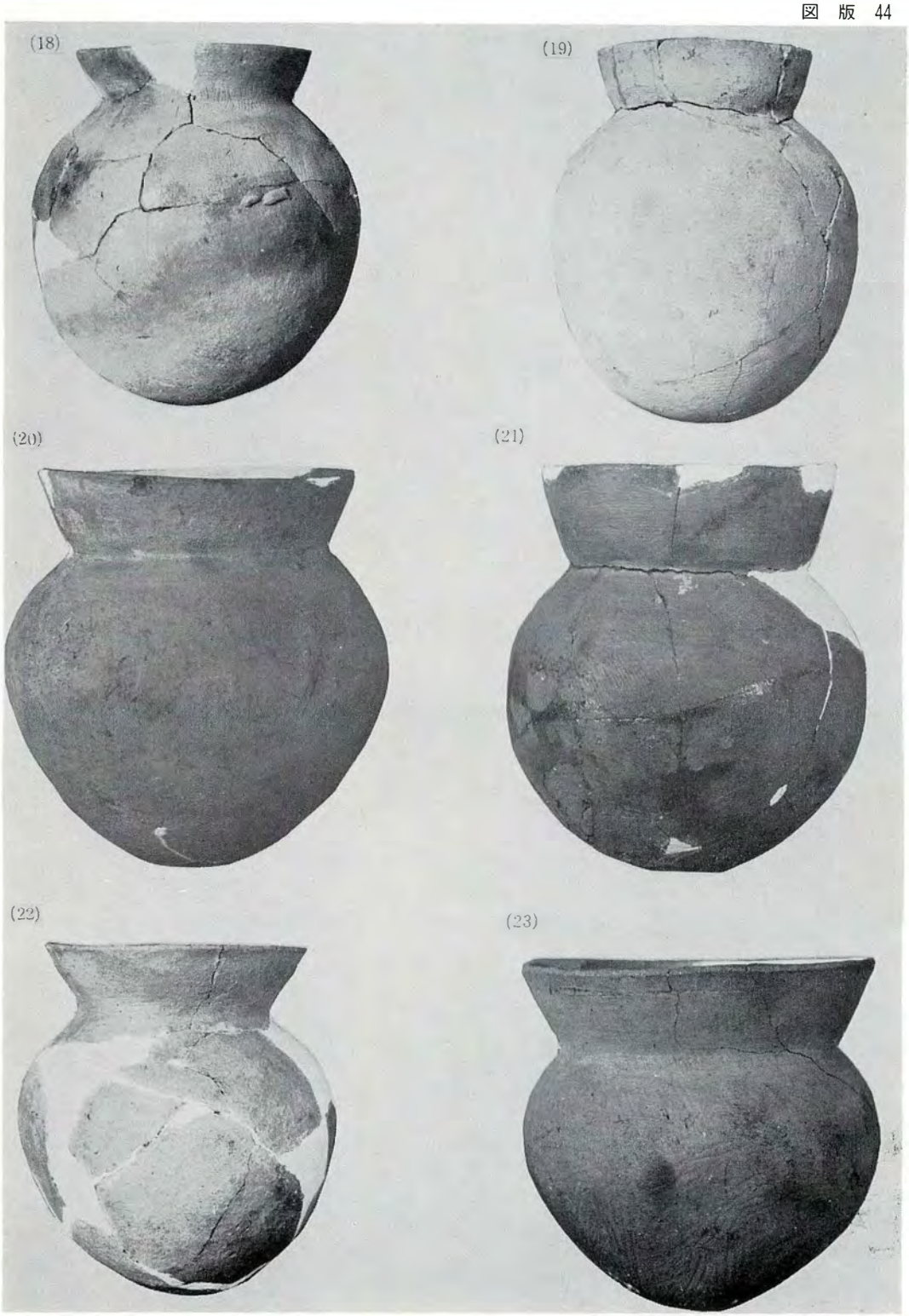
(5) 図版11、第16図(2)（第16号住居址出土）
(6) 図版12、第18図(3)（第18号住居址出土）
(7) 図版20、第27図(4)（第27号住居址出土）



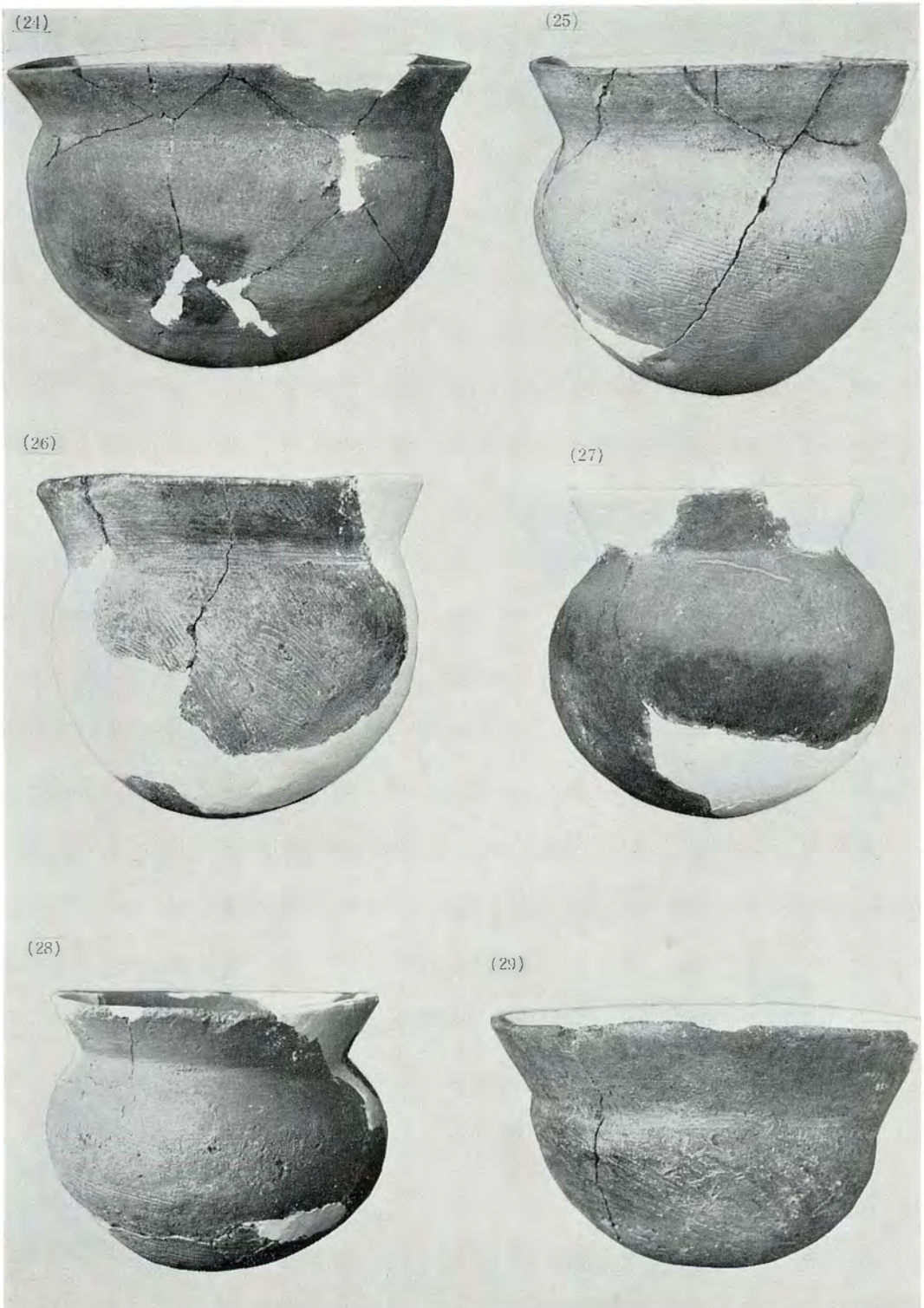
(8) 図版7. 第9図(1)（第9号住居址出土）
(9) 図版6. 第7図(2)（第7号住居址出土）
(10) 図版18. 第23図(11)（第23号住居址出土）
(11) 図版20. 第27図(1)（第27号住居址出土）



(12) 図版６．第７図(4)（第７号住居址出土）
(13) 図版１．第１図(1)（第１号住居址出土）
(14) 図版13．第18図(15)（第18号住居址出土）
(15) 図版15．第19図(6)（第19号住居址出土）
(16) 図版18．第23図(33)（第23号住居址出土）
(17) 図版18．第23図(34)（第23号住居址出土）



(18) 図版８．第９図(3)（第９号住居址出土）
(19) 図版18．第23図(31)（第23号住居址出土）
(20) 図版９．第11図(13)（第11号住居址出土）
(21) 図版21．第27図(16)（第27号住居址出土）
(22) 表採資料
(23) 図版９．第11図(13)（第11号住居址出土）



(24) 図版９．第11図⑫（第11号住居址出土）
(25) 図版15．第20図⑶（第20号住居址出土）
(26) 図版19．第24図⑷（第24号住居址出土）
(27) 図版10．第12図⑶（第12号住居址出土）
(28) 図版12．第16図⑽（第16号住居址出土）
(29) 図版12．第16図⑽（第16号住居址出土）

(30)

(31)

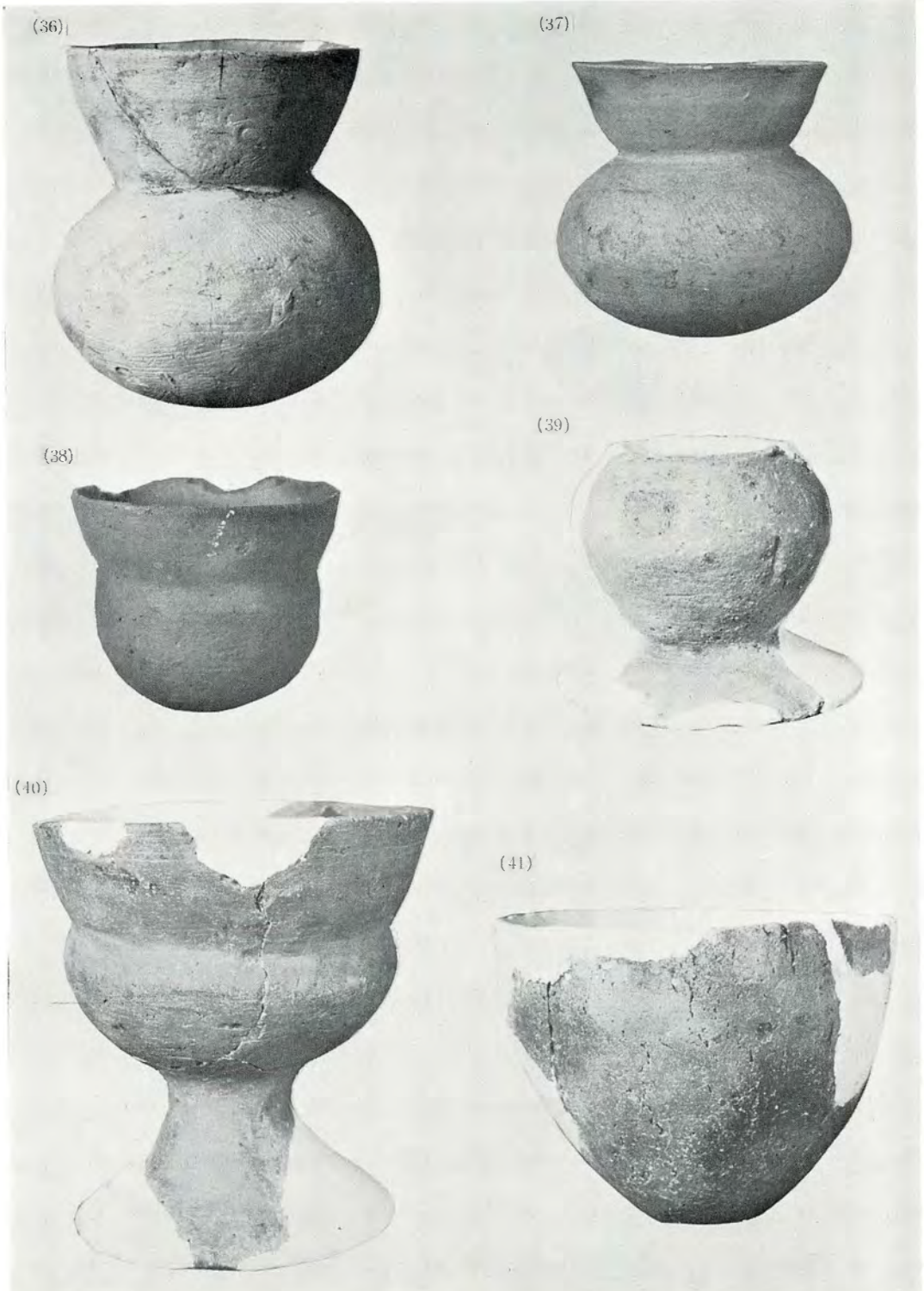
(32)

(33)

(34)

(35)

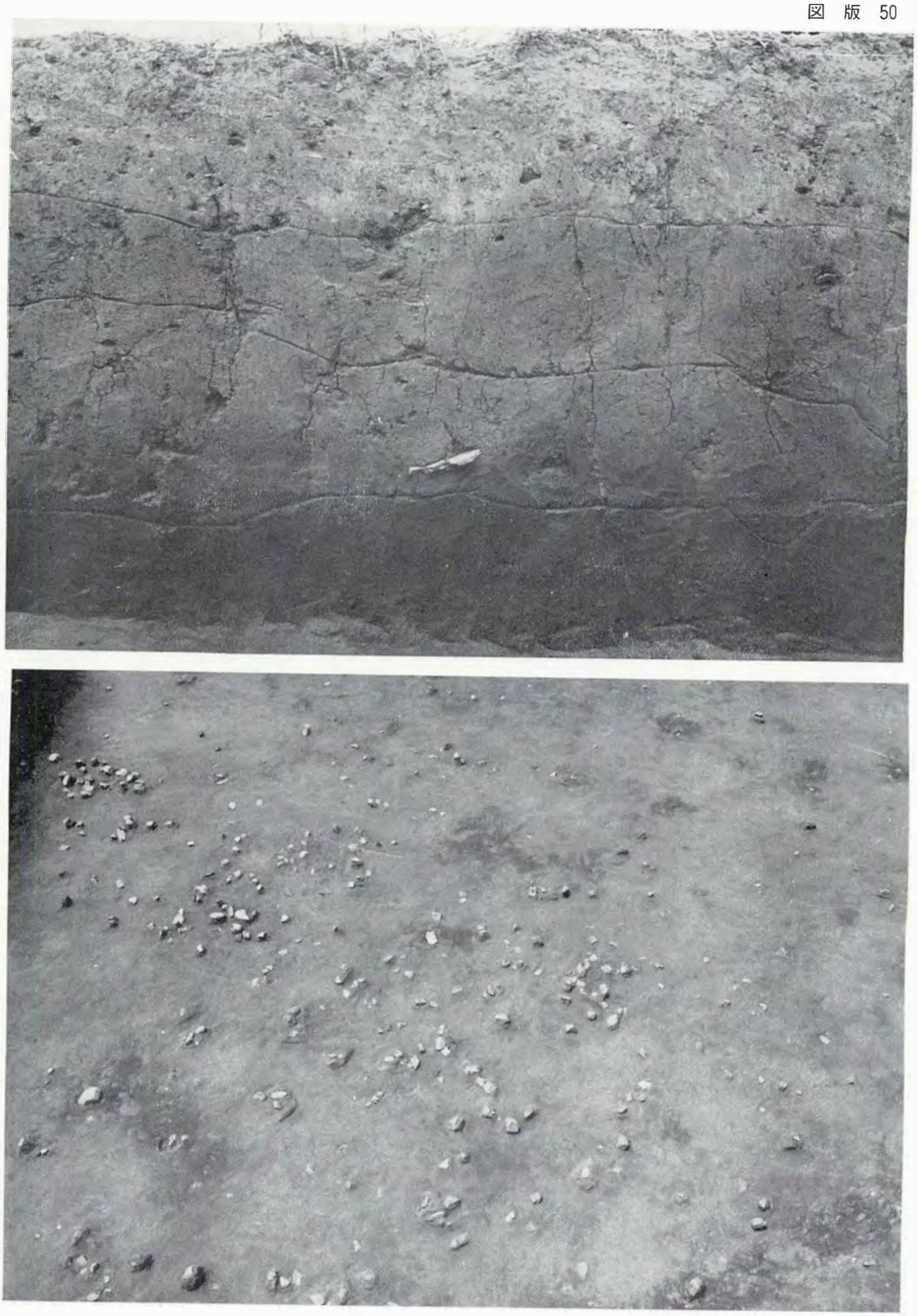
(30) 図版14．第18図(27)（第18号住居址出土）
(31) 図版９．第11図(15)（第11号住居址出土）
(32) 図版21．第27図(22)（第27号住居址出土）
(33) 図版21．第27図(23)（第27号住居址出土）
(34) 図版９．第11図(16)（第11号住居址出土）
(35) 図版９．第11図(17)（第11号住居址出土）



(36) 図版10．第14図(7)（第14号住居址出土）
(37) 図版３．第５図(9)（第５号住居址出土）
(38) 図版21．第27図(24)（第27号住居址出土）
(39) 図版14．第18図(23)（第18号住居址出土）
(40) 図版12．第16図(15)（第16号住居址出土）
(41) 図版12．第16図(21)（第16号住居址出土）

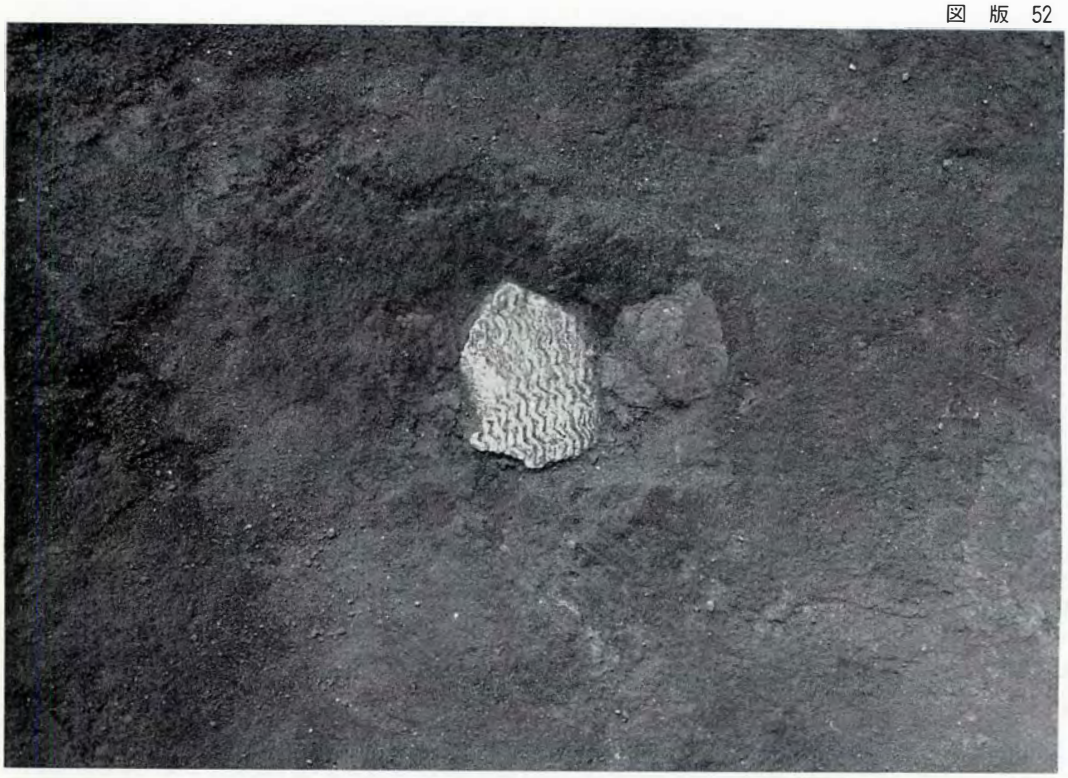
(42) 図版14．第18図(3)（第18号住居址出土）
(43) 図版１．第１図(4)（第１号住居址出土）
(44) 図版８．第９図(4)（第９号住居址出土）
(45) 図版19．第23図(2)（第23号住居址出土）
(46) 図版９．第11図(5)（第11号住居址出土）
(47) 図版９．第11図(6)（第11号住居址出土）

(48) 図版９．第11図(7)（第11号住居址出土）
(49) 図版21．第27図(18)（第27号住居址出土）
(50) 図版22．第28図(2)（第28号住居址出土）
(51) 図版22．第28図(1)（第28号住居址出土）
(52) 図版10．第14図(2)（第14号住居址出土）
(53) 図版22．第27図(36)（第27号住居址出土）
(54) 図版22．第27図(30)（第27号住居址出土）
(55) 図版22．第27図(34)（第27号住居址出土）
(56) 図版22．第27図(31)（第27号住居址出土）
(57) 図版22．第27図(25)（第27号住居址出土）

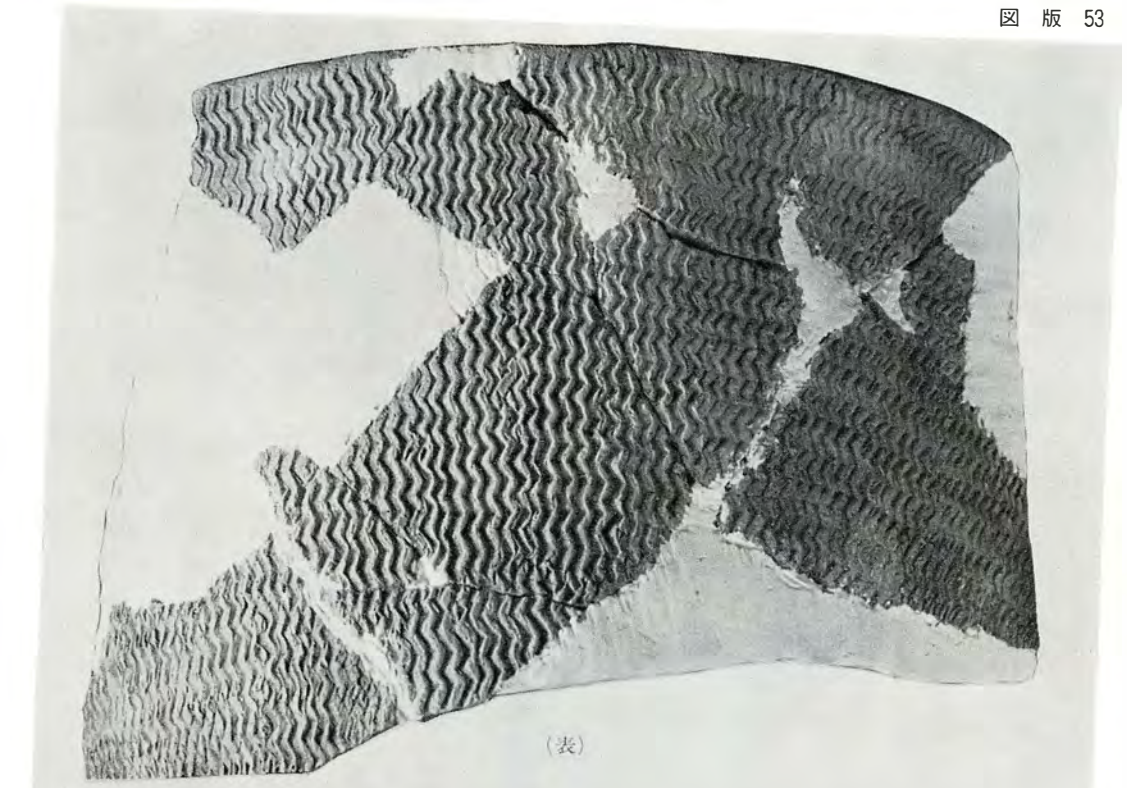


（上）土層と土器の出土状況（ＳＴＡ164＋00南壁）
（下）押型文土器出土状況（Ｃトレンチ第Ⅲc層）

（上）押型文土器出土状況（Bトレンチ第Ⅳa層）
（下）押型文土器出土状況（Bトレンチ第Ⅳc層）



（上）押型文土器出土状況（Cトレンチ Ⅳa層）
（下）石器出土状況（Cトレンチ Ⅳb層）



（表）

（裏）

押 型 文 土 器 （Bトレンチ第Ⅳ層から出土）

墨 書 土 器 (1) 表土層から出土 (2) 墨書拡大写真 東？
(3) 表土層から出土 (4) 墨書拡大写真 介？

熊本県文化財調査報告第13号

沈　　目

—熊本県下益城郡城南町沈目遺跡の調査—

昭和49年３月31日

編集　熊本県教育委員会

発行　熊本市水前寺６丁目18番１号　〒862

印刷　株式会社　城野印刷所

熊本市琴平１丁目４番１号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 13 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：沈目
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日